

博士論文

ガージャール朝期イランにおける都市変容

—都市間の比較分析を通して—

Transformation of Iranian Cities in the Qajar Period:
Comparative Analysis of Qazvin, Tehran and the Other Cities

東北大学大学院国際文化研究科

国際地域文化論専攻 イスラム圏研究講座

近藤 百世

A9KD1003

目次

凡例 iv

図表一覧 vii

序章 1

第1節：研究の目的と方法 1

第2節：先行研究と本論文の課題 2

第3節：資史料について 6

第4節：論文構成について 8

第5節：特記事項 8

第1項：自然条件がイランの諸都市に与える影響について 8

第2項：水利施設の発達 10

第3項：本論文における都市構成の要素の分類 13

【第1部：ガージャール朝期イランにおける近代化事業の影響】

第1章：イランにおける近代化事業の興りと進展 16

第1節：イランを取り巻く政治状況 16

第1項：列強勢力のイラン侵入 16

(1) 初期におけるロシア勢力の侵入 16

(2) 初期におけるイギリス勢力の侵入 17

(3) イラン・ロシア戦争をきっかけとした従属化の始まり 19

第2項：列強への従属化の進展と内部情勢 23

(1) 政情不安とバーブ運動 23

(2) 利権供与による従属化の進展 25

(3) 国内の反発 28

第2節：イランにおける改革の流れ 31

第1項：改革の始まり 31

(1) 新式軍隊設立がもたらした影響 31

(2) 留学生派遣の影響 33

第2項：ナーセリー期の改革 35

(1) アミーレ・キャビールによる成果 35

(2) ナーセロッディーン・シャーの親政 37

(3) セパフサーラルの改革とその後 40

第3項：モザッファリー期の改革 41

(1) 教育協会の影響 41

第3節：イランの経済と社会の変化 43

第1項：イラン経済の変容 43

第2項：経済圏の拡大と社会変化 45

小結 49

第2章：都市の近代化：首都テヘランの変化・変容とその影響 50

第1節：ナーセリー期以前のテヘラン 50

第1項：テヘランの地理 50

第2項：ガージャール朝期に至るまでの都市形成史	52
(1) サファヴィー朝期以前のテヘラン	52
(2) サファヴィー朝期からザンド朝期にかけてのテヘラン	53
第3項：ナーセリー期までのテヘランの成長	56
(1) アーガー・モハンマド期	57
(2) ファトフ・アリー期	59
(3) モハンマド期	62
第2節：ナーセリー期の大改造	65
第1項：大改造直前のテヘラン	65
第2項：大改造期のテヘラン	68
第3項：宮殿域の変化	71
第3節：建造物から見る他都市への影響	76
第1項：シャー・モスク・プロジェクト	76
第2項：モスク・マドラサ複合体の増加	80
第3項：世俗的建造物の増加	81
小結	83

【第2部：中継都市ガズヴィーンに見るガージャール朝期の都市変容】

第3章：中継都市ガズヴィーンの形成	84
第1節：ガージャール時代に至るまでのガズヴィーンの諸状況	84
第1項：ガズヴィーンの地理的状況	84
(1) 自然条件	84
(2) 水利条件	86
第2項：都市形成史	97
(1) 興りから遷都まで	97
第2節：サファヴィー朝期の都市変容	100
第1項：サファヴィー朝期の都市構成	100
第2項：サファヴィー朝期の宮殿域	105
第3節：ガージャール朝期の都市構成	109
第1項：都市域の構成	109
第2項：街区構成	112
第4節：ガージャール朝期の都市社会	115
第1項：ナーセリー期の人口調査	115
第2項：人口構成	117
小結	122

第4章：ガズヴィーンの都市変容	123
第1節：ガズヴィーンの再興と再発展	123
第1項：ザンド朝期からモハンマド期までの都市の再構成	123
(1) 宗教関連施設の動向	123
(2) 水利施設の動向	126
(3) その他の建造物の動向	127
第2項：ガズヴィーンの再発展	128

(1) ガズヴィーンの再興	128
(2) ガズヴィーンの再発展とアープ・アンバールの充実	131
第2節：都市内交通の整備と都市変容	135
第1項：ナーセリー期の都市変容	135
(1) 宗教関連施設の動向	135
(2) 水利施設の動向	137
(3) 商業関連施設の動向	137
(4) 世俗的建造物の動向	139
第2項：幹線道路整備と関連事業の影響	140
(1) テヘラン＝ガズヴィーン街道と都市間交通	140
(2) メフマーンハーネと都市内交通	143
(3) 都市社会の変容	149
第3節：都市社会の変化	154
第1項：ガージャール朝末期の都市構成	154
(1) 宗教関連施設・水利施設・商業関連施設の状況	154
(2) 世俗的建造物の増加	155
第2項：近代化事業の影響	157
(1) ガズヴィーンの識者の活躍	157
(2) ガージャール朝末期のガズヴィーンの都市社会	162
小結	164
終章 総括と課題	165
参考資料	168
参考文献一覧	235
謝辞	244

凡例

○ペルシア語の転写方法について

ペルシア語は原則として、黒柳恒夫『新ペルシア語辞典』大学書林（2002年）の表記に従い、ラテン文字に転写して下記のとおり表記する。

- (1) 子音に関しては、b, p, t, s, j, ch, h, kh, d, z, r, z, zh, s, sh, s, z, t, z, ‘, gh, f, q, k, g, l, m, n, v, h, y を用いる。
- (2) 母音に関しては、短母音は a, e, o、例外として i。長母音は ā, ī, ū。二重母音は ei, o u、例外として ai (ay) を用いる。
- (3) 語末の無音の・(h) は基本的に省略する。

○固有名詞・人名について

固有名詞は原則として原音に忠実な形で片仮名表記するが、キーワードとなる語については、著者による邦訳を付す場合がある。人名についても片仮名表記とする。いずれも初出の際、論述に必要なものには括弧付きでローマ字表記を付す。

○暦について

暦は原則として西暦を用いるが、場合によってはヒジュラ太陰暦、イラン太陽暦を用いる。前者を用いる際も、史料などでヒジュラ太陰暦やイラン暦が付されている場合は、括弧付きでヒジュラ太陰暦を A.H. (anno Hegirae)、イラン太陽暦を A.P. (anno Persico) として表記することとする。

○引用文献について

引用文献中の () は文献の著者による補筆・説明、【 】 は本論文の筆者による補筆・説明であることを示す。

○参考文献

引用文献や参考にした文献はその都度脚注にて簡略化した形で書誌情報を付す。なお、巻末に参考文献一覧を付した。また、脚注での書誌情報の表記に関して、文献に西暦が表記・

併記されている場合はそれを表記し、そうでない場合は参考文献一覧にのみ西暦を換算して併記し、脚注では文献に掲載された出版年を記すこととする。

○雑誌・文献の略号について

下記のように対応する。

- ・ *Bargī*: *Bargī az Tārīkh-e Qazvīn*, Tabātabā'ī, Seyyed Hosein Madrasī (A.P.1361, 1982/3), Khaiyām, Qom. *文書についてはページ番号の前に(数字)で番号を示す。
- ・ *CHI VI*: *The Cambridge History of Iran, VI, The Timurid and Safavid Periods*, ed. Lockhart, Laurence; Jackson, Peter, Cambridge, 1986.
- ・ *CHI VII*: *The Cambridge History of Iran, VII, From Nadir Shah to the Islamic Republic*, ed. Avery, Peter, Hambly, Gavin and Melville, Charles Peter, Cambridge, 1990.
- ・ *EI*: *The Encyclopaedia of Islam*.
- ・ *EI2*: *The Encyclopaedia of Islam, new (second) edition*.
- ・ *EI3*: *The Encyclopaedia of Islam, Three*
- ・ *EIR*: *Encyclopaedia Iranica*
- ・ *EIR Online*: *Encyclopaedia Iranica, Online*, なお、括弧書きにて書籍版もしくは、最終アップデートの情報を付す。出版年は最終アップデート年で統一する。
- ・ *Mīnūdar*: *Mīnūdar yā Bāb ol-Jannat Qazvīn*, Golrīz, Muhammad 'Alī (A.P.1337, 1958/9), 2 vols, Tehran.
- ・ *QI*: *Qajar Iran: Political, Spcial, and Cultural Change, 1800–1925*, Bosworth, Edmond and Hiltenbrand Carole (eds.), Mazda Publishers, 1992.
- ・ *Sīmā*: *Sīmā-ye Tārīkh va Farhang-e Qazvīn*, Varjāvand, Parvīz (A.P.1377, 1998/9), 3 vols, Tehran.

○略称について

下記のように対応する。

- ・ シャー：国王 (Shāh) を指す。王名の繰り返しを避けるために使用する場合がある。
- ・ アーガー・モハンマド期：ガージャール朝初代君主アーガー・モハンマド・ハーン (シャー) の活躍時期及び統治期間 (*doure-ye Āqā Mohammad Khān, Shāh*) の略称。本論文では、キャリーム・ハーンの死後、ガージャール族の族長アーガー・モハンマド・ハーンとして活躍した期間 (1747 - 1788/9, A.H.1160 - 1203 年) とガージャール朝初代君

主アーガー・モハンマド・シャーとして統治した期間（1788/9 - 1797, A.H.1203 - 1211年）の双方に渡る、1747年から1797年までを指している。略号：(A.M.)。

- ・ファトフ・アリー期：第2代君主ファトフ・アリー・シャーの統治期間 (doure-ye Fath ‘Alī Shāh) の略称。1797 - 1834 (A.H.1212 - 1250) 年の期間を指す。略号：(F.)。
- ・モハンマド期：第3代君主モハンマド・シャーの統治期間 (doure-ye Mohammad Shāh) の略称。1834 - 1848 (A.H.1250 - 1264) 年の期間を指す。略号：(M.)。
- ・ナーセリー期：第4代君主ナーセロッディーン・シャーの統治期間 (doule-ye Nāserī, Nāser od-Dīn Shāh) の略称。1848 - 1896 (A.H.1264 - 1313) 年の期間を指す。略号：(N.)。
- ・モザッファリー期：第5代君主モザッファロッディーン・シャーの統治期間 (doule-ye Mozaffarī, Mozaffar od-Dīn Shāh) の略称。1896 - 1907 (A.H.1313 - 1324) 年の期間を指す。略号：(Mz.)。

○用語について

下記のように対応する。

- ・商館、隊商宿：ペルシア語の *kārvānsarā*、*sarā*、*khān* は、商取引や宿泊施設の場となる商業活動のための複合施設を指す用語である。本論文ではこれらを細かく訳し分けず、その役割から、都市のものを商館、街道沿いのものを隊商宿と称する。
- ・都市域：本論文では、都市的地域 (*urban area*) の概念に加え、イランの都市 (*shahr*) を構成する諸要素、中心となる会衆モスク (*masjed jāme‘*) 行政の場である宮殿域 (*arg*)、経済活動の中心であるバーザール (*bāzār*, 市場)、複数の街区 (*mahalle*) に分かれた居住空間などを有し、市壁 (*darvāze*) や堀 (*handaq*) によって境界が定められたエリアのことを指している。
- ・トポグラフィー (*topography*)：地勢 (図)
- ・モスク (*mosque*)：ペルシア語ではマスジド (*masjed*) と呼ばれ、イスラーム寺院のことを指す。本論文においては混乱を避けるため英語のモスクで統一する。なお、建造物名の原語を表記する場合に限り、*masjed* を使用する場合がある。
- ・マドラサ (*madrasa*)：ペルシア語ではマドラセ (*madrase*) と呼ばれ、イスラーム学院のことを指す。本論文においては混乱を避けるためアラビア語のマドラサで統一する。なお、建造物名を表記する場合に限り、*madrase* を使用する場合がある。

第2章

- 図 1：サファヴィー朝以前のテヘラン概念図 53
- 図 2：サファヴィー朝期のテヘラン概念図 54
- 図 3：サファヴィー朝滅亡後からザンド朝末期までの宮殿域 56
- 図 4：アーガー・モハンマド期のテヘラン概念図 58
- 図 5：アーガー・モハンマド期の宮殿域 59
- 図 6：ファトフ・アリー期のテヘラン概念図 60
- 図 7：ファトフ・アリー期の宮殿域概念図 62
- 図 8：モハンマド期テヘラン概念図 63
- 図 9：大改造直前のテヘラン概念図 65
- 図 10：大改造直前の宮殿域概念図 67
- 図 11：大改造後のテヘラン概念図 69
- 図 12：大改造後の宮殿域 73
- 図 13：シャー・モスクが置かれた都市 79
- 表 1：テヘランにおけるモスク・マドラサ類型 80

第3章

- 図 1：テヘランとガズヴィーンの関係から見た交通の流れ概念図 86
- 図 2：ガズヴィーンのカナートの給水範囲概念図 91
- 図 3：ガズヴィーン平野のカナート分布 93
- 図 4：ササン朝からアッバース朝期までのガズヴィーン概念図 98
- 図 5：イル・ハン朝期から16世紀前半までのガズヴィーン概念図 99
- 図 6：サファヴィー朝期のガズヴィーン概念図 102
- 図 7：サファヴィー朝期の宮殿域概念図 106
- 図 8：ガズヴィーンのカナート構成(旧市街地)概念図 111
- 図 9：ガズヴィーンのカナート概念図 113
- 表 1：ガズヴィーンのカナート一覧 89
- 表 2：ガズヴィーンのカナートの重要なアーブ・アンバル 96
- 表 3：ガズヴィーンのカナートの人口調査結果まとめ 118

第4章

- 図 1：ザンド朝期からモハンマド期までのガズヴィーン概念図 124
- 図 2：ガズヴィーンのカナートのアーブ・アンバル分布概念図 133
- 図 3：ナーセリー期のガズヴィーン概念図 135
- 図 4：ガズヴィーンのカナートのバーザール概念図 138
- 図 5：メフマーンハーネ概念図 145
- 図 6：ガージャール朝末期のカナート概念図 155

終章

- 図 1：ガージャール朝期ガズヴィーンのカナート開発エリア概念図 167

第1節：研究の目的と方法

本論文の目的は、ガージャール朝期（*doure-ye Qājār*, 1786 - 1925 年）に起こった変化・変容の内実を明らかにすることである。具体的には、都市の分析を通してイラン内部に起きた変化・変容の具体的事例を示し、それらがどのような経緯でもたらされたのか、あるいは他の地方に影響を与えたのかについて都市間のつながりという点から読み解いてくものである。そして、現代のイラン＝イスラーム共和国（*Jomfūrī-ye Eslāmī-ye Īrān*, 以下、イラン, 1979 年～）¹の基盤を形成した時代といえるガージャール朝期の変化の実態を明らかにする。

この目的は、次の3点の問題意識を背景とする。まずは、ガージャール朝期を通して起こった変化を理解することが、現在のイランをとらえる際に重要であると考えられるためである。ガージャール朝期は、列強の影響力や時代の変化により、新しい文物の流入や近代化政策など、近代化の萌芽が見られる時代である。

イランの近代化そのものは、続くパフラヴィー朝期（*doure-ye Pahlavī*, 1925 - 1979 年）に達成されたものであることに異論はない。しかし、その近代化への準備がガージャール朝期に行われた様々な試みの中から始まったことを無視することはできない。そこで本論文では、ガージャール朝期を現代のイランへつながる銚の時代であると同時に、後の近代化のための布石を打った時代と位置付けて、この時期に起こった変化・変容に注目したい。

2 点目として、ガージャール朝期の分析に、都市研究の視点を考慮する必要があるのではないかという点である。近代化以前、イランを構成する基本的な単位は都市であった。歴史の舞台となってきたイラン高原の大部分は砂漠もしくは砂漠周縁気候に属しており（後述）、その都市の大部分がオアシス都市として自立的な性格を持っていた。これらの都市のうち、大きなものが地方勢力の拠点を形成し、時々の王朝や支配勢力と協調・対立を繰り返しながら存続してきた。つまり、イランの歴史研究において具体的な分析を行うには都市という存在を無視することはできないのである。そして、ガージャール朝期は人とモノの流れの加速にあわせて、このような都市の在り方に変容がもたらされた時代であるといえる。それは、都市間交通が整えられることで中央集権化への舵が切られ、都市の独自性が失われていくためである。このことから、イラン全体の変化を捉えようとするとき、これらの変化・変容を追う必要があると考えられるのである。

¹ 国号としてイランが正式に用いられるのは 1927 年以降であり、それ以前はペルシアとの併用であったが、本論文では混乱を避けるため呼称をイランで統一する。また、本論文でイランの呼称を用いる際、現在のイラン＝イスラーム共和国の領土を指す場合と、当時の支配王朝の勢力範囲全体を指す場合とがある。特にガージャール朝期においてイランの呼称を用いる場合は、対外勢力、王朝、文化に対する勢力範囲、文化圏という意味で用いている。国境線画定以後は、その範囲内をイランとして扱う。

本論文でも注目する幹線道路の整備は、単に広く安全な交通路が成立したという事実だけが重要なのではない。これらの整備によって都市間交通がそれまでにない安全性と速度をもって確立され、各都市を有機的につなげたことによる効果が重要なのである。また、都市間交通と市内交通と結びつくことで、都市の中もより早く、より安全に物流が行われるように変容を遂げていくこととなる。この流通との結合が都市の内部に様々な変化・変容をもたらす要因となった。この時期に起こる都市構成の変化は、イラン全体からあるいはイラン全体に影響を及ぼす何らかの変化・変容のサインであると考えられる。そのため、本論文では、人とモノの流れをキーワードとして議論を進めることとする。

最後に、都市ガズヴィーン（Qazvin）への注目の必要性が挙げられる。ガズヴィーンはその歴史的重要性にもかかわらず、研究対象としてあまり注目を集めてこなかった都市である。特に近年は首都テヘランに都市機能を吸収されたことから存在価値が薄れている。しかし、イラン史全体におけるガズヴィーン的重要性を考慮すれば、その価値を再評価し、研究を充実させる必要があると考える。また、本論文の論点に則していえば、ガージャール朝期の人とモノの流れを考察する上で、ハブ都市としてのガズヴィーン存在には特異な点が認められる。そして、その分析はガズヴィーン一地方に留まらず、イランの地域研究ならびに王朝史研究においても意義のあるものであると考えられる。

以上のように、本論文はガージャール朝期という近代化を目前に控えた変化の時代において、イラン内部でこれらの影響がどのように受け止められ、波及し、変容をもたらしていったのかを都市とそれらのつながりに注目することで明らかにすることを目的としている。本論文の意義は、王朝史や政治・思想といった大きな視点からではなく、都市という具体的な視点に落としてこの時期の変化・変容を描き出す点にある。これらを通して、イランにおける近代化の進展をより立体的に行うことが可能となるだろう。

本論文は基本的に歴史研究の立場をとって文献研究を行っているが、特に都市の構造（ハード面）に注目を置いているために、人文地理学や都市研究の分野に論及していることを明記しておきたい。

第2節：先行研究と本論文の課題

ガージャール朝期は、列強の侵入と利権譲渡によって政治的・経済的隷属化を招いた時代であると同時に、領土を確定するなど、現代に続く基礎を築いた時代である。また、列強の侵入を許した要因ともされる支配体制の脆弱さが、様々な種類の抵抗運動を生んだことで、大小様々な改革の動きを生み出し、後の立憲闘争へとつながる大きな変動を呼んだ時代でもある。ともすれば、ガージャール朝期は内憂外患の時代として否定的に捉えられ

がちであるが、この時代の様々な動きが後の近代化へとつながるものであった点も考慮されて研究が展開されている²。

地方へ対する注目は、中央と地方の関係性を念頭に置いて研究が進められている。統治機構に関しては支配体制と地方政権の関係を考察したバフシュ³などの研究が一定の成果を収めている。また、立憲革命に関する研究では、地方の動きが重要であったことからギーラーン地方⁴やタブリーズ⁵などの研究がある。このように、イランの社会変化に関する研究は、中央と地方に関係への注目が集まってきた。

また、都市のつながりに関しては、金融や流通に注目した研究も成果を上げている⁶。これらの研究は特に経済活動・金融活動に主眼をおき、ガージャール朝期が、イラン経済が世界経済システムの中へ組み込まれる過程であることを明らかにしている。また、統治者に注目して地方政権と首都とのつながりを明らかにするタイプの研究も盛んである。中でも、ヴァルヒヤーによってまとめられたゼッロルソルターン (Mas'ūd Mirzā Zell ol-Soltān, 1849-1918 年)⁷ 治下のエスファハーンの研究が代表的なものとして挙げられる。これは、知事を中心に地方統治の方法や列強とのやりとりなどの様子を描き出すことによって、一地方が施政者の影響を受けつつ時代の変化に対応していく様子が明らかにされている⁸。地方に主眼をおいてまとめられた研究の中で記念碑的な研究といえるのが、タブリーズに関するヴェルナーの研究である⁹。これは不動産関連の動きに注目し、土地所有の変容から地方の変化を描き出したものである。また直近の成果では、グスタフソンによるケルマーン研究が挙げられる¹⁰。これはケルマーンの地方有力者に注目してその血脈によるネットワークと経済活動の広まりを明らかにし、ガージャール朝との関係から、ケルマーンにおけるモダニティの変容を明らかにした。

都市間の差異に関する研究は、主に社会学の分野を通してある程度明らかにされてきた。中でもフロールによる一連の研究によって、都市行政の在り方や行政官の職能に地方差があった点が明らかにされている¹¹。同様の指摘は水田によっても行われていた¹²。加

² 例えば、Abrahamian (1974), (1982); Bayat (1991), Jahanbegloo(ed.) (2003); Keddie (1966), (1971), (1991); Ringer (1998), (2001) など。

³ Bakhsh (1978), (2011) など。

⁴ 黒田 (1984), (1988), (1989), (1992), (1994), (2008); 後藤他 (編) (1997): 227-268 など。

⁵ 八尾師 (1998); 佐野 (2010) など。

⁶ 例えば、Floor (1972), (1998); Issawi (1971); 坂本 (1983b), (2003), (2015); 水田 (1987), (1993), (2003), (2009) など。

⁷ 第4代君主ナーセロドディーン・シャーの長子。1872年から1907年の長期にわたりエスファハーンを統治した。

⁸ Walcher (2008).

⁹ Werner (2000).

¹⁰ Gustafson (2015).

¹¹ Floor (1971), (1998).

¹² 水田 (1989).

えて岡崎¹³、河田¹⁴らの研究によって、地方統治における知事職の重要性が指摘されている。これらの成果によって、イランにおける地方統治の多様性が示唆されており、分析の際に地方性に配慮する必要性が確認されている。地方に注目した研究は、いずれも地方統治を体系的に論じるので、当該地方や中心都市についてある程度詳細な言及をしている。しかし、都市の全体像を描き出すようなタイプの研究ではないため、時系列的な変化を確認することはできない。このように、現在地方の研究の進展がみられるものの、その中心となる都市そのものへの注目度は低いという状況にある。

都市構成に対する研究は、古くは歴史地理学、美術史、建築史¹⁵の分野が牽引し、その後歴史研究の分野においても盛んになった。そして現在では、都市研究は、先述のように地方というキーワードに置き換えられ、地方研究の一環として進められている場合が多い。日本においては、「イスラーム都市研究プロジェクト」(1988-91年)¹⁶を一つの頂点として、都市そのものが考察対象として前面に押し出される研究は減少した¹⁷。それはひとえに、このプロジェクトの後、地方の中心都市とその周辺のつながりを体系的に捉えた上で、地域全体の中でそれを位置づけるという視点から研究が展開されたためである。しかし、近代化によって都市間交通が発達する以前は、イランを構成する単位は確かに都市であった。そのため、歴史研究を行う上で、都市というキーワードを無視することはできないと考えられるのである。

都市研究の中で、特に多くの蓄積があるのが首都テヘランである。イラン国内の研究では建築史に関連したナジュミーの研究¹⁸がテヘランに関して体系だってまとめられた中で最も古いものとされている。その他に、都市史をまとめたシャヒーディー¹⁹の研究、社会史に関してまとめたシャフリーの集成²⁰などが挙げられるが、いずれも考察や分析というよりは史料集成の色合いが濃いものである。これはテヘランに限ったことではなく、他の都市に関しても同様である。但し、これらの集成は二次史料としての価値があり、特に地図などと照らし合わせて都市の構造を捉えるのに役立つことが多い。

テヘラン内部の個別的な事象に関する研究は、特に文書を積極的に扱って当時の様相を描き出す都市社会史の分野において盛んであった。ガージャール朝期に関しては、ナーセ

¹³ 岡崎 (1985b).

¹⁴ 河田 (2002), (2006), (2012).

¹⁵ 例えば Pope (1969); Hillenbrand (1994).

¹⁶ 文部省の重点領域研究「イスラームの都市性 Urbanism in Islam」プロジェクト (1988 - 91年)。1967年の「イスラーム化プロジェクト」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・代表：板垣雄三)を引き継ぐ形で展開された。イスラーム文明の特質を都市性にあるととらえて、都市的な生き方の諸相を比較の手法によって明らかにすることを目指した。その成果は2度の国際会議と事典(板垣雄三他編 (1992))の刊行に集約されている。

¹⁷ 三浦 (1997a): 2-4; (1997b)など。

¹⁸ Najimi (1984a), (1984b).

¹⁹ Shahīdī (A.P.1383).

²⁰ Shahrī (1989).

リ一期に行われた 3 回の人口調査²¹に焦点を当てたエッテハーディーエの研究²²が挙げられる。これは、統計資料の整理・分析を通して、テヘランが人口増加に伴って都市域を拡大させていく様を、街区毎の人口の変化を元にして明らかにしたものである。日本でもこの成果を受けて坂本が都市の拡大と人口移動に関する研究を行っている²³。いずれの研究も、建造物を中心としたハード面の変化への言及が不足していると指摘されてきた。

これに対し、ワクフ文書を用いて不動産の所有関係を明らかにすることで、テヘランの発達を描き出してきた近藤の一連の研究が大きな示唆を与えた²⁴。また、現地調査に基づいたソレマニエによるテヘランの大バーザールの発達史²⁵などはテヘランの都市成長にこの区域が果たした役割を明らかにしている。モオタメディーによって概観されたテヘラン成立史とガージャール朝期の都市構成の集成は、地図の分析に基づいており、水利と都市構成を結び付けて捉えている点で、筆者の関心に近い²⁶。また、建築史の分野では、ソルターンザーデによって示された、サファヴィー朝末期からガージャール朝期にかけて広まったモスク・マドラサ複合体 (masjed-madrese) という新しい建築様式が、ガージャール朝期の都市社会や宗教と人々との関わりを分析する一指標として注目を集めている²⁷。

このように、テヘランの研究は主に不動産関連の動向を調査することでその変遷を明らかにする方向で研究が進められてきた。特に宮殿域とバーザールに研究が集中しており、テヘラン全体の動向を分析するタイプの研究はそこまで多くない。また、テヘランの変化が他都市にどのような影響を与えたのかという点についても、建築的な流行に関する論考はあるものの、具体的な動向としては明らかにされていない部分が多い。

本論文が注目するガズヴィーンに関する先行研究は、他都市のものと比べて少ない²⁸。特にイラン国外の研究に関しては、ニザール派の研究²⁹や、サファヴィー朝研究の中で言及されることはあっても³⁰、ガズヴィーンそのものに注目した研究は稀である。サファヴィー朝期からガージャール朝期までにガズヴィーンをある程度体系だつて研究対象としてきたのは、主に建築や美術の分野であった³¹。

イラン国内においても、ガズヴィーンそのものへの注目は乏しく、研究のほとんどが地元出身の研究者によって行われてきた。代表的なのはパフラヴィー朝期に当地の地誌をま

²¹ 第 1 回 : 1852/3 (A.H.1269) 年、第 2 回 : 1869/70 (A.H.1286) 年、第 3 回 : 1899/1900 - 1902/3 (A.H.1317 - 1320) 年

²² Ettehadiye (1983), (1999).

²³ 坂本 (1982), (1984).

²⁴ 近藤 (1994), (1997), (2003), (2006a), (2006b), (2007), (2012).

²⁵ ソレマニエ (2009a), (2009b).

²⁶ Mo'tamedī (2002).

²⁷ Soltānzāde (1993); Idem (1378A.H.); モスク・マドラサ複合体への指摘は、例えば、エスファハーン の調査報告 (深見, 1999) やテヘランのモスクの分析 (近藤, 2003) などに見られる。

²⁸ 後藤他 (編) (1997): 330-350; 八尾師 (編) (1997).

²⁹ 例えば、ルイス (1973), Daftary (1995), Hodgson (2005) など。

³⁰ 例えば、ブロー (2012), 平野 (1997), (2000) など。

³¹ 例えば、Kleiss (1976), (1990), Echrāghī (1982), Golāmhossein (2003), Akbarī (A.P.1390) など。

とめたゴルリーズ³²、ヴァルジャーヴァンド³³、タビールスィヤーギーら³⁴の著作が挙げられる。これはそれぞれの著者が集められる限りの史料や自身の聞き取り調査の成果などを編纂したものである。テヘランと同様に、いずれも資史料集成の色合いが濃く、分析が不十分な点も見受けられるが、ガズヴィーンに関わる諸項目が百科事典的にまとめられており、二次史料として価値の高い研究である。近年目立った成果を上げているのは、郷土史研究家のヌールモハンマディーの一連の著作である³⁵。これらの研究は、氏の関心が立憲革命史にあることから、近代化直前のガズヴィーンの都市社会についての考察が多い。しかし、これらはいずれもイラン史全体の大きな枠組みの中でガズヴィーンを論じるという視点が弱く、その変遷もガズヴィーンの中だけに留まっている。

以上の先行研究を踏まえ、本論文の課題を、ガージャール朝期の変化を、都市変容の側面から考察することと定める。具体的には、ガージャール朝期の改革事業に注目して、首都テヘランとガズヴィーンが、どのような変化・変容を遂げるかを明らかにし、それらの動きがどのような影響から生じたものかを考察する。その上で、ガージャール朝期の近代化政策が、都市とそこに住む人々にどのような変化・変容をもたらしたのかを考察していきたい。

対象期間は、変化・変容を大きな流れの中で捉えていくために、ガージャール朝期全体となるが、適宜その前後の時代も考察対象に含める。ただし、大きな変化が見られる第2代君主ファトフ・アリー・シャーの時代から第5代君主モザッファロッディーン・シャーの時代までの約100年間についての考察が主となる。中でも、第4代君主ナーセロッディーン・シャーの統治期間については、変化・変容の転換期となるため、議論が集中することとを明記しておきたい。

第3節：資史料について

都市形成史に関しては、先行研究による成果を主に参考としている。テヘランに関しては、特にモオタメディーによる解説³⁶とソレマニエの現地調査の成果³⁷を参照した。

ガズヴィーンに関しては、先行研究から、調査資料や建造物の分析やリストなどを利用した。文書に関しては、タバータバーイーが編纂したシャーザーデ・ホセイン廟に関する文書の集成を利用している³⁸。また、調査関連の報告としては、ガズヴィーンのみフマー

³² *Mīnūdar*.

³³ *Varjāvand* (A.P.1351); *Sīmā*.

³⁴ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380a), (A.P.1380b), (A.P.1381).

³⁵ *Nūrmohammadī* (A.P.1380), (A.P.1390), (A.P.1392).

³⁶ *Mo'tamedī* (2002).

³⁷ ソレマニエ (2009a), (2009b).

³⁸ *Bargī*.

ンハーネ (mahmānkhāne) に関するポルヒーズカーリー³⁹の報告を始め、パフラヴィー朝期に行われた文化芸術省の調査報告書⁴⁰がある。

人口調査史料は、テヘランに関しては、サアドヴァンディヤーンとエッテハーディーエによる校訂本⁴¹を利用している。また考察に際しては、これらを分析した研究⁴²についても副次的に参照している。ガズヴィーンに関しては、ゴルリーズ⁴³、ヴァルジャーヴァンド⁴⁴、ダビールスィヤーギー⁴⁵の各研究で計算されているものを参照している。先行研究では、ゴルリーズの記録が最も引用される数値であるため、計算が合わない場合や、数値にブレがある場合は、基本的にゴルリーズの数値を採用することとした。ヴァルジャーヴァンドは基本的にゴルリーズの数値のトレースであるので、副次的に参照している。ダビールスィヤーギーのものは、3者のうち最も詳しく数値が示されているものの、全体的な計算があわない場合が多い。そのため、全体的な数値はゴルリーズのもの採用する代わりに、街区ごとの詳細に関しては、こちらの数値を中心に考察することとした。これらの数値については、巻末に参考資料としてまとめたものを添付している（参考資料：2）

地図は、テヘランに関しては、ガージャール朝期に作成された、ベレズィン⁴⁶、ケルズィズ⁴⁷、アブドゥルガッファール⁴⁸による地図が残されている。本論文では、基本的に、ケルズィズの地図によって作成されたモオタメディーの概念図を利用しながら、ケルズィズとアブドゥルガッファールの地図を読み解いている。議論に必要なものに関しては、適宜概念図を作成した。

ガズヴィーンに関しては、イギリス⁴⁹とロシア⁵⁰によって作成された2枚の地図と、パフラヴィー朝期に作成された地図⁵¹が存在する。ただし、いずれも20世紀以降、都市改造が行われて以降の地図である。そのため、それ以前の都市構成を再現するために、イラン陸

³⁹ Parhīzkārī (A.H.1386).

⁴⁰ 文化芸術省調査報告書 1021, 22681 (Iranshahr: Encyclopaedia of the Iranian Architectural History, <http://ancientworldonline.blogspot.jp/2010/11/encyclopaedia-of-iranian-architectural.html>) から参照 (2015年4月アクセス, 現在アクセス不可)

⁴¹ Sa'dvandiyān & Etehadiye (ed.) (A.P.1368).

⁴² Etehadiye (1992), (1998); 坂本 (1984a) など。

⁴³ *Mīnūdar*: 427-442.

⁴⁴ *Sīmā*: 340, 783-797.

⁴⁵ Dabīresiyāqī (A.P.1380a).

⁴⁶ 1852年作成。モハンマド期テヘランを訪れたロシア人東洋研究者ベレズィンが帰国後に出版したものの。ロシア軍が偵察目的で作成した地図修正に収められている (*Pictorial Documents of Iranian Cities in the Qajar Period*, Iranian Cultural Heritage Organization, Tehran, 2000: 51)

⁴⁷ 1857年作成。イラン政府の命令で作成された初めての測量地図 (Kerziz, August, *Naqshe-ye Dār ol-Khelāfe-ye Tehrān*, A.H.1275, 1858/9, repr. Tehran, A.H.1370, 1991/2)。

⁴⁸ 1891年作成。第2回人口調査の責任者であったアブドゥルガッファールによって作成された測量地図。大改造後のテヘランの様子が分かる (*Abd ol-Ghaffār, Naqshe-ye Dār ol-Khelāfe-ye Tehrān*, Tehran, A.H.1309, 1891, repr. Tehran, 1984)。

⁴⁹ 1919年作成。縮尺：1/253,440 (*Mīnūdar*: 281, Alai, 2005:326)

⁵⁰ *Mīnūdar*: 281

⁵¹ イラン陸軍参謀本部地理局作成 (*Mīnūdar*: 281)

軍参謀本部によって作成された地図をベースに、筆者が適宜概念図を作成することで対応している。

図・写真資料に関しては、ゾカーとセムサールによる集成⁵²から多くを引用しているが、原典もしくは出典にあたる場合はそちらのものを優先した。ガズヴィーンに関しては、ヌールモハンマディーの集成⁵³から多く引用している。また、建造物の写真に関しては、筆者による撮影も含まれている。これらは巻末に参考資料として添付してある(巻末資料7)。

第4項：論文構成について

構成は下記の通りとなる。本論文は、序章と終章を除き、2部4章構成になっている。大まかな流れとして、第1部(第1章・第2章)でガージャール朝期の全体的な変化の動きを概観し、第2部(第3章・第4章)ではその動きが地方都市にどのような影響を及ぼしていたのかを考察する形で議論が展開される。

第1章では、イランを取り巻く国際情勢をまとめた上で、近代化事業の経緯を概観し、当時の経済状況について全体の動きを概観する。

第2章では、首都テヘランの都市構成の変化を追いながら、近代化事業によってどう変化したのかを考察する。そして、地方にどのような変化があったかについて考察する。

第3章では、ガズヴィーンの都市構成と特徴についてまとめる。特に、都市構成と人口構成を分析することを通して、ガズヴィーンの特徴を明らかにする。

第4章では、具体的にガズヴィーンの都市変容を見ていくことで、ガズヴィーンの中で起こった様々な変化が、いつどのようにもたらされたものかを明らかにし、その特徴を分析する。

これら4章をふまえ、終章ではそれまでの議論を総括し、ガージャール朝期における都市変容についてまとめる。

また、都市構成に関する議論を進めるために、イランの都市の成立条件と水利施設に関する説明を次節にまとめた。これらの議論は、テヘランとガズヴィーンの都市構成について議論する際の前提知識となる。

第5節：特記事項

第1項：自然条件がイランの諸都市に与える影響について

本論に入る前に、ガージャール朝期における都市変化を理解する前提として、都市の成立条件と特徴を確認しておきたい。イランの都市、特に本論文が分析の対象としているガズヴィーンやテヘランは、イラン高原上に位置している。

⁵² Zoka & Semsar (A.P.1369).

⁵³ Nurmohammadi (A.P.1390).

イラン高原の諸地域における都市の成立あるいは発展は、自然条件とその当時の王朝との関係に左右されてきた。イランの国土の大半は山岳地帯で、標高 1,500m ほどの高地である。西部には北西部のアゼルバイジャン地方から南東部のペルシア湾にかけてザクロス山脈が囲み、北部には最高峰ダマーヴァンド山 (5,671m) を有するアルボルズ山脈がカスピ海南岸に沿って連なっている。東部はソレイマン山脈に連なる東部山系がアフガニスタンとの国境域に走っている。そして、内陸部はキャビール砂漠 (dasht-e kavīr) やルート砂漠 (kavīr-e Lūt) といった広大な砂漠をかかえている。これらの砂漠地帯は湖が干上がってできたもので塩分を含んでおり、その周辺には塩湖も点在している。平野部は少なく、大きなものはカスピ海沿岸の平野とアルヴァンド川 (シャットウルアラブ川) 河口部にあたるペルシア湾北端の平野だけである。その他小規模な平野部はペルシア湾、ホルムズ海峡、オマーン湾の沿岸部に点在する。

国土の大部分は大陸性気候に属しており、降水量が少なく、年較差や日較差も大きく⁵⁴、亜熱帯高圧帯⁵⁵の影響下にあるため砂漠が多く存在する。カスピ海南岸の温暖地域、アルボルズ山脈とザクロス山脈の周りの高地の山岳温暖地域を除き、残りの台地の大半は乾燥・半乾燥地域⁵⁶である。そして、この乾燥・半乾燥地域は灌漑を絶対条件とするという特徴を持っている。これらはイランの土地制度や農業の研究の際に、その水の少なさによって注目されてきている。

例えば、岡崎はイランの農業と水利に関する研究の中で気候と農業の関係に着目し、イランの国土を「西」(年間降水量 250mm 以上) と「東」(年間降水量 250mm 以下) に概念的に区分した。そして、「西」は乾地農法が可能である地域、「東」はガナートによる灌漑農法が主たる農法であることを指摘している⁵⁷。この概念に従えば、イランの国土の実に 70% 以上が「東」に属し、灌漑を必要とする地域となる。そして、夏季の酷暑と乾燥、山岳地系による農業の困難さから、イランの耕地面積は約 19,000,000 万ヘクタール (国土の約 1 割) に満たない。

⁵⁴ 大陸性気候の影響下では、次のような特徴がある。①年間降水量が少ない。②年較差 (1 年のうちの最高・最低気温) が大きい。③日較差 (1 日のうちの最高・最低気温の差) が大きい。といった特徴が挙げられる。イラン、トルコ、中央アジアの一部がこれに属し、これらの地域では降水のピークが冬に集中するため、春の雪解けの季節に洪水が発生しやすいという特徴がある。

⁵⁵ 亜熱帯高圧帯とは、緯度 20~30 度付近の地域に形成される高気圧帯のことで、中緯度高気圧帯とも呼ばれる。赤道上で生じた上昇気流のた空气が緯度 30 度付近で溜まることで下降気流が形成されるのだが、この下降気流は高温で乾燥しておりその下では砂漠が形成されるという特徴がある。

⁵⁶ メイグスの分類 (Meigs, 1952) に従うと、乾燥地域は次の地域に分けて捉えることができる。①乾燥地域 (arid area) : 年に 1 月以上降雨のある地域で年間降水量が 200mm 以上の地域。雨期のタイミングと気温によって細分類をする。②半乾燥地域 (semi-arid area) : 年間降水量が 100mm~200mm 程度ある地域。雨期のタイミングと気温によって細分類する。③極乾燥地域 (extreme arid) 年間降水量がほとんどない完全な砂漠。気温により、極暑 (サハラ砂漠)、温暖 (アタカマ砂漠)、寒冷 (タクラマカン砂漠) の各砂漠に細分類してとらえる。

⁵⁷ 岡崎 (1988b): 20-32.

更に、原はこの「西」と「東」を年間降水量及び海拔によって、砂漠地域（年間降水量：100mm以下、海拔：200～1,000m）、砂漠周縁地域（100～200mm, 1,000～2,000m）、山岳地域（200～300mm, 2,000m以上）の3つの地域に分類している。砂漠地域は、キャビール砂漠、ルート砂漠の位置するイラン高原中央部にあたる。砂漠周縁地域は文字通り、この砂漠地域の周縁に存在する地域にあたる。この地域は、テヘランを始め、エスファハーン、ガズヴィーンといったイランの主要都市の大半を含んでいるため、本論文ではこの砂漠周縁地域という概念に基づいて分析を進めるものとする。

そして、原は砂漠周縁地域の自然、技術、社会の特徴は次の5点に要約している。1点目はガナートによる灌漑が行われていること。2点目は農作物が穀類のほかに良質な豆類、瓜類といった夏作物（特にメロン）が採れること。3点目は家畜放牧（定住農耕民：夏と冬に山地・平地間で短距離放牧／遊牧民：山地の夏営地と平地の冬営地間で長距離放牧）が行われていること。4点目は農村工業（織物、窯業）が発達していること。5点目は農業外労働者（牧畜、手工業、出稼ぎなど）が多く、人口が流動的であること、以上5点である⁵⁸。

これらの特徴からわかることは、イランのほとんどの地域において給水は重要な問題であり、農業形態や生活形態などに大きな影響を及ぼしているということである。特に砂漠・砂漠周縁地域では、村落、都市などの居住地域の形成は水利の問題に直結しており、平地に存在する村のほとんどが大規模な灌漑農業によって作られた人工村となるのである。

第2項：水利施設の発達

降水量だけでなく、乾燥気候・半乾燥気候によるワジ（涸川）の多さと恒常河川の少なさも⁵⁹、半乾燥地域の農村や都市の成立に灌漑を絶対条件とする要因となってきた。そして、この灌漑のほとんどはガナート⁶⁰によって行われてきた。ガナートの歴史は古く、その最

⁵⁸ 砂漠周縁地域は、更に北東型砂漠周縁地域（砂漠と山岳地帯に挟まれた帯状の地域：カーシャーン＝セムナーン＝ダムガン＝ネイシャープール＝ガーエン＝ビールジャンド）と西南型砂漠周縁地域（砂漠と山岳地帯に挟まれた平地部分：エスファハーン＝ナーイー＝ヤズド＝ケルマーン）に分けることができる。前者は比較的集落が多く、農業が活発であり牧畜業は付随的である場合が多く、農村型家内工業が盛んであるという特徴がある。後者は、牧畜が主体で、バフティヤリー族やカシュガイ族といった有力な遊牧部族が存在し、長距離遊牧が行われる点特徴的である（原，1997: 6-11）。

⁵⁹ イランの河川のほとんどは、夏の高温によって蒸発してしまい、恒常河川でも塩分を含む水質の悪い川がほとんどである。これは、イラン高原の帯水層の浅さが原因である。直接河川の水を利用することが難しい地域が多い。イランにおいて利用可能な大河川は、ザクロス山脈に水源を持つエスファハーン地方のザーヤンデ・ルド川、ホーゼスターン平野のシャットル・アラブ川、そしてカスピ海沿岸のセフィード・ルド川ぐらいである（岡崎，1988b: 37-40; 板垣他，1992: 385-387, 390-391; Planhol, 2012a）。

⁶⁰ ガナートは灌漑用に地下に掘削された水路、導水暗渠（pūste）のことであり、イランに限らず乾燥地域を中心に、広範にわたって灌漑に利用されてきたものである。イランやアフガニスタン方面では別名カーレーズ（kāreẓ）とも呼ばれ、イラクやシリアなどではフカラー（fuqārā）、アラビア半島

古の記録は紀元前 700 年ごろのアッシリアのサルゴン 2 世 (B.C.722-705 年) の時代に求められる。そしてイランにおいては、メディアを滅ぼしたアケメネス朝ペルシアの統治下において盛んにガナート建設が行われるようになった⁶¹。

ガナートは、その水源に掘られる母井戸 (mādar chāh) が平均して 40~50m の深さがあり⁶²、水源部から出口までは平均 5~10km⁶³ほどの長さがある。そしてそこから 30~40m おきに堅坑が掘られ、2 本の堅坑の間に横坑を通す形で掘り進められていくのである。ガナートの掘削は 1 日に 2m ほどしか進めることができず、完成には長い年月と巨額の費用を要した⁶⁴。そのため、ガナートの創設は大抵町に住む富者によって行われてきた⁶⁵。岡崎はこれをもって、ガナートを必要とする地域では、しばしばガナートを介して都市が農村を作ってきたと評している⁶⁶。

更に、ガナートのメンテナンス費用は、水源となる母井戸から地表に出るまでの長さとなりが通ってくる土質によって異なっている。創設に巨額の費用がかかったように、メンテナンスにも通常大変な額がかかった。ガナートの通る土質が崩れやすい場合、絶えず浚渫 (lālūbī) や陥落防止の陶製の輪 (kavarl, kūl, gūm, nār) をはめる補強工事の必要が生じた。このメンテナンス作業の責任は地方によって異なるが、いずれも大変な労力と費用を要するものである。そのため、ガナートの新設や修繕は、そのほとんどがこれらの費用を賄う大地主が出てくる平和な時代に集中しており、戦乱期には見捨てられて廃墟

付近ではシャリーズ (shariz)、北アフリカではフォガラ (foggariur) などと呼ばれる。中国の坎児井や日本のマンボなども同様の仕組みを持つものである (ヴルフ, 2001: 253-254; Planhol, 2012c)

谷から山麓傾斜地に向かう沖積扇状地の帯水層 (āb deh) を水源とする。ここに母井戸と呼ばれる元井戸を掘りあて、そこから地表の扇状地形よりも緩やかな勾配で横坑 (kūreh) が掘られる。ガナートの横坑の勾配はほとんどが 1/1000~1/1500 ほどであり、ガナートの距離が長いほど水平に近づくという性質を持つ。流れを緩やかにすることで側壁を傷つけないようにするためである。横坑は水源部にあたる帯水層ズィヤード・アープデ (ziyād āb deh)、地隙水のたまった帯水層カムタル・アープデ (kamtar āb deh)、土壌中の水分の多い透水層タル・オ・ホシュク (tar-o-khoshk)、乾いた土壌を持つ透水層のホシュケ・カール (khoshk-e kār) と呼ばれる 4 種類の土壌の中を通してその出口 (mazhar) に至る。横坑は一気に掘り進めることができないので、一定の間隔を開けて堅坑 (mīleh, chāh) が作られ、そこから縫うようにして掘り繋げられる。また、出口付近では通常水面は地面より低く作られ、しばらく開渠の堀 (haranj) が続き、耕地へと注がれる (ヴルフ, 2001: 253-258; 織田, 1984: 50-17; 岡崎 1988b: 32-37; 原, 1997: 39-44; Planhol, 2012d)。

⁶¹ サルゴン 2 世がイラン北西部のオルミーエ地方へ遠征した際に無数の地下水路による灌漑組織を破壊し、首都を陥落せしめた旨が刻まれた楔形文書が残されている (織田, 1984: 49; 岡崎 1988b: 46-48)

⁶² 最長で 300m に及ぶものもある。

⁶³ 最長で 70km に達するものもある。

⁶⁴ また、ガナートの掘削はモカンニー (moqannī, ガナートを作る人の意) と呼ばれる職人によって行われた。ヤズドのモカンニーが最も熟練していたといわれる

⁶⁵ 砂漠にガナートを引くことで農耕地を形成した (ヴルフ, 2001: 253-258; 織田, 1984: 50-17; 岡崎 1988b: 32-37; 板垣他, 1992:390-391)

⁶⁶ 板垣他 (1992): 390.

となるガナートも数多く存在した。しかし、ガナートがなくては村や町の存続は難しい。そこで、大抵の場合、ガナートは私有財産でなく、ワクフ財⁶⁷とされてきたのである⁶⁸。

また、ガナートは農業用水として引かれるだけでなく、生活用水としても利用されており、イランの都市の大部分の給水もガナートによって賄われていた。都市部へ引かれるガナートは、大抵の場合、町と郊外の境目に結節点が設けられた。母井戸から村まで引かれたガナートを、中継する村で町へのガナートに連結させたのである。

こうした水の希少性は、灌漑技術やガナートによるネットワークだけでなく、その価値から精神的、文化的、宗教的にも重要な意味を有していた。例えば、公共の水場 (zahīr) が主要な道路沿いやバーザールの内部、住宅地の中などに設置され、道行く人に水を提供する場となっていた。これらはタイルなどで美しく装飾され町の景観をより美しいものとする役割も担っていた⁶⁹。また、宗教的な必要性から⁷⁰、モスクやマドラサの中庭あるいは前庭に泉亭 (khouzkhāne) が必ず設けられている。そしてこの習慣は、家屋や商館などの世俗的な建造物の中庭にも見られるものであった。

そして、公共空間での水利用の中で重要なのが、公衆浴場 (hammām) である。これは身を清めるといふ宗教的な目的の他に、健康・娯楽・社交の場としても機能していた。そして、限られた水を有効利用するというために、貯水施設であるアーブ・アンバール (āb a nbār, 水蔵の意) も、都市においては重要な機能を持っていた。

アーブ・アンバールは、水の貴重な乾燥・半乾燥気候の地域において発達した貯水施設で、ガナートによって運ばれた水を保存しておく工夫として発達したものである⁷¹。そして、ガナートと同様にイラン以外の地域でも同様の施設が見られる⁷²。元々この施設は、ガナートの給水順番が回ってきた際に水を貯めておくものとして、農村のはずれや家屋内に

⁶⁷ ワクフ (waqf) とは寄進もしくは寄進財産のことを指す。ある物件の所有者がその用益権を放棄し、それらの収益が最初に設定された目的に使用される限り、その処分権を放棄することを意味している。モスクやマドラサなどの公共施設の維持のために寄進する慈善ワクフと、子孫のために寄進する家族ワクフがある。ペルシア語ではヴァクフ (vaqf) と表記されるが、本論文では慣例的に使われるワクフで表記を統一する。

⁶⁸ ラムトン (1978): 216-223.

⁶⁹ 板垣他 (1992): 385-387.

⁷⁰ イスラームでは礼拝 (namāz, salāt) の前に水などで顔や手足を清めることが義務付けられている。

⁷¹ アーブ・アンバールのほとんどは焼成煉瓦製もしくは石造りの堅牢な建造物で、耐水性のモルタル (sārūj) で上塗りされている。貯水槽部分 (makhzan) は地下に造られ、厚い壁で外界と遮断されている。イランにおける公共のアーブ・アンバールの貯水槽量は最小で 300 m³、最大で 3,000 m³と様々である。そして貯水槽には少なくとも 1 つ以上のバードギール (bādgīr, 風採り塔) と呼ばれる換気システムが取り付けられている。バードギールは貯水槽の横もしくは上に取り付けられ、その上に設けられた小部屋を介して貯水槽内の空気を循環させ、水を冷たく清潔に保つ働きをしている。水を新鮮な状態に保つためにバードギールはアーブ・アンバールには欠かせないシステムとなっていた。このバードギールの技術は屋内の冷房システムとしてイラン中央部の乾燥地域であるヤズドで発達したものである。ヤズドにはバードギールを 6 本も有するアーブ・アンバールも存在する。またサファヴィー朝以降にイランで建設されたアーブ・アンバールには、2 つ以上のバードギールが作られるようになっている (ヴルフ, 2001: 262-264; Sotūda, 1982; Golāmhosein, 2003)。

⁷² トルクメニスタンではサルダーバ (sardāba)、初期のアラビア語の史料にはエスタフル (estakhr)、ベルク (berak)、マスナア (masna‘) が屋根のあるタンクや貯水槽を指す言葉として用いられる。

ある貯水池 (houze) から発展したものである。そしてアーブ・アンバールのうち、私有のものは正方形か長方形の平らな屋根を持つものが多く、大抵の場合建て増しで作られる。そして、大きなアーブ・アンバールは公共のものとして利用されるが、これらはドームや円錐型の屋根を持つものが多かった⁷³。

アーブ・アンバールの起源そのものは明らかにされてはいないが、水の保存は給水が成立して以降に必要となると考えられることから、ガナートよりは新しい施設であると推測される。アーブ・アンバールに関する記述で最古のものは 1473 (A.H.878) 年のヤズドの大会衆モスク (masjed-e Jāme‘) のものであった⁷⁴。

そして、都市に作られるアーブ・アンバールは、大抵そこに貯めた水を利用するモスク・マドラサ・公衆浴場・商館といった施設に付属するものとして建てられることが多かった。そして、特に大きなものやモスクなどに付属されるアーブ・アンバールは、しばしばその創設者の威光を示すものとして、壮麗なものとなった。このような装飾されたアーブ・アンバールには正門 (sardar) が作られていて、創設者もしくは後援者や修繕者の名前、日付などを刻んだ碑文が掲げられることが多い。アーブ・アンバールはヤズドやナーイーンといった砂漠気候の都市に多く存在するが、砂漠周縁気候の諸都市においても見ることができる。特に、本論文が扱うガズヴィーンにおいては、一時期アーブ・アンバールの創建が集中するなど、独自の発展を見せている。

以上のように、イランの都市は、その厳しい自然条件、水利条件に左右されて発展してきたことがわかる。そして、ガージャール朝期に新しい変化が起きた際も、これらのイランの都市が元々有していた条件も少なからず影響を与えていたことに留意しておきたい。

第3項：本論文における都市構成の要素の分類

建設事業の増加は、都市の発展の指標となる。特に大規模な創建・修繕事業は、十分な工期と潤沢な資金を有したパトロン存在を要するため、当該都市の社会が平和で繁栄している期間にしか行われぬ。本論文ではこの点に着目し建造物の創建・修繕の様相を明らかにすることで、都市変化・変容を、読み解いていく。

本論文では、都市を構成する要素を、宗教関連施設、水利施設、商業関連施設、世俗的建造物の4つのタイプに分類してまとめることとする。これらの施設は、この時期のイランの都市構成における重要な要素である。宗教関連施設については、モスク・マドラサといった礼拝・教育の場から、参詣対象となる墓廟、シーア派宗教行事の場であるテキエやホセイニーエなどを指している。これらは、中東のイスラーム圏諸都市において、信仰・教育・巡礼・社交といった様々な場を提供することから、都市内部において場合によって

⁷³ ヴルフ (2001): 262-264; Holod (1982).

⁷⁴ ヤズドはイランにおいてガナート技術が発展し優秀なモカンニーが多く集まる場所であり、アーブ・アンバールの技術もヤズドから術が伝播したものと考えられることから、イランにおける水利施設の建築技術はヤズドにおいて発展したと考えられる (Holod, 1982)。

は都市外からも人を引き寄せる求心性を有している。特に大会衆モスクは都市の起点であり、かつては中心そのものであった。また、これらを維持・管理するためのワクフ財も併せた一連のコンプレックスは、周辺に人を集めて経済活動の活性化を促すため、都市社会・経済の基盤ともなる。この点では、ワクフ財に設定された水利施設や商業関連施設も、その収益が施設運営に還元されるため、ある意味で宗教関連施設の一部としてとらえることができる。

また、イランの宗教的建造物は、サファヴィー朝期以降、シーア派信仰を体現する意匠や建造物が増加するという特徴がある。この傾向が強く表れるのは、エスファハーン遷都後であるが、その前時代の首都であったガズヴィーンでの変化を見ることも、全体の流れをとらえる上で重要であると考えられる。またこの時のシーア派への転換を契機として、シーア派関連の墓廟が増加していく。そして、この時期からタアズィーエ上演とイマーム・ホセインの追悼の場であるホセイニーエやテキエの創建が見られるようになってくる⁷⁵。このシーア派関連の建造物の増加傾向はサファヴィー朝期以降の特徴であるため⁷⁶、ガージャール朝期の都市構成・社会の前提を把握するうえで注目しておく必要があるだろう。

次に水利施設であるが、本論文では、都市の給水に重点を置いているため、主にガナートとアープ・アンバールを水利施設として扱う。そのため、水利用施設としての公衆浴場は商業関連施設として、泉亭は宗教施設の一部としてとらえることとする。繰り返してきたように、水利施設はイランの都市における水の重要性の問題と絡んでいるため、存続・発展という意味では都市構成上最も重要な要素となる⁷⁷。特に、ガズヴィーンは地理的・気候的制約から、大規模かつ恒常的な水の供給が難しいという条件下にあるため、水利施設は都市において極めて重要な要素である。つまり、水利施設に関する工事が行われるということは、ガズヴィーンにそれを可能とする程度の富と平和がもたらされたと想定することができる。そこで本章では、発展の一指標として水利施設を捉え、その変化・変容を追うこととする。

商業関連施設は、取引の場となるバーザール、商館などを対象としている。また、本論文ではこれらの施設や街区の住民に利用される公衆浴場もこれに含めて分析する。

最後に世俗的建造物であるが、これには宮殿・邸宅の他、近代化以降に登場する建造物を含めた上記の範疇に入りきらない要素を包括的に取り扱うこととする。イランの建築史上、サファヴィー朝以降は宮殿や邸宅といった建造物が増加し、これらのための技術が発達していくと特徴づけられている。また、ガージャール朝期には、列強との接触によって、これまでのイランになかった建造物が登場してくる。特に、列強が拠点として各地に建てた建造物とナーセロディーン・シャーの西洋趣味によって生じた折衷型の欧風建築の流

⁷⁵ Scarce (1991); Calmard (2012).

⁷⁶ Hillenbrand (2011).

⁷⁷ Beaumont (1969): 45-64.

行は、ガージャール朝後期の特徴であり、地方によって独自の発達を遂げる場合があるため、注目する必要がある⁷⁸。

以上、都市構成の基本となる4つの要素を挙げたが、これらの分類はあくまでも便宜的なものであり、各々の要素は互いに関連しあい、複合的であることを念頭に置いておく必要がある。また、ガージャール朝期に関しては、変化を細かく見ていくために、君主の統治期間に区切って経緯をまとめることとする。

イラン高原の都市の成立条件や水利の問題は、歴史を通して、イランの都市形成や構造に影響を与えてきた。また、都市同士も、砂漠による分断のために強固なつながりを形成しづらい状況にあり、歴代の王朝や中央権力は強力なイニシアティブを発揮しにくい状況にあった。しかし、19世紀以降にイランに起こった列強との接触や改革事業、中央集権化などの様々な変化は、少しずつこれらの形やつながりに変化をもたらすこととなった。そのような時代の変化の中で、イランの都市や都市同士のつながりはどのような変化・変容を遂げていったのか。本論文ではこれらを都市の構成要素に注目しながら段階的に整理した上で、これらの推移を明らかにする。

⁷⁸ Scarce (1991); Grigor (2015): 221-233.

【第1部：ガージャール朝期イランにおける近代化事業の影響】

第1章：イランにおける近代化事業の興りと進展

ガージャール朝の成立とその勢力拡大の時期にあたる18世紀末から19世紀前半にかけては、イランがロシアの南下政策と、それを阻止しつつ自国の権益を拡大しようとするイギリス、フランスとの覇権争いの舞台となる時期と重なった。サファヴィー朝滅亡後の混乱する情勢を治めて成立したガージャール朝は、未だ活発な地方勢力に加えてこれら列強とも対峙する宿命を負っていた。

18世紀の後半は、ヨーロッパにとっては内部での覇権争いが海外植民地での抗争と連動した時代であり、フランス革命（1787-1799年）・革命戦争と、ナポレオン・ボナパルト（Napoléon Bonaparte, Napoléon I^{er}, 1769-1821年, 在位：1804-1814, 1815年）に導かれた遠征や戦争の混乱が周囲の諸地域を巻き込んで様々な闘争を生み、国際勢力が再編されていく時代でもあった。中でも海外植民地における争いは、いかに自国に有利な地域を抑えるかという地政学的な争いに発展したことで、イランを含む多くの地域が列強の影響下に巻き込まれていくという作用を生んでいる。イランにおける列強の影響力拡大も、こうした時代の流れの1つに他ならない。

このような流れ中で、イランは様々な影響を受けて少しずつ変化を遂げていった。特に、列強の影響力が強まる中で、ヨーロッパの近代性と邂逅したことは、イランにそれまでの時代には見られなかった新しい変化が起こるきっかけとなった。本章では、この時期にイランで起きた変化・変容を考察するために、当時の政治状況、その中で起こされた改革の動き、イラン経済の変化を整理し、その流れを確認する。

第1節：イランを取り巻く政治状況

第1項：列強勢力のイラン侵入

(1) 初期におけるロシア勢力の侵入

イランへ対する列強の侵入は、まずロシアの南下政策によってカスピ海南岸と南コーカサス地方への干渉が起こったことから始まる。周知の通り、南下政策自体は、ロマノフ朝第5代君主であり、帝政ロシアの初代皇帝でもあったピョートル1世（Pyotr I Alekseevich, 在位：1682-1725年）¹によって始まったものである。1696年のアゾフ海へ進出を契機に、長期にわたってロシアの国策となっており、イランを始め、オスマン帝国、中央ア

¹ 大北方戦争（1700 - 1721年）を治めて北東ヨーロッパの覇権を握ったことにより、元老院にインペラートル（皇帝）の称号を贈られ、ロシアの帝国への昇格を実現した。これによって帝政ロシアが成立している。彼の行った近代化によって、ロシアは列強に加わることとなった。そして国是となった南下政策によってオスマン帝国、ガージャール朝イラン方面への侵攻が行われるのである。

ジア諸地域、清、日本など広域に渡ってこの影響を受けている。この政策がイランに侵入したのは、ロマノフ朝第8代君主エカチェリーナ2世（Yekaterina II Alekseyevna, 在位1762-1796年）の治世であった。この時イランは、アーガー・モハンマド・ハーンが国内を統一しようとする、ガージャール朝の勃興期にあった。

この時期の衝突は、単発的なものが多く、そこまで深刻な問題には映らなかった。しかし、断続的な干渉が続いており、戦争への布石を打つような軍事行動が起こっていた。例えば、1781年にロシアがイギリス領インド方面への進出を企図して、カスピ海南東のアスタラーバード（Astārabād）²に築いた拠点を、アーガー・モハンマド・ハーンによって撃退された。また、1785年から翌年にかけて、カスピ海南岸のアンザリー（Anzālī）を巡って、ギーラーンの統治者ヘダーヤトッラー・ハーン（Hedāyat-ollāh Khān Gilānī）に、アーガー・モハンマド・ハーンに対する共闘を持ちかけるなど、次第に影響力を増してきていた。

そして、ロシアが2度の露土戦争（1768 - 1774年、1787 - 1791年）を経て、ウクライナやクリミア・ハン国を併合し、黒海での覇権を確立すると状況は一変する。イランにとって転機となったのは、ロシアがキリスト教国であったグルジア³の保護国化を進めたことである。これは、黒海地方かグルジアを拠点としてコーカサス地域への進出を目論んだためである。1783年にギオルギエフスク条約が結ばれ、保護国化へ向けて動き出すと、サファヴィー朝期の版図再現を目指すアーガー・モハンマド・ハーンがこれに激しく反発した。そして、1795年にはアーガー・モハンマド・ハーンによる首都トビリシへの大規模侵攻も行われている。この争いや衝突自体は、1796年にエカチェリーナ2世が病没し、翌1797年にアーガー・モハンマド・ハーンが暗殺されることで一端収束した。しかし、争いの火種は燻り続け、後のイラン・ロシア戦争へと発展していくのである。

(2) 初期におけるイギリス勢力の侵入

ロシア以外の国がイランへ注目し始めるのは、インドにおける覇権争いに終止符が打たれて以降であり、これをきっかけとしてイランは国際情勢に巻き込まれていくこととなる。ロシアの関心がコーカサス地域やカスピ海沿岸といったイラン北部にあったのに対し、南部から影響力を強めていったのはイギリスであった。契機となったのは、1757年のプラッシーの戦いである。この時、イギリス東インド会社（East India Company, 1600年成立）が、フランス東インド会社（Compagnie Française des Indes Orientales, 1604年成立）を破り、インド亜大陸東部ベンガル地方における支配を確立し、インド植民地化の

² 現在のゴルガン（Gorgān）。カスピ海南岸の交通の要所の一つ。

³ グルジア（Gruziya, Gorjestān）の国家名称は、日本では2015年に呼称をジョージア（Georgia）に変更しているが、本論文ではそれ以前の時代を扱うためグルジアで表記を統一している。

足掛かりとしている⁴。この時初めて、インドの背後に存在するイランの存在が、地政学的に重要性を持ち始めた。きっかけとなったのが、フランスによる英印航路の妨害である。1798年、ナポレオンはエジプト遠征によって、重要な中継都市であったカイロを占領し、牽制行動に出た。更に、台頭していたアフガニスタンのドゥッラーニー朝（1747 - 1826年）ザマーン・シャー（Zamān Shāh Dorrānī, 在位：1793 - 1800年）の勢力と、マイソール王国（1399 - 1947年）のティープー・ソルターン（Tīpū Soltān, 在位：1797or1786 - 1799年）とそれぞれ同盟を結んで、対英戦闘のための小部隊を派遣した。そして、ナポレオン自身もアレクサンドル1世と同盟を結んで、カスピ海経由でインド遠征計画を進めるなど、イギリス包囲網を築こうとしたのである⁵。

イランはこの争いの舞台となるインドとカスピ海の間位置していたため、フランスにとってはインドへの兵站路、イギリスにとっては防衛線としてにわかに注目され始めたのである。この注目を皮切りに、イランは列強の覇権争いの舞台として、目まぐるしく変化する国際情勢に巻き込まれていくことになった。

ベンガル総督⁶ウェルズリー（Wellesley, Richard Colley, 1760 - 1842年, 在職：1787 - 1805年）は、カイロ占領の翌年にあたる1799年に、マルコム大佐（Malcolm, John, Sir, 1769 - 1833年）をファトフ・アリー・シャーの宮廷に派遣することを決定し、政治条約締結のための交渉を一任した。当時のイギリス外交は、インド総督府と本国の意向が一本化されてはおらず、インドでの影響力拡大の主力は総督府、特にベンガル総督によって画策されたものであったことを留意しておきたい。そして、この時ウェルズリーの思惑には、1796年から始まっていたザマーン・シャーのインド侵攻にガージャール朝の軍をぶつけることで、自身の負担を回避しようとする意図があった⁷。この交渉は、アフガニスタン方面への勢力拡大を目論むガージャール朝宮廷に受け入れられ、ガージャール朝領土へのフランスの侵入禁止に加えて、ドゥッラーニー朝のインド侵攻の際にガージャール朝がアフガニスタンへ侵攻するという条項が盛り込まれたのである⁸。

⁴ インドの植民地化自体は、ブラッシーの戦いの因縁によって起こったブクサル（battle of Buxar, 1764年）の勝利と、翌年に結ばれたアラーハーバード条約（treaty of Allahabad, 1765年締結）による、ベンガル、オリッサ、ビハール3州での租税徴収権（ディーワーニー）の獲得が契機となる。この後、マイソール王国、マラーター同盟との衝突が起こり、更に影響力を拡大。1858年インド大反乱（シパーヒーの乱）の後、ムガル皇帝の廃位と東インド会社解散によって、イギリス領インド帝国（Indian Empire, 1858-1947年）が成立する。

⁵ 永田（編）（2002）: 335-336。

⁶ 東インド会社が植民地インドにおいていた総督で、後のインド総督（Governor-General of India）の前身。同社の拠点として商館が置かれた3つの管区（ボンベイ、マドラス、カルカッタ）のうち、最も重要であったカルカッタ（ベンガル）が1773年に最高商館（Supreme Council）となり、ベンガル総督を名乗るようになる。1833年の特許法により改称された。イランへ対する影響は、初めはこのベンガル総督によるものが大きかった。

⁷ 第3代君主ザマーン・シャー（在位：1793-1801年）による、パンジャーブ地方への侵攻（Sykes, 1915, vol.2: 300）

⁸ Kazemzadeh (2011).

この交渉の際、イラン側で代表を務めたのは王朝初の宰相（Sadr-e A‘zam）ハーッジー・エブラーヒーム・シーラーズィー（Hājī Mīrzā Mohommad Ebrāhīm Kalāntar Shīrāzī, E‘temād od-Doule, 1745 - 1800 or 1801, A.H.1158 - 1215 or 1216年）であった。彼はザンド朝最後の君主ロトフ・アリー・ハーン（Lotf ‘Alī Khān Zand, 在位：1789 - 1794年）の宰相を務めた人物で、その時代からシーラーズ交易を巡ってイギリスとの繋がりを持っていたため、この条約締結に前向きであった⁹。

マルコム大佐とハーッジー・エブラーヒームの協議は政治条約に留まらず、1801年1月には通商条約と攻守同盟も締結されている。この条約では、イギリスおよびインド商人のペルシア湾の停泊許可や免税に加え、イギリス商品の関税免除など、イギリス側にとって有利な条件が認められた。そして、この条約締結によってインド植民地経営へ集中できる体制が整ったため、イランへ対する関心は急激に失われていったのである¹⁰。

(3) イラン・ロシア戦争をきっかけとした従属化の始まり

イランがイギリスとの同盟を結んだ背景には、先述の南コーカサス地域におけるロシアとの争いがあった。ロシアのグルジア進出は、ゲージャール朝との間に軋轢を生み、イラン・ロシア間での最大の領土争いへと発展していたのである。経緯は次の通りである。エカチェリーナ2世の死後、グルジアでは内戦が起こり、これを治めた第9代君主パーヴェル1世（Pavel Petrovich Romanov, 在位：1796 - 1801年）によって1801年1月にグルジア併合の取り決めがなされた。そして、1801年9月に第10代君主アレクサンドル1世（Aleksandr I, Aleksandr Pavlovich Romanov, 在位：1801-1825年）により、正式に併合された。ロシアが南コーカサスに拠点を築いたことは、同地域を自らの版図のうちと自負していたイランの意向と本格的に衝突し、第一次イラン・ロシア戦争（1804 - 1813年）が勃発したのである。

この第一次イラン・ロシア戦争に際して、ファトフ・アリー・シャーは、1801年に同盟を結んでいたイギリスからの支援を期待していた。しかし、その目論見は完全に外れた。この時イギリスは植民地インドとの関係強化に勤しんでいたため、既にイランに対する興味を失っていた。そして、イランからの支援要請に対して、対価としてゲシュム島（jazīre-ye Qeshm）、ホルモズ島（jazīre-ye Hormoz）といったペルシア湾上の要所の割譲を要求し、即時の対応をしなかった¹¹。

この時、対ロシアへの協力を申し出たのは、ロシアとイギリス、双方と対立を深めていたフランスであった。フランスは、アミアンの和約（1802年3月締結）によってイギリ

⁹ Kazemzadeh (2011).

¹⁰ 永田（編）(2002): 337; Kazemzadeh (2011).

¹¹ 永田（編）(2002): 337; Kazemzadeh (2011).

スと一時的に和平状態にあったため、開戦当初はイランに対して関心を持っていなかった。しかし、大陸封鎖令（1806年）へのイギリス、ロシアの反発を契機にナポレオン戦争に突入し、ロシア遠征を決定したことでにわかにイランへの関心が高まっていたのである。イランは対露戦への兵站路、そしてイギリス領インドへの牽制という意味から、フランスにとって地政学的な重要性が生じていた。

そしてナポレオンは、1806年6月に外交官ジョベール（Jaubert, Pierre Amédée, 1779 - 1847年）に書簡を持たせてイランに派遣し、イギリスとの条約破棄を条件に、グルジア回復のための支援を提案した。更に1807年4月、フィンケンシュタイン城でガージャール朝特使ミールザー・モハンマド・レザー（Mīrzā Mohammad Rezā Qazvīnī）と会見し、フィンケンシュタイン条約を締結している。この条約は、前年の提案の内容を盛り込み、フランスのインド通行への便宜をはかることと引き換えに、対ロシア軍事作戦への支援やギャルダン准将（Gardane, Charles-Matthieu, 1766 - 1818年）率いる軍事使節団のイラン派遣などが含まれていた。

だが、このフランスとの条約は、同年のティルジット条約（1807年7月）によってフランスとロシアが接近したために、早くも無効化した。結局のところ、フィンケンシュタイン条約は、ギャルダン准将の軍事使節団の派遣（1807年12月テヘラン到着）以外は実現されなかったのである¹²。更に、1812年のモスクワ遠征の失敗とナポレオン失脚によって、イランへ対する興味が失われた。

この、フランスの動きは、再びイギリスをイランへと引き寄せることにつながった。これは、ロシアが南コーカサスに勢力が拡大したことで、イギリス領インドにとってもロシアが脅威と受け止められるようになったためである。イギリスは、フィンケンシュタイン条約の事実上の無効化を受けて、イランの対仏関係に割って入った。イギリス本国政府とインド総督府は、それぞれイランとの接触を図った。これは、イギリス本国にとってもロシアが脅威と映ったためである。

まず動いたのは、従来対イラン交渉の主導権を握ってきたインド総督府であった。総督ミントー卿（Minto, Gilbert Elliot-Murray-Kynynmound, 1751 - 1814年、在職：1807 - 1813年）は、過去に条約締結に尽力したマルコム卿を、1808年4月に准将位でガージャール宮廷に派遣した。しかし、これは失敗に終わっている。それは、この時ファトフ・アリー・シャーがフランスに淡い期待を抱いていたために、謁見を拒否したためである。

一方で、イギリス本国政府はイランとの交渉に成功した。これは、本国政府から全権使節に任命されたインド植民地特使ハーフォード・ジョーンズ卿（Brydges, Harford Jone

¹² 永田（編）（2002）：337；吉村（2005）：27-28；Hellot-Bellier（2012）。

s, 1764 - 1847 年) の功績である。ジョーンズ卿は 1809 年 2 月にテヘランに到着し、翌月 12 日には友好同盟条約の下地となる暫定条項を完成させていた¹³。

友好同盟の概要は次のようなものであった。イランが他国と結んだ条約を破棄、第三国から攻撃を受けた際のイランへの軍事援助、イギリス領インドが攻撃を受けた際のイラン軍の派遣などである。これによってイギリスは、ガージャール宮廷に派遣されていたギヤルダンを帰国させ、宮廷内のフランスの影響力の排除に成功したのである。これを受けて、1809 年 5 月、友好同盟の本条約の交渉のために、アボルハサン (Mīrzā Abū ol-Hasan Khān Shīrāzī Īluchī-ye Kabīr, 1776 - 1845 年) を団長とした 9 名の使節団がイギリスに派遣された。使節団は 1811 年 3 月に帰国したのだが、この時、イギリス本国政府は本格的にイランへの進出を図るため、ウーズリー (Ousley, Gore, 1770 - 1844 年) を全権大使に任命して、同行させている。本条約は 1812 年 3 月に締結され、1814 年にはこの条約に基づいて更なる関係強化を約束するテヘラン条約が結ばれた。この 1809 年からの 20 年間はイランにおけるイギリスの影響力が強い時期となった¹⁴。

このようにガージャール朝の方針は親仏から親英へと転換した。しかし、この時、イギリス本国とイギリス領インド政府の方針は一元化されていなかった。総督ミントーは、ジョーンズの交渉に憤り、あらためてマルコムを少将位で派遣して (3 回目) 交渉にあたらせようとした。この時、マルコムは皇太子アッバース・ミールザー (‘Abbās Mīrzā Nāyeb-os-Saltane, 1789 - 1833 年) の要請で、軍人養成のために指導教官を随行させている¹⁵。しかし、この派遣も先述のウーズリー卿が全権大使として本国より派遣されてきたことによって失敗に終わっている

このような外交交渉が行われている中、イラン・ロシア戦争はロシア優勢へと傾いていた。そして、ガージャール軍はアラス河畔の戦いで大敗したことをきっかけに、この 10 年近くにわたる争いに敗れたのである。戦争の講和条約として結ばれたゴレスタン条約 (‘ahdnāme-ye Golestān, 1813 年 10 月 24 日締結) は、ロシアにとって大変有利な条約であった。

そのうちイランに大きな影響を与えた条項は次のものである。まず、イランはカスピ海西岸地方にあたるダルバンド (Darband)、バクー (Bākū)、シールヴァーン (Sīrvān)、ガラバーグ (Qarābāgh)、ギャンジャ (Ganja)、ターレシュ (Tālesh) の一部をロシアに割譲し、グルジアとその周辺地域にあたるダーゲスタン (Dāghestān)、ミングレル (Mingrel)、アブハジア (Abkhaziya, Ābkhāzestān) に対する一切の要求放棄することを約束させられた (第 2 条)。これによってガージャール王朝は、その領土の中で最も豊かな南コーカサス地方に対する影響力を失うこととなった。その上で、カスピ海におけるロシア軍

¹³ この成功は、ジョーンズ卿がペルシア語に堪能で、宮廷とのつながりもあり、賄賂などでファーフ・アリー・シャーや廷臣に取り入ったためともいわれる。

¹⁴ 永田 (編) (2002): 337-338; Kazemzadeh (2011).

¹⁵ Kazemzadeh (2011).

艦の独占的航行権の承認を余儀なくされた（第5条）。更にはイランの王位継承問題への介入を認める条項（第4条）まで含まれている¹⁶。

このカスピ海西岸から南コーカサスにおけるロシアの影響力拡大は、南部から勢力拡大を目論むイギリスにも好機をもたらした。イギリスは使節団を派遣し、翌1814年11月25日にはイギリス・イラン防衛同盟を調印する。その内容は、親英国以外との同盟を破棄する代わりに、イランが他国から侵略された場合の軍派遣や補助金などを含む支援を約束するもので、一見同盟としての性格が強いように見える。しかし、その内容は、「ロシア・イラン両国の領土上の境界線は、イギリス、イラン、ロシアの承認に従い決定される」（第3条）、「イラン側からの侵略によりヨーロッパ諸国との戦争が発生した場合、上記補助金【年間20万トマン】は支払われないものとする」（第4条）といったものであった¹⁷。これは、イギリスが後に生じると目されたコーカサスとイランの国境画定問題への参入することを約束させるものであった。

この国境確定問題の原因は、ゴレスターン条約において明確な国境線が規定されていなかったことにあった。このイギリスの強引な介入は、両国の境域を巡る軋轢が近いうちに次の抗争を呼ぶことを予想して、その際の国境画定に参画するつもりがあったからである。そして、大方の予想どおり、この問題は再び両国の衝突を生んだ。イラン側では対ロシア戦争の敗北に対してのフラストレーションが辺境での小競り合いという形で表れており、それが1826年6月の軍事行動につながったのである¹⁸。これが第二次イラン・ロシア戦争（1826-28年）の始まりであった。この時イラン側は、一時的にゴレスターン条約によって失った地域のほとんどを回復するほど善戦した。しかし、すぐに巻き返されてしまい、1827年10月には皇太子の居所でありアゼルバイジャン地方の中心都市であったタブリーズまで陥落の憂き目にあうほどの大敗を喫した。

この戦争中、イランは先のイギリス・イラン防衛同盟条約に基づいてイギリスに支援要求をしたのだが、イギリスは第4条に基づいてこれを拒否した。大きく裏切られたイランは敗北を重ね、ついにトルコマンチャーイ条約（‘ahdnāme-ye Torkamānchāy, 1828年2月21日）の締結に至った。

トルコマンチャーイ条約では、ロシアへのエレヴァン（Yērevān）、ナヒチェバン（Nakhijevān）両地方の割譲が約束され、アラス川が両国の国境線として規定された（第3条）。そして、これにあわせてイランとロシアの国境線も画定された（第4条）。この条約をもって、イランは南コーカサス地域の領土のほとんどを喪失したのである。更に500万トマン（約250万ポンド）の賠償金支払いの責務を負い（第6条）、イラン北部の主要都市におけるロシア領事館設置を約束させられた（第11条）。更には、ゴレスターン条約

¹⁶ 歴史学研究会（編）（2009）：204-205.

¹⁷ 歴史学研究会（編）（2009）：206-207.

¹⁸ 永田他（編）（2002）：339.

で承認していた王位継承問題へのロシアの介入を改めて認めさせられることとなった（第7条）。加えて、通商保証協定も同時に結ばれており、その条項によって在イラン・ロシア臣民の治外法権を承認したことから、イランは関税自主権を喪失したのである¹⁹。

このトルコマンチャーイ条約は、イランが列強と結んだ初めての不平等条約であり、その後列強がイランと不平等条約を結ぶ際のひな型となるなど、イランの国際的凋落を決定的づけた条約である。その一方で、今まで曖昧であったイランの領土の境界域が、初めて国境線によって規定されたという面もあった。他の国家との間を国境で区分し、明確な領土を持つことは国民国家の条件の一つである。そのため、この条約はイランにとって国家主権の喪失の始まりであると同時に、国民国家への第一歩でもあるという二面性を有していたと評されるのである²⁰。

このように、北からロシア勢力が、南からイギリス勢力が侵入する中で国境線が確定され、イランは列強の影響下に置かれていった。ガージャール朝宮廷は、対露路線を基軸として親英と親仏の間を揺れ動き、イラン・ロシア戦争を契機として親露派の動きも出てくることとなった。イランの国境が画定したことで、これ以降、イランにおける境域の町であるタブリーズやカスピ海地方の重要性が高まり、イラン北街道が重要な街道となっていったのである。

第2項：列強への従属化の進展と内部情勢

(1) 政情不安とバーブ運動

イラン・ロシア戦争の敗北と不平等条約によって、イランは莫大な負債を背負い、列強への従属化が進展した。この出来事は、その後のイランの国際的地位や国力を著しく低下させ、国内での不満を増大させることとなった。その混乱が続く1832年、イランの近代化の旗手であった皇太子アッバース・ミールザーがその44年の短い生涯を閉じた。ファトフ・アリー・シャーも翌1833年にその後を追うように亡くなり、アッバース・ミールザーの長子が第3代君主モハンマド・シャーとして即位した。

モハンマド・シャーは、ロシア・イラン戦争で失墜したと国際的な地位の上昇を目指し、アフガニスタン遠征を計画した。この時モハンマド・シャーの宮廷は、アッバース・ミールザーにも仕えた開明的な宰相ガーエム・マガーム（*Mīrzā Abū ol-Qāsem Qāem Maqām Farāhānī*, 1779 - 1835年）が早い段階で退けられていた。そして親露的な政権となっており、この遠征の背後は、ロシアがイギリス領インドへ進出の意図があった。イランの軍隊は1837年にヘラート（Herāt）包囲攻撃を行ったが、ブーシェフル（Būshehr）に拠点を持つイギリスの牽制によって失敗に終わっている。

¹⁹ 歴史学研究会（編）（2009）：207-209.

²⁰ 八尾師（1998）：65-66；永田他（編）（2002）：340-341；西川（1992）：13-17.

この時期のイギリスの関心は、インドの平定とアフガニスタンの従属化にあり、さほどイランには向いていなかった。しかし、第一次アフガン戦争（1838-42年）に敗北したことで、その戦略は再びイランに戻ってくる。これは、イランを利用して南アジアに進出しようとするロシアの南下政策への対策である。そのため、イギリスは再びイランに接近し、1841年10月に関税優遇措置や治外法権などを含む通商条約を結んだ。この時イギリスはロシアと同等の最恵国待遇を要求し、これを通して²¹。

列強の思惑に振り回されて不利な条約を結んだことや、度重なる戦争による国家財政の圧迫は、国内に政情不安を巻き起こした。この時期、これらの不満を吸収する形で拡大していたのが、バーブ運動（1844 - 1852年）であった。この運動自体は、バーブ（Seyyed' Alī Mohammad Bāb, 1819 - 50年）²²による既存の宗教的秩序否定のための宗教的異議申し立てとして始まったものである。

これは、社会不安の中で隠れイマーム（mehdī）の再臨と救いを熱望する民衆の心情と合致し、次第にこれらの政情不安を作り出している体制への反発に変化していった。そしてこの運動が転機を迎えたのは、バーブが自らを真実へのバーブ（bāb, 入り口）であり、救世主であると宣言した1844年の時点である²³。この時から、運動はシーア派の改革運動の性格を帯びようになり、両性の平等、既存の宗教体制や社会的・政治的秩序の再編の必要性などを説くようになっていった。そして、貧農や主要都市部の公民権を剥奪された貧困層の不満を吸い上げる形で拡大していったのである

ガージャール宮廷は、当初この動きを単なる宗教運動として静観していた。しかし、運動に強い反発を示すシーア派ウラマーたち既存の宗教勢力の圧力と、運動の規模の大きさに、次第に危機感を抱くようになり、弾圧に至ったのである。

イランに大きな変化・変容の時代をもたらすことになるナーセロッディーン・シャーが第4代君主に即位したのはこのような時期であった。彼の初代宰相であった改革派のアミーレ・キャビール（Mīrzā Taqī Khān Amīr-e Kābīr, 1807-52年、在職：1848 - 52年）も、タブリーズで皇太子に仕えていた時代から、このバーブ教徒の運動に弾圧を加えている。1847年のアミーレ・キャビールによるバーブを幽閉によって、事態は新たな展開を迎えた。1848年にシャールード（Shāhrūd）近郊のバダシュト（Badasht）で主要な弟子たちによる集会が開かれ、既存の宗教の限界を示し、イスラーム法の放棄を宣言してガージャール政府と戦うことが決定されたのである。これ以降のバーブ運動は、明確に反体制、反ガージャールの意味合いを含むものとなった。運動の規模も全土へと広がり、マーザ

²¹ Kazemzadeh (2011).

²² バーブは、1844年にバーブを自称して以降の称号となるが、煩雑さを避けるため、本論文ではバーブで呼称を統一する。

²³ バーブが救世主であることを宣言した1844年5月22日は、ヒジュラ太陰暦1260年ジュマードI月4日にあたる。これは、シーア派の第12代目イマームが幽隠してからちょうど千年目であったことから、高まりつつあった隠れイマームの再臨待望の機運に乗る形で受け入れられていった。

ンダラーン (Māzandarān)、タブリーズ、ザンジャーン、ネイリーズ (Neirīz) などの地方都市で、王朝軍とバーク教徒の衝突事件が相次いだのである。

1850年にバークがタブリーズで異端審問にかかって処刑されると、その死は「殉教」と捉えられ、運動は更に加熱した。ラシュト蜂起 (1851年)、ターレシュ蜂起 (1869年)、ギーラーン蜂起 (1874年) と、地方諸都市でも武装蜂起が頻発している。この時の運動は政情・社会不安に起因する現体制への反発に及んでいたため、一部の商人やケルマーニー (Mīrzā Āqā Khān Kermānī, 1853/4 - 1896年) などの識者も一時的に運動に参加するまでに至った。彼らはバーク教のイデオロギーに同調していたわけではなく、大衆の反体制の主張に共鳴していたのである。

この運動の加熱具合は、1852年にナーセロディーン・シャーの暗殺未遂事件が発生したことで推し量ることができるだろう。一宗派の改革運動にすぎなかった動きが様々な階層の人を取り込み、一国の王の暗殺を計画するに至ったことは、この時期の政情不安や社会的不満の計り知れない大きさを示している。ガージャール政府はシャーの暗殺未遂事件を受けて、運動に未曾有の大弾圧を加えた。この時、女流詩人としても高名なゴッラトルエイン (Fāteme Khānom Barāghānī Qazvīnī, ? - 1852年) を始め、多くの信徒が逮捕・処刑されている。最終的に、この弾圧をきっかけに運動は収束を迎えた。バーク教自体も戦闘的な方針を転換することを余儀なくされて分裂し、急激に縮小していったのである²⁴。

このように、シーア派の宗教活動の一つにすぎなかったバーク運動は、都市社会の中でその階層の一部に受け入れられ、既存の宗教権力や王朝と対立するまでに膨張した。この動きは、その規模や影響力から、「下からの」宗教的な抵抗運動であり、ガージャール朝に対する最初期の革命運動であると捉えられている²⁵。大規模な粛清の後、下火になったとはいえ、地方諸都市に潜んだこれらの勢力は、ガージャール朝宮廷やそれと結びついた宗教勢力にとっては大きな楔となったのである。

(2) 利権供与による従属化の進展

アミーレ・キャビールは、このバーク運動への弾圧と並行し、様々な改革事業を展開して、イランの近代化を図っていた (後述)。しかし、一連の改革も宗教的慣習や行事の制限にまでは踏み込めず、失敗に終わったものも多かった。そして、改革によって既得権益を奪われることを恐れた廷臣や宗教勢力の進言によって、アミーレ・キャビールは失脚、改革も頓挫することとなるのである。

²⁴ バーク教は、その後バハーオッラー (Mīrzā Hosein 'Alī Bahā-ollāh, 1817 - 1892年) 率いるバハーイー教と、ソブヘ・アザル (Mīrzā Yahyā Nūrī Sobh-e Azar, 1830 - 1912年) 率いるアザリー・バークに分裂した。

²⁵ 吉村 (2011) : 33-34.

アミーレ・キャビールの失脚と共に、ナーセロッディーン・シャーの親政が始まったのだが、彼もまた祖父、父と同様にアフガニスタンへの侵攻を計画する。そして1856年にヘラート遠征を行うが、これが引き金となり、イラン・イギリス戦争（1856 - 67年）が勃発した。ヘラートは即座にイギリスに奪還され、その勢いでペルシア湾の要所であるハールグ島（jazīre-ye Hārg）とブーシェフル港（bandar-e Būshehr）を占領される。更にイギリスの勢いは止まらず、ペルシア湾からカールーン川を北上してアフヴァース（Ahvāz）までも占拠されることとなった。この圧倒的な勢いと軍事力の差にイラン側はなすすべもなく、1857年のパリ講和条約において、アフガニスタン方面への領土拡大の全面的放棄を認めざるを得なかったのである。

これまでアフガニスタンとイランの北東部は、歴史的ホラーサーン地域として、ペルシア文化圏を構成するものととらえられてきたが、この条約によって、この文化圏の事実上の分断・解体が始まったのである。その後、この地域に関しては、イラン側とイギリスの交渉を通じてアフガニスタンとインドとの国境線が確定していった²⁶。こうして、北西方面はロシア、南東方面はイギリスの勢力がおかれ、両国に従属していくというイランのあり方が決定づけられたのである。

更にイランの従属化が加速した背景には、異常ともいえる数の利権譲渡があった。ガージャール政府は、利権譲渡によって、不足する国家予算を補い中央集権化のためのインフラを整備しようとした。この動きは、モスクワに本部を持つイギリス系のインド＝ヨーロッパ電信会社（Indo-European Telegraph Company, IETC）に、電信線敷設利権が譲渡したことをきっかけに始まった²⁷。これをきっかけにロシアも利権獲得に乗り出し、1860年にペテルブルク＝テヘラン間の電信線敷設利権、1869年にカスピ漁業利権を獲得しており、その後約60年にわたり、道路、鉄道敷設、河川航行など、ありとあらゆるといっても過言ではない量の利権が列強に売り渡されていった²⁸。

中でも、1872年に行われたロイター（Reuter, Paul Julius Baron, 1816 - 1899年）への包括的な利権譲渡は深刻であった。それは、カスピ海＝ペルシア湾ルートの鉄道敷設に関する初の利権とそれに関わるあらゆる利権を含むものであった。列挙すれば、路面電車の設置、天然鉱物資源の採掘権、森林資源の利用、河川整備、ダム建設、貯水槽設営、掘り抜き井戸・運河の掘削、税関の管理運営、銀行設立、街道の舗装・整備、郵便・電信線の整備、製粉所・工場・作業所などの建設といった、インフラ事業から、経済システムに至るまでの広範かつ包括的な利権譲渡である。ロイターは、その見返りとして、ガージャール政府に対して鉄道関連の収益の20%及びその他分野の収益の15%の支払いと、鉄道関

²⁶ 八尾師（1998）：68-73.

²⁷ 1862年にハーネギーン＝テヘラン＝ブーシェフル間、1868年にテヘラン＝ジョルファー間での電信線敷設権が敷設された。

²⁸ 1921年のクーデタによる事実上のガージャール朝権力の衰亡までの間、38件の利権が供与された。

連事業の15ヶ月以内の未完了に対する違約金として4万ポンド支払うことを約束した²⁹。

この利権譲渡は、あまりに包括的内容であったために、内外から多くの反発を呼んだ。そのため、翌1873年には、利権はいったんガージャール朝側から撤回され、交渉を経た後、1889年に改めてペルシア帝国銀行 (*bānk-e shāhanshāhī-ye Īrān*) の開設権と鉦山開発権 (貴金属・宝石類を除く) が譲渡されることとなった。

注目すべきは、この銀行が紙幣の印刷・発行権を有していた点である。これは、イギリスによるイラン経済・金融のコントロールを可能とする金融機関が誕生したことを意味していた。もちろん、この動きはロシアの関心も引いた。そして、1890年にはロシア人ポリャコフに貸付銀行 (*bānk-e esteqrāzī*) の開設利権が譲渡されると、この利権はロシア政府によって買い取られ、先述のペルシア帝国銀行と競合する形で、イラン経済に介入していくこととなったのである。

ロイター利権の衝撃は列強にも重く受け止められ、同様の利権譲渡が再び起こらぬように牽制する動きが起こった。そして、1890年11月11日にイラン＝ロシア間で合意がなされ、イラン政府がむこう10年間、鉄道を自身の手で建設したり、会社・個人に建設権を与えたりしないことが決定された。イッサウィによればこの合意はイギリス政府への報告で不妊化合意 (*sterilizing agreement*) であると評されていた³⁰。この合意は1900年に更新され、結果的に20年にわたり鉄道建設関連の利権譲渡が凍結されたのである。

鉄道利権の忌避は、イギリスとロシアに道路建設に関する利権獲得への方向転換を促した。そして、1893年から1914年の間に延べ500マイルにも及ぶ道路敷設が行われることとなった。イギリスは南部の道路建設に着手し、イラン南部のテヘラン＝ゴム (*Qom*) 街道 (147km)、ゴム＝アラーク (*Arāk*) 街道 (135km) を建設した³¹。一方でロシアは、イラン北部を中心にテヘラン＝アンザリー街道 (379km)、タブリーズ＝ジョルファー街道 (135km)、ガズヴィーン＝ハマダーン街道 (147km) を建設している。この1890年代から1910年代にかけての道路建設事業の集中は、この時期が「舗装道路の時代 (*the Paved Road Period*)」と称されるほどであった³²。この時、ロシアの道路建設事業で注目されたのが、貿易港であるアンザリー港とテヘランへと繋ぐルートと、タブリーズとテヘランを繋ぐルート、双方の中継地でもあったガズヴィーンであった。

²⁹ 水田 (2003): 34-35; Bakhash (1978): 114.

³⁰ Issawi (1971): 156.

³¹ イギリスは、1862年の段階でバスラとバグダードに挟まれたティグリス川の航行権を、1888年にはアフワーズ近郊のカールーン川の航行権を獲得していた。そのため、バグダード経由の商業ルートとアフワーズ＝エスファハーンのルートが開発され、そこから首都テヘランとつなぐ形で道路建設が進められた (Issawi, 1971: 156-157)

³² Issawi (1971): 157より。

(3) 国内の反発

利権譲渡が加速していく中で、国内情勢は新たな展開を迎える。契機となったのは、タバコ³³利権の譲渡を発端とした大衆の抗議運動、いわゆるタバコ・ボイコット運動 (*nehzat-e tanbākū*, 1891-1892 年) である。タバコの専売そのものについては、アミーレ・キャビールが国家歳入の増大を企図して徴税計画を制度化した際にその下地が形成されており、1886 年にタバコ専売化の勅令が發布されていた。しかし、これらの利権料はほぼシャーの私財として利用されており、3 度にわたる訪欧旅行や遊興費に充てられていた³⁴。そして、タバコ利権は 1890 年 3 月 8 日 (3 回目の訪欧旅行の最中)、イギリス公使の仲介で、イギリス人投機業者タルボット (Talbot, Major Gerald Francis) へ売却された³⁵。この時与えられたのは、イランにおけるタバコの栽培、買い付け、加工、販売、輸出の 50 年に渡る独占権である。すなわち、国内消費、輸出に関わらず、タバコ葉に関する利権独占を意味していた。そして、その見返りとして、イラン国庫へ毎年 15,000 ポンドと利益配当 (資本比率 5 パーセント分) とそれを含む純益 25% を納めることを約束した。そして、翌年専売会社「タバコ・レジエ (Tobacco Régie)」が設立したのである³⁶。

この一連の利権譲渡は秘密裏に行われたものであったが、その情報は事前にイスタンブールのイラン人コミュニティにつかまれており、3 月 3 日付の『アフタル紙 (Akhtar)』にスクープされている³⁷。当時タバコは、イランにとってなくてはならない日常生活物資の一つであり、喫煙者数 250 万人、関連就業者数 20 万人程度の大規模産業であった。そのため、既得権益を奪われる形になったタバコ関連の商人たちを中心に、列強の圧力と売国ともいえる政策を繰り返す王朝への強い反発が起こったのである。半列強・反体制の社会運動はバーブ運動の後期にも起こったが、この度のタバコ・ボイコットでは、大衆だけでなくウラマー層も運動に加わった点に違いがあった。これは、タバコの生産によって利権を得ていた宮廷と、彼らと結びつく高位のウラマー層からも強い反発が起こったためである。そして、急進派ウラマー層がこの争いを大規模な反植民地運動に発展させ、最終的に王にタバコの独占権譲渡を無効とさせるに至ったのである。

この独占権譲渡が破棄されない限りタバコの使用を禁止するというウラマーたちのスローガンや、それに従う商人層、都市民衆などの動きは、反ガージャール的かつ反植民地主義的な姿勢となり、最終的に王の決定を覆したという点で、後の立憲革命 (*enqelāb-e mashrūtiyāt-e Īrān*, 1905 - 1911 年) の予行演習となったと評されている。また、タバコ・ボイコット運動の経験は、内外のイラン人に列強の圧迫とガージャール朝の専制的支配に

³³ 水煙草用の刻み煙草 (*tanbākū*) とキセル煙草 (*tūtūn*) の双方をタバコと称している。

³⁴ 吉村 (2011): 39。

³⁵ この面会に際し、タルボットはナーセロディーン・シャーに 25,000 ポンド、宰相アミーノッソルターンに 15,000 ポンドの賄賂を支払っている (吉村, 2000: 39)。

³⁶ Coleman (1897): 205-206; 吉村 (2011): 39; 加賀谷 (1975): 190-193。

³⁷ スクープは第 15 巻 27 号 222 項に掲載された。イスタンブール在住イラン人の動きとアフタル紙の分析に関しては鈴木 (1986); 坂本 (2012a), (2012b) に詳しい。

対する批判の目を開かせたという点でも評価されている³⁸。一方で、この運動の成功によって破棄された利権の賠償金が財政を更に圧迫し、更なる借款に頼らざるを得ないという悪循環を招いている。そのため、この運動は、イラン史上初の民衆運動としての側面と、イランの経済的・金融的従属化の加速のきっかけとしての側面があることを理解せねばならない³⁹。

また、1901年にノックス・ダーシー (Knox D'Arcy, William: 1849 - 1917年) に供与された石油利権は、後のイランにとって大きな問題を残した。これは、むこう60年間にわたって、イラン全土の天然ガス・原油を探鉱・調査・採掘、輸送、販売する包括的利権である。当時、石油の資源としての利用価値が低かったため、それほど問題視されなかったが、後続であるパフラヴィー朝期に大きな問題となって浮上してくることとなる⁴⁰。

しかし、この利権譲渡による弊害について、王朝側の危機感は薄かった。後続の第5代君主モザッファロディーン・シャーの時代になると、利権譲渡は既に外交的な慣習の様相さえ呈している。シャーは、長い皇太子生活をタブリーズで過ごしていたことから、親露的であった。そして、1896年に改革派のアミーノッドウレ (Mīrzā 'Alī Khān Amīn od-Doule, 1844 - 1904年) を宰相据えるものの、1898年には解任している。そして、ロシアとの結びつきが強かった保守派のアミーノッソルターン (Mīrzā 'Alī Asghār Khān, Atā bek-e A'zem, 1858 - 1907年) を宰相に据えている⁴¹。

シャーは1900年と1903年の2度にわたり、訪欧旅行を行っている。しかし、これは父のような、政治的な意図を伴った視察旅行というよりは、娯楽的な意味合いの強い旅行であったようである⁴²。問題であったのは、この旅行費用捻出のため、ロシア(1900年、1903年用)とイギリス(1900年用)に利権供与をしたことであった。このために、ロシアにはイラン北部の関税利権が供与され、その収入を旅行資金の担保・元金・利子にあてることを約束し、イギリスにはカスピ海における漁業権、郵便事業および電報に関する利権、ファールス地方およびペルシア湾における関税利権を供与した。このように、シャー

³⁸ Browne (1910); Lambton (1987); Keddie (1966); 加賀谷 (1968); 佐藤 (1992)など。

³⁹ 坂本 (2012a), (2012b)。

⁴⁰ 1908年、遊牧部族集団が支配するイラン南部のホーゼスタン (Khōzestān) のマスジェデ・ソレイマーン (Masjed-e Soleymān) において採掘に成功し、翌1909年にアングロ・ペルシアン石油会社 (Anglo-Persian Oil Company, APOC) が設立された。更にシャットルアラブ川沿いの土地を買い入れ、1912年にはアーバード (Ābādān) に製油所が建設されることにより、石油の生産体制が整えられていった。

⁴¹ アミーノッソルターンは、1898年から1903年まで宰相職にあったが、その間、国庫からの着服やロシアやイギリスからの借金を重ねたことにより、イランの財政を更に逼迫した上、両国への依存を更に大きいものにした。また、宰相は王のトラベル・コーディネーターと揶揄されるように、彼が最も力を入れた事業は、王の2度にわたるヨーロッパ外遊の計画と資金集めであった。

⁴² 1度目はパリ万博と周辺地域の観光、2度目は温泉巡りがその主たる目的であった。1900年の訪欧旅行唯一の成果は、パリで入手した映画機材を持ち帰ったことで、イランにおける映画の歴史に幕を開けたことであった。

の娯楽と引き換えに、イランはロシアに北部における政治・経済に実権を、イギリスに南部の政治・経済の実権と共に、国内の情報網を抑えられたのである。

イラン経済の要ともいえる諸利権が供与されることに伴い、権益を奪われた商人階級、新興の小中産階級、彼らを支持する中・低位ウラマーの不満が高まったのは当然の成り行きであった。シャーは、これらの不満を、アミーノッソルターンを解雇することで解決しようとした。しかし、後任のエイノッドウレ (Abd ol-Majd Mīrzā ‘Ein od-Doule, 1845 - 1927 年) が、反革命的・反動的ウラマーのシェイフ・ファズロッラー・ヌーリー (Sheikh Fazl ollāh Nūrī, 1843 - 1909 年) を宗教面の責任者に据えたことで、反発はより一層大きなものとなったのである。

この時期のイランの宗教指導者階層は、ガージャール朝の廷臣・名士たちや一部の大商人と結びつく高位のウラマー層と、新興の商人階級や民衆と結びつく中・低位のウラマー層とに分裂していた。しかし、ヌーリーの着任は、権力争いの面で高位のウラマーの反発が起こった⁴³。更に、都市社会の中で商人階級と結びついていた中・低位のウラマーの反発も同時に招くこととなったのである⁴⁴。

このような政情不安に加え、社会的な混乱も増加する。1904年に全国的な不作とコレラの発生が起こった。加えて日露戦争も勃発したために、その煽りを受けて、国内の食料品価格が高騰し、経済的混乱まで引き起こされている⁴⁵。この混乱を収めることのできない政府への絶望感から、次第に反体制的な動きが全国的な広がりを見せ、立憲革命につながったのである。

立憲革命は、テヘラン商人たちが経済的窮状の打開を主張し始めたあたりから、明確な運動の形を取り始める。1905年4月の終わりには、両替商を中心とした200人ほどのテヘラン商人が、ベルギー人財務関局長の罷免を求めて声を上げた。このようなデモ行為は次第に立憲制を求める大きな動きとなり、同年9月にシャーが外遊を終えて帰国するころには、全国規模にまで広がっていたのである。

その後、運動は更に広がり、同年12月13日、砂糖価格の高騰を理由に2名の砂糖商人が逮捕・処罰を受けたことに抗議して、バーザールが一斉休業に入った。これを受けて、ウラマーに導かれた約200名のテヘラン住民が、レイのシャー・アブドゥルアズィーム廟にバスト (bast, 聖域避難)⁴⁶を行った。この時テヘラン市長の更迭、エイノッドウ

⁴³ ヌーリーは、エスファハーンにおけるパハーイー教徒弾圧を進言するなどし、社会的な混乱を招いた。

⁴⁴ ダバシ (2008): 119-121.

⁴⁵ テヘランを始めとする主要諸都市では、年末の3カ月間のみで砂糖の値段が33%、小麦の値段が90%も値上がりしている (永田他, 2002: 357-358)

⁴⁶ バスト (bast) あるいは (bast neshīnī) とは、モスクやエマームザーデといった聖域は原則として世俗権力の不可侵領域であるという約束事を前提として、体制に反対する者たちがここに避難を求め、罰を受けることなく苦情を申し立てる慣習のことを指す。テヘランにおいては電報局などの新しい施設も避難先とされるようになり、立憲革命期には各国大使館が避難所リストに加えられた。

レの罷免、住民の権利擁護を保証するアダーラトハーネ（'adālatkhāne, 正義の館）の設置とイスラーム法の実施が要求として掲げられたが、政府側からは十分な対応がなされなかった。

翌 1906 年 1 月 11 日、シャーは、エイノッドウレの権限を制限すること、議会設立を約束して、ウラマーたちはテヘランに帰還することとなる。しかし、これに対してエイノッドウレは反発し、テヘランに帰還したウラマーや革命家たちを逮捕する。これに対し、テヘランの主だったウラマーはシーア派の聖地ゴムヘバストし、商人たちはイギリス大使館へバストを行った。

このテヘランでの一連の動きは、全国的な波及をみせ、1906 年 7 月末には再び大規模なバストが行われたのであるが、この時初めて国民議会の開設が要求された。住民の圧力に屈した王はこれを基本的に受け入れ、8 月 5 日に立憲制樹立に関する勅令を発したのである。これに基づいて議会が招集されて憲法が起草され、短命ではあったが、イランの立憲革命は一応成功の形を見せたのである。

このように、イランは列強の勢力争いの影響で目まぐるしく変わる方針に翻弄されつつ、国際情勢の中に組み込まれていったのである。その過程で、列強への政治・経済的従属に対する反発が起こり、近代化の必要性が論じられるようになり、改革を推進する動きが出てくるのである。

第 2 節：イランにおける改革の流れ

第 1 項：改革の始まり

(1) 新式軍隊設立がもたらした影響

ガージャール朝が列強の脅威を直接実感したのは、第 2 代君主ファトフ・アリー・シャーの時代に起こった第一次イラン・ロシア戦争（1804 - 13 年）に他ならない。戦争を最前線で指揮した皇太子アッバース・ミールザーと側近のガーエム・マガームが、近代化されたロシア軍と対峙して、自国の遅れを直感したことで改革が始まったのである。彼らは、第一次ロシア・イラン戦争において、近代化されたロシア軍と対峙することにより、部族にたよった自国の軍隊の弱さを目の当たりにし、軍隊改革の必要性を痛感した。そして、戦争捕虜に自軍の教育をさせることから改革に着手し、イラン初の近代的な軍隊を創設するに至るのである。

アッバース・ミールザーの置かれた状況は、軍事的な必要性から近代化の先鞭をつけたオスマン帝国の第 28 代皇帝セリム 3 世（Selim III, 在位：1789 - 1807 年）⁴⁷、その構

都市住民がバストの慣習を戦略的に利用して自身の主張を行った点から、挑戦的避難とも称される（板垣，後藤，1992: 336-338; 嶋本，1983）。

⁴⁷ 厳密に言えば、オスマン帝国は近東であるが、本論文においては、現在の地域概念である中東地域にあてはめて中東と称している。

想を受けて軍制改革を図ったエジプト太守ムハンマド・アリー（Muhammad ‘Alī Bāshā 在位：1805 - 1848 年）と類似している。軍事改革が後の改革の呼び水となったという点で、アッバース・ミールザーを含めたこの3名は、中東における近代化の先鞭をつけた人物として評価されている⁴⁸。非西洋地域における近代化が、列強の帝国主義との脅威によって生じた軍事的な危機感から生じることは、これらの近代化の始まりから見て取ることができるだろう。

アッバース・ミールザーは自軍の近代化を図るため、新式軍隊と呼ばれる近代的な軍隊設立を行った。新式軍隊とは、ペルシア語でネザーメ・シャディード（nezām-e jadīd）という。これは、イランよりも早く近代化に取り組んでいたオスマン帝国のニザーム・ジェディード（nizam-ı cedid）と同名であり、それを意識したものであった⁴⁹。オスマン帝国のニザーム・ジェディードはイランのそれよりも四半世紀近く早い。当時、オスマン帝国は露土戦争（1787 - 1791 年）の敗北とヤッシーの講和（1792 年 1 月 9 日）によってクリミアとグルジアの領土を割譲し黒海の制海権を失うなど、中東のどの地域よりも早く列強の脅威に直面していた⁵⁰。また、絶え間ないロシアの南下は、これを牽制するイギリス・フランスの勢力介入を招く呼び水となっていた。このロシアの南下政策とそれを巡る列強の勢力争いに巻き込まれるという状況は、イラン・ロシア戦争を挟んでイランの辿った道とよく似ている。

この危機に直面したセリム 3 世によって始められたのがニザーム・ジェディードと総称される軍制改革である。ニザーム・ジェディードは「新たな秩序」（new order）を意味し、軍装から軍規に至るまで西洋式に整えられ、募兵も一般に募るという革新的なものであった⁵¹。

セリム 3 世の暗殺後も改革は続けられ、マフムト 2 世（在位：1808 - 1839 年）によって、1826 年には西洋式新式軍隊であるムハンマド常勝軍（asâkir-i mansûre-i muhammediy e）⁵²が設立されている。そして、新軍の兵士養成のために、設立の同年に軍医学校が、1

⁴⁸ Ringer (2001): 14.

⁴⁹ Cronin (2011).

⁵⁰ 更に、イラン・ロシア戦争の引き金となったグルジアの保護国化（1801 年）によって黒海とコーカサス地域への影響力も失った。次の露土戦争（1806-1812 年）では、ベッサラビア（モルダヴィア公国領）を失い、地中海東部地域へのロシア勢力進出を許している。

⁵¹ この改革プランはフランス革命の影響を受けており、フランスから軍事顧問団を招聘して新軍隊（兵力約 20,000 人）を設置した。これらの新式の軍隊は、その養成のための陸・海軍両軍事技術学校の開設や、フランス語の戦術書・数学書を中心とした翻訳事業の推進、軍需産業の創出などを伴った。そしてこれらの改革関連費用の捻出のため、ニザーミ・ジェディード財務局を設置し、商人、官僚、アーヤーンの財産没収を積極的に行った。更に、情報収集のため、ロンドン（1793 年）、パリ、ベルリン、ウィーン（いずれも 1797 年）に駐在大使が派遣された。しかし、既得権益を奪われた廷臣やアーヤーンや、常備軍団カプ・クル・オジャクラル（kapıkulu, 君主直属の兵力）の主力をなす常備歩兵軍であったイエニチェリ軍団（yeniçeri）の反発を受けた。そしてその結果、セリム 3 世の廃位（1807 年）と暗殺（1808 年）を招いた（永田，2002: 281-284）。

⁵² 総司令官としてセラスケル職が新設されたことで、初めて陸軍の指揮系統が一元化した。

834年には士官学校が開設されている。これらの学校はエリート教育も兼ねており、軍事技術以外の基礎学力強化が目指された⁵³。

このように、オスマン帝国においては、軍の改革から始まった近代化の動きが、それに関わる分野である教育、翻訳、出版、財政、外交へと広がっていったのである。イランにおいても、新式軍隊の設立は、それに伴う教育などの周辺分野の改革を促したことで、近代改革が進められていった。

アッバース・ミールザーの軍制改革は、第一次ロシア・イラン戦争中に、ロシア軍の脱走兵・捕虜に加え、交渉のためにテヘランやタブリーズに滞在していたフランス・イギリスの植民将校を雇い入れて自軍に軍事訓練を施させるところから始められている。それまでのガージャール朝の軍隊は、主に陸軍で、数千に満たない近衛兵、地方の非正規民兵、1年のうちの一定期間従軍する現地の補充兵、必要時に徴収される部族兵という構成であった。これに対し、アッバース・ミールザーはヨーロッパ式の軍事機構を整えることを試みた。結果、1808/9年には6,000ほどの歩兵しか持たなかった兵力は、少しずつ増えていったのである⁵⁴。まだ改革の途中ではあったが、第二次イラン・ロシア戦争において、アッバース・ミールザーの新式軍隊は活躍しており、イギリス・フランスからの援助を受けられない中で善戦した。

第二次イラン・ロシア戦争敗北後も改革の勢いは衰えず、1831年に至るまでに兵力は増加し、1,200の砲兵隊、騎馬連隊も創設され、全体で10個大隊から成るイラン軍が編成されるに至った。更に、トルコマンチャーイ条約によって国境となったアラス川の沿岸に、イラン初のヨーロッパ式の要塞を築城して防備を固めた。その上で、戦時のみならず、平時においても重要な情報のネットワーク化を意図し、諸都市へ官吏を派遣してその礎を築こうとした。また、産業基盤育成のための工場設立も行っている⁵⁵。

(2)：留学生派遣の影響

アッバース・ミールザーが軍政改革と並行して行っていた改革のうち、後の社会変革に絶大な影響を及ぼしたものが留学生の派遣である。彼は、改革のためには、ヨーロッパに対する理解を深め、進んだ教育や技術を取り入れることが不可欠であると考え、列強との交渉の中でその機会をうかがっていた。そして、1807年のフィンケンシュタイン条約の際に、ガージャール政府とは別に、アゼルバイジャン総督として、フランスと軍事・外交協定を結び、条項の中に軍事科学を習得するためのパリへの留学生派遣を盛り込んだので

⁵³ 当時の軍人エリートは読み書きの覚束ない者が多かった。この時、アメリカのプロテスタント系線教団のもたらしたベル＝ランカスター教授法が取り入れられ、識字率強化に役立った。外国人による学校の中でもミッシヨナリー系の学校が教育方法の近代化にもたらした影響は大きい（秋葉、2014: 88-90）

⁵⁴ Busse (2011); Cronin (2011).

⁵⁵ Busse (2011); Cronin (2011).

ある。しかし、この計画は、ティルジット条約によって反故にされた上、イギリス本国政府の横槍によって頓挫してしまった。そこで、今度はイギリスに近づき、イギリス・イラン友好同盟の交渉の中で、近代美術と科学を学ばせるためロンドンへの留学生派遣を承諾させたのである⁵⁶。

そして、1811年、イギリス全権公使ジョーンズの帰国に際し、アッバース・ミールザーの従者2名がタブリーズより同行した。彼らはガージャール朝から列強へ派遣された初の留学生となったのである。1名は不幸にも1813年3月にロンドンで病死してしまうものの、もう1名は最先端の西洋医術を学び、帰国後もイランにおける医療の近代化に従事した⁵⁷。

第一次イラン・ロシア戦争後の友好同盟条約を結んだ際も、アッバースは留学生派遣を検討する。そして、条約の修正条約（11月の最終条約）調印後の1815年5月、交渉団の一人であった陸軍中将ダーシー（1780 - 1848年）に、自身の従僕5名を留学生として帯同するよう交渉した。結果的として派遣自体は叶ったのだが、ダーシーが事前に本国政府の承認を得なかったこと、アッバース・ミールザーから託された費用を着服して彼らに便宜をはからなかったことから、この時の留学生たちは大変な苦勞を強いられた。しかし、彼らは自身の私物を切り売りすることで資金を稼ぎ、各々が成果を得て帰国した⁵⁸。

中でも、1819年の帰国途上で一台の印刷機を自費購入してきたミールザー・サーレフ（*Mīrzā Mohammad Sāleh Shīrāzī*）の功績は大きい。彼は滞在中、イギリスを手本として様々なことを学びながら、祖国に持ち帰るべき事柄のチェックリストを作成していた。それは、制度、法律、出版方法など多岐にわたったが、印刷機もその中の一つであった。彼は近代化において印刷技術が果たす役割を理解しており、滞在期間の残りの半年をロンドンの印刷所で見習いとして働き、印刷・出版に関する技術の獲得に成功した⁵⁹。この働きによって、印刷機のみならず出版・印刷の技術がイランに流入することになったのである。ミールザー・サーレフは帰国後、本国初となるペルシア語新聞『カーガゼ・アフバル（*kāghaz-e akhbār*）』（*newspaper*の直訳、1837年）を創刊したといわれる⁶⁰。また、ヨーロッパ書籍の翻訳活動も行われている⁶¹。

印刷技術の到来は、政治が及ぼす影響や引き起こされた諸問題について話し合う公共の場を創造し、政情・社会不安を背景に芽生えつつあった社会的関心を広く話し合う道を

⁵⁶ Busse (2011).

⁵⁷ Mahdavi (2010).

⁵⁸ ロンドンでの留學生活や現地での交流については Green (2016) に詳しい。

⁵⁹ Green (2016): 116-117, 126-127.

⁶⁰ 現存していない。現存する最古のものは、アミーレ・キャビールが発行した官報 *Vaqā'-'ye Ettefāqīye* (1851年2月7日創刊)。

⁶¹ ミールザー・レザー・モハンデス (*Mīrzā Rezā Mohammdes*) によってエドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡の歴史』、ヴォルテールの歴史小説などの良書が翻訳された。更に、ロシアの南下政策を支える強さの背景に、ピョートル大帝による中央集権的西洋化改革があるとのアッバース・ミールザーの考えから、大帝の伝記も翻訳されている。

拓いたことで、イラン市民社会の形成を促した。これらの活動は、一般読者層のペルシア語散文能力を養成し、ヨーロッパ史を熟知させ、イラン情勢を世界の出来事と比較する批評プロセスを誕生させるという作用を生んだ⁶²。つまり、これから断続的に続いていく、宮廷の宰相や改革派官僚・役人によるいわゆる「上からの」改革だけでなく、一定の教養を身につけた知識人層が改革思想を育む土壌が生み出されたという意味でも、大きな転機となったのである。

しかし、このタブリーズで萌芽した改革の動きは、1833年のアッバース・ミールザーの早すぎる死によって立ち消えてしまった。アッバース・ミールザーの改革を支えた ガーエム・マガームがモハンマド・シャーの即位と共に初代宰相に任命され、タブリーズでの改革がテヘランでも展開されるかと思われたが、改革によって既得権益を奪われることを恐れた廷臣や植民将校によってすぐに解任され、1835年6月27日に処刑されてしまったのである。

第2項：ナーセリ一期の改革

(1)：アミーレ・キャビールによる成果

改革の流れが引き継がれたのは、ガーエム・マガームの死から8年後の1848年のアミーレ・キャビールの宰相就任によってであった。彼は、先述のバーブ教徒の乱を鎮圧すると同時に、ナーセロディーン・シャーの承認を得て、罷免される1851年までの3の間に、広範に及ぶ国政改革を行っていった。これは、かつてない連続した行政改革であり、イラン全体に改革の手が及んだもので、後の諸改革の下地を作ったものである。

財政面では、国庫を圧迫していた不透明な徴税体制を一新すべく、徴税官の派遣による、部族長、州知事、地方有力者からの徴税拡大、租税査定と国有地の見直し・改革を行い、管理の給与削減などを含めた財政の健全化を目指した。ガージャール朝の主たる財源は土地税 (*mālīyāt*) と関税 (*ta'rafe*) であったが、その徴収は地方の統治者に任せていたため、誤魔化しや不正が横行した。そのため、税制の抜本的改革の前提として、正確な測量と人口把握の必要性が浮上したのである⁶³。これが、イラン初の人口調査につながった。

また、軍事面では、アッバース・ミールザーの改革を受け継ぎ、部族からの徴兵による兵力の拡大、イタリアやオーストリアからの軍事顧問の招聘、武器製造工場の設立に着手している。また、テヘランの宮殿域に砲兵舎を新設し、近代軍養成を行っている。更にテヘランに40か所の衛兵駐屯所を設置し、郊外に兵舎(1851年完成)と軍事病院(1852年完成)を設営するなど、本格的な近代的常備軍の設立と共に、首都の治安維持を行う警

⁶² ダバシ (2000): 70-71.

⁶³ Bakhsh (2011).

察的な役割への配慮が伺える。そして、徴税と徴兵、また正確な国土の把握といった様々な側面から、イラン初の人口調査が A.H.1269 (1852/53) 年に実施された。この時の調査は、前年のアミーレ・キャビールの失脚によって頓挫してしまうが、後に行われた 2 回の人口調査のための下地を形成した⁶⁴。

また、鉱山の開発の他、灌漑施設の拡充、河川の整備、道路整備といったインフラ整備が行われた。特に、道路整備と 6 ファルサング (約 36km) 毎に駅通を設置したことは、テヘランを中心に情報を統制することが目的とされており、中央集権化を目指すという意味で重要な事業であった。

外交の分野では、対外関係の再構築が図られ、イギリス、ロシア両国大使館に対して情報ネットワークを広げ、貿易の多角化を図り、利権譲渡やそれに伴う特権的措置に対する交渉が行われた⁶⁵。司法の分野では、宗教裁判所の政府による統括と慣習法裁判所の優越、イスラーム教徒以外の被告に対する待遇の改善が図られたが、これに対してはウラマ一層からの反発が大きく、宗教的慣習や行事の制限などの分野も踏み込むことはできなかった⁶⁶。

アミーレ・キャビールの改革のうち、その後のイランに大きな影響を与えたのが、教育関連事業である。彼は、とりわけ技術の取り入れに重点を置いており、ミールザー・モハンマド・タブリーズィー (Mīrzā Mohammad Tabrīzī) ら数名の留学生を、技術習得とヨーロッパ製品の購入のために派遣している。また 1851 年、首都テヘランに軍人と官僚養成を目的にダーロルフオヌーン校 (dār ol-Fonūn) を創立した⁶⁷。同校は、イラン初の西洋式官営高等技術学校であり、19 世紀末に高等学校に改編されるまでの約 40 年間にわたり、立憲革命を始め、その後のイランを支える多くの人材を輩出するなど、イランの近代化を支えた。従来のイスラーム諸学などの伝統的な学問領域ではなく、近代的な西洋式の教育が登場したことで、近代的知識人、教育者、官僚の育成につながる土壌が形成されたことは、後世に大きな影響を及ぼした。

同校の設立に際し、オーストリア帝国から医学博士ポラーク (Polak, Jakob Eduard, 1818 - 1891 年) を始め、7 名の教官が招聘された。また、ヨーロッパの知識を獲得した留学生たちも同校で教鞭をとるなど、留学派遣の効果が表れ始めている。同校ははじめ、軍事技術、医学、薬学、博物学、自然科学、数学、英語、フランス語、ロシア語の教育を予定していた。しかし、西洋的な教育を受けることで、ガージャール朝の政治体制そのものへ

⁶⁴ Ettehadiye (1992).

⁶⁵ 外国の圧力に対して、それに抵抗し独立と主権保持を目指す「均衡否定 (movāzene-ye manfi)」の立場で展開された。イランの外交原則は、これと、圧力に積極的に対応してそのパワーバランスの中でイランの生き残りを模索する「均衡肯定 (movāzene-ye mosbat)」の 2 大原則で成り立っている。1950 年代初頭の石油国有化運動の際のモサッデグ (1880 - 1967 年) の立場もアミーレ・キャビールのそれを踏襲している (吉村, 2011: 36) ことから、イランで積極的な改革が行われる際に、この立場がとられることが多い。

⁶⁶ Floor (1992): 119-120.

⁶⁷ 建設自体は 1850 年に開始されている。

の猜疑心や反王制思想が生まれることを恐れた廷臣の働きかけによって、軍事関係中心の教育に限定されることになっている⁶⁸。

このように、広範な分野にわたって改革を推し進めていたが、ガーエム・マガームの時と同様に、アミーレ・キャビールの活動も長くは続かなかった。既得権益を奪われることを恐れた廷臣たちとそれと結びついた高位ウラマー層や後宮の勢力によって、彼を追放の後処刑されてしまったのである。これによって改革の動きは頓挫し、ナーセロッディーン・シャーの親政へと移行したのである。

(2)：ナーセロッディーン・シャーの親政

ナーセロッディーン・シャーは、アミーレ・キャビールを左遷した後、1851年に反動的なヌーリー（Mīrzā Āqā Khān Nūrī, 1807頃 - 1865年）を宰相の座に就けた。しかし、1857年には彼を罷免して、その後1871年までの約15年近く宰相を置かず、親政を行っている。

この期間、シャー自身による改革が行われているが、それは主に官僚制の創出と地方統制による中央集権化の試みが中心となっていた。彼は、1858（A.H.1275）年に、ロシアの閣僚理事会（ministerial council）をモデルとして、6人制の閣議を成立させ、翌年には政府評議会（majles-e shūrā-ye doulatī）と相談の場（maslahatkhāne）の2つの諮問会を発足させている。前者は11名の大臣、高級官僚、皇子たちで構成され、後者は26名の宮廷の中級役人たちによって構成されていた。ここには、行政機構の再編、官僚制とそれを取り仕切る各部門の閣僚の頂点に国王自身が立つことで、国王主導で改革を進めようとする意図があったと考えられる。地方諸都市にも類似の会議が設立されはしたものの、いずれも短命に終わった⁶⁹。

この時期の動きで重要であったのが、ガージャール政府主導による電信線の敷設事業である。電信線は、それまで人馬による運搬で何日もかかっていた情報伝達の時間や距離を一気に短縮し、情報統制を促すものである。そして、電信線の敷設は、首都を頂点として通信網が形成されることを意味していた。情報統制に関しては、アミーレ・キャビールの改革の際、都市間街道の整備と駅逦の設置によってその布石が置かれていたが、彼の失

⁶⁸ 開校にあたって、政府の働きかけにより各都市の上流階級の14、5歳の子弟が呼び寄せられ、初年度には150名の男子が入学を果たした。入学者の数はその後増加し、890年代には387名に達している。そして、ナーセリー期に12期1,100名の卒業生を輩出し、この間、26名のヨーロッパ人教師と16名のイラン人教師が教鞭をとった。また、1858年には、タブリーズにも同名の学校が建てられた。こちらはことさら軍事面が重視され、カリキュラムや授業の質はテヘランのそれに比べるとはるかに劣っていたといわれる。しかし、校長のサーデグ・ハーン（Mohammad Sādeq Khān）を始め、教師のほとんどがテヘランのダーロールフォヌーン校の卒業生であったことは、イランの内部において、イラン人の手によって新式の教育が回り始めていたことを示している（Gurney & Nabavi, 2011）。

⁶⁹ Bakhsh (2012).

脚後はほとんど機能していなかった。情報網の形成によって情報をテヘランに一極集中させていくことは、中央集権化を進展させる契機となるはずであった。

電信機そのものは、親政に先立つ 1851 年に、パリ留学を終えてダーロルフオヌーン校の翻訳家兼地理学教師となっていたマルコム・ハーン (Mirzā Malkom Khan, 1833 - 1908) によってシャーに披露されていた。当初、電信のもたらす脅威を危惧したヌーリーによって退けられているが、彼の失脚後の 1858 年、親政の開始と共に再びシャーに紹介されている。シャーは電信に大変興味を示し、すぐにダーロルフオヌーン校において実用化実験が行われたのである。

実験は、同校の監督者エッテザードッサルタネ ('Alīqolī Mirzā E'tezād ol-Saltāne, 1822 - 1880 年) と、砲術講師でオーストリア人将校のクルズィズ (Kržiž, Lieutenant August) らによって行われた。ミールザー・サーレフが印刷機を自腹購入して持ち込んだことと同様に、電信機器セットは、マルコム・ハーンが独自に持ち帰ったものが使われていた。実験チームは、まずダーロルフオヌーン校の離れた部屋同士で電信のやりとりを成功させた。次にゴレスターン宮殿とシャーのお気に入りの場所であったラーレザール庭園を電信線で結び、これも成功させた。そして 1858 年 4 月 24 日 (A.H. ラマダン月 10 日) にシャーに電信が披露されたのである。シャーは交信の正確さと速さに驚き、クルズィズを監督に据えて都市間に電信線を敷設するためのプロジェクト立ち上げを命じた。

プロジェクトは翌 1859 年開始され、同年 4 月から 5 月にかけて、テヘラン＝キャラジ (Karaj) 間に約 20 マイルの電信線が敷かれた。すると今度は、この電信線を西方向へ延ばし、夏営地であるソルターニーエ (Soltāniye) に電信局を置くように命令が下った。総責任者はダーロルフオヌーン校総責任者のエッテザードッサルタネ、総監督はモフベロッドウレ ('Alīqolī Khān Mokhber ol-Doule)、技術関係の現場監督はダーロルフオヌーン校の物理・科学・薬理学講師であったフォケッティ (Focchetti) である⁷⁰。この時敷設された電信線は全長 180 マイルに及んだ。このプロジェクトのために総額 4,500 トマーンが費やされ、うち 2,000 トマーンは、電信局の交換手のための訓練費に回されていた⁷¹。

テヘラン＝ソルターニーエ・ラインは順調に工事を終え、同年 7 月 3 日 (A.H.1275 年ズルヒジャ月 2 日) には、シャーがソルターニーエを訪れて、テヘランへ向けて初電信が打たれた⁷²。シャーは電信線の完成を大いに喜び、この電信線を副都タブリーズまで延長することを命じた。そして、エッテザードッサルタネを科学相 (Minister of Sciences) に、モフベロッドウレをその直属機関でイラン初となる電信局長 (Officer of Telegraphs) に任命し、電信運営にあたらせることとした。テヘラン＝タブリーズ・ラインは 1860

⁷⁰ フォケッティは主に仕入れを担当し、大変な苦勞の末、黒海北岸の町アストラカンより電信用のケーブルの仕入れに成功した。

⁷¹ *Mokhber os-Saltane*: 62.

⁷² この電信は、シェミーラーンに新設された電信局で受信されている。

年7月30日（A.H.1277年モハッラム月11日）に完成し、首都と副都の情報伝達をかつてないスピードでつなぐツールが出現した。

この王朝主導による電信線は、つくり自体は脆弱なものであり、長期の使用が可能なものではなかったようである。このことについて、在テヘラン英国代理公使であったドリア（Doria, William）は、電信線自体の厚みがなさすぎることから、イランの厳しい気候で運用するには耐久性が悪いと述べている。またコストパフォーマンスが悪く、民衆に益なく、単なる国王の娯楽のためのものであると酷評している⁷³。これは、先述のタブリーズ＝ザンジャーン・ラインの初電信が、王室関係者の離婚というプライベートな知らせだったことと⁷⁴、その後もこの電信がほぼシャーの私信のためだけに利用されていたためである。そのため、数ある近代化事業のうちでも、この電信線プロジェクトは重要な部類であるとは認識されていない。しかし、ドリアもタブリーズ＝テヘラン・ラインについては有用であると述べているように、電信線の出現による首都と副都の接近には大きな意味があった。タブリーズはロシアとオスマン帝国の境域であり、交易の一大拠点であり、皇太子の居所である。この地と首都テヘランの迅速なコミュニケーションが可能になったという点では、近代化の重要な一段階として捉えることができる。また、シャーはテヘランの電信局に日参し、2・3時間ほどタブリーズの廷臣たちとやりとりをしたことは⁷⁵、国王自身がタブリーズと直接つながりを持ち、その動きをある程度把握・牽制できるようになったことが分かる。これは、中央による地方の監視という意味合いで、中央集権化への布石とも捉えられるだろう。

電信線敷設のプロジェクトは順調に進み、このタブリーズ＝テヘラン・ラインの敷設後、脆弱なものではあったが全土に電網が構築され、イランにおける情報の流れが整えられた。そして、これらの電信線は、1862年から始まる利権譲渡によって外国資本の管理下に入っていった。そして、本格的でシャー以外も利用可能な電信網が敷かれたのである。いち早く電信に関する利権を獲得したのは、インド＝ヨーロッパ電信会社（IETC）であった。同社はモスクワに本部を置き、ロシア・ドイツ経由でロンドンまでつなぐ電信線を運営する会社である。そのため、特にテヘランからロシア境域にかけてのイラン北西部の電信線の利権を獲得してその管理を行っている。また、ロンドンに本部を置く、イギリス政府の電信事業の支局であるインド・ヨーロッパ電信局（Indo-European Telegraph Department/ IETD）も、イラン経由でのインド＝イギリス間の電信線の設置を企図し、南部から中部にかけての電信利権を獲得し、その再構築を行った。王朝主導で敷かれた電信網の上に、本格的な電信網が展開されていったということである。この時、列強の軍事的・政治的な進出と併せて、イラン北部には親露的な IETC が、南部にはイギリスの IET

⁷³ Shahvar (2009).

⁷⁴ *Mokhber os-Saltane*: 62-63; *E'temād os-Saltane* (1943): 1812.

⁷⁵ Shahvar (2009).

Dが経営を引き受けている。つまり、情報・通信網も、英露の勢力均衡と連動していたのである。

(3) セパフサーラルの改革とその後

シャーは、相次ぐ国際社会での地位低下や逼迫する財政、改革による混乱を治めることができず、1871年に再び宰相を置くことを決意する。その任についたのが、改革派官僚のセパフサーラル（Hājji Mīrzā Hosein Khān Moshir od-Doule Qazvīnī Sepahsālār, 1828-1881年）であった。彼はオスマン帝国のタンズィマート期（1839 - 76年）にあたる1858年からイラン大使としてイスタンブルに滞在し、国外追放となっていた先述のマルコム・ハーンや、初期のナショナリストであるアーホンドザーデ（Mīrzā Fath ‘Alī Ākhondzāde, 1812 - 78年）らと親交を持つ開明的な官僚であった⁷⁶。セパフサーラルも、結局は保守派勢力の反発によって1873年に罷免されてしまうが⁷⁷、その短い期間の間に、タンズィマート改革や、在外イラン人のもたらす改革案などを参考にした諸改革が展開された。セパフサーラルの宰相任命によって、アミーレ・キャビールの改革から20年後、再び改革の時代が訪れたのである

セパフサーラルは、専門知識を持った官僚主導による改革の必要性を実感しており、法制定を説く改革の書である『一つの言葉（yek kalame）』の著者モスタシャーロッドウレ（Mīrzā Yūsuf Khān Mostashār ol-Doule Tabrīzī, 1895年没）を司法相に任命し、裁判制度の組織化、法編纂の準備にあたらせた。また、マルコム・ハーンを自身の内閣顧問として招聘し、次いで駐英公使（1882年に大使）として派遣し、イギリスの援助を得た官僚主導の改革を外務から指導させている。そして、シャーが設置した2つの諮問委員会をまとめて国政諮問機関である大諮問会議（dār ol-shūrā-ye kobrā）を設置、大宮廷会議（majles-e darbār-e a‘zam）を開いて国政の審議を行った⁷⁸。

そして、セパフサーラルもまたアッパーズ・ミールザー、アミーレ・キャビールと同様に、教育改革を行っている。この時期の教育改革の動きは、後の学校設立の動きの土壌となった点で重要である。セパフサーラルは、まずエエテマードッサルタネ（Mohammad Hasan Khān E‘temād ol-Saltane, 1843-1896年）に命じて、外国語・地理学の専門学校としてモシーリーエ校（maktab va madrase-ye Moshīriye）を創設させた。そして、自身でも1872年に翻訳者の養成学校であるダーロツタルジョメ校（dār ol-Tarjome）を設

⁷⁶ Bakhsh (1978): 17-18.

⁷⁷ セパフサーラルの改革は保守派の勢力から激しい反発を呼び、早い段階で挫折した。特にモスタシャーロッドウレによる司法改革の中で、従来独立していたイスラーム裁判所をも司法省管轄下に組み込もうとした動きが、ウラマー層の反発を呼んだ。また、先述のロイター利権の問題が起これると、セパフサーラルは保守派の官僚、ウラマー、利権譲渡を売国行為とみなす商人や大衆の批判を一身に浴びさせられることとなった。また彼が親英的であったことによるロシア側からのプレッシャーもあった（Bakhsh, 1978: 77-119; 佐野, 2011: 20-22）。

⁷⁸ 佐野 (2010): 20-22.

立している。また、宰相職を退いた後も学校設立に尽力し、1875年にダーロルフォヌーン校から軍事部門を独立させ、専門的な軍事訓練校であるネザーミー校（*madrase-ye nezā mī*）を設立した後、戦争省の管轄下に置くことで本格的な士官学校を成立させた⁷⁹。このことから、セパフサーラルが専門家の育成とそれに基づく組織的な制度改編を目指していたことが伺える。

この時期、改革派官僚主導によるものだけではない学校設立の動きも出てきている。その一つが、改革派の有志による新式学校（*madrase-ye jadīd*）設立の動きである⁸⁰。イランにおける新式学校設立の動きは、1883年にロシュディーエ（*Mīrzā Hasan Roshdīye*）がエレヴァンに初等学校であるロシュディーエ校を建てたことに始まる。この学校は、1887年にシャーによる視察が行われ、テヘランで同名の学校を設立するように要請が下るも、設立に至らなかった。この動きは、モザッファラー期に身を結ぶことになる。このセパフサーラルの失脚は、王や改革派官僚主導による上からの改革への限界を悟らせるきっかけとなり、また王自身にも改革への熱意が失われていく転機ともなった⁸¹。

第3項：モザッファラー期の改革

(1) 教育協会の影響

モザッファロッドイーン・シャーの治世に移ると、改革の動きはアミーノドウレ（*Mīrzā 'Alī Khān Amīn ol-Doule*, 1844 - 1904年）に引き継がれるも、やはり早期に頓挫する。しかし、この短い期間に、先述の新式教育を普及させるための学校設立の動きが活発化している。アミーノドウレは、改革において、教育や学校設立の重要性を認識していた。そして、1897年11月（A.H.1315年ジョマダーII/ラジャブ月）に新式学校推進のための私的な会合を開いて新式学校設立のための計画を議論した。その中には、前述ロシュディーエを始め⁸²、後にエスファハーンで新式学校設立に尽力することになるドウラターバーディー（*Mīrzā Yahyā Khān Doulatābādī*）などの教育改革者を始め、ガージャール朝の改革志向の王子や政府役人など7名が集まった。そして、その会合直後、メンバーの一

⁷⁹ これは、イスタンブルに滞在していたロシュディーエが、マフムト2世の教育改革の要として建てられたリュシュディーエ校をモデルとして建てられたものである（Ringer, 2001: 147-149）

⁸⁰ イランにおける近代様式の教育を行う学校。ヨーロッパ式近代教育をモデルに、科目やカリキュラムを取り入れ、初等・中等教育を展開した。

⁸¹ Bakhsh (1978): 180-239; Ringer (2001): 152-4; 佐野 (2001): 20-22; 水田 (2003): 33-71.

⁸² ナーセラー期にテヘランでの学校設立に失敗した後、マシュハドなど各地を転々とし、地元のウラマーや新学生の強烈的な反対にあいながらも学校設立に奔走した。その後、タブリーズにて、皇太子モザッファロッドイーン・ミールザー（後のモザッファロッドイーン・シャー）とその側近を務めていたアミーノドウレの庇護を受けて教育を展開した。そして、皇太子の即位に併せて、アミーノドウレから召喚を受け、再びテヘランに拠点を移した。その後ロシュディーエ校は、新式の教育法によると識字の向上と、ヨーロッパ型の教科取り入れなどの面で新式学校の手本となった。同時に、これらの新しい教育は、従来のマクタブやマドラサのあり方と対立するものとされ、既存のシーア派諸学を修めるウラマー層、神学生から反発が起こることとなった。

人であった軍人モンタザモッドウレ (Mīrzā Karīm Khān Montazam od-Doule, Sardār-e M okarram) の資金提供によって、初等教育と孤児院 (dār ol-aytām) の要素を併せ持つヘイリーエ (Kheirīye) 校が設立されている。更に、1898年1/2月 (A.H.1315年ラマザン月) にはタブリーズから招聘されていたロシュディーエによって、テヘランのロシュディーエ校が開校した。この学校は、後続の新式学校のモデルとなることが期待され、モザッファロッドイーン・シャーやアミーノッドウレを始め、その他の名士たちからも資金提供があった⁸³。

そして、学校の方針や教育方法を巡って生じたモンダザモッドウレとロシュディーエの論争や⁸⁴、新式学校設立のための協議など、議論の場を設置する必要が生じ、教育協会 (anjoman-e ma'ālef) が設立されることとなった。この協会に関しては正式な記録が残っているわけではなく、個々の回想録や研究によって類推するしかない。その活動の詳細だけでなく、設立の経緯や構成員に関しても、史料や研究によって差がある⁸⁵。いずれの研究にも共通していることは、本協会が教育改革を主導しようとする有志の集まりの訴えによって1898年2/3月に設立された点、最初の集会在同年3月 (A.H.1315年シャヴアー月) にテヘランのロシュディーエ校にて開催されたという点、アミーノッドウレの後援を受けていた点、議長としてこの協会の中心人物であったのがエフテシャーモッサルテネ (Mīrzā Mahmūd Khān Ehteshām ol-Saltane, 1863 - 1936年)⁸⁶であったという点である。構成員は設立当初は6、7名と少数であったが、第一回の会議から数週間のうちに急増し、同年秋ごろまでには30名近くになった⁸⁷。構成員には、教育省、ダーロールフォヌーン校の関係者、外務省などの関係者⁸⁸、医師、商人といった顔ぶれがそろっていた⁸⁹。

設立当初、教育協会はモザッファロッドイーン・シャーから2,000トマン、アミーノッドウレから12,000トマンを寄付されたが、その予算や方針を巡ってロシュディーエと対立し、週1回開かれていた会議の場をロシュディーエ校から個人の邸宅に移している⁹⁰。そして、1898年5月 (A.H.1315年ズィーハッジェ月) に教育協会による初の新式学校エルミーエ ('Elmīye) 校が設立された。また、初の公的な国民図書館の設立⁹¹、成人

⁸³ Anwar (2011); Ringer (2001): 161-162.

⁸⁴ Anwar (2011).

⁸⁵ 構成員の動向については、山崎 (2007): 79-84 に詳しい。

⁸⁶ ダーロールフォヌーン校の卒業生。アレクサンドル3世の追悼式への派遣、バグダードの総領事などの外交業務を歴任し、1896年にテヘランに帰還し、外務次官となっていた (Amanat, 2011)。

⁸⁷ Anwar (2011).

⁸⁸ 議長のエフテシャーモッサルテネが外務次官であったために、その関係者が多い。

⁸⁹ Ringer (2001): 189.

⁹⁰ アンワールによれば、ドウラターバーディーの回想録より Nayer ol-Molk 宅であったことが確認されている (Anwar, 2011)。

⁹¹ この国民図書館 (ketābkhāne-ye mellī) はダーロールフォヌーン校に設置されていた同名の図書館とは別物。アーजूダーン・バーシー (Esmā'il Khān Ājūdān Bāshī) が館長を務めた。教育協会の尽力により短期間に1,000冊以上の本が集められ、後に教育図書館 (ketābkhāne-ye ma'ālef) と改名、一部が国民図書館に移されている (Anwar, 2011)。

学級の設立⁹²、出版翻訳会社の設立⁹³、新聞の発行⁹⁴といった、教育に関連する諸分野のインフラを整えた。

この教育協会は、方針や予算、主導権を巡る内部の不和のみならず、宮廷関係者や名士たちの争いも呼び込み、3年で活動を停止した。きっかけとなったのは、1898年6月のアミーノッドウレの罷免である。その後任となったアミーノッソルターンは、教育協会の存続にも懐疑的であった。そして、内部の軋轢を利用して全ての教育機関を科学相の監督下に置くようシャーに働きかけ、1900年に協会は解散したのである。これに対し、協会員たちは翌1901年5月1日に新しい教育協会を設立したが、承認を得られなかった。アミーノッソルターンはこの新しい教育協会が解散した後、自身の息のかかった役人や外国人から成る教育高等審議会 (shūrā-ye ‘ālī-ye ma‘ālef) を設立し、イランにおける教育関連の業務を監視下に置いたのである⁹⁵。

教育協会はその短い活動期間の間に、複数の新式学校の設立やそれに関連する施設の創建を促すという意味で、大きな役割を果たした⁹⁶。それに加え、改革志向の人々を、社会階層を越えて一つの場を集めて交流させることで、自主的な改革の動きを生み出すという効果をもたらした。後述するガズヴィーンのように、教育協会によって集結した有志は、その後も活動を続け、教育を通して改革の影響を波及させていった。リンガーは、ロシュディーエ校の設立にあたる1870年から立憲革命の起こった1906年を、教育にとって特に実り多い期間であったと述べているが⁹⁷、これは、単に学校の設立やその教育効果だけでなく、それによって結び付けられた人々の動き、設立に伴うインフラ整備による情報やジャーナリズムの発展と改革思想の揺籃といった様々な波及効果を含めてこの期間をそう捉えることができるのである。

第3節：イランの経済と社会の変化

第1項：イラン経済の変容

前節までに確認してきたように、ガージャール朝期のイランは列強勢力の侵入によって、国内改革を始め様々な変化が求められる時代となっていた。これらの変化は、軍事的

⁹² ミールザーギヤーソッディーン (Mīrzā Giyās ol-Dīn Adīb Kāshānī) の監督下で開かれるも、数ヶ月しか続かなかった (Anwar, 2011)

⁹³ 書籍印刷会社 (sherkat-e tab‘-e ketāb) の名で、協会から独立した組織として設立された (資本：1,000 トマン)。有能な人材の雇用による良質な書物の編纂、翻訳、出版を行い、歴史の本や教科書の発行なども行った (Anwar, 2011)。

⁹⁴ 『教育新聞 (rūznāma-ye ma‘āref)』(1898年12月創刊) は、隔週発行の定期行物で、近代教育に関する話題を主に取り上げた (Anwar, 2011)。

⁹⁵ Anwar (2011).

⁹⁶ 先述のエルミーエ校の設立後も、エフテターヒーエ (Eftetāhīye) 校、モザッファリーエ (Mozaffarīye) 校、シャラフ (Sharaf) 校、ダベスターネ・ダーネシュ (dabestān-e Dānesh) 校といった学校が創立されている。

⁹⁷ Ringer (2001): 178-179.

な脅威や近代ヨーロッパ文明の影響だけでなく、経済的影響にも起因している。それは、イラン経済が列強との接触によって、世界経済の中に組み込まれていったためである。

改革の必要性が生じたのは、イラン・ロシア戦争から始まる軍事的脅威からであり、主に軍隊と教育改革を中心に発展していったのは確認した通りである。それと平行して生じたのが徴税制度と行政機構の見直しの必要性である。これは、改革のための諸経費捻出という側面から浮上した問題であった。更に、増え続ける宮廷の奢侈、行政費、軍事費などの財源を確保するためにも改革の必要性が施政者側に認識されていったのである。

従来の王朝と同様に、ガージャール朝の主要財源は土地であり、土地からの生産物であった。そして課税方法と徴税のやり方はそれぞれの地方に一任されていたため、中央政府が管理できる状態になかった。そのため、中央集権化を図り、土地制度改革と税制改革によってこれらの財源管理を可能とすることが急務とされたのである⁹⁸。

そこで、国土のかなりの面積を占めつつも荒廃していたハーレセ地 (khālese, 王領地) の払い下げや、部族地域への秩序確立を目指すなど、税制の見直しが図られた⁹⁹。そして、1885/6 (A.H.1303) 年の内政改革委員会 (shūrā-ye tanzimāt) に関する布告で徴税制度全体の見直しが計画され、イラン全土に順次適応されることとなった。この布告は、初めて中央から派遣される知事が地方財政を統括することが明記されていた点で重要であった¹⁰⁰。更に 1889/90 (A.H.1307) 年には検地が行われ、土地の分類、部族や村落での徴税方法、それらにあわせた税額が決定されたことで¹⁰¹、初めて徴税が政府によって管理できるようになったのである。更に、同年には、国是でもあった道路建設のための労役に関する布告もなされている¹⁰²。

しかし、やはりこれらの税制改革や土地制度改革は実際に全面的な成功を取めたわけではなく、増え続ける予算に対応しきれなかった。そのため、政府はこれらを補填するために利権の売却を乱発していったのである。ガージャール朝宮廷は利権供与を始めとして、イラン経済をヨーロッパ主導の植民地主義経済に巻き込む道具のような存在となっていた。イランは原材料、安価な労働力、戦略上有利な立地を提供する代わりに、製品提供のための市場になり、更に国家経済・行政組織・文化を列強に委任していったのである¹⁰³。

そして、政府が外国商人に貿易の便宜を図ったことで、商人階級は新たな収入源として農業用地に目をつけ、個人地主に投資せざるをえなくなった。こうして外国からの原材

⁹⁸ ラムトン (1978): 155; Bakhsh (2011).

⁹⁹ ラムトン (1978): 150-169.

¹⁰⁰ ラムトン (1978):170; Bakhsh (2011).

¹⁰¹ ラムトン (1978): 169-171.

¹⁰² 16歳から50歳までの全ての男性は、1年のうち何日間かの労役が義務付けられ、労働力を提供できない場合は代人雇用のための額の支払いを命じられた。この時、聖職者(宗教は問わず)、学校教師、現役兵、警官はこの義務を免除されている(ラムトン, 1978: 171)。

¹⁰³ ダバシ (2000): 116.

料の要求と換金作物を扱う市場が誕生し、イランの経済基盤は製品の取引が減り、原材料を輸出するという植民地経済の形に変容していったのである。19世紀、イランは自国の共同社会よりも外国商人の利害に最大の便宜を図ることで、植民地主義的かつ従属的な形で発展を遂げていた。特に19世紀における砂糖と紅茶の莫大な消費量は、他の中東社会が通ってきた道と同様、「植民地の製品」の用途が増大したことを暗に示している¹⁰⁴のである。

第2項：経済圏の拡大と社会変化

経済史的な観点から見ると、19世紀後半から20世紀にかけての時代は、イランがイギリスを中心とした世界経済システムに包摂されていく時期にあたる¹⁰⁵。ヨーロッパでは、19世紀初頭にナポレオン戦争が終結して英仏間の抗争が収束し、産業革命の進展に伴ってイギリスが史上初の工業国家としての歩みを始め、ロンドンが国際金融の中心として成長していく過程にあった。そして、工業国家イギリスの台頭は、イギリスを中心とした世界経済システムを構築し、ヨーロッパ以外の地域を製品販路、原料および食料供給地へと転換させていった。この時期は、台頭してきたロシアとイギリスとの対立構造が確立された時期とも重なる。

中東地域の中でいち早くこの流れに巻き込まれたのが、露土戦争によってロシアの影響が増していたオスマン帝国であった。18世紀には工業原料の供給地として、1840年代頃にはロシアの黒海経由の穀物貿易によって小麦の一大供給地として、世界経済システムに包摂されている¹⁰⁶。そしてこの時、中東におけるイギリス・フランスの現地代理人として活動したのが、古くから東地中海の貿易を支配していたギリシア商人たちであった。中でもラリ商会（Ralli Brothers）¹⁰⁷重要な地位を占めていた。

イラン経済が世界経済の中に組み込まれていったのは、このイスタンブルを介したイギリス＝ロシア間の貿易収支がイギリス側の赤字となったことがきっかけであった¹⁰⁸。そして、この不均衡を解消するために目をつけられたのがイランであった。

この時、イランと交易するために開拓されたのがタブリーズ＝トラブゾン（Trabzon）・ルートである。これはイスタンブルから海路にて黒海南岸のトラブゾンまで行き、そこから陸路でアナトリア東部の山道を超えてタブリーズに至るというルートである。このルートはペルシア湾を経由するよりも距離が短く、経済的なルートであったことから重宝され

¹⁰⁴ Afary (1966): 19.

¹⁰⁵ 水島他 (2015): 231-232.

¹⁰⁶ 武田 (2009): 15-16; 水田 (2003): 8.

¹⁰⁷ ラリ商会は店舗ごとに商号が異なるが（水田, 2003: 29, 脚注2）、本論文では表記をラリ商会で統一している。

¹⁰⁸ 水田 (2003): 9-11.

た。1831年にトラブゾンにイギリス領事館が設立されたことから、イギリスにとってここが重要な交易ルートとして認識されていたことがわかる¹⁰⁹。

更に、1960年代に入ると南コーカサス・ルートが台頭してきた。これはイスタンブルから海路で黒海を渡ってグルジアのバトゥミ（Batumi）まで行き、そこから鉄道でティフリス（Tiflis）を経由してカスピ海西岸のバクーへ行き、カスピ海航路を経てアンザリーに至るというルートであった。これはタブリーズ＝トラブゾン・ルートよりも短い時間がかつ安全にイラン領内に入ることでできるルートであった¹¹⁰。このルートの台頭は関税の独占を失うことを恐れたオスマン帝国の反発があり、ヨーロッパ列強やイランとの通商条約交渉に発展している¹¹¹。

これらのルートによる輸出商品として初めに注目されたのがイランの絹であった。そのため、この時期カスピ海沿岸地方を中心に急速に養蚕業が広がっている¹¹²。しかし、絹貿易自体は、1860年代に流行した蚕の微粒子病（pebrine）によって衰退している¹¹³。この国際貿易は、イラン国内に産業の転換と貨幣不足を発生させた。前者は、農業生産に占める絹・綿花・アヘンといった換金作物の割合が高まったことが原因である。商人層は国内における通貨価値の下落を背景に、投機対象を農産物へと変えた。そしてそれに伴う土地投機や農地開発によって、国内の農業形態に大きな変化がもたらされたのである。これをきっかけに、国内の伝統的織物工業は衰退を初めた。更に工業製品の輸入と半加工品と農産物の輸出という貿易構造もこの時期に形成されている。

貨幣の流出に関しては、タブリーズとイスタンブルを経由して、ロシア・イギリス間で貨幣がやり取りされるために、中継地となったイランから貨幣が流出したことが原因である。これは、特に絹貿易が衰退した1860年代以降に深刻な問題として浮上してきた¹¹⁴。そのため、金融面での改革が叫ばれるようになったのである。この改革では、国内通貨の統一を図ることが第一の目標とされた。それまでのイランは各地方に造幣所が存在し、地方ごとにその質が異なっていた¹¹⁵。しかし、1860年代からの深刻な貨幣不足によって国内通貨の価値も低下し、改革に着手せざるを得ない状況に追い込まれたのである。

¹⁰⁹ 坂本 (2015): 34.

¹¹⁰ 坂本 (2013): 41-42.

¹¹¹ 南コーカサス・ルートの台頭と関税交渉の過程については坂本 (2013: 40-4) に詳しい。なお、坂本は南コーカサスではなくザカフカスの名称を用いている。本論文では他の章との関連から、南コーカサスの名称で統一している。

¹¹² 岡崎 (1984): 70-72; 水田 (2003): 11-15.

¹¹³ 1860年代のはじめから10年の間に、絹の輸出量は約1/4まで減少した。更に1870年代の大飢饉とコレラの蔓延による経済力の低下も相俟って、ラリ商会は1871年にイランから撤退している（水田, 2003: 11-13, 33）。イランにおける養蚕業の発達と衰退に関しては岡崎 (1984) に詳しい。

¹¹⁴ イランに流入していたのはほとんどがコーカサス経由で入ってくるロシア貨幣であった（水田, 2003: 18-28）。

¹¹⁵ 水田によれば、テヘランとハマダーンの間での通貨価値の開きは17パーセントにも達していたという（水田: 4）。

そして 1863 年にテヘランに造幣局が設立されたのだが失敗に終わり¹¹⁶、1879 年に造幣局長に任命されたアミーノッザルブ (Hājji Mohammad Hasan Amīn oz-Zarb, 1834 - 1898 年) によって、ようやく貨幣の統一が図られていった。

これらの経済的な変容は、イランの商人階層にも大きな影響を与えた。それまでのイラン経済は、都市における金融業務を伝統的な両替商 (sarrāf) や商人たちが担当し、更に都市を拠点として形成した交易ネットワークの相互連関によって流通を行っていた。そのネットワークが、列強の動きによって世界経済へ組み込まれていったことで、国際交易を担う大商人が誕生したのである¹¹⁷。これらの商人たちの多くは、ヨーロッパ貿易の拠点であったイスタンブルに拠点を置いた。そして、イスタンブルにおいて前述のラリ商会を初めとするギリシア系、アルメニア系の非ムスリム系商人たちのネットワークと共存、競合することによって、国際的な商業ネットワークの中に参入していったのである¹¹⁸。造幣局長に抜擢されたアミーノッザルブも、こういったイラン経済圏の世界経済への包摂に伴って誕生した大商人の一人であった¹¹⁹。

アミーノッザルブがイラン経済に与えた影響は、列強への従属から脱却するためにイラン経済の自立に奔走したことで、経済・金融面での改革を促した点にある。彼はイランの経済的従属化がイランの国力を衰退させ、列強への従属を加速させることに危機意識を抱いていた。そしてその打開策として、イランの商慣習であった掛売りをやめることと、産業の育成と国際見本市の開催によってイラン商品輸出を振興することの 2 点を挙げた¹²⁰。商品の掛売りは、慢性的な通貨不足と、貨幣における金・銀・銅の含有量の地方格差を背景に、現金決済が避けられたために商慣習として重用されていた。外国と綿製品の取引においても掛売りが多く行われ、結局支払い不能に陥って破産する商人が多く現れ、外国商会との競争に敗れていくという問題が発生していたのである。アミーノッザルブは、この問題を解決するために、1879 年 8 月 4 日にナーセロッディーン・シャーへ銀行設立の請願書を提出することで貨幣改革を提案している。加えて 1884 年 7 月 31 日にはテヘランで商人代表者会議 (majles-e vokalā-ye tojjār) を立ち上げることで商人が協力して取引やネットワークを管理できる体制を整えた。この動きは他の地方にも伝播し、タブリ

¹¹⁶ 1863 年にダヴースト (Davoust)、1875 年にはペパン (Pechan) が招かれて通貨改革を任されたが様々な抵抗にあつてうまくはいかなかった。前者は何もできずにイランを去り、後者は銀貨ではなく銅貨の造幣を命じられ、結局のところ貨幣価値の回復はかなわなかった (水田, 2003: 4)

¹¹⁷ 坂本 (2013): 23-24.

¹¹⁸ 坂本 (2013): 23-24.

¹¹⁹ アミーノッザルブはラリ商会のテヘラン支店長であったパナヨッティ (Panayotti) から海外貿易の方法を教わった。そして 1857 年にテヘランで商会を立ち上げた後、タブリーズ、マシュハド、ヤズド、ケルマーンといった主要都市に支店を開設し、南コーカサス・ルートを経由してモスクワにも進出し、1870 年頃にはイスタンブルに拠点を築いた。特に海外送金のネットワーク重視し、前述の 2 つのルートを通じてヨーロッパの綿製品の輸入に加え、王族、役人たちのための奢侈品の輸入にも力を入れた (坂本, 2013: 47-49)

¹²⁰ 坂本 (2013): 50-52.

ーズを初めとする 17 都市で同様の会議が設立されている。更に国内産業の育成にも力を注いだ¹²¹。

イランの国内産業については、段階的な転換が起こっている。前述の通り、19 世紀中頃までには絹貿易のための養蚕などの輸出商品生産へ転換が図られた。しかし、1870 年代を境に絹貿易が頓挫すると、輸出商品としての絨毯に注目が集まるようになる。これは、19 世紀後半にイギリスが大衆消費社会に突入し、ヨーロッパにおいてペルシア絨毯の需要が増大したことと、絹貿易によって受けた打撃から回復しようとする新しい輸出商品を探していたイラン商人の努力との利害が一致したからであった。

この時、絨毯貿易のために、その生産方法と流通経路が見直された。そして、ペルシア絨毯は、生産地の農村から小都市のバーザール、局地的な交易圏の中心である地方都市のバーザール、そこからイスタンブルを経由してヨーロッパへと輸出されていった¹²²。更に、家内工業であった絨毯織りが、工場でも行われるようになるにつれ、イランの中でも資本主義の仕組みが成立していくこととなる。このようにして、地方の局地的な交易圏で流通するだけであった絨毯が、国際輸出品としての商品価値を持つようになったのである。

実際の絨毯ブームを牽引したのは外国商社であるツィーグラー商会 (Zirgler and Company) であった。重要であったのは、この商会が新たな交易ルートを開拓したことと、イラン商人がブームに乗ってペルシア絨毯の取り扱いを始めるきっかけとなった点である。ツィーグラー商会はテヘラン南西のソルターナーバード (現アラーク) に拠点を置き、農村の家内製工業であった絨毯を扱う他に、絨毯工場を設立して本格的な生産に着手した¹²³。そしてハマダーン、ケルマーンシャーを経由してバグダード、バスラに至り、スエズ運河を経由してヨーロッパへ輸出する新たなルートを開発した。これらの事業は成功を収め、他の地域でも絨毯商品の生産が試みられるようになり、各地に新しい絨毯の産地が出現している。

このように、国際貿易を通して商人層が台頭していくのだが、彼らは、都市社会においては、彼らの活動拠点であるバーザール内のモスクやマドラサの中・低位ウラマー層と結びついていった。イラン経済は、世界経済システムの中で、原料供給地に位置づけられたことで、商人による農地の買い上げと輸出用作物の生産が始まり、土地所有の形態が変容を遂げた。そして、都市において郊外の土地を所有し、流通を担う商人階層が台頭していったのである。また、絨毯工場を初めとする工場労働者は、労働組織や職人組合を組織

¹²¹ しかし、いずれも地方のウラマーや役人の反対によって 2 年ほどで頓挫している (坂本, 2013: 54-55).

¹²² 坂本 (2013): 132-140.

¹²³ 当地にはツィーグラー商会に先んじて、ライヘルト (Reichert) という名のドイツ人が絨毯の買い付けと共に小さな工房を開いて絨毯生産を行っていた。ツィーグラー商会が当地に参入したのはこのライヘルトの前例があったためでもある。商会の絨毯工場はこのライヘルトの工房を買い取り、拡張する形で設立されている (坂本: 142)

するようになる。立憲革命期に実際に活躍したシーア派聖職者たちはこういった商人階級とのつながりによって台頭してきたものであった。

小結

イランは列強が政治的・経済的に世界進出をしていく一連の流れの中に巻き込まれる形で近代化の必要性に直面した。改革の試みは軍事的な危機に直面したタブリーズで始まり、後に首都テヘランで展開していったが、いずれも単発であり、連続した長期的な改革の機会には恵まれなかった。そのため、イランにおける改革は、財源確保の難しさ、周囲の圧力などから、これらの動きを牽引できる大きな力を持った個人に拠るところが大きかったのがその特徴といえる。アッバース・ミールザーの留学生派遣が後の教育・出版事業の促進につながったように、一つずつの成果が結実して、小規模ではあるが確実に変化を遂げていった。このような変化の積み重ねが最終的に大きな変容をもたらしたのである。

一方で、改革のための財源確保や国家予算の財源捻出のために利権譲渡が促進され、列強への従属を強めたことも忘れてはならない。しかし、これらの利権譲渡によって国内のインフラが整備され、イランの近代化が促進されたという面もある。ただし、これらの整備の前提に、アミーレ・キャピールの駅停整備やナーセロディーン・シャーの電信線敷設など、イラン独自の近代化の努力が存在していた。

このように、ガージャール朝期のイランは様々な方面で変革の時代を迎えていたのであるが、その中で、実際このような変化・変容は人々の生活圏ではどのような形で現れていたのだろうか。このことについて、次章以降イランの生活圏の中心であり、交易の拠点でもあった都市に注目して考察していきたい。何故都市に注目する必要があるのかは自序文で説明した通りである。

ガージャール朝期の都市に起こった変化・変容に注目する際、その都市の位置が重要となる。先述の通り、タブリーズがテヘランに先んじて改革が起こった背景には、外国との境域であるという戦略的な重要性と共に、ヨーロッパ交易の拠点であるイスタンブルとの通商ルートにあるという経済的な重要性があった。そのためタブリーズは、アッバース・ミールザー以降、歴代の皇太子が派遣されて統治を任されるという慣習ができ、副都としての地位を確立している。これを受けて本論文では、このタブリーズと首都テヘランを結ぶ街道上にあり、更に南コーカサスの交易ルートであるアンザリーからラシュトを經由してテヘランとを結ぶ街道上にも位置している都市ガズヴィーンに注目することとする。その前提として次章にてテヘランの諸状況を確認し、首都において起きた変化・変容についても考察を行いたい。

第2章：都市の近代化：首都テヘランの変化・変容とその影響

第1節：ナーセリー期以前のテヘラン

第1項：テヘランの地理

ガージャール朝期のテヘランを考察する前提として、地理的な要素と歴史を簡単にまとめ、その特徴を明らかにしておきたい。

テヘラン (Tehrān) はガージャール朝期から現在まで続くイランの首都である。北緯35度40分、東経51度26分、海拔1,158m、標高1,400mに位置している。2014年段階で人口8,154,051人を抱えるイラン高原の北端部最大の都市にして¹、中東有数のメトロポリスである²。現在の市域面積は733 km²で、北端はアルボルズ山脈、南端はキャビール砂漠に接する。最初の都市域はバーザールを中心とした宮殿域におかれ、19世紀以降に北部へと拡大していったものである。現在テヘランの一部となっている北部のタジュリーシュ (Tajrīsh)、ゴルハク (Qolhak)、シェミーラーン (Shemīrān) などは、元々夏の避暑地として別荘が置かれた村であった。

テヘランの地理的特徴は、大陸性気候の影響で降水量が少なく、年較差や日較差も大きいことが挙げられる。亜熱帯高圧帯の影響下にあつて、半乾燥気候に属しており、砂漠周縁気候に分類される。また、年平均気温は17°C前後であるが、夏季に40°Cを越え、冬季は-15°Cを下回ることもあるなど幅が大きい。年間降水量は平均で230mmであるものの、降水はほぼ冬季に限られるという乾燥した気候である³。

この地理的条件により、テヘランはガナートによる給水が水利の絶対条件の地域となっていた。テヘランは、アルボルズ山脈の地下水源に近く、ガナートによる水の獲得に適した土地柄であった。都市部は、4,000m級の褶曲山脈であるアルボルズ山脈の最南の一支脈に属し、古第三紀⁴に形成された緑色凝灰石岩上のトーチャール山脈南麓の扇状地上に展開している。この扇状地は厚い砂礫層の下に帯水層を備える地層構造になっており、アルボルズ山脈から流れる雨水や融雪水は、山麓部でほとんどこの帯水層に浸透することとなる。よって地表を流れる河川は乏しく、その乾燥も相俟ってほとんどがワジ (涸川) となり、植生も乏しい。

しかし、後述するガズヴィーンと比べると、都市部が水源に近いこともあつて、泉 (c heshme, 図1: ①②) や川の水なども、期間や水量に制限はあるものの、ある程度は利用することができた。泉は2か所存在していた。1つ目はアーブ・パフシュ (āb pahsh,

¹ Bosworth (2000): 483.

² UN2: 35; 総務省統計局 (編): 30.

³ 後藤他 (編) (2010): 135.

⁴ 地質時代の区分で、6,600万年前から2,303万年前までを指す (日本地質学会 HP <<http://www.geosociety.jp/uploads/fckeditor//name/ChronostratChart2015.pdf>> 2016年11月アクセス)。

図 1: ③) と呼ばれ、後のサンガラジ区の北側にあたる場所にあった。これらの水は、皮なめし工房で使われる工業用水として利用されていた⁵。2 つ目はサル・チェシュメ (sar cheshme, 図 1: ①) と呼ばれ、テヘラン村の北東に位置していた。そこから 2 方向に向けて水路が設えられており、それぞれ上流 (sar cheshme-ye bālā, 図 1: ②) と下流 (sar cheshme-ye pāyīn, 図 1: ③) と呼ばれた。これらは生活用水として利用されており、テヘランが都市へ成長した後にも、オウドラージャーン区とバーザールでも利用された。そして、宮殿域もこの区域に建てられていたことから、この泉がテヘランの水利を支える重要な給水地の一つであったことが分かる⁶。

都市部の水利に影響を与えていた川は 8 本存在するが、先述した通りいずれもワジで春先に流れるだけであり、恒常的な給水源とはいえなかった⁷。いずれにせよ、テヘランの水利システムは、ガナートによって支えられてきたのである。

テヘランはアルボルズ山脈の裾野に広がるという好条件から、ガナート・システムによる給水を考えた際、最適の場所の一つと言える。帯水層の地下水は扇状地の傾斜に沿って流下する構造になっており⁸、都市部ではガナートを通して地下水を利用していた。構造上、水源に近い北部ほど水量が豊富であることから、都市部では、北側街区に富裕層が集中し、都市部の拡大も北方向に進むという傾向を有している。

テヘランにおける最古のガナートはメフラーンのガナート (qanāt-e Mehrān) で、テヘラン郊外のタジュリーシュ方面にあるメフラーン村 (deh-e Mehrān) に母井戸があった。このガナートは後にネガーレスターンのガナート (qanāt-e Negārestān) と呼ばれ、宮殿域を満たす重要なガナートとなった。メフラーン村はガージャール朝期に入っても、宮殿域へ流れ込むガナートの水源として水利上重要な地位を占めることになったが、利用が進んだことで後年枯渇してしまった。このため、村の北と西側の 2 か所に母井戸が移され、村で連結された形で宮殿域に流れ込む形に改修された。そしてこのガナートはメフルギヤルドのガナート (qanāt-e Mehrgard) と呼ばれ、南東方面へ流れ

⁵ Mo'tamedī (2002): 543.

⁶ Mo'tamedī (2002): 542-543.

⁷ ①ダラケ川 (rūdkhāne-ye Darake, nahre-ye Avīn darre): ダラケ山に水源が位置し、春先に 3 サング流れる。②ヘサーラク川 (rūd o mosīl-e Hesārak): テヘランの西部、現在のキャラジ方面への高速道路付近に位置し、北から南へ真っ直ぐ流れる。春先のみ流れがあり、夏には干上がる。③ダーラーバード川 (rūdkhāne-ye Dārā Ābād): かつてはニヤーヴァラーンの東側を流れていたが、現存していない。④シャムサーバード (rūdkhāne o mosīl-e Shams Ābād): テヘランの北東部から南へ向かって真っすぐに流れ、マーザンダラーン街道とドシャーン・テッペ街道を通り抜ける形で流れる。⑤シェミーラーン川 (rūdkhāne-ye Shemīrān, Darband): ダルバンド溪谷 (darre-ye Darband) とゴラブ溪谷 (darre-ye Gol āb) に水源を持ち、ルーミー橋 (pol-e Rūmī) の下を通り、ゴルハクを経由して南へ流れる。ラーレザール庭園からネガーレスターン庭園とネザーミーエ庭園の西側を流れ、トゥープハーネ広場の北側までやって来る。⑥グーチャク川 (mosīl-e Qūchak, Tehrān Pārs): グーチャク峠 (gardane-ye Qūchak) から南方面へ雨が降った時のみ流れる。⑧フィールーザーバード (nahr-e Fīrūz Ābād): テヘランの南西部。バーゲ・シャーと宮殿域の下水を流す側溝となっている (Mo'tamedī, 2002: 542-543.)。

⁸ 末尾 (1976): 226.

てファラハーバード (Farah Ābād) に至り、宮殿域で出水していた。このガナートは約 2 サングの水量があり、セパフサーラルの邸宅を含めた建造物群が建てられた際、このガナートで給水される水と灌漑地の 1/2 (3dāng)⁹ の収益を、庭園へのワクフとするように設定されている¹⁰。これらのガナートはナーセリー期のテヘラン大改造後には 53 本、パフラヴィー期に上下水道の設営が始まる直前までに 75 本まで増設された¹¹。テヘランのガナートは、都市の拡大と共に本数を増やしてきたのである。

第 2 項：ガージャール朝期に至るまでの都市形成史

(1) サファヴィー朝期以前のテヘラン

テヘランは元々シルクロード上の拠点であったレイ (Rey) の 8km ほど北に広がる村 (deh) の一つであった。図 1 のモオタメディー作成の概念図が示すように、この村の給水は、北部から流れ込む川と、3 つの泉によって支えられていた (図 1: ①~③)。いずれの水源もこの領域の北部にあるアルボルズ山脈にあるため、泉は 3 か所とも北側に位置しており、北から南へ流れるという傾向を有する。また、川や泉によって給水が充実している地域には草木の群生が見られ、集落が点在していることが分かる。この中で、川とサル・チェシュメ (図 1: ②③) によって給水が充実していた地域にあったのがテヘラン村である。この村がこの周辺最大の集落であった背景には、このように複数の給水源を持ち、他と比べて給水が充実していたことが関係していると考えられる。

この村は、後のバーザールの起点となる東側地域に位置していたことから (図 2: 5~8 の建造物群がある斜線部)、テヘラン発展の基盤となる重要な集落であったことが分かる。川は後に埋め立てられてガナートとなり、その上に宮殿域が構築されることとなる。また先述の通り、サル・チェシュメもオウドラージャーン区とバーザールを始めとし、テヘランの東部・南部で引き続き利用されている。そして、町の東部を満たしていたアーブ・パフシュも、アフシャール族を始めとした遊牧王朝の冬営地 (qeshlāq) として利用され、後にサンガラジ区で利用された。このように、給水が充実していた草木の群生が見られる場所はそれぞれ、後の街区発展の拠点となっている (図 1: 点線で囲まれた部分)。また、群生が見られる場所とそうでない場所の境域に墓廟が建てられる傾向にあったことは興味深い。

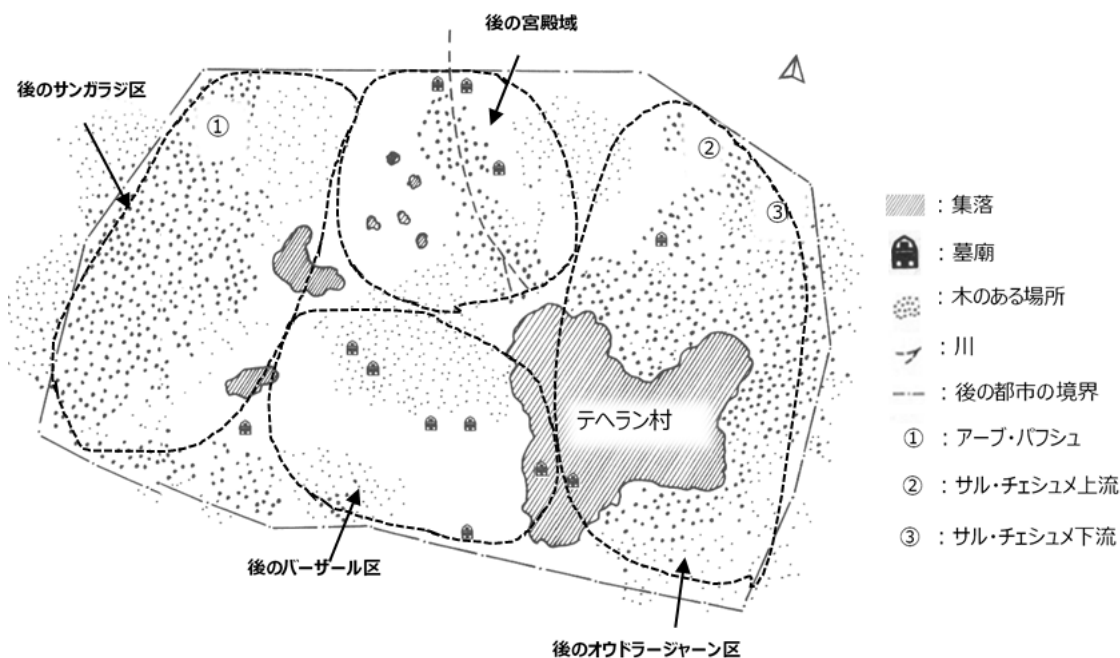
⁹ 1 ダーングは、ガナートを流れる水と、それによって灌漑される土地の収益の 1/6 を指す (ラムトン, 1978: 299-300)。

¹⁰ Mo'tamedī (2002): 544.

¹¹ Mo'tamedī (2002): 546-556.

テヘラン村は、記録としては 11 世紀頃から散見されるようになるものの¹²、近世に至るまではさほど重要な場所ではなかった。しかし、1220 (A.H.617) 年にモンゴル族の侵入によってレイが破壊されたことで、これに代わる地として、同じく近郊のヴァラーミーン (Varāmīn) と共に成長することとなった。更に 1381 年以降に始まったティムール朝 (1370-1507 年) の侵攻にさらされてレイが荒廃し¹³、その後、統治者の居城が置かれなくなったことで¹⁴、相対的にテヘランの重要性が上がっていったのである。

図 1：サファヴィー朝以前のテヘラン概念図¹⁵



(2) サファヴィー朝期からザンド朝期にかけてのテヘラン

テヘランは、サファヴィー朝 (1501 - 1736 年) の第 2 代君主タフマースプ 1 世 (在位 1524-76 年) が冬営地に定めたことで開発が進み、都市 (shahr) と呼ばれるようになった。これは、テヘランがサファヴィー朝の勃興の地であるカスピ海西岸地方とイラン高原を結ぶ交通の要所であり、当時の首都ガズヴィーンからホラーサーン地方へ

¹² 最古の記録は 11 世紀の『バグダーディーの歴史』(Khatīb-e Bāghdādī) において当代の高名な学者の生地として記されたものが最古である。また、テヘランに関する言及としては、13 世紀にヤークートによって、レイの郊外に位置していたこと、地面に穴を掘って住んでいたことなどが記されている (Madanipour, 1998: 4; Zoka & Semsar, A.P.1369: 6-9)。

¹³ ロビンソン(2009) : 64-65.

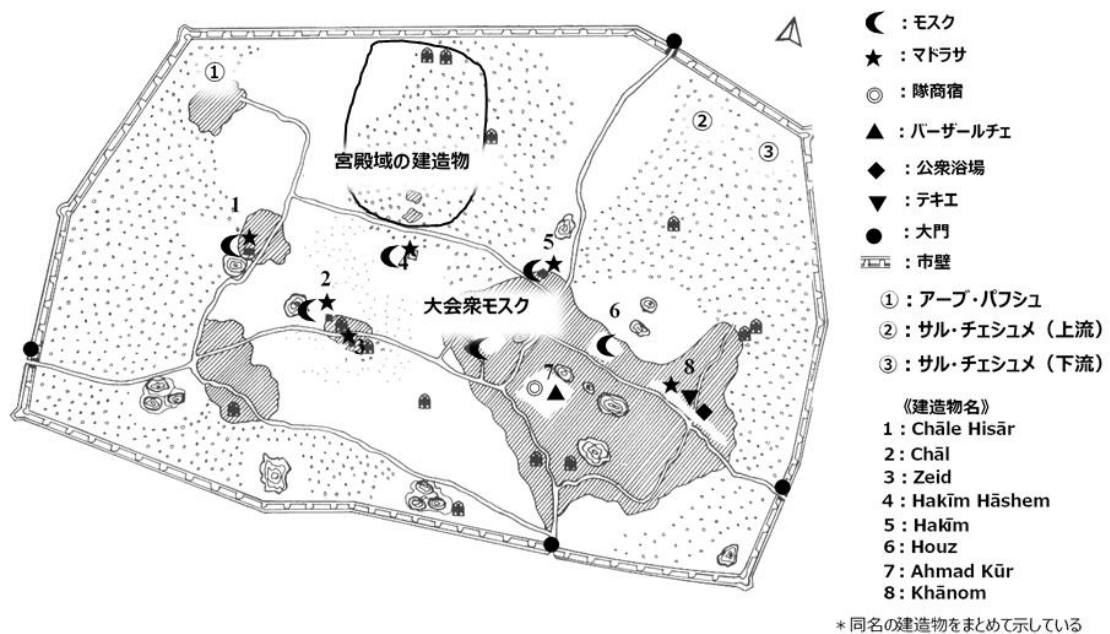
¹⁴ ミノルスキーによれば、当時この一帯はティムールの義理の息子アミール・ソレイマーン・シャー (Amīr Soleimān Shāh) の統治下にあったが、彼はレイに住まず、ヴァラーミーンの町に住んだ。

¹⁵ Mōtamedī (2002): 9 より。

向かう中継地であったためである。これ以降、テヘランは交通の要所として戦略的
重要性を高めていくこととなった。

1553/4 年 (A.H.961 年)、タフマースブ 1 世は、テヘランの都市域を市壁 (shahrband)
d) で囲み、東西南北に 4 つの大門 (darvāze) ¹⁶、114 の塔 (borj) を設置して都市とし
ての基盤を整えた。そしてバーザールを建設して後のバーザール (bāzār-e bozorg, bāz
ār-e qadīm-e Tehrān) の基礎を築き、約 4 km を市壁で囲んだ (図 2) ¹⁷。この時に整え
られた種々の建造物は、ガージャール朝期まで残存し、ナーセリー期の大改造前に作
成された地図でも確認することができる ¹⁸。

図 2：サファヴィー朝期のテヘラン概念図¹⁹



この時、元々川の流れ込んでいた北部の区画に宮殿域が置かれた。図 3 のザンド朝
末期の概念図を見ると、宮殿域の北辺が北の市壁に接していることが分かる。ザンド
朝期はそれまでの基礎の上に宮殿域を整備したといわれていることから、サファヴィ
ー朝期もそれと同等の区域に宮殿域を構成していたと考えられている²⁰。これは、冬営
の際に給水の充実した郊外に陣を敷く遊牧王朝の特徴である。アフシャール朝の勢力

¹⁶ 南のシャー・アブドゥルアズィーム門 (darvāze-ye Shāh ‘Abd-ol-‘Azīm)、東のドゥーラーブ門
(darvāze-ye Dūlāb)、北のシェミーラーン門 (darvāze-ye Shemīrān)、西のガズヴィーン門 (dar
vāze-ye Qazvīn) の 4 門。

¹⁷ Minorsky (2000): 484.

¹⁸ Berezin (1852)、Krziz (1858) の地図。

¹⁹ Mo‘tamedī (2002): 9 より。

²⁰ Scarce (1991): 890-891.

がテヘランに逗留した際も、その拠点は北西部のガナートの出水口付近に置かれていたのも同様の理由からである²¹（図2：①付近）。

第5代君主アッバース1世の治世にあたる1618年に当地を訪れたデッラ・ヴァッレ（Della Valle, Pietro, 1586-1652年）は、町の規模は大きいが人口はカーシャーンより少ないと記し²²、1628年に訪れたイギリス大使随員ハーバート（Herbert, Thomas, 1606-1682年）は、当時のテヘラン市内に約3,000戸の住居があり、王宮やバーザールがモスクよりも立派であったと記している²³。一般的には、イランの都市において中心となり、華やかなのは大会衆モスク周辺である。これがテヘランでは、バーザールと比肩される建造物がモスクではなく王宮であったというのは興味深い記述である。これはテヘランがサファヴィー朝という比較的新しい時代に形成されたことに関係している。サファヴィー朝成立以降、イランでは王宮を始めとした世俗的建造物がより重視されるようになってくる²⁴。その意味では、サファヴィー朝期に都市化したテヘランは、このサファヴィー期以降のイラン建築の在り方を体現する都市の一つであるといえる。

テヘランもサファヴィー朝の弱体化と共に起きた騒乱に巻き込まれたものの、ザンド朝の初代君主キャリーム・ハーン（在位：1750-1779年）による整備で再び息を吹き返した。彼は政敵であったモハンマド・ハサン（Soltān Mohammad Hasan Khān Qājār, 1722-1759年）を殺害後、1759（A.H.1172）年にテヘランに入城し、翌年にかけて市壁と宮殿域の再建を命じている。宮殿域は、謁見の間（dīvānkhāne）、後宮（haram）、近衛兵の詰め所など、統治者の居所として必要な諸要素の整備が進められた。これらの工事は、建築家ゴラーム・レザー・タブリーズィー（Ostād Gholām Rezā Tabrizī）の監督に一任された。この工事が大規模な宮殿域の再構成であったことから、キャリーム・ハーンのテヘランへの遷都の意図を示す事業であったと考えられている²⁵。しかし、その計画は、ガージャール族の勢力拡大に伴って拠点がシーラーズに移されたことで頓挫してしまった。

このようにサファヴィー朝期からザンド朝期にかけて構築された宮殿域であったが、ナーセリー期の度重なる改修工事によって、この時期のものはほとんど取り壊されてしまい、現存するのはキャリーム・ハーンの間（khalvat-e Karīm Khānī, 図3：③）と呼ばれる一区画のみである。これは、その名が示すように、ザンド朝期に造られた空間であるとされる。また、モオタメディーによれば、図3のように、キャリーム・ハーンの間（sarā-ye homāyūnī, 図3：①）、南部の謁見の間（図3：④）と苑池（āb namā, 図3：②）の構成は、サファヴィー朝期の遺構を受け継ぐ造りをしてい

²¹ ガージャール朝の初期にアフシャール族の居留地（mahalle-ye Afshār-hā）となっていた。

²² また、鈴懸の木（chenār）の群生も記している（Grey, tr. & ed., 1873: ）。

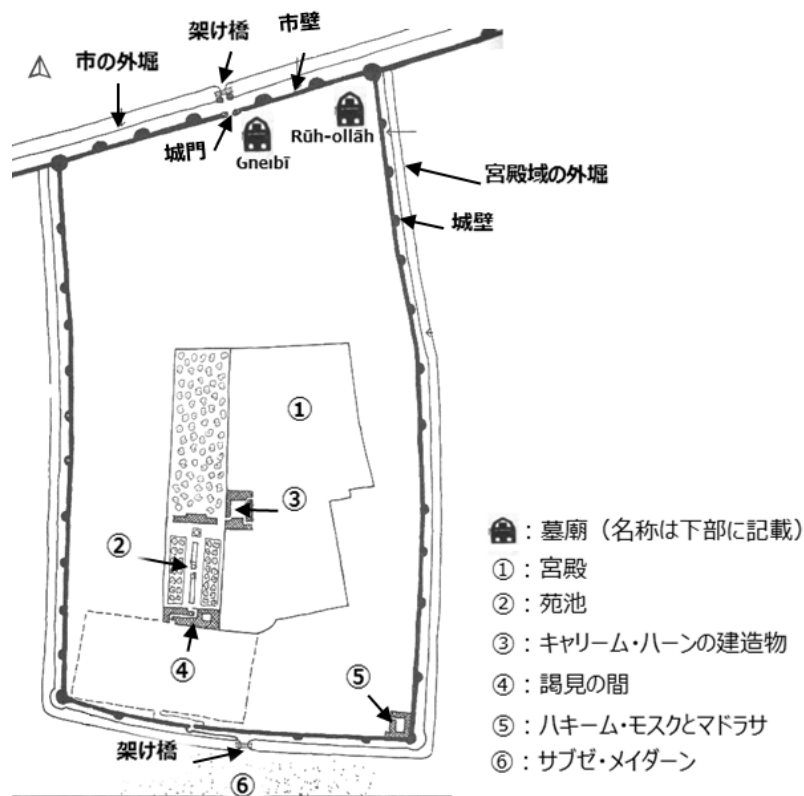
²³ Minorsky (2000): 484.

²⁴ Foster (ed.) (1929):

²⁵ Minorsky (2000): 485; Scarce (1991): 903.

たとされる。アーガー・モハンマド期以降の宮殿域の構成（図 5、図 7、図 10、図 12）と比べてみると、建造物の配置そのものに変化はなく、宮殿、苑池、謁見の間のプランはそのままであることが分かる。このことから、宮殿域は、サファヴィー朝に構築された建築プランをそのまま受け継ぎ、ナーセリー期に至るまでは同じ構造をしていたことが分かる。

図 3：サファヴィー朝滅亡後からザンド朝末期までの宮殿域²⁶



第 3 項：ナーセリー期までのテヘランの成長

本項では、テヘランで起こる変化をナーセロディーン・シャー以前の 3 代の君主の統治期間に分けて確認していく。テヘランが変容するのは 1868 年以降である²⁷。しかしそこに至るまで変化もまた、都市の変化を辿るうえでは重要な観点を示すと考えられる。

²⁶ Mo'tamedī (2002): 66, 75-77 より。

²⁷ 後述する市壁の拡張に始まる一連の都市改革事業のこと (Madanipour, 1998: 31-32)。

(1) アーガー・モハンマド期

1785年のアーガー・モハンマド・ハーンのテヘラン入城²⁸、そして首都選定によって、テヘランの繁栄は本格的なものとなった。テヘラン内部の街区構成もはっきりとしてきており、サンガラジ区、オウドラージャーン区、チャール・メイダーン区、バーザール区などのまとまりが出てくるようになる(図4)。しかし、これらの街区は他の都市でいうところの街区とは異なり、行政区分の性質に近いものであった²⁹。実際の街区に近いのはその下位に区分される地区で、ルーティエー・サーレフ地区(mahalle-ye L ūtī Sāleh)やサル・プーラク地区(mahalle-ye Sar Pūlāk)などがこれにあたる。そしてエスニック集団の居住区域も街区の名前として定着していくこととなる。例えば、サンガラジ区の北部にアフシャール族の居住区(mahalle-ye Afshār-hā)、宮殿域の東部とシャー・アブドゥルアズィーム門の付近にアラブ族の居住区(mahalle-ye ‘Arab-hā)、バーザールの北部にユダヤ教徒の居住区(mahalle-ye Yahūdī-hā)があったことが確認されている³⁰。

アーガー・モハンマド期において注目すべき出来事は次の2点である。まずは、バーザールと商館の整備によってテヘランの政治・経済的中核を再編成したこと。そして、1785年から始まる首都移転に伴って宮殿域を再開発したことである。

前者に関しては、アーガー・モハンマドが私財を投じてバーザール内の商業施設をいくつか購入したころから始まる(図4斜線部)。そして、中心となる蹄鉄打ちメイダーン(meidān-e Na‘lbandān)周辺を店舗で埋め、その周辺に30の部屋を持つ商館を建設してチャハール・バーザール(chahāl bāzār)を建設し、バーザール内に有機的につながった商業空間を創出している³¹。この事業によって、バーザールは全体的に西方向、すなわち宮殿域に向かって拡張していくこととなる。そしてこの王家によるバーザールの地所購入とバーザール拡張の動きはナーセリー期まで続き、バーザールは北西方向へと拡張していったのである。

一方で、後者の宮殿域の開発は、キャリム・ハーンの時代の基礎を利用して作られていった。改築した宮殿(図5:①)を中心に、後宮(haram)・寝所(khābgāh)を含む

²⁸ テヘラン遷都とガージャール朝の成立時期に関しては長らく研究史上の論点であったが、近藤(2006b)が史料の精査によって、テヘランへの遷都が1785年以降始まった段階的なものであった点を明らかにしている。加えて、アーガー・モハンマド・ハーンの即位の時期の比定、ガージャール朝宮廷におけるノウルズの儀式の重要性、冬営・夏営の意義についても明らかにされている。本研究は、都市の形成という観点から議論を進めているため、テヘランの遷都を、都市の整備の完成と首都機能の移転に置いている近藤の研究成果に依って議論をすすめている。

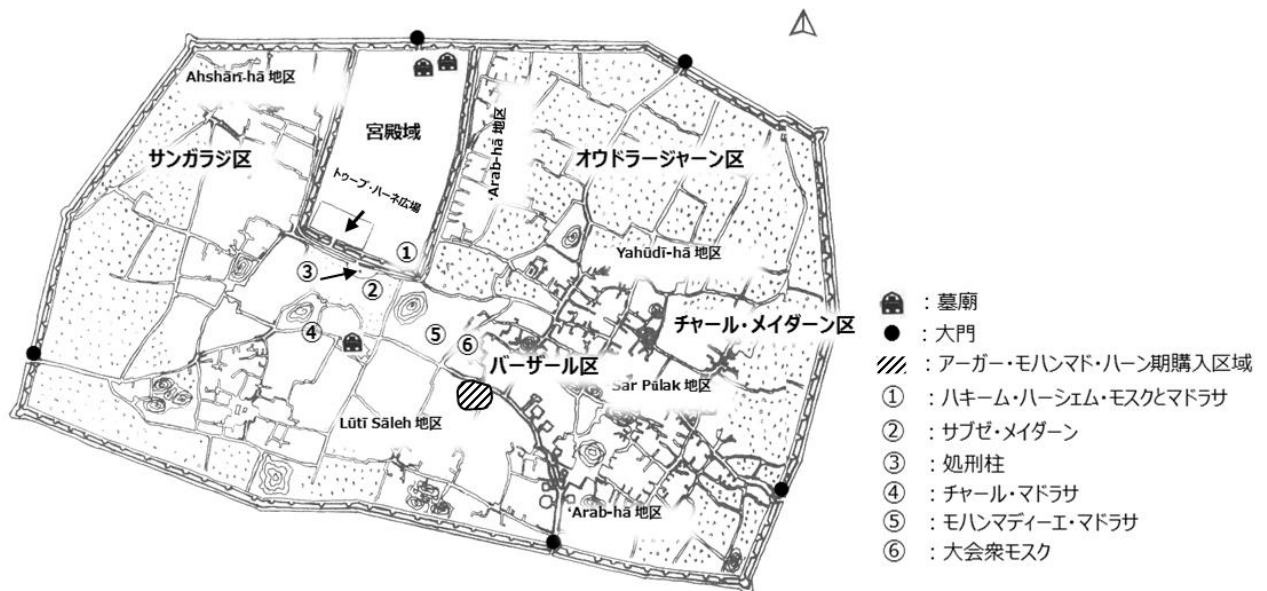
²⁹ 本来、街区は生活と意識を共有する住民の地域共同体として機能するが、テヘランでは行政的な街区区分のとは別に、それぞれの生活と意識に根差した居住空間を持っていた(坂本, 1984a: 100)。例えば、オウドラージャーン区に住居を持っていた住民は、自身の住所をサル・チェシュメ(sar cheshme, 同街区の一部)にあると述べている(坂本, 1982: 4)。このことは、テヘランでは街区の下位に地区があり、それが本来の意味の街区として機能していたことが分かる。

³⁰ Mo’tamedī (2002): 70-71.

³¹ 近藤 (2007): 164-166.

内廷域 (andarūn) が整備され、外廷 (bīrūn) も整備された (図 5)。これはアーガー・モハンマドの即位前、すなわちガージャール朝の成立とテヘラン遷都以前から始まっていた。近藤によれば、この宮殿域の完成に伴って、宮廷やハレムが段階的にテヘランへ移動し、首都を示すラカブ「ダーロツサルタネ (Dār os-Saltane)」がテヘランに冠されるようになった³²。そしてこのラカブのつく 1795 年が遷都の開始年ととらえると、宮殿域の開発は 1795 年前後には段階的に完成していったものと考えられる。

図 4：アーガー・モハンマド期のテヘラン概念図³³



ザンド朝期のプラン (図 3) と比べると、宮殿域内の位置関係や構造は基本的に前時代のものを受け継いでおり、墓廟、城壁の他、宮殿 (図 5：①)、苑池 (図 5：④) などと同じ位置に置かれていることも分かる。アーガー・モハンマド期に新設されたのは、東側区域の厩舎 (establ, 図 5：③)、苑池南東部のアーガー・モハンマド・ハーンの塔 (borj-e Āqā Mohammad Khānī, 図 5：⑤) である。

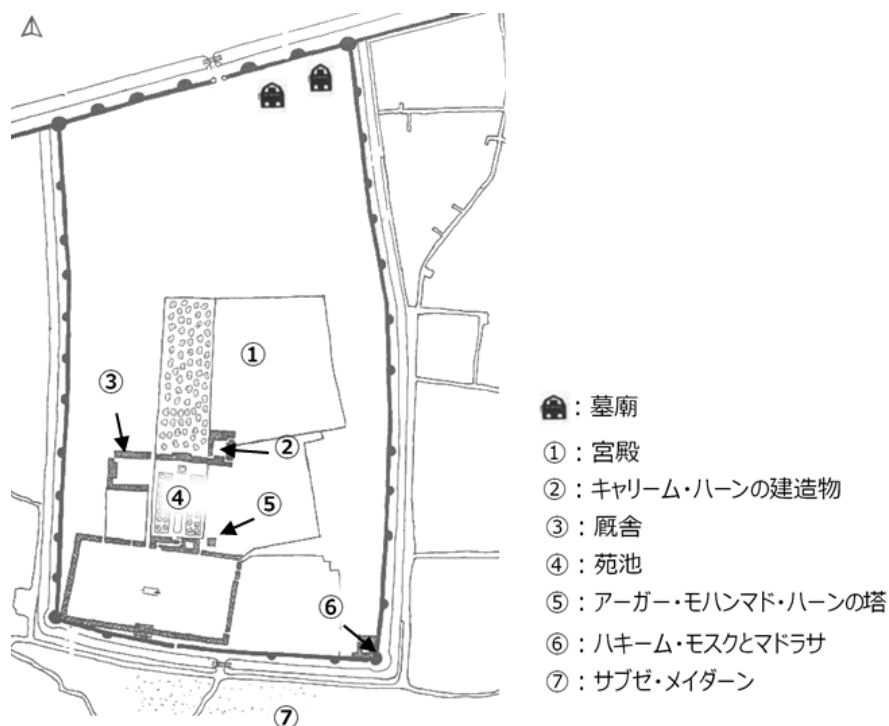
これらバーザールと宮殿域の間には、シャー広場 (meidān-e Shāh, 図 4：②, 図 5：⑦) が存在していた。このシャー広場は慣例的にサブゼ・メイダーン (sabz-e meidān) と呼ばれており、処刑柱 (qāpūq, 図 4：③) が置かれ、見世物としての刑罰が行われる場所でもあった。

³² 近藤 (2006b) によれば、アーガー・モハンマドの即位自体は 1796 年 4 月 26 日 (A.H.1210 年シャヴヴァール月 18 日) から同年 5 月 24 日 (ズィーガッデ月 17 日) 間に行われた。

³³ Mo'tamedī (2002): 66-71; 近藤 (2007): 170 より筆者作成。

以上のことから、アーガー・モハンマド期においてテヘランに起こった変化は、宮殿域の再建とバーザールの拡張であったことが分かる。そして、バーザールの西方向への拡張を決定付けたのがこの時期であったことも重要な転換点であった。

図 5：アーガー・モハンマド期の宮殿域³⁴



(2) ファトフ・アリー期

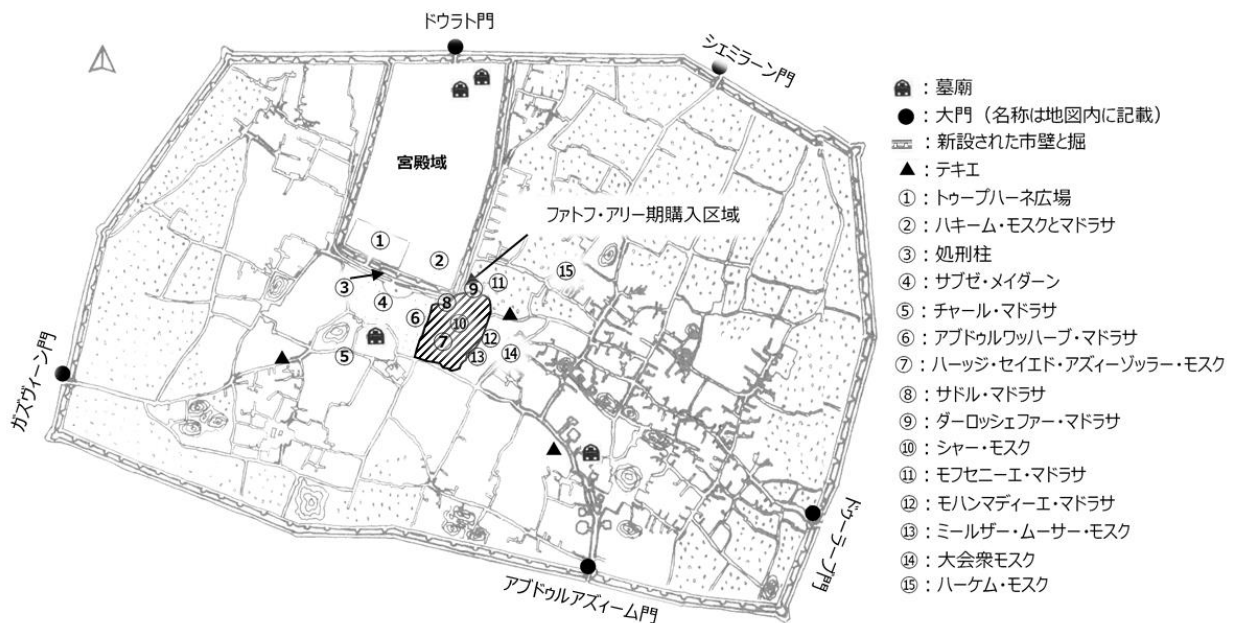
次に第2代君主ファトフ・アリー・シャーの統治期間（1797-1834年）についてみていきたい。都市構成に関しては、アーガー・モハンマド期に引き続きバーザールの購入を行った他、宗教・教育施設、また世俗的建造物や市壁の修繕を含む都市の整備など大規模な工事が多い。宮殿域の開発も進められ、前時代と比べて構造も複雑化している。

都市構成に関わる事業については、市壁の修繕による、都市域の確定とインフラ整備が重要な出来事であった。ファトフ・アリー・シャーはサファヴィー朝期に創建されていた古い市壁を再建し、その周りを深い堀（*handaq*）で囲んでいる（図6）。そしてこの市壁に新たな大門を取り付け、町の東西南北の境界を設定した。大門の内訳は、北にドウラト門（*darvāzeh-ye Doulat*）、シェミーラーン門（*darvāzeh-ye Shemīrān*）の2門。南にアブドゥルアズィーム門（*darvāzeh-ye ‘Abd ol-‘Azīm*）。そして西のガズヴィ

³⁴ Mo‘tamedī (2002): 76より筆者作成。

ーン門 (darvāzeh-ye Qazvīn) と東のドゥラーブ門 (darvāzeh-ye Dūlāb)、あわせて 6 つの大門が取り付けられた。これらの事業は、テヘランの境界を明確化したという点で大きな意味を持っていた。

図 6：ファトフ・アリー期のテヘラン概念図³⁵



また、先代に続いてバーザールへの関与も行われ、店舗の購入によって宮殿域の南東に近い区域の開発が行われた（図 6：斜線部）。また、ハーჯィー・セイエド・モフセンの寄進によって商館 (sarā-ye Hājji Sayyed Mohsen, 図 6 の⑦の西側) が設置され³⁶、バーザールの正門 (sardar-e bāzār) も設けられている。これによって、バーザールは更に西へ拡張され、サブゼ・メイダーンへと近づいている。

この時、ファトフ・アリー・シャーは購入した地所の敷地内に宗教関連施設を創建するなど、テヘラン内部の宗教空間の整備を行っている。有名なのは全国で 2 番目に造られたシャー・モスク (masjed-e Shāh, 図 6：③) である³⁷。このときモスクの北向かにサドルのマドラサ (madrasede Sadr, 図 6：⑧) とダーロッシュェファーのマドラサ (madrasede Dār osh-Shefā, 図 6：⑨) が整備されている。テヘランにはサファヴィー朝期に大会衆モスクが創建されている（図 2, 図 6：⑭）。それにも関わらずシャー・モスクのような新しい集会モスクが新設されたのである。ここには、ファトフ・アリー・

³⁵ Mo'tamedī (2002): 66, 98; 近藤 (2007): 166-167, 169-170 より筆者作成。なお、モオタメディーはファトフ・アリー期のテヘランの概念図を作成していないため、図 6 は、アーガー・モハンマド期のものをベースにしてある。

³⁶ 近藤 (2007): 166-167.

³⁷ シャー・モスクのプロジェクトに関しては第 3 節第 1 項で後述。

シャーが本格的にテヘランの社会を支配下に置いていく意思が感じられる。同時に、大会衆モスクに関しても再整備が行われており、領域内のモハンマディーエのマドラサ (madrise-ye Mohammadīye, 図 6 : ⑫) の改築とワクフ財の追加、ミールザー・ムーサー・モスク (masjed-e Mīrzā Mūsā, 図 6 : ⑬) の増設³⁸が行われた。この他にもバーザールの目抜き通りに面した場所に、セイエド・アズィーゾッラー・モスク (masjed-e Sayyed ‘Azīz-ollāh, 図 6 : ⑦) も創建されている。このことから、ファトフ・アリー期のバーザールは、商業空間としてだけではなく、宗教空間としても充実が図られていったことが分かる。

一方で、宮殿域も開発が進み、王の居所としてだけでなく、政治・軍事・外交の中心としての機能を整えられていった。内廷域 (andarūn, 図 7 : ⑦) の基礎が築かれたのはこの時期である。北部の開発は特徴的で、テヘランの北の大門であり、宮殿域の北門であるドウラト門 (図 7 : ①) が設置されている。そしてその付近に兵舎 (lashkarkhāne, 図 7 : ②) とロシアの間 (sarā-ye Orūs, 図 7 : ③) が置かれている。

また、宮殿域南側開発が進んだのも特徴的である。宮殿南面の広場にはその南面にナッガーレハーネ (naqqārekhāne, ‘emārat-e khorūjī, 図 7 : ⑩)³⁹が建てられたことから、ナッガーレハーネ広場と呼ばれることもあったが、後にトゥープハーネ広場 (meidān-e tūpkhāne, 図 7 : ⑪) と呼ばれるようになる。これは、1817/8 (A.H.1333) 年に広場中央に真珠の砲台 (tūp, tūp-e morvarīd 図 7 : ⑫) が設置されたためである。トゥープハーネ広場は、軍事演場としての機能を設えたものであった。北西部には砲兵隊の倉庫 (anbār-e tūpkhāne, 図 7 : ⑬) が設えられ、徐々に軍事関連の施設が充実してくるころに、近代化へ向けた準備が整いつつある印象を受ける。また、ナーセリー期の大改造時に同名の広場が新設されて新しい官衙形成の中心となっていく点からも、このトゥープハーネという名は、テヘランの都市構成にとって特別の意味を持っていたものと考えられる。

宮殿域全体に目を移すと南部に正門 (‘emārat-e sardar, 図 7 : ⑭) が設けられ、外廷との境界が出現している。それに伴って外廷の整備もなされ、外国使節との謁見の間である太陽の館 (‘emārat-e Khorshīd, 図 7 : ⑮)、糸杉の間 (‘emārat-e Sarvestān, 図 7 : ⑯) が設けられた。この点からも、この時期、諸外国との外交交渉が増えていたことが分かる。そして苑池 (図 7 : ⑰) の北部に大理石の玉座の置かれたイーワーン⁴⁰ (eivān-e takht-e marmar, 図 7 : ⑱) などが作られた⁴¹。しかし、後のナーセリー期の改築でこ

³⁸ 近藤 (2007): 166-167.

³⁹ ナッガーレハーネは軍楽隊による演奏の場である。

⁴⁰ イーワーン (īvān, eivān) は、イスラーム建築における、半ドームで覆われた前面開放型の広間のこと。四辺のうち一辺が完全に開き、三方が壁に囲まれて、正面には大アーチがかけられることがある。

⁴¹ Scarce (1991): 915-916.

の時代の建造物もほとんど取り壊されてしまい、現存するのはこの大理石の玉座と内廷城南東部のバード・ギールの建造物 (khāne-ye bādgīr, 図 7 : ⑱) だけである。

図 7 : ファトフ・アリー期の宮殿域概念図⁴²



(3) : モハンマド期

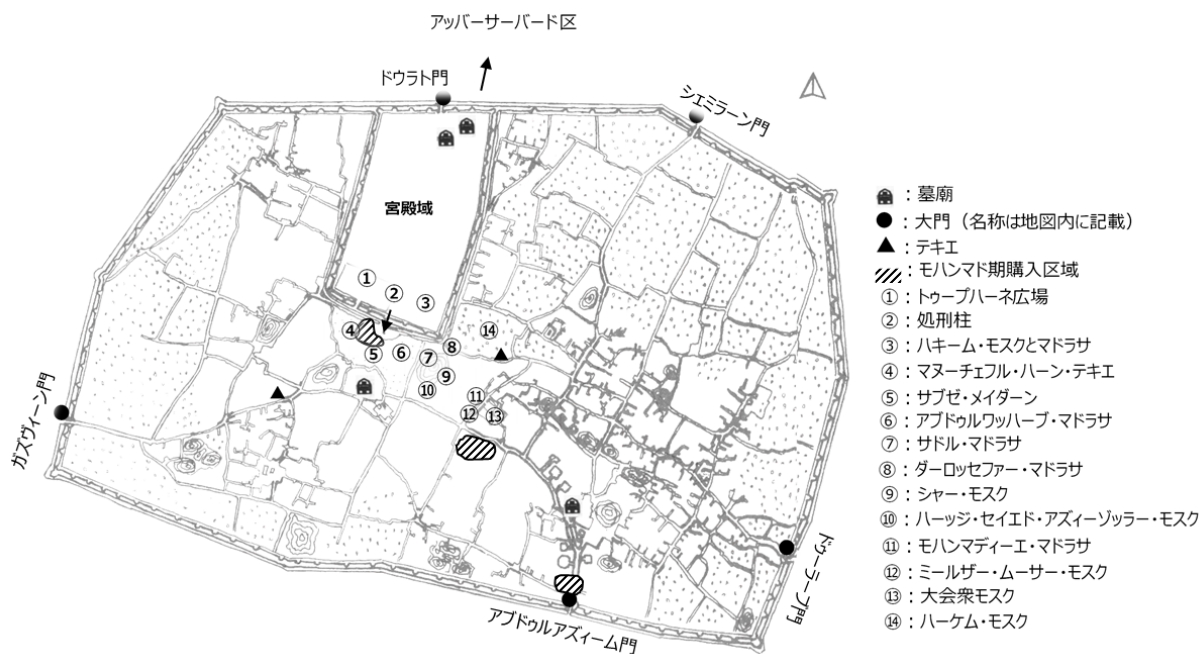
第3代君主モハンマド・シャーの治世 (1834 - 1848, A.H.1250 - 1264 年) は、宮殿域に大きな変化は起きず、都市構成に変化が起こった。この時期に行われていたのは、宮殿の南部とバーザールの結節点の整備や、テヘラン北部の人口増加に伴う開発事業などである。

この時期にもバーザール内の不動産購入があったが、それはシャーの私財によるものではなく、宰相ハーッジー・ミールザー・アーガーシー (Hājji Mīrzā ‘Abbās Erevānī Mīrzā Āgāsī, 在職 : 1835 - 1848 年) によるものである。彼はアーガー・モハンマド・ハーンとファトフ・アリー・シャーが購入した区画の間に挟まれた地所 (図 8 : ⑪～⑬に近接した斜線部) を購入し、バーザール内の政府の影響力を連続したものとした。これによってバーザール内のモスクやマドラサの整備も進み、周辺には 25 軒の商館が立

⁴² Mo‘tamedī (2002): 90, 96-103 より。

ち並んだ。また、サブゼ・メイダーンの6店舗とその西側堀沿いに建つ310店舗（図8：④⑤に近接した斜線部）とアブドゥルアズィーム門とバーザールとの間あった区画（図8：アブドゥルアズィーム門付近の斜線部）も購入している。この購入によってサブゼ・メイダーン西側の開発が進み、テヘランの南門とバーザールがつけられた⁴³。

図 8：モハンマド期テヘラン概念図⁴⁴



このように、モハンマド期の不動産購入は、南門からバーザールを通り、宮殿域につながる人とモノの流れを作り出すことを意識したかのような動きを見せている。アブドゥルアズィーム門はナーセリー期にイラン南部へつながる街道の出口となり、鉄道開発や街道整備の際の拠点の一つとなる。そして、バーザールは先代の買い残した土地を購入しており、西側方面へと延びるバーザールの拡張を補完する一助となっている他、この流れが宮殿域との結節点にあたるサブゼ・メイダーンへとつながることを見越しているかのようなのである。続くナーセリー期に、サブゼ・メイダーンの開発を皮切りにテヘラン大改造が進行していくが、既に前代のモハンマド・シャーの時代に、その下地が形成されていたと考えてよいだろう。

テヘラン北部の開発事業に関しては、テヘランの人口増加と関わっている。遷都より人口の流入が年を追う毎に増加し、テヘランの居住区域は既に飽和状態にあった。

⁴³ 近藤 (2007): 167-168.

⁴⁴ Mo'tamedī (2002): 66; 近藤 (2007): 167-168, 169-170 より筆者作成。なお、モオタメディーはモハンマド期のテヘランの概念図を作成していないため、図8は、アーガー・モハンマド期のものをベースにしている。

この人口圧によってテヘランは、北方向に拡張していた。これは、水源が町の北部にあったことと無関係ではない。テヘランの北郊外には、シェミーランやタジュリーシュなどの王侯・貴族の避暑地があり、テヘランの富裕層は水源に近く、標高も高い北郊外に住居や別荘を構える傾向にあった。この流行から、町の富裕層は人口増加によって過密化した都市域から、より過ごしやすく水源に近い北側郊外に住居を構えるようになっていった。この流れに伴い、モハンマディーエ門（darvāze-ye Mohammadiye, Nou）が新設されて新しい北の境界となり、更に新しい街区であるアッパーサーバード区（mahalle-ye ‘Abbās Ābād, 図 8 上部）が形成された。更に、1844/5 (A.H.1260) 年にキャラジ川（rūdkhāne-ye Karaj）からの引水事業も行われ、増加する人口を補うために新たな水源の確保が行われている⁴⁵。

以上から分かるように、ナーセリー期の大改造に至るまで、各時代の君主・政府はテヘランの経済・宗教の中核であるバーザールの拡大と整備に関与し、それらの流通、発展の方向が宮殿域へ向かうよう不動産購入と施設整備を行ってきた。

もう一度この形成の流れをまとめると、アーガー・モハンマド期にはバーザール拡張の流れを宮殿域方面である西方向に決定づけ、ファトフ・アリー期はバーザール内で求心力のあるモスクやマドラサの整備を積極的に行ってその関与を強め、モハンマド期にはバーザールと宮殿域が接触したことで、それらの結節点となるサブゼ・メイダーンの整備が始められていた。また、人口増加に伴って北側郊外に住居が増加していたことは、既にテヘランがこの時期から実質的に拡大を始めていたことが分かる。北側街区の開発や、水利施設の開発など、テヘランは既に拡張事業の下地を着実に整え始めていた。

これらの動きは、どの程度意図的に行われていたのか、そしてどれぐらい計画的であったのかは現時点では状況証拠しかなく、推測の域を出ない。しかし、これらの事業が後続のナーセリー期の近代化事業へと続く下地を提供しているという意味では、都市計画に近い動きがあったものと考えられる。では、この下地の上に、ナーセリー期にテヘランはどのような変容の時期を迎えるのか。次節で確認していきたい。

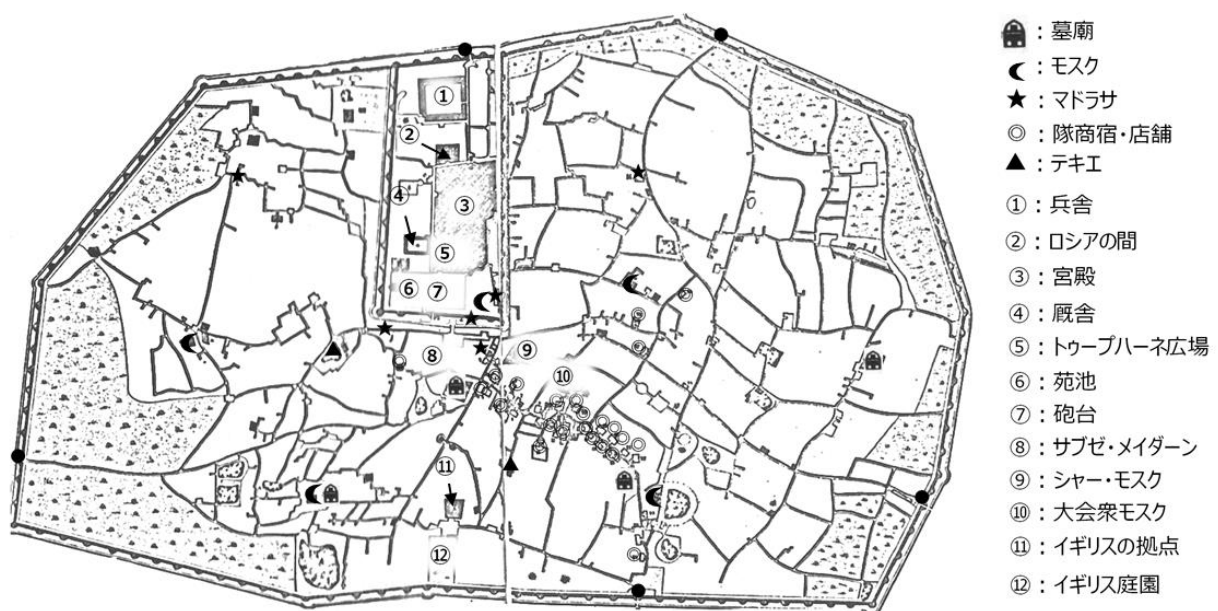
⁴⁵ Mo‘tamedī (2002): 559-560.

第2節：ナーセリー期の大改造

第1項：大改造直前のテヘラン

ナーセリー期のテヘラン大改造の背景には、人口増加や経済活動の活発化による要請だけでなく、当該期間中に行われた改革、列強からの影響、ナーセロッディーン・シャー自身の西洋趣味などが存在したと考えられる。ナーセリー期の大改造において、都市がどのように変容したのかを明らかにするために、本項ではその前提として大改造直前のテヘランの様子をまとめる。

図9：大改造直前のテヘラン概念図⁴⁶



この時期のテヘランは、宮殿域やバーザールの開発が進む一方で、アブドゥルアズィーム門付近にはイギリスの拠点（図9：⑪）とイギリス所有の庭園（図9：⑫）が置かれた。この時、勢力の均衡を図ったロシアがサブゼ・メイダーンに影響力を強めている⁴⁷。このため、テヘランはロシアとイギリスに宮殿域とサブゼ・メイダーン、そしてバーザールの南側と南門という重要な場所を抑えられた形となっていたのである。

バーザールについては、この時期も不動産購入が続いたが、先代のモハンマド・シャーと同様に、ナーセロッディーン・シャーも、自身では地所の購入は行わず、これらの購入は、専ら大宰相アミーレ・キャビールが行った。彼は、購入した区域に商館やバーザールの建設を行い、サブゼ・メイダーンから南に延びるバーザールを整備している。

⁴⁶ Mo'tamedī (2002): 142-143; Calmard (1974): 124-126 より筆者作成。

⁴⁷ Calmard (2000): 487.

サブゼ・メイダーンの整備の工程は次の通りである。まず 1852/3 (A.H.1269) 年に広場中央に設置されていた処刑柱が市壁外へ移設された。公開処刑の場が町の中央から除かれるのは、都市の衛生や雰囲気の改善と共に、外国使節の目を気にしたという点で、都市に近代的な変化が起こる前兆的な現象であったと考えられる。次に広場を取り囲むような形で国営の商館が建設された。この建物は中央に池を備えた二階建ての壮麗な建造物で、1階だけで42の部屋を有し、更に大商人たちが居を構える部屋 (kh ojre) が設けられたものであった。全体としてみれば商取引の場が、バーザールと宮殿域の結節点に出現したわけである。

このような整備を受けて、サブゼ・メイダーンは商業空間の中心地としての役割を果たすようになった。特徴的であったのは、1854/3 (A.H.1270) 年以降に、奢侈品などを扱うラマダーン月の特設市が開かれるようになった点である。この市は、それまでバーザール内部のシャー・モスク (図 9: ⑨) やゼイド廟 (図 9: ⑧ 付近の墓廟) の中庭で開かれていたものであった⁴⁸。特設市がサブゼ・メイダーンで大々的に行われるようになったということは、交易の場がテヘランに誕生したことを意味していた。しばしば、サブゼ・メイダーンの開発からテヘランの改造が始まったといわれるのはこのような点からである。

しかし、前述のとおり、この時期のサブゼ・メイダーンは、宮殿域内部に拠点を置いていたロシア勢力の影響下にあった。そして、バーザールとイラン南部へ抜ける街道の結節点にあたるシャー・アブドゥルアズィーム門付近は、イギリスの影響下にあった。つまり、交易市場の場をロシアに、都市間交通と都市内交通の結節点をイギリスによって抑えられていた形になる。テヘランの大改造の背景には、人口増加や改革によって生じた必要性から近代的な都市への移行するのが主たる目的であった。

一方で、宮殿域については、更に開発が進んで建造物が増加しており、構造も複雑化していた。特徴的であったのが、それまでのイランに存在しなかった新しいタイプの建造物が出現している点である。その一つが北東部の区画である。ここにはイラン初の西洋式高等教育機関であるダーロールフォヌーン校が置かれた (図 10: ③)。前述のとおり、同校はアミーレ・キャビールの改革の嚆矢として開かれたものである。この工事がナーセロッディーン・シャーの即位の翌年に開始されたこと (工期 1849/50-1851, A. H.1266-68 年)、宮殿域の一区画にその敷地が与えられたことから、改革において同校が大きな期待を寄せられていたことが分かる。

外廷域・内廷域にもそれぞれ変化があり、テヘラン知事モハンマド・タギー・ミールザの間 ('emārat-e Mohammad Taqī Mīrzā hākem-e Dar ol-Khelāfe, 図 10: ⑬)、エエテマードッサルタネの上階執務室 (bālākhāne-ye E'temād os-Saltane, 図 10: ⑱)、とい

⁴⁸ 近藤 (2007): 168-169.

った執務用の空間が設けられるようになってきている。また、公正の間 (dīvānkhāne-y e ‘adālat, 図 10 : ⑩)、国庫の管理を行うためのハーレセ地の穀物倉庫 (anbār-e ghalle -ye khālese, 図 10 : ①) など、近代化の影響を受けた建造物が設けられている。これらの建造物は、外廷域の北側に位置していることから、宮殿域の中で、中央から北側にかけてが、ファトフ・アリー期からナーセリー期にかけて、政務を執り行う場として発達してきたことが分かる。

図 10 : 大改造直前の宮殿域概念図⁴⁹



⁴⁹ Mo‘tamedī (2002): 201; Qobadian (2006/7, A.P.1385): 125 より筆者作成。

また皇太后 (Mahd-e ‘Olyā) の名を冠した建造物が増加しており、この時期の宮廷における後宮勢力の大きさを見て取ることができる。地図で確認できるのは、皇太后のマドラサ (madrāse-ye Mahd-e ‘Olyā, 図 10 : ⑧)、皇太后の間 (‘emārat-e Mahd-e ‘Olyā, 図 10 : ⑭)、皇太后の庭園 (bāgh-e Mahd-e ‘Olyā, 図 10 : ⑮) である。また、ハキーム・ハーシェムのマドラサに関しても、母後のマドラサと呼称を変えている (madrāse-ye Mādar-e Shāh, 図 10 : ⑳)。

また、宮殿城南側のトゥープハーネ広場の周辺の整備も充実が見られる。北西部に専用の倉庫 (anbār-e tūpkhāne-ye mobāreke, 図 10 : ㉑) と厩舎 (establ-e tūpkhāne-ye mobāreke, 図 10 : ㉒) が設けられ、南東部には兵器庫 (jobbekhāne, 図 10 : ㉓) も置かれた。このことは、この時期に砲兵隊を中心とした新式軍隊の整備に力が入れられていたことを示している。

このように、大改造を目前に控え、宮殿域内部の構造は複雑化してきていた。また、ダーロルフォヌーン校を始めとした近代化の影響を受けた建造物もいくつか出現してきており、見方によっては、宮殿域は既に改造期に突入していたようにも見える。しかし、大改造の時期に、宮殿域は再び大きく変容することとなり、この複雑化した構造も一新されるのである。

第 2 項 : 大改造期のテヘラン

テヘランの大改造は、1867 年の市壁拡張工事開始がその起点とされる。それは 1874 年まで続く大規模な事業であった。これはヨーロッパの都市計画、特にフランス第 2 帝政期のオースマン (Georges-Eugène Haussmann, 1809 - 1891 年) によるパリ都市計画をモデルとして、ダーロルフォヌーン校の外国人講師らの力を借りて行われた⁵⁰。特徴的なのはその形状で、ヴォーバン式要塞⁵¹を念頭に置いた新しい市壁で都市を八角形に囲んでいる⁵²。この工事により、テヘランの面積は約 20k m² に拡大し、周囲の長さは旧市街の約 3 倍となった。新市壁には 12 の大門が取り付けられている。

この時取り付けられた大門は、北側にユースファーバード門 (darvāze-ye Yūsof Ābād)、ドウラト門、シェミーラーン門の 3 門。東側にドゥシャー・テッペ門 (darvāze-ye Doshān teppe)、ドゥラーブ門、ホラーサーン門 (darvāze-ye Khorāsān) の 3 門。

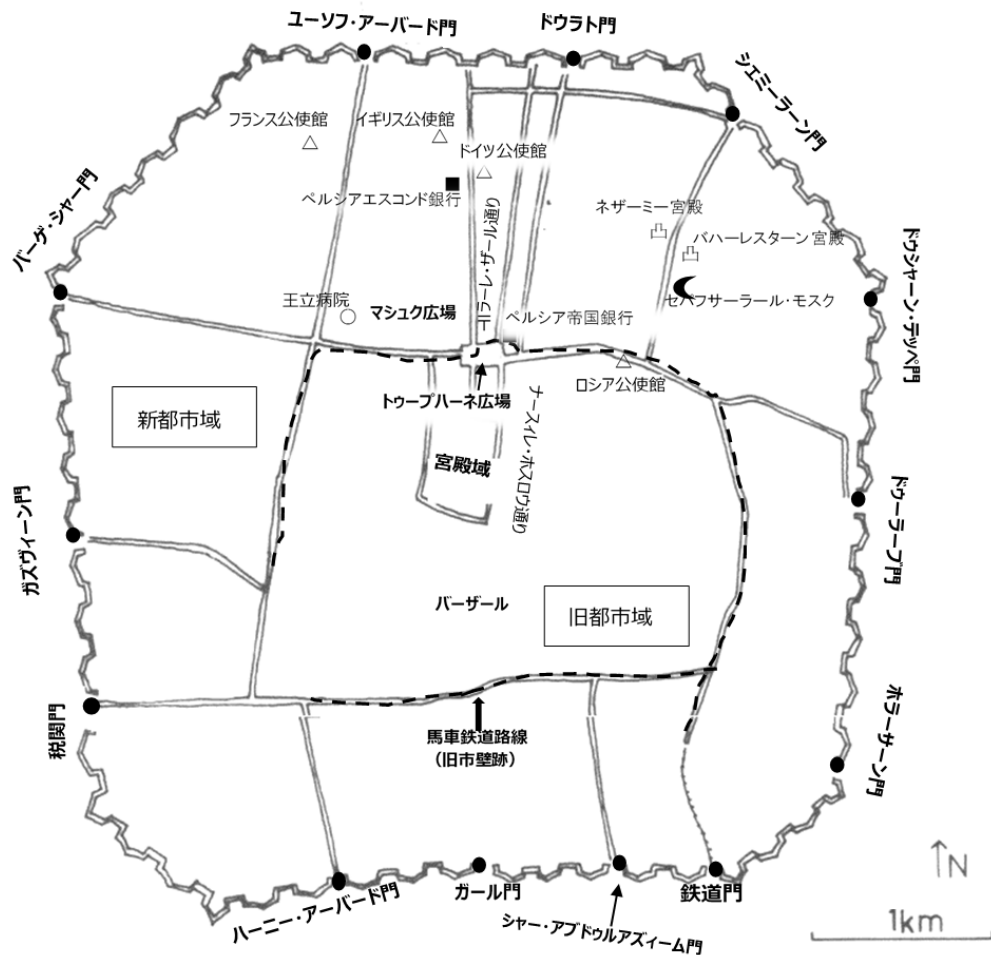
⁵⁰ ダーロルフォヌーン校のフランス人軍事技術講師のビューラー (Alexandre Buhler) を中心としたチームが都市計画のデザインと建設を担当した。特に幅広い大通りによって有機的につながられた都市内交通網の出現が念頭に置かれた。

⁵¹ ヴォーバン式要塞 (fortifications of Vauban) とは、ルイ 14 世期に活躍した建築家・軍事技術者ヴォーバン (Sébastien Leprestre de Vauban, 1633-1707 年) が考案した稜堡式城郭の様式のこと。火砲に対応するための星形要塞の完成形といわれており、城壁の外側に突き出した稜堡が特徴とされる。テヘランの市壁の外観がこの形をとっている。

⁵² Scarce (1983): 339; 坂本 (1984): 92.

南側にシャー・アブドゥルアズィーム門 (darvāze-ye Shāh ‘Abd ol-‘Azīm)、ガール門 (darvāze-ye Ghār)、ハーニーヤード門 (darvāze-ye Khānī Ābād) の 3 門。そして、西側にゴムロク (税関) 門 (darvāze-ye gomrok)、ガズヴィーン門、バーゲ・シャー門 (darvāze-ye Bāgh-e Shāh) の 3 門である。いずれの方角にも 3 門ずつ大門を取り付けることで、シンメトリックな構造が目指されていたことが分かる。また、大改造後の 1888 年に南東にラーアーハーン (鉄道) 門 (darvāze-ye rāh āhan) が新設されることで、最終的には 13 の大門を有することとなった。そして撤去された旧城壁の跡地は、道路や馬車鉄道軌道に転用されている (図 11: 点線部)。

図 11: 大改造後のテヘラン概念図⁵³



この市壁の拡張と同時に、新市街の形成が始まっている。新しくテヘランの中心に据えられたのは、宮殿域の北東部に隣接するトゥープハーネ広場 (図 11 中央) である。大改造前の宮殿域の南側に同名の広場が存在していたが、新しいトゥープハーネ広場

⁵³ Madanipour (1998): 32; 末尾 (1976): 227 より筆者作成。

も、それ以前のものと同様に、軍事関連の施設として機能していた。しかし、このトゥープハーネ広場は、単なる軍事訓練用の広場ではなく、ここを中心として新しい都市の中心を形成するための起点でもあった。また、この広場の着工と同時期に、王立銀行 (bānk-e Shāhi) とモアイエロルママーレクのモスク・マドラサ複合体 (masjed madrase-ye Mo‘ayyer ol-Mamālek) の建設も始められており、この時期、テヘランの至る所で変容が起こっていたことが分かる。

このトゥープハーネ広場は、南面にダーロルフオヌーン校が、北面には郵便局が建てられている。また西方向にはペルシア帝国銀行とロシア公使館が建てられ、北方向にはイギリス大使館 (1870/1, A.H.1287 年完成) が建てられた。そして、北西には本格的な練兵場となるマシュク広場 (meidān-e Mashq) が建てられている。このように、広場の周りには外交・情報・経済・軍事を司る各種施設が整えられていった。

トゥープハーネ広場を起点に官庁街の基礎が形成されたことで、そこは近代的な変化・変容の中心となった。特に広場の南辺に位置していたダーロルフオヌーン校の影響が大きい。先述のとおり、この学校は、ナーセリー期の最初期からこの場所に置かれており、教育だけでなく、都市構成の点から見ても、この学校は、変化・変容の原動力としての役割を負っていた。それは、招聘された外国人講師・技師らが都市改造の計画・実行を担ったためである。また、それ以前にも、同校のイラン人講師であるアブドゥルガッファール (Mīrzā ‘Abd ol-Ghaffār, Najam ol-Molk, Najam ol-Doule, 1839 - 1908 年) らの人口調査や測量などによって都市内部の把握が進められており⁵⁴、近代化事業の下地が形成されている。また、同校から、後の立憲革命を指導するような知識人が排出された点も大きな意味があった。彼らを育み、その影響を全土へと波及させた電信事業も、そもそもの始まりは同校である。このように、トゥープハーネ広場の南東部は、新しい時代の教育・文化の発信地として機能していたのである。

そして、トゥープハーネ広場の北西部は近代化のモチベーションでもあった近代的軍隊編成の動力源となるべく軍事的な複合施設の様相を呈していた。広場の北西のマ

⁵⁴ 1 回の人口調査は、1852/3 (A.H.1269) 年にアミーレ・キャビールによって、人口の把握と徴税の準備のために実施された。この時、戸籍・住民台帳が作成されている (住居、店と残りの建物の数と、同様に持ち主の名前もしくはそれらの借家人の名を記録しており、店の業種も一緒に明記されている (Ettehadiye, 1983: 208-109; 坂本, 1984a: 107)。

2 回目は、文部大臣エエテダード・サルタネとセパフサーラルによって、人口統計・徴税の準備・全国調査の下準備として行われた。調査は、ダーロルフオヌーン校の数学教授アブドル・ガッファールに任された。彼は、同校の 8 名の生徒を 2 人 1 組にし、それぞれに職員 1 名と街区長 1~2 名、工兵 2 名を補助に付けて調査させた。調査は 1868 年 1 月 12 日から 3 月 6 日にかけて延べ 55 日行われ、男性、女性、児童、使用人、奴隷、女奴隷、その他の人数に加えて、世帯主、借家人の数も明らかとされた。調査報告はエエテダード・サルタネに献呈された上、アブドゥルガッファールの個人的な報告としてもまとめられている。また、1869 年 9 月頃からテヘラン市街の測量、建物の調査も行われ、地図が作成された。

3 回目は 1899/1900-1902/3 (A.H.1317 - 1320) 年に、アミーノッソルターンの命で行われている。テヘランの建物に関する調査であったが、それ以前の報告と比べると詳細が乏しいものであった (Ettehadiye, 1983: 209)。

シュク広場は大規模な軍事演習場で、その南側には王立病院 (marīzkhāne-ye doulatī)、周囲には複数の兵器庫を備えており、本格的な近代軍養成の場となった。

更に、トゥープハーネ広場を中心に行われた大通り (khiyābān) による都市内交通の整備が、人とモノの流れを活性化させることにつながった。それまでのテヘランは複雑に入り組んだ小路や袋小路によって、場所間の移動に時間がかかっていた。これが、広くまっすぐ通りが出現することによって、往来がスムーズなものとなったのである。この大通りは、トゥープハーネ広場を中心に交通網を形成するように計画されており、宮殿域の改造の際にも、周りの堀が埋め立てられて大通りとなっている (図 12)。特に東側にあたるナーセリー通り (khiyābān-e Nāserī) は、トゥープハーネ広場とバーザールを結び、更に宮殿域の南辺に沿ってサブゼ・メイダーンまで抜けることのできるアクセス道路として、周辺交通の要となった。バーザールと接触する部分は、シャー・モスクを始めとした、ファトフ・アリー期にバーザール内の拠点となるように整備されたモスクやマドラサへ続くアクセス道路としても機能している。

また、ナーデリー通り (khiyābān-e Nāderī) から接続する通りも重要であった。特にトゥープハーネ広場東部にあるラーレザール庭園とそこから北に延びるラーレザール通りは、ガス灯による装飾などで洋風に整備される、シャーの西洋趣味発露の場の一つであった。更に東部に広がるチェラーゲ・バルグ通り (khiyābān-e cherāgh-e barq) は、宮殿や周辺の役人の邸宅に納めるシャンデリアを扱う商店が置かれている。

このように、大改造後、テヘランの中心は宮殿域からトゥープハーネ広場に移行した。また、市外からのアクセスもホラーサーン門とガール門以外は大通りを經由して直接トゥープハーネ広場に通じるように導線が引かれている。後付けの大門である鉄道門も、旧市壁跡に設置された馬車鉄道線とつなげられたことで、トゥープハーネ広場へのスムーズなアクセスが可能となっている。このことは、他都市とつながる街道が直接町の大通りとつなげられたことを意味し、都市間交通と都市内交通が連結されたことを意味するのである。

第 3 項：宮殿域の変化

大改造によってテヘランの都市域が拡大する一方、宮殿域は北部を官衙の用地として開放したため、大幅に規模が縮小している (図 12)。しかし、その内側はシャーの西洋趣味の発露の場となり、大規模な改修工事が頻発されて豪華さを増していた。宮殿域の工事はテヘラン大改造の開始と同じく 1867 年に始まっている。そこから 1892 年までの 25 年間に、26 件もの創建・修繕事業が行われている。これらの改修事業は、次の 3 期に分けることができる。第 1 期は 1867 年から 1873 年の間で、テヘラン大改造

に即して宮殿域の大規模な改造を行った時期に当たる。第 2 期は 1873 年から 1882 年までの間で、シャーが第 1 次、第 2 次訪欧旅行を経て西洋趣味が加速し、内廷域を中心に大規模な工事が行われて、欧風建築が増加する時期に当たる。そして第 3 期は 1882 年から 1892 年の間で、引き続き内廷域の開発が進む時期となる⁵⁵。

第 1 期に行われた工事は、先述のトゥープハーネ広場を中心とした新市街の形成に向けて、宮殿の北側を開放し、宮殿域の周りの堀を埋めて大通りを建設したところから始まる。宮殿域は北門が取り壊されて後宮の北面にまで後退し、ロシア公館も取り壊されている。そして、外廷域と後宮の北面に新たな境界が設けられ、東西の大通りを結ぶ道路が設置された。東側のナーセリー通りにつながるのは後宮に接していたため、ダレ・アンダルーネ通り (khiyābān-e dar-e andarūn, "後宮の戸口"の意) と呼ばれた。この通りは、ナーセリー通りを介し、北はトゥープハーネ広場に繋がり、南はバーザールに繋がっていた。そして、西側のジャリーラーバード通り (khiyābān-e Jalīl Ābād) につながるのはナーイエボッサルトネ通り (khiyābān-e Nāyeb os-Saltane) で、そこを介して北はマシュク広場に、南はバーザールにつながっていた。いずれの通りもアルマースィーエ通り (khiyābān-e almāsīye) を介してトゥープハーネ広場とつなげられている。この工事によって、宮殿域は政務の空間と王の居所が完全に区別されることとなった。そして、シャーは後宮を新設し、内廷域の改造に着手したのである。

この時期に宮殿域に創建された建造物の中で重要なものは、シャムソルエマーレ (shams ol-'emāre, 図 12 : ⑫) と王立のテキエ (tekīye-ye doulat, 図 12 : ⑬の近く) である。前者は、目抜き通りとして新設されたナーセリー通りに面するように建てられた 5 階建ての建造物である。内廷域の南東に建てられ、物見の塔として後宮の女性たちにも利用された。1865/6 (A.H.1282) 年に着工され、1868 年に完成している。この建物はシャーの意向によって、ヨーロッパ風を目指して左右対称 (taqāron) に作られた、三角屋根のある建物 (kolāh-farangī) で、中央に時計 (sā'at) を設えられている。この 3 つの要素を取り入れた造りは、この時期の欧風建築の特徴で、ナーセリー期の初期に建てられたダーロールフォヌーン校も同様に三角屋根と時計塔を持つシンメトリックなデザインをしている。

また、王立のテキエもシャムソルエマーレと同じ 1868 年に完成している。このテキエは、宮殿域の南部、サブゼ・メイダーンの北東部に建設された。テキエとは、シーア派の受難劇であるタアズィーエ (ta'zīye) を行うための専用の劇場であるが⁵⁶、この建

⁵⁵ Scarce (1983): 339.

⁵⁶ タアズィーエは本来死者に対する哀悼を意味するが、ガージャール朝期には、エマーム・ホセインの受難とその従者たちの殉死を追悼する一連の儀礼 (ta'zīyedāri) のことを指すようになった。受難劇は専用の劇場であるテキエにて、モハッラム月 1 日から 10 日間にわたり上演される。この 10 日間はイランのムスリムにとってのハレの日であり、特にエマーム・ホセインが殉教した 10 日目 (アーシューラー, 'āshūrā) は最高潮の盛り上がりを見せる (Chelkowski, 2009; 嶋本, 1990: 46-48)。

造物は、シャーの西洋趣味建築の一つとして創建されている。シャーはヨーロッパの劇場やオペラに関心を持っており、それをイランのタアズィエで実現しようとして、オペラ劇場を模した劇場空間を創出したのである⁵⁷。

図 12：大改造後の宮殿域⁵⁸



このテキエは、従来のものと異なり、大規模な建造物であった。直径約 60 メートル (200 フィート)、高さ約 24 メートル (80 フィート)、3 階建ての大建造物である。この建物の中央には石造りの円形舞台が置かれており、この上でタアズィエが上演された。この舞台には階段が 2 か所設けられており、高さは約 1 メートル (3 フィート) であった。テキエの地上階は見学に訪れた一般民衆に公開されており、特にこの舞台

⁵⁷ シャーの西洋趣味のうち、建築に関してはリシャル (Richard, Jules "Rishar Khan", 1816 - 1891 年) の影響が大きいといわれている。そして、シャムソルエマーレ創建にあたっては、彼とモアイエロルママーレクが設計を担当した (Amanat: 76-78, 435)。

⁵⁸ Mo'tamedī (2002): 204, 210-227 より。

の周りが女性たちの専用席となっていた。上階はシャーや後宮の寵姫たち、政府関係者専用の観覧席が設えられていた。ちなみにシャーの席は2階のキブラ方向にあった。この席は、朗誦者 (rouzekhān) のための白い大理石製の演台 (menbar) を見下ろす特等席にあった⁵⁹。そして、劇場全体の照明は、開閉式の窓から鏡の反射などで外の光を取り込む工夫が凝らされていた。その他に吊るしランプ (qandīl) ⁶⁰なども用いられ、美しい空間となっていた。これらの照明器具は、シャーが西洋式の装飾として取り入れたものであったが、見学に訪れた外国人の目にはオリエンタルな装飾と映っていた⁶¹。つまり、この劇場空間は、ヨーロッパ式の空間というよりは、ヨーロッパへの憧憬を集めて作られたイラン式洋風空間であったと考えられる。

また、この王立のテキエという劇場空間が成立したことで、テヘランの都市社会にも変化をもたらされた。それは、このテキエがシャーや政府の役人たちだけでなく、一般民衆にも無料で公開されていたためである。このテキエも、他の市井のテキエと同じように、モハッラム月の1日から10日までの間連続してタアズィーエが行われていた。つまり、モハッラム月の10日間、身分や男女の差に関わりなく、一つの空間を共有する機会が設けられたのである。それまでの王族のタアズィーエは、宮殿域の中に置かれ、観劇できるのも限られた身分のものだけであったことから、これは画期的な出来事であったと考えられる⁶²。

王立のテキエにおけるタアズィーエ上演は、午後の2時頃から夕方までと。日没後2時間後から深夜までの1日2回行われていた。シャーはお付の者を伴い1日2回テキエに足を運んでいたが、長丁場のため、しばしば欠席・退席した。一方で民衆、特に女性たちにとってこのタアズィーエは何よりの娯楽であったようで、朝から少しでもよい席をとろうと連日列を成していたといわれる⁶³。

更に、シャーは常に複数の演者を招いてタアズィーエを上演させ、見事に演じたものには褒美をとらせるなどして競い合いを奨励した⁶⁴。この競争を通して、テキエにおけるタアズィーエは舞台芸術化していき、市井で行われるタアズィーエとは別の形で発展していく契機となっている⁶⁵。劇場そのものはシャーの西洋趣味から生じたものであったが、タアズィーエというイランの人々に共通するシーア派的な哀悼儀礼を題材としたことで、西洋趣味とイランの伝統的な要素を混合させた独特の演劇文化を生み出したのである。

⁵⁹ Benjamin (1887): 382-388; Chelkowski (2009); 嶋本 (1990): 50-51.

⁶⁰ 筒状の色ガラスで蠟燭の明かりを覆ったイラン独特の照明器具。

⁶¹ Benjamin (1887): 382.

⁶² 例えば、図10: ㊸など。サファヴィー朝期にガズヴィーンに造られた王族のためのテキエも宮殿域内に建てられている(第3章)。

⁶³ *Rūznāme Nāser od-Dīn Shāh*: 17-38; Benjamin (1887): 382-388.

⁶⁴ *Rūznāme Nāser od-Dīn Shāh*: 38.

⁶⁵ Chelkowski (2009); 嶋本 (1990): 52-53.

更に、タアズィーエという民衆の感情を揺さぶる受難劇の上演は、民衆に娯楽と共に一体感を与えた。タアズィーエは元々、エマーム・ホセインとその一行が殉教するまでの10日間の行程を追体験することで追悼を行うものである。これは通常、詩の形式をとり、ロウゼハーンによって歌い上げられる。そして、劇中で聖句や祈りが唱えられる時には、観客も共に声を合わせ、悲劇的な場面では胸を打って（sīnezanī）その哀悼の意を表す。この観客が胸を打つ音が拍子となり、劇が進行していくのだが、この行為はそこに集う者たちにシーア派としての一体感を与える効果をもたらす。この点からタアズィーエの舞台は観客参加型の朗誦劇であるといえる。

通常、タアズィーエは市井のテキエにおいても熱狂的な盛り上がりを見せるのだが、これが国立のテキエほどの規模となり、更に王や政府高官たちも臨席する中で行われたのである。その一体感は集まった人々に同朋意識のようなもの、後の国民（mellat）の概念の下地になるような感情を芽生えさせたのではないかと考えられる⁶⁶。

そして、この王立のテキエが、サブゼ・メイダーンという公共空間の北部に出現したことにも意味があった。前述のとおり、元々サブゼ・メイダーンは計画的に整備された交易・通商の場である。このバーザールと宮殿域の結節点に、王族や政府役人と民衆が共に熱狂する場が設けられたことは、テヘランの都市社会にとって少なからぬ影響を与えたと考えられる。その後、全国規模でタアズィーエが流行していくのも、立憲革命において、タアズィーエのモチーフが用いられていくことになるのも、この王立のテキエから始まるタアズィーエ流行の影響を受けているものと考えられるのである。

以上から、第1期の変化は、テヘラン大改造に伴う宮殿域の構造の変化と、シャーのヨーロッパ文化への憧れと思い出が具現化したタイプの建造物が出現したものであるといえる。前者はテヘランの都市交通や都市社会の変容に貢献していくこととなり、後者はその後内廷で展開される洋風建築のさきがけとなった。

第1期の変化が宮殿域の外側を含めた大規模なものであった一方で、第2期からの改造は宮殿内に限定されていくこととなる。第2期はゴレスターン宮殿の改築がメインとなった。特にファトフ・アリー期に整備された内廷の北側部分はその対象となり、その構造に変容が生じた時期である。この時期はシャーが訪欧旅行によって実際にヨーロッパの文物を目にした後の時期にあたる。そのため、シャーがヨーロッパで見た建造物を宮殿内に再現するようなタイプの建築が目立った。しかし、それはヨーロッパの建造物をそのまま再現する類のものではなく、ヨーロッパの建造物の特徴をイランの宮殿建築に取り入れた折衷的な西洋趣味の建造物であった⁶⁷。この時重視された要

⁶⁶ 国民の形成やモチーフと革命との結びつきなどの観点からも、イランにおけるタアズィーエは重要な意味を持っていると考えられる。タアズィーエの意義に関する研究は、Chelkowski (2006), (2009); 山岸 (1998)などがある。

⁶⁷ イランに本格的な西洋建築が登場するのはパフラヴィー朝期に入った1930年代以降となる（深見, 2013: 234-236）。

素は、先述の左右対称性、三角の屋根、時計に加え、当時のヨーロッパで流行していた化粧漆喰細工 (gachborī)、ガラス (shīshe) の多用である⁶⁸。特にガラスやそれを用いた装飾は、シャーの趣向に合ったため大いに発展した。そのため、この時期の建造物には、ステンドグラス (shīshe rangī) やシャンデリア (chelcherāgh) の多用が目立つのである。

この時期を代表する建造物は、1877年に内廷北西部に建てられた博物館の間 ('emārat-e mūze, 図12: ⑩) が挙げられる。これは、シャーがヨーロッパで見学した博物館を宮殿内で再現しようとしたもので、キャリーム・ハーンの間西側に続く部分を改装して造られた。この建物は内部に広間と博物室を備えた豪華なつくりをしていた。そしてこの広間はガラスで煌びやかに装飾されたため、鏡の広間 (tālār-e āyīne) と呼ばれた。この博物館はシャーのお気に入りの場所となり、広間は特別なあるいは正式な謁見を行う場として利用されるようになったため、次第に謁見の広間 (tālār-e salām) と呼ばれるようになっていく。更に、これらの建物にあわせて内廷の庭も改造された。壁の改修や区画整理が行われ、新設の庭園や苑池などを幾何学的に配置できるような工夫がなされた。この時、北西部に造られた柑橘園 (nārenjestān, 図12: ⑨) はシャーのお気に入りであり、第3期にはその西側に後宮が建てられることとなる。

第2期に引き続き、第3期の改造も、内廷の充実が主となった。特に後宮の建て替えやシャーの居所の改装が中心となり、内廷で洋風文化が流行することとなる。この時建てられたのは、謁見の間の後ろに新設された後宮 (図12: ⑧) と、その中庭建てられた西洋風の寝殿 (khābghāh)、それから白亜宮殿 (kāh-e Abyez) と呼ばれた小宮殿であった。

このように、宮殿域は、始めのうちはテヘランの大改造にあわせて変容し、後半になるにつれて内廷の充実の特化し、規模そのものは収縮していくという傾向にあった。都市構成そのものへの関与という観点から見れば、第1期がより大きな変化を迎えた時期となる。一方で、建築文化の観点からすれば、ヨーロッパ文化に直接接触する機会を得て、それをイラン風に再現しようとしたシャーの意向が色濃く出てくる第2期、第3期の方が大きく変化した時期であったといえよう。

第3節：建造物から見る他都市への影響

第1項：シャー・モスク・プロジェクト

建築の分野においては、18世紀以降の建造物はそれ以前の時代のものと異なる特徴を見せることが明らかにされている⁶⁹。それは、サファヴィー朝末期の混乱とそれに続

⁶⁸ Scarce (1983): 338-340.

⁶⁹ Scarce (1991): 891-892, 895-903.

く群雄割拠の世相によって、大規模な建造物の創建・修繕を行えるようなパトロンの存在を欠く、空白の時代が存在していたためである。つまり、イランにおける建造物は、サファヴィー朝期までとそれ以降と分けて捉えていく必要があるのである。このパトロンの存在を念頭に置くと、ザンド朝期と、後続のガージャール朝期はある程度連続性があったものと考えられる。特にテヘランに関しては、サファヴィー朝期の建造物やその基礎プランがザンド朝によって再建され、ガージャール朝でもナーセリー期前半までの期間はその基礎の上に修繕・改築を行っていたことから、2つの王朝の連続性を見ることができるといえる。

この2つの王朝を通して見られる傾向は、世俗的建造物の発達、特に宮殿域の建造物の装飾の発達である⁷⁰。そして、この傾向は、時代が下るほど大きく表れてくることとなる。特にこの傾向が強まり、イラン全体に変化が訪れたとされるのが、ガージャール朝のファトフ・アリー期と、ナーセリー期である。

ファトフ・アリー期の建築事業の特徴は、テヘランでも見られたようにモスクやマドラサといった、イスラーム圏の都市に欠かせない要素の創建・修繕が行われた点にある。ナーセリー期に西洋風の建造物が増えていくことを鑑みると、この時期はそれまでの伝統に基づいた都市構成や建築が行われる最後の時代であるといえる。ファトフ・アリー期は、ロシア・イラン戦争の敗北から、列強への従属化が始まる時期であると共に、王朝の支配を盤石のものとするために、国内の安定を図った時期でもある。そのような中でモスクやマドラサなどの都市社会の拠点となる建造物を建設することは、王朝の威厳をアピールする重要な意味を持っていた⁷¹。

そして、この時期に地方にも影響を及ぼしたのが、主要な都市における一連のシャー・モスク (masjed-e Shāh) 建設事業である。これは、ファトフ・アリー・シャーがテヘランを始めとする地方の拠点に王 (shāh) の名を冠したモスクを建てさせた大規模なプロジェクトである。この時、首都テヘランの他に、ガズヴィーン、ザンジャーン、ボルージェルド (Borūjerd、ロレスターン州)、サナンダジュ (Sanandaj、コルデスターン州)、カーシャーン、セムナーンの7か所にシャーの名を冠したモスクが建設された⁷²。

これらの都市はいずれもガージャール朝期の交通の要となる都市であった。そのうち、ガズヴィーンとザンジャーンはイラン北西部の街道上の要所にあたる。ガズヴィーンは、アンザリー港方面とタブリーズ方面への2方向の街道を結ぶハブ都市である。このアンザリー港とタブリーズは、列強との往来の拠点や、オスマン帝国との境域、そして皇太子の居所などの様々な重要性があったことから、この2つの街道は経済・政治・軍事あらゆる意味で、ガージャール朝期の最重要街道であった。そして、ザンジャ

⁷⁰ Scarce (1991): 890-892.

⁷¹ Scarce (1983): 330.

⁷² Hambly (1991d): 551; Scarce (1991): 910-912.

ーンはガズヴィーンからタブリーズへ向かう街道上にあり、ガージャール族の拠点の一つである。イラン初の電信線が引かれ、中継局が開設されたのもこのザンジャーンであった。

そして、サナンダジュとボルージェルドは、イラン西南部交通の要所である。サナンダジュは、オスマン帝国領イラクとの国境であり、シーア派の聖地であるアタバート参詣の必要な中継地であった。そして、ボルージェルドはペルシア湾の港湾都市アフワーズへの中継都市であった。

また、カーシャーンはイラン南街道の要所である。テヘランからゴムを經由して、首都とイラン南部、そしてシーラーズやバンダレ・アッバース港をつなぐ中継都市である。その上、古都エスファハーンへの中継都市であったことから、北街道におけるガズヴィーンのように、複数の都市をつなぐハブ都市であったことが分かる。

最後のセムナーンは、イラン北西部交通の要所である。アフガニスタンとの境域であり、列強勢力との境域でもあったホラーサーン方面への街道上にあった。また、この街道は、イラン最大の巡礼地であるマシュハドへ至る巡礼街道でもあり、人の往来が盛んな場所にあった。

このように、テヘランを拠点として東西、そして南へと広がる交通の要所が選ばれて、そこにシャー・モスクが建てられたのである。工事は1806年前後から始まり、1840年まで断続的に続けられた。これらのモスクのうち、シャーの存命中に完成したのは、いずれも北街道に属する町で、ガズヴィーン、テヘラン、ザンジャーン、セムナーンの4箇所である。このことから、ファトフ・アリー期において、イラン北部に大きな関心が払われていたことが分かる。

シャーがこれらのモスクの建造を行った背景には、流通の要である地方都市を再建し、その事業を通してこれらの中継都市を影響下に置く意図があった⁷³。その理由として次の2点が考えられる。1点目は、モスクなどの創建には、ワクフ財の設定を伴うためである。ワクフ財は、大抵その建造物の周辺に店舗や公衆浴場を創建あるいは再建して、そこから上がる収益に設定される。そのため、モスクの創建はその周囲を含めた区域の開発や整備を伴うことを意味している。つまり、モスクを建てることは、ワクフ財を通して周辺の経済状況を好転させ、再興することにつながるのである。そして2点目は、都市社会に影響を与えうる大規模なモスクを王主導で創建することにより、これらの利益をもたらした王朝の威光を示すためである。その上、そのモスクが王朝の影響下にあることで、間接的に都市社会に王朝の影響力を伝えうる媒体が出現したものと考えられる。

⁷³ Hambly (1991d): 551-554.

そして、この一連のシャー・モスクのプロジェクトの中で、最初に創建されたのがガズヴィーンのマスク（*masjed-e Shāh, Qazvīn*, 図 13 : ③）であった。正門の碑文によればその完成は 1806 年である⁷⁴。このモスクは、廃墟となっていたサファヴィー朝期のモスクを取り壊し、その敷地内に建てられたもので⁷⁵、その敷地はバーザールの北面と接していた。そこに新たなモスクを建て、大通りに接する前庭や正門も整備し、ガズヴィーンでも有数の壮麗な空間を作り上げた。また、この時ワクフ財も設定し直され、モスクはガズヴィーン再興の拠点の一つとなった。

モスクの創建が首都テヘランに先んじていた点からも、シャーがガズヴィーンをイラン北西部の要衝として重要視していたことが分かる。テヘランのマスクが建てられたのは、ガズヴィーンのマスクが完成した 2 年後にあたる 1808 年のことであった。その次に建てられたのはザンジャーン（*masjed-e Shāh, Zanjān*, 図 13 : ②）とセムナーンのマスク（*masjed-e Shāh, Semnān*, 図 13 : ⑥）である。これらの創建は 1827 年頃と考えられている。

この一連のシャー・モスクは、いずれのものにも入り口部分に広いスペースがとられ、装飾が施された壮麗な造りをしていた。そして、都市のバーザールに隣接する形で建てられ、バーザール内の店舗が購入されてワクフ財として設定されていた⁷⁶。このことは、テヘランと同様に、政府によるバーザールの関与が促進されるきっかけとなったと考えられる。

図 13 : シャー・モスクが置かれた都市⁷⁷



⁷⁴ *Mīnūdar*: 578-587.

⁷⁵ *Dabīrsiyāqī* (2002/3, A.P.1381): 601-605.

⁷⁶ Scarce (1991): 910-914.

⁷⁷ 筆者作成。

第2項：モスク・マドラサ複合体の増加

ガージャール朝期には建造物の空間の使い方にも変化が現れてきている。代表的なのが、近年モスク・マドラサ複合体 (masjed-madrased) ⁷⁸と呼ばれるようになった建築様式の発達である。これはマドラサの中に礼拝のためのシャベスターン (shabestān) ⁷⁹を備えた区画が設けられたり、モスクの中に学僧のための教育空間が設けられていたりするものである。一方がもう一方の施設の付属機関として作られるものではなく、空間的に平等にモスクとマドラサが配置された複合的な建造物である。この形式の建造物は、サファヴィー朝期から見られるようになり、ガージャール朝期になると、特にテヘランで多く見られるようになる⁸⁰。

表 1：テヘランにおけるモスク・マドラサ類型⁸¹

	名称	創建者<修繕者> (西暦, A.H.年)	タイプ	備考
1	ハキーム・バーシー (Hakīm Bāshī/ Āqā Mahmūd)	Mīrzā Ahmad Hakīm Bāshī (創建：ファトフ・アリー期)	I or II型	・キブラ辺のモスク空間が壮麗で、その対辺にもう1つシャベスターンが設けられている
2	マルヴィー (Marvī)	Hājī Hosein Khān Marvī, Fakhr od-Doule (創建：ファトフ・アリー期)	I型	・創建者はファトフ・アリー期の高官、1818/9 (A.H.1234) 年に死去している ・中央に大きな中庭が設けられている
3	古セパフサーラル (Sepahsālār-e qadīm)	Mīrzā Mohammad Khān Qājār (創建：1860/1, 1277以前)	I型	・創建者は王族でナーセリー期の高官、1867/8(A.H.1284)年に死去している
4	モアイエロルママーレク (Mo'ayer ol-Mamālek)	Dūst 'Alī Khān Nezām od-Doule, Mo'ayer ol-Mamālek (創建：1873/4, 1290以前)	I or II型	・キブラ辺にモスク空間があり、その対辺にもう2つシャベスターンが設けられている
5	セパフサーラル (Sepahsālār/ Shahīd Motaharī)	Mīrzā Hosein Khān Qazvīnī, Sepahsālār Yahyā Khān Moshīr od-Doule (竣工：1878/9, 1296)	I型	・テヘラン最大のモスク・マドラサ ・マクタブ、宝物庫、病院、ハンマムなどの付属施設が充実
6	ハキーム・ハーシム/母后 (Hakīm Hāshem/ Mādar-e Shāh)	Hakīm Hāshem (サファヴィー朝期) <Mahd-e 'Olyā> (改修：1886/7, 1304)	II型	・北辺と南辺に礼拝のためのシャベスターンが置かれている
7	フィールスーフ・ドゥレ (Fīlsūf od-Doule)	Mīrzā Kāzem Fīlsūf od-Doule (創建：ナーセリー期)	I型	・創建者はナーセリー期の医師、1905/6 (A.H.1323) 年に死去している ・主要な中庭の後ろに設えられた小庭園の中に創建者の墓があり、モスク・マドラサ・マザール (墓廟) 複合体建築のれいでであるとみなされている。
8	モシーロツサルタネ (Moshīr os-Saltane)	Mīrzā Ahmad Khān Moshīr os-Saltane (創建：1900/1, 1318)	I or II型	・キブラ辺に大規模なモスク空間があり、その対辺にもう1つシャベスターンが設けられている ・マドラサ部分の東側に時計塔があるため、時計モスク (masjed-e sā't) としても知られる

⁷⁸ イランの建築学会で用いられるようになった用語であるため、本来はペルシア語のマスジド・マドラセ複合体と表記するほうが相応しいが、本論文では混乱を避けるため、モスク・マドラサ複合体で統一している。

⁷⁹ シャベスターンは屋根のある礼拝に利用される空間のことを指す。モスク単体の場合は、夏の日差しや冬の寒さを避ける目的で、季節毎に2~4のシャベスターンを移動しながら礼拝を行う場合が多い。モスク・マドラサ複合体の場合は、このシャベスターンの数を減らすことで、礼拝空間として固定し、利用している。

⁸⁰ Soltānzāde (A.P.1378, 2000): 53-54; また近藤によれば、Ritter, Markus (2006), *Moscheen und Madrasabauten in Iran 1785-1848*, Leiden and Boston: 73-74にもこの概念に対する説明がある (近藤, 2012: 69)。

⁸¹ Soltānzāde (A.P.1378): 54-62; Qāsimī (1998), vol.3: 32-39, 70-73, 92-109, 126-139より筆者作成。創建年代の早い順でまとめてあるが、6に関しては、改修工事後よりモスク・マドラサの形になったため、改修年代を基準としている。

構造上の特徴からこのモスク・マドラサ複合体は 4 種類に分けることができる⁸²。表 1 を確認すると、テヘランのモスク・マドラサ複合体は、ファトフ・アリー期に 2 軒、ナーセリー期に 6 軒建てられていることが分かる。テヘランでは中庭をはさんだ平面の空間をシェアする形式 (I 型、II 型) が多い。I 型は比較的教育空間に適した造りで、マルヴィー (表 1: 2)、古セパフサーラール (表 1: 3)、セパフサーラール (表 1: 5)、フィールースーフオッドウレ (表 1: 7) のモスク・マドラサがこれにあたる。II 型は教育空間に適していない造りとされているもので、ナーセリー期に改修された宮殿域にあったハキーム・ハーシェムのモスク・マドラサ (表 1: 6) がこれにあたる。また、モスク空間の大変に礼拝や休憩用に利用するシャベスターンを配置する造りのものがあり、これがハキーム・バーシー (表 1: 1)、モアイエロルママーレク (表 1: 4)、モシーロツサルタネ (表 1: 8) のモスク・マドラサがこれにあたる。

これに対し、地方都市に造られたモスク・マドラサ複合体には 2 階建ての構造を持ち、上階と地階で空間を分ける III 型、IV 型に属するものも存在する。前者は教育空間に適さないタイプのもので、モハンマド期に完成したエスファハーンのセイエド・モスク (masjed-madrased-ye Seyyed) などがこれにあたる⁸³。後者は教育空間に適した造りのもので、カーシャーンのアーガー・ボズルグ・モスク (masjed-madrased-ye Āqā Bozorg) がこのタイプのもといわれている。両者ともモハンマド・シャー期に建造された物件である。また、この様式の好例と捉えられるのが、ファトフ・アリー期にガズヴィーンに建てられたサーレヒーエのモスク・マドラサ (masjed-madrased-ye Sālehīye) である。この建物は 3 層構造になっており、最上階にマドラサ、地上階にモスク、地下階に居住空間を設けることで、教育空間と宗教空間の分離に成功している⁸⁴。

このような複合的な建造物が何故増加してきたのかについては、明確な答えは出されていない。しかし、モスクとマドラサはどちらもイスラーム圏の都市構成における重要な要素である。これらが一つの空間にまとめられた背景には何があったのか、今後解明されるべき課題の一つである。

第 3 項：世俗的建造物の増加

ガージャール朝期全体を通して、都市における変化・変容は、都市の中に世俗的建造物の割合が増し、その種類が多様化してくることがその原動力となっていると考えられる。この傾向が加速するのが、列強との交流が深まるナーセリー期である。それまで

⁸² I 型：キブラ辺 (礼拝の方向、イランでは南 or 南西) にモスク、残りの 3 辺にマドラサを配置しているもの。礼拝用の沐浴の場をマドラサの隅に設定している。II 型：キブラと対辺にモスク、東西の 2 辺がマドラサを配置しているもの。礼拝と学問の場が互いに交差する構造。III 型：地階にモスク、上階にマドラサを配置したもの。IV 型：地階にマドラサ、上階にモスクを配置したもの (Soltānzāde, A.H.1378: 53-64)。

⁸³ Soltānzāde (A.P.1378): 63.

⁸⁴ *Mīnūdar*: 612-616. 詳細については、第 4 章第 1 節第 1 項 (3) で後述。

の世俗的な建築といえば、バーザールや宮殿といったいわゆる宗教的建造物に属さない建造物のことを指していた。これがナーセリー期になると、新しい機能を持った政庁関係の建造物や、趣向を凝らした個人邸宅、新式学校といったそれ以前は存在しなかったような建造物が増加してくるのである。

また、この時期の建築の特徴は、同様に洋風建築の流行が見られる点である。この時期に立てられた建造物には、色彩タイル、化粧タイル、化粧漆喰、ガラスの多用の他、ステンドグラスやガス灯による装飾も好まれた。特に色彩タイルによる壁面の鮮やかな装飾は、宮殿の内廷域で行われた第2期、第3期の改造で施されたタイルの特徴を受け継いだものである⁸⁵。

例えば、ガージャール朝期に交易の中継地として栄えていたカーシャーンでは、19世紀後半に建築ラッシュが起こっていた。特に建築家オスタード・アリー・マルヤム (Ostād 'Alī Maryam)⁸⁶が商人たちの邸宅、バーザールのティームチェ (tīmuche-ye Amīn od-Doule) などを建設するなどの活躍を見せている。イスラーム圏において特定の建築家もてはやされ、名前が伝わっているのは珍しい出来事である。この流行の中心が専ら商人たちの邸宅であったことから、パトロネージュを可能とするほど、カーシャーン商人たちの経済活動が活発であったことがわかる。

アリー・マルヤムの建設した邸宅の中でも特に有名なのが、ボルージェルディーの邸宅 (khāne-ye Borūjerdī) である。これは1875年に建設が開始され、18年の歳月をかけて1892年に完成している。構造自体は客間などを有した外庭と居住空間である内庭で構成される伝統的な様式であるが、ナーセリー期の流行であった化粧漆喰やステンドグラスの多用、ピンク色を用いた色彩タイルの多用などが見られる。特にピンク色は当時のヨーロッパの流行色であり、ゴレスターン宮殿でも多用されていることから、テヘランでの流行がカーシャーンにも伝播してきていることが伺える⁸⁷。客間もヨーロッパ風にシャアの肖像画が飾られるなど、随所に洋風文化の影響が現れている⁸⁸。アリー・マルヤムは、伝統的な家屋の構造をベースとしながらも、当時の流行を取り入れた一方で、中庭ファサードに破風飾りをつけたりするなどの伝統技術の応用も見られた。

商人の邸宅が流行を取り入れて作り上げられたのに対し、伝統的なバーザールの中に作られたティームチェは、サファヴィー朝期のムカルナス建築から発展させた複雑な技法が用いられている。この流行を取り入れて新しいものを取り入れる柔軟さと伝統技術の発展を融合させることのできた背景には、アリー・マルヤム自身の才能のほかに、カーシャーンの独自の伝統が存在していたと考えられる。カーシャーンはゴム

⁸⁵ Scarce (1983): 339.

⁸⁶ 本名のアリーに、彼のパトロンであった女性投資家マルヤムの名をつけて「アリー・マルヤム」と呼ばれることが多い。

⁸⁷ 深見 (2013): 240.

⁸⁸ Haeri (2012).

= エスファハーン街道上にある古い歴史と伝統がある町である。町の名前も化粧タイルを表すカーシー (kāshī) を語源とされるように⁸⁹、元々ラスター彩を始めとする様々な工芸品の名産地であり、建築技術の伝統も有している場所でもあった。アリー・マルヤムの特性を育んだのは、カーシャーンの伝統技術の習熟と、彼に活躍の場を与えた商人たちの財力であったことは間違いないだろう。ここに欧風文化の流行と、伝統に根ざした文化の融合を見せるといふ、カーシャーン独特の都市建築文化の変容が見られるのである⁹⁰。

小結

テヘランは、サファヴィー朝期以降にて発展した比較的新しい都市であった。ガージャール朝期にも、サファヴィー朝期の基礎の上に都市が発展しており、これは宮殿域も同様であった。ガージャール朝期には、周辺地所の購入によってバーザールの北西方向への拡張が起り、サブゼ・メイダーンの重要性が高まった点が特徴的であった。そして、ナーセリー期の大改造によってテヘランは大きく変容した。この時都市内交通が充実し、人とモノの流れが加速したことが、後の都市構成に大きな影響を与えた。また、都市間交通と都市内交通の結びつきも見られ、都市の形そのものが中央集権化に対応した形に変容を遂げている。

また、ガージャール朝期を通した変化として、ファトフ・アリー期にシャー・モスク・プロジェクトによる、イラン北部の地方都市の再建があった点。モスク・マドラサ複合体の増加や個人邸宅の充実が見られる点も明らかとなった。これらの変化・変容は、いずれも交通の要所に多く見られることから、中央集権化事業による人とモノの流れの加速化が、都市変容を引き起こす要因となっているのではないかと考えられる。

では、ガージャール朝期に交通の要所として重要な位置にあり、テヘランとのつながりの強かった都市ではどのような変化を迎えたのか。第2部では、ガージャール朝期随一のハブ都市であった地方都市ガズヴィーンを対象として、この変化・変容の実態を明らかにしていきたい。

⁸⁹ Planhol (2012f).

⁹⁰ 深見 (2013): 239-241.

【第2部：中継都市ガズヴィーンに見るサージャール朝期の都市変容】

第1部では、サージャール朝期のイランが置かれた状況と首都テヘランにおける変化・変容の経緯が明らかにされた。では、同じ時期の地方都市、特にテヘランと強いつながりを持っていた都市ではどのような動きがあったのか。これを明らかにするために、第2部では、地方都市ガズヴィーンをケーススタディとして取り上げ、サージャール朝期の地方都市の変化・変容について考察していきたい。

第3章：中継都市ガズヴィーンの形成

第1節：サージャール時代に至るまでのガズヴィーンの諸状況

第1項：ガズヴィーンの地理的状況

(1) 自然条件

サージャール朝期のガズヴィーンについて議論を進める前提として、地理的な要素と歴史を簡単にまとめ、その特徴を明らかにしておきたい。

ガズヴィーンの都市部は北緯36度15分、西経50度、海拔1,800m、テヘランの北西約150kmに位置し、アルボルズ山脈南麓に位置している¹。テヘランと同様に半乾燥気候、砂漠周縁地域に分類することができ、平均気温は夏が34.5℃、冬が-5.4℃、年間降水量は300~400mmであり、特に1、2月の降雪量が多い²。その気候は、山地部で過ごしやすいが、平野部では冬寒く夏暑いという過ごしにくい土地柄である。

更に、ガズヴィーンの平野部には春の初めから夏にかけて、時には秋の初めから冬の期間に2・3日ほど、南東からラーズ(rāz)あるいはシャレ(share)と呼ばれる熱風が吹き荒れるという特殊な事情がある。この風は、平野全体に高温と極度の乾燥をもたらし、ガズヴィーンの都市部の水不足を加速する要因ともなってきた³。

また、ガズヴィーンはアルプス・ヒマラヤ造山帯に属すアルボルズ山脈の影響下にあり、地震帯の上にあるため地殻変動が起こりやすく、大きな地震も度々発生している。記録されているだけでも、863/4(A.H.249)年、970/1(A.H.360)年、1119/20(A.H.513)年、1120年(A.H.514)年、1169(A.H.562)年⁴、1809年⁵の地震を確認できる。平野部全体で見れば、1484/5(A.H.889)年にターレガン地方で、1549/50(A.H.95

¹ Adamec (1976): 323; Lambton (1995a): 857.

² Varjāvand (A.P. 1351): 5; Lambton, 1995a: 857.

³ また、北部から北西部には、メ(Meh)と呼ばれる冷風が吹く。この風は季節を問わず吹き、特に山岳部の冷涼な気候の原因ともなってきたようである(Varjāvand, A.P. 1351: 5-6)。

⁴ Lambton (1995): 857; Bosworth (2007): 429.

⁵ Morier (1812): 254

6) 年にロードバールで発生した地震が記録されており、比較的新しいものだと、1962年にガズヴィーンの南部で起こった地震が記録されている⁶。

100万都市を幾つも抱えるイランの中にあつて、ガズヴィーンは決して大規模な都市でなく、2014年段階での人口は381,598人である⁷。同様の人口を抱えているのは、ホラーサーン地方のガーセマバード (Qāsem Ābād, 人口: 389,102人) やサナンダジュ (人口: 373,987人)、近郊のザンジャー (人口: 386,851人) などが挙げられる⁸。これらは、かつて交通の要所として栄えた都市である。

現在の都市域の基盤となった旧都市域 (ガージャール朝期の都市構成)⁹は、サファヴィー朝期に完成した。これは、テヘランのバーザールが整えられ、宮殿域が形成されることで発展の基盤が作られた時期に近い。ただし、その形成は首都が置かれたガズヴィーンが先行しており、テヘランは当地から東方面への交通の要所として注目されたという変化の順序・方向については念頭に置いておく必要がある。

サファヴィー朝期からガージャール朝期にかけて、テヘランとガズヴィーンは互いにとっての重要な戦略的用地として機能していた。テヘランがタフマースブ 1世の目に留まったのは、ガズヴィーンへの首都移転が検討されていた時期である。図 1 で示したように、この時期のテヘランは、ガズヴィーンからホラーサーン地方への中継地であると共に、レイやヴァーラミーンを經由してエスファハーンから南部へと抜けるルートともつながっていた。また、エスファハーン遷都後もガズヴィーンが旧都としてしばしば王の訪れがあつたことから、テヘランとガズヴィーンの関係は続いていたのである。

そして、ガージャール朝の成立と共にテヘランが首都となり、今度はガズヴィーンがテヘランにとっての中継地として機能するようになった。これまでテヘランが北東及び南方面への中継地であつたことと逆転して、ガズヴィーンは北西方面への中継地となったのである。

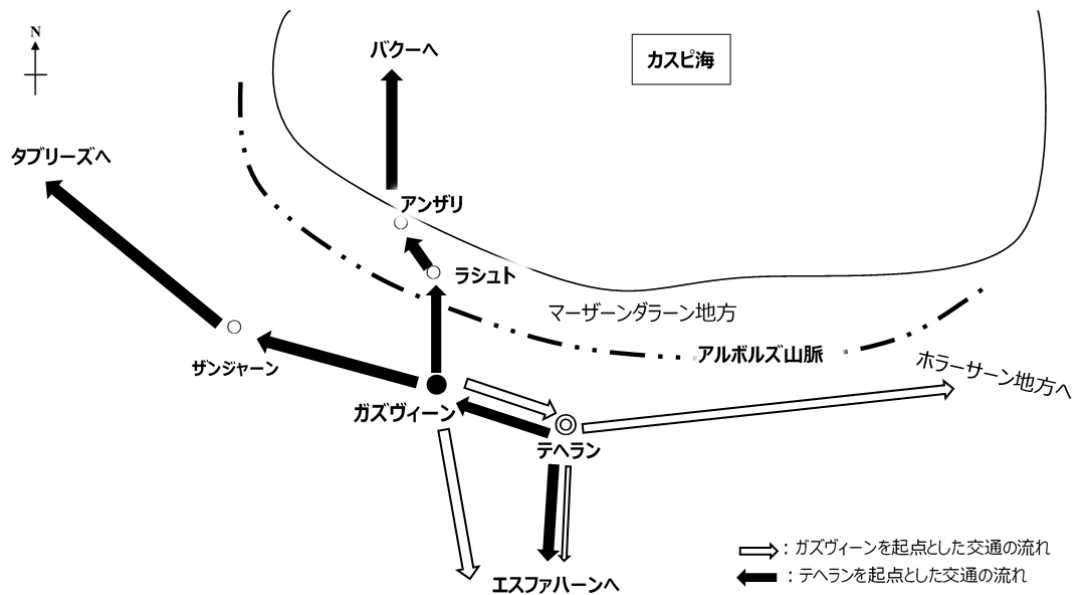
⁶ 1962年9月1日発生。マグニチュード7.0-7.5、死者13,000名、被害地域20,000km²。日本から耐震調査団が派遣され、10月10日よりテヘランを拠点に約6週間の調査を行っている (小林, 1963)。

⁷ UN2: 35.

⁸ UN2: 35-36.

⁹ 本論文が研究対象としている旧都市域は約15,000km²である。これは、パフラヴィー期の地図によって、南北 (シャーザーデ・ホセイン廟の南端からダルブ・クシュク門まで) と東西 (パンベ・リーセ門からラシュト門まで) の大通りの距離から概算された数値である。イギリスの地図に基づいてその面積を概算すると、長さ (南北距離) × 幅 (東西距離): $2 \cdot 1/2 \times 1 \cdot 1/3 =$ マイル (363,520 m²) となる。ロシアの地図での概算は、長さ × 幅: $2 \cdot 1/10$ ヴェルスト × 2 ヴェルスト = (3,685,683 m²)。都市郊外の面積を含めると、長さ × 幅: $6 \cdot 3/4$ ヴェルスト × 5 ヴェルスト = (24,784,440 m²) となる (*Mīnūdar*: 281)。

図 1：テヘランとガズヴィーンの関係から見た交通の流れ概念図¹⁰



(2) 水利条件

水利に関しては、テヘランと同様に、ガズヴィーンでも町で利用される水の水源は全てアルボルズ山脈に集中している。ガズヴィーンの平野部には、大きめの河川が5本ある。列挙すると、アブハル川 (Abhar rūd)、ハル川 (Hal rūd)、ハッジー・アラブ川 (rūdkhāne-ye Hājī ‘Arab)、シャー川 (Shāh rūd)、アラムート川 (rūdkhāne-ye Alamūt) の計5河川である。いずれも冬から春にかけての一定期間しか流れないワジ (涸川) である。また、都市部の水利に影響を与えている流れは、ディザジ川 (rūdkhāne-ye Dizaj, Bāzār)、アランザク川 (rūdkhāne-ye Aranzak, Aranzaj)、デリー・チャーイ川 (rūdkhāne-ye Delī Chāy) の3河川が存在する。これらの川はいずれもワジである上、ほとんどが町中まで流れてこない¹¹。

このうちガズヴィーンの都市構成と深く関わっていたのがディザジ川である。この川は町の北西24kmの地点から流れてくるのだが、2本ある支流のうち的一方が都市部に流れ着き、もう一方は町の北部に広がる農園地帯で農業用水として使用されている¹²。水量は、春に18サング¹³あるが、夏は干上がってしまい、稀に流れることがあって

¹⁰ 筆者作成。

¹¹ *Gozīde*: 778-779; Lambton (1995): 857.

¹² パフラヴィー朝期のガズヴィーンで消費される小麦の半分がこの地域で生産されたものであった (*Sīmā*: 14-15)。

¹³ ガズヴィーンの1サングはテヘランの約4サングに相当するといわれる。すなわち、1サング ≒ 約53.3ℓ (0.2 m² × 4m ÷ 3秒 = 53.3333... ℓ/秒) と計算できる (岡崎, 1988b: 13-17; ラムトン, 1978: 407-410; *Mīnūdar*: 308)。

も 1 サング程度の水量であった。この支流は、北部から町に流れ込み、西側の街区を
通って南西に向かって流れる。この川はかつてガズヴィーンで唯一町中を流れる川で
あった。しかし、サファヴィー朝期に西側街区が開発された際に、ラシュト門の後ろに
移設された上、元の場所は埋め立てられ、その跡地はモウラヴィー通りに改築された
ことで、町中から姿を消している¹⁴。

そして、アランザク川は、2本の支流のうちの1方が町の北方 20km から都市部に向
かって流れてくる。しかし、この流れは町には入らずにパンベ・リーセ門（北門）の外
側から東回りで南方に流れて、農業用水として利用される。水量は不明だが、年に一度
だけ郊外にある 13 の水車を回しながら流れてきて、灌漑に利用されていた。

そして、デリー・チャーイ川も都市部には流れ込まない。ただし、町に流れ込むガナ
ートの水源となっているという点で、町の水利と関わっている。北部にあるセピード・
ダーラン山（*kūh-e Sepīd Dārān*）からアク村（*Ak ābād*）に流れ込み、ここでヒヤー
バーンのガナート（後述）と連結される。この川の水量は春に 15 サング、夏に 1 サン
グ程度であった¹⁵。

以上から分かるように、ガズヴィーンも他の乾燥・半乾燥地域と同様に、河川による
恒常的な給水が不可能であり、給水のほとんどをガナートに頼ってきた地域であった
。この水不足は、しばしば旅行記や地誌などで言及されてきており、町の給水がガナ
ートのみによって行われていたという事実も確認されている¹⁶。

ガズヴィーンの都市部のガナートは、パフラヴィー朝期までに 12~16 本程度残され
ていたことが確認されている（表 1）。そのうち 7 本のガナート（表 1: 1~7）が稼働状
態にあって、残りは廃墟となっていた¹⁷。近代化事業によってガズヴィーンに上下水道

¹⁴ ワジであるため、ごみが堆積しやすく、また冬から春にかけての降雨によって流れが生じた際
に、急激な増水で水害が発生しやすいという問題を抱えていた。ガズヴィーンにおける大きな
水害は、1557/8(A.H.965)年と 1850/1(A.H. 1267)年のものが記録されている（*Mīnūdar*: 874; *Sīm*
ā: 14-15）。

¹⁵ *Sīmā*: 14-18.

¹⁶ 例えば、1046 年 7 月 16 日にガズヴィーンに到着したナーシレ・ホスロウは、「果樹園が多く
あったが、それらは塀も垣根を有しておらず、入るのに何の障害もなかった。私はガズヴィ
ーンを良い町であると思った。町は堅固な壁と、胸壁を持ち、バーザールも良いものだった。し
かし、その水は少なく、地下のカーリーズ【ガナート】に限られていた」（森本（監），2003:
16）と述べている。

また、1647 年にガズヴィーンに滞在したシャルダン「この州のほかの多くの町と同様この
町にも庭園はあまり多くない。土地が砂地で乾いている上、シャー・ルード川の支流の細い川
がたった一本流れているだけで十分な水量が得られぬためだ。そこでこの川の水のほかにケリ
ーズ【ガナート】という地下水路を設け、山から水を引いている。ケリーズで引いてきたこの
水は三十尺(ピエ)の深さの地下水槽【アープ・アンパール（後述）】に貯えられる。ひんやりと
冷たい水だが、味の方はすっきりせず、不味い。この水不足が原因で、夏の間はとくにガズビ
ン【ガズヴィーン】の町の空気が重苦しく、不潔で不健康なものになってしまう。町に流れて
いる水がなく、汚物を流し去る下水溝が設けられていないためだ」（シャルダン，1993: 410）と
述べている。

¹⁷ *Mīnūdar*: 311.

が完備されたのは、1963年であり、それまでガズヴィーンの水利用はこれらのガナートによって賄われていたのである¹⁸。

史料を確認すると、ガズヴィーンで初めてガナートの名称や本数の記録が確認できるのは11世紀後半のことで¹⁹、そこから14世紀までに全体的な変化は少なかったように見受けられる²⁰。ただし、その間にガナートが連結されて数が減ったり²¹、名称の変化²²や、数本の新設²³があったりなど、多少の変化はあったようである。19世紀に確認された10本のガナート²⁴も、20世紀に確認された11本のガナート²⁵も名称などに連続性を感じさせるものが多い。

これらのガナートのうち、ハートゥーニー（表1:2）、ホマルターシュ（表1:5）、テイフリー（表1:7）の3本のガナートは、11世紀からその名称にほとんど変化が起こっていない²⁶。そしてこれらは、水質や水量、そして給水するルートなどから、ガズヴィーンの都市部における最重要のガナートであるといえる。

ガズヴィーンの水利用の特徴は次の2点にまとめられる。まず全ての水源がアルボルズ山脈南麓に位置し、母井戸に直結するガナートを通して中継地の農村まで水が運ばれ、そこで都市用のガナートに連結されて流されるという点²⁷。次に水量が足りな

¹⁸ Lambton (1969): 281; Bosworth (2007): 429.

¹⁹ ゴルリーズによれば、エマーム・ラーフィーイーの『タドウィーン』に、ガズヴィーンは5世紀の初めまで井戸水を利用していましたが、人口の増加による水不足解消のためガナートが設けられたと記されている。そして、これらのガナートの名称を列挙すると、ハムザト・ブン・アルヤサウ（Hamzat b. al-Yasau'）、テイフリーエ（Teifūrīye）、タルハーニーエ（Tarkhānīye）、マターバーディーエ（Matābādīye）、ホマルターシーエ（Khomārtāshīye）、ザラーリーエ（Zarārīye）、セイエディーエ（Seyyedīye）、ハートゥーニーエ（Khātūnīye）、そしてサーヘブ・ハサン（Sāheb Hasan）の9本が確認できる（*Mīnūdar*: 311）。

²⁰ モストウフィーによれば、彼の時代（14世紀まで）にガズヴィーンに存在していたガナートの名称は、テイフリーエ（Teifūrīye）、ルーズバーリー（Rūzbārī, Rūdkhānī）、セイエディー（Seyyedī）、ハートゥーニー（Khātūnī）、ホマルターシー（Khomārtāshī）、ハージェビー（Hājebī）、マレキー（Malekī）の7本であった（*Gozīde*: 779-781）。

²¹ タルハーニーエとマターバーディーエの2本のガナートが、テイフリーエのガナートに連結された（*Gozīde*: 780）。

²² モストウフィーの時代までに、ガナートの名称に次のような変化があった。それは、ザラーリーエがルーズバーリーへ、サーヘブ・ハサンがサーヘビーへ、そして、ホマルターシーエ、セイエディーエ、ハートゥーニーエの語尾についていた・(he)の音が取れて、それぞれホマルターシュ、セイエディー、ハートゥーニーへと変化したというものである。

²³ イル・ハン朝期のガズヴィーンの名家エフテハーリー・バクラー家の一人、エマーモッディーン・ヤフヤー（Malek Seyyed Emām od-Dīn Yahyā Bokhārī）が設立したものと考えられている。モストウフィーは、彼の時代に確認された全てのガナートについてエマーモッディーン・ヤフヤーがその水を流したと記録している（*Gozīde*: 781, *Sīmā*: 1941-1946）。

²⁴ 1885年7月にガズヴィーンに到着したファラーハーニーは、利用可能なガナートとしてアーホンド、ハータム・ベイグ、ハートゥーニー、ハララーブ、ホマルターシュ、シャー、テイフリーの7本のガナートの名前を挙げている。そして、その他に名称不明で利用不可能なガナートが3本あったと記している（Farmayan & Elton, 1990: 21）

²⁵ 連結されているものも含めると計13本のガナートが存在した（利用可能であったガナートが10本、不可能なものが3本）。

²⁶ *Mīnūdar*: 298-309.

²⁷ これは山の帯水層に母井戸を掘ってガナートによって運ぶ場合と、近隣の川から引かれてくる場合とがあった。

表 1: ガズヴィーンのカナート一覧²⁸

	名前	創建者 (創建年: 西暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年: 西暦, A.H.年)	中継井戸の位置	出水口 (mazhar, padfide)	水量 (sang)		給水範囲
						フアラハーニー	ゴルリーズ	
1	アーホンド, ヌーク (Akhond/Nuk/Mollā Khailillah)	Khadīje Khanom ben. Hājī Badī (?)	Ākhond Mollā Khalīr Allāh (?)	Vashte, Zaviyār (北西6km)	bāgh-e Ma'nebiyāt	1	1/4	・アーホンド区 ・マグラウウク区 ・コムラウク区
2	ハートウニー (Khātūnī)	Arsrān Khātūn ben. Soltān Arb Arslān Sejūqī (セルジューク朝初期) Hājī Hosein	・Mirzā Abū'l-Qāsem Tabīb (1883/4, A.H.1301) ・Mirzā Esmā'il Khān Vaktīl or-Ro'āyā (?)	bāgh-e Movattheq (北東4km) Bājīn (北東2km以下)	khiyābān-e 'Adl	1/2	春5, 夏10shīr	・ハンバハリセ区
3	ヒヤパーン (Khiyābān)	Shāh 'Abbās Thānī (サファヴィー朝)	Shāh-zāde Ahmad Mirzā (1875, 1292)	deh-e Ak (北東15km)	meidān-e Rāh Āhan	5	1以下	・ボラーギー区 ・セハ(フ)通り周辺街区
4	ハララーブ (Halā' Ab, Malekī)		ラーフ・クシユク区住民	Zaviyār (北西6km)	bagh-e Sepahsālār	1/2超	春5, 夏1.5~1	・ラーフ・クシユク区
5	ホマールタージュ (Khomārtāsh)	Amīr Zāhid Khomārtāsh (セルジューク朝)	・Āqā Seyyed Mohammad Jazame'i (?) ・Hosein Khān Shehāb ol-Molk (?)	?	Meimūn Qal'e	かつては2 当時は1/2	1/4	・ウースフアホンド・メイダーン区 ・デイーマジ区 ・セツク・シヤリ・ハーン区 ・タッバーガーン区
6	シャハ (Shāh)			Akbar Ābād (北6km)	① hammām-e Shahīd ② hammām-e Sardār ③ Sadiye	荒廃	春4~5, 夏1	①モウラヴィー通り ②コムラウク区, デイーマジ区 ③セツク・シヤリ・ハーン区
7	テフーリー (Teifūrī, Keifūrī)	Mirzā Jal' od-Din Teifūr (セルジューク朝初期)	Hājī Fath 'Alī (?)	Givāth Ābād (北6km)	Ālī Qāpū	1/2	1	・ラーフ・クシユク区
8	アーガ・ジョマール (Āqā Jomālī)			Bāqer Ābād (北東3km) Bājīn (北東6km)	Bāqer Ābād		1/2~1/4	・郊外のガズヴィーン・カーカール庭園 (ホクマールバード)
9	ゴッラール・アーガーシー (Gollār Āqāsi)			Bājīn (北東6km)	bāgh-e Sardār →bāgh-e Khāyeghāh			
10	シェイク・アハマド (Sheikh Ahmad)			Bājīn (北東6km)				
11	ミールザー・アリー・アスガル・ハートウニー (Mirzā Ālī Asqar Khānī)			Zaviyār, Miyān-e Chāl (北東10km)	mahalle-ye Rāh Kushk			

* 起点は都市部

いために町に到る前に、複数のガナートや川などが連結され、増水される場合があるという点である。

それぞれのガナートの給水範囲（図 2）を概観してみると、次のようなことがいえる。まず、西側の街区を流れるアーホンドのガナート（表 1：1）のルートは西から南西へ抜けるもので、ガズヴィーンの中で最も水が不足する地域を給水するものである（図 2：1）。だが、このガナートは、町に入る直前にアーホンドの庭園を通り、出水口（mazhar, padīde）も南部のマアネビアート庭園に位置しているため、通過するアーホンド区、マグラーヴァク区、ゴムラク区に十分な水を供給することができるか疑問が残る。しかし、このガナートは、ガズヴィーンでは珍しく深く掘られており、乾燥による蒸発を防ぐ工夫がしてあった点、古くからこの地区の宗教指導者たちによってワクフ文書が管理されていた点から、重要なガナートであったことが分かる²⁹。

これ以外のガナートは全て北部から都市部に流れ込んでいる。このうち、ハートウーニーのガナートのみ北東部から流れ込んでいる。このガナートは水量が足りないために、郊外でハータム・ベイグのガナートと連結されている（表 1：2, 図 2：2）。しかし、その水質はガズヴィーンで最良のもので、純度が高く体に良い水であるとされ、東側のパンベ・リーセ区全体で利用されていた³⁰。

残りのガナートのうち、ヒヤーバーン（表 1：3）、ハラーループ（表 1：4）、テイフーリー（表 1：7）の 3 本のガナートは、北のダルブ・クシュク門を通過して町に入ってくる。ヒヤーバーンのガナートは宮殿域まで流れた後で 2 本に分かれ、一方は東のボラーギー区、一方は南の果てにあるラー・アーハン（鉄道）広場（midān-e rāh-āhan）まで流れる仕様になっている。しかし、水量自体は少なく、南にまで水が届かないことが多かった（図 2：3）³¹。次に、ハラーループのガナートは、距離は短いものの宮殿域の北側を流れて、そこを通るダルブ・クシュク区全体で利用されている重要なガナートであった（図 2：4）³²。そして、最後のテイフーリーのガナートは、北部から宮殿域を通過して、アーリー・ガープー門の向かいで出水する（図 2：7）。このガナートは、町に至るまでに川を横切って来るために水量が豊富で、春には余剰分が出るほどであ

²⁸ *Mīnūdar*: 297-309; *Sīmā*: 35-39; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 498-503 より筆者作成。ゴルリーズの分類に基づいてまとめている。灰色部分は、パフラヴィー朝期に廃墟となっていたガナート。また、2 と 8 のガナートは途中で連結されているので、まとめて一つのガナートとしている。そして、8~10 のガナートは、いずれも都市部近郊の庭園のためのガナートであって、直接都市部の水利に影響はないものとして分析対象としていない。

²⁹ ゴルリーズによれば、代々アーホンド区のウラマーによって文書が受け継がれていた。彼が当時の所有者の息子から写しを借りて、一部を *Mīnūdar* に掲載しているが、日付や書体などからワクフ文書自体の信憑性に疑問が残るものであることを指摘している（*Mīnūdar*: 299-304）。

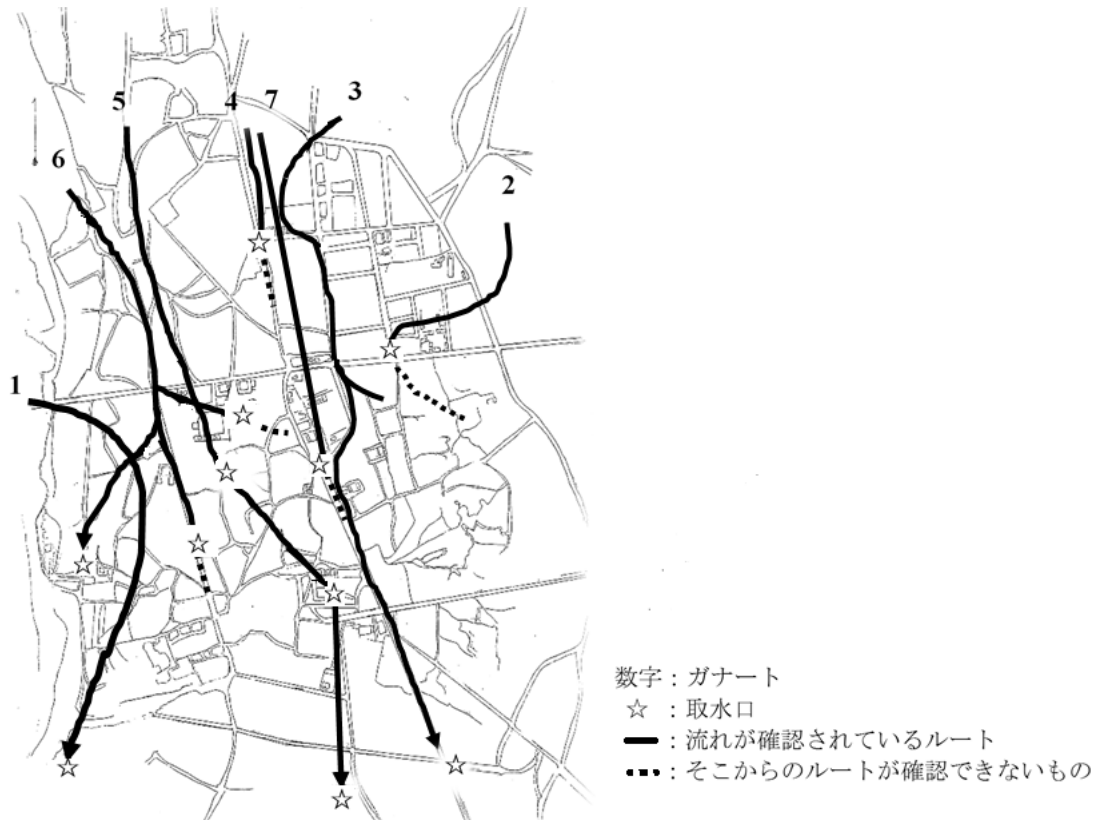
³⁰ *Mīnūdar*: 304-305.

³¹ *Mīnūdar*: 305-306.

³² *Mīnūdar*: 306.

った。この時余った水は、町の東方面の堀（handaq）を流れて郊外の農業用水に使用されていた³³。

図 2：ガズヴィーンのカナートの給水範囲概念図³⁴



そして、北西から流れ込んでくるカナートは、ホマルターシュ（表 1：5）とシャー（表 1：6）の 2 本のカナートで、それぞれグースファンド・メイダーン門とシェイハーバード門を通過して町に入ってくる。このうち、前者は北西の街区から宮殿域の西側と大会衆モスクを通過して、シャーザーデ・ホセイン門の外に位置するメイムーン・ガルエ（Meimūn qal'e）と呼ばれる丘近くで出水する（図 2：5）。このルートから分かるように、このカナートがガズヴィーンにおいて重要なカナートであった。このカナートは、先述のアーホンドのカナートと同様に深く掘られており、階段を 20 段降りなければ水を汲めないほどであったといわれている³⁵。

そして後者も重要なルートを通る。このカナートはモウラヴィー通りを流れ、ラシユト通りに至ると 3 本の支流に分かれる。1 本はそのままモウラヴィー通りを南に向か

³³ しかし、ゴルリーズの時代になると、1 サング程度の量しか流れていなかった（*Mīnūdar*: 307-308）。

³⁴ *Mīnūdar*: 298-309; *Sīmā*: 35-39; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 498-503 より筆者作成。1～7 は表 1 のカナートの通し番号に対応している。

³⁵ *Mīnūdar*: 306-307.

って流れ、バーザールや付属のアーブ・アンバルに給水する。そしてもう 1 本は西側へ流れて西部の街区に給水する。最後の 1 本はサアディーエ（第 4 章で詳述）を通過して宮殿域のあるセッケ・シャリーハーン区を給水するのである（図 1：6）³⁶。

以上から、ガズヴィーンの水利状況は次の 3 点にまとめることができる。まずは、アーホンド以外のガナートが全て北部から都市に流れ込むため、北に行けば行くほど水量が豊かであったということ。そして、ハートゥーニーのガナートのおかげで北東部のパンベ・リーセ区周辺は都市部において最も水質に恵まれた区域になっていたということ。また、ホマールターシュのガナートや、シャアのガナートといった、それ 1 本で政治的、経済的、宗教的に重要な区域を満たすガナートが存在していたということである。

都市の発展は水需要の増加に直結するため、基本的に都市変容とガナートの変化は同義のものとしてとらえられる。先述のテヘランも、ナーセリー期の大改造後に 53 本、パフラヴィー期には 75 本のガナートが増設されており、町の拡大に伴ってガナートの本数が増えていることが分かる。しかし、前述の通り、ガズヴィーンの水利は歴史を通して大きな変化が起きていない。この背景には、ガズヴィーンの水利の都市部のガナートが他の地域と比べて脆弱であるという問題があった³⁷。

ガズヴィーンには、1966 年時点で、平野部と都市部を合わせた南北 35km 東西 25km の範囲内に 86 本のガナートが存在し、その総延長は 254.5km に達していたことが分かっている（図 3）。しかし、これらのガナートの大半は 3 km 以下の短めのものが多く、水量も少なかった。加えて、地層が脆弱であるために地殻変動や老朽化による荒廃が起りやすく、他の地域のガナートよりも短命な上、存続のためにはより多くの補修・修繕を必要とするという特徴も明らかとなっている³⁸。序章で確認したように、ガナートは定期的なメンテナンスのために莫大な費用を必要とする施設である。ガズヴィーンは歴史を通して戦乱に巻き込まれる機会が多く、社会的に不安定な時期が多かったため、例え死活問題であったとはいえ、それだけの費用を定期的に捻出する必要があったのは大きな負担であったと考えられる。恐らく、必要最低限のメンテナンスしか手が回らず、ましてやガナートの新設までには及ばなかったのであろう³⁹。

このような条件下であるにも関わらず、都市北部郊外の農園地帯だけは、アルボルズ山系の水源の恩恵を受けてきたといえる。それは、この土地の土壤に保水力があり、

³⁶ *Mīnūdar*: 307-308.

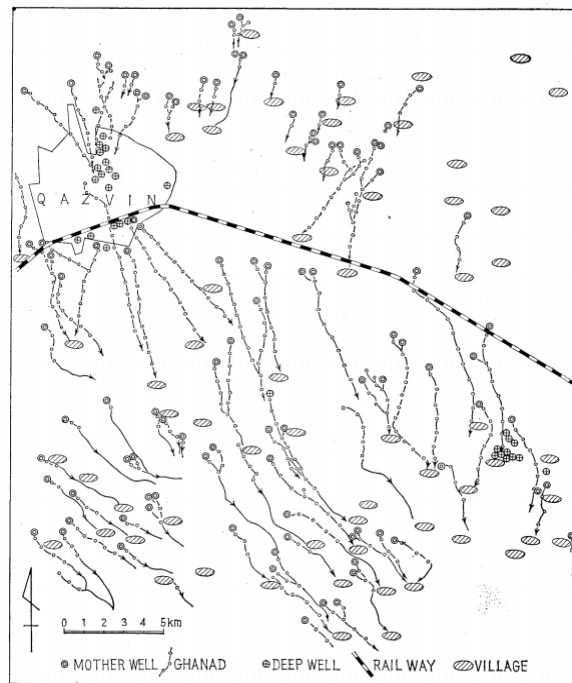
³⁷ ガズヴィーンは、アルボルズ山系の帯水層という豊富な水源を持つものの、都市部ではその恩恵を十分に受けることができずであった。1810 年にガズヴィーンに立ち寄ったモーリアも、複数のガナートが存在するにもかかわらず水不足が深刻な問題であったと述べている（*Morier*, 1818: 202-204）。

³⁸ 森谷（1966）: 498-503. この調査はガズヴィーンの上水道が完備された 3 年後に実施された。

³⁹ 同様の見解はゴルリーズも示しており、ガナートに関する章で水量を記録する際、「これだけの費用を捻出できれば水量をこれだけ増やせるはずだが、行われていない」という言及が見られる（*Mīnūdar*: 297-309）。

良質な土質であったためである。そのため、ガズヴィーンは古くから葡萄・ナッツ類・駱駝等の量産地として知られ、都市部の生命線となってきた。例えばモストウフィーの記録には、これらの農園地帯が1年に1回、氾濫期のみ灌漑をしてその後一切水をやらないこと、良質な牧草地が広がっていたことなどが記されている⁴⁰。また、シャルダンもガズヴィーンでシャーハーニー (shāhānī, 王の葡萄) と呼ばれる葡萄が取れることについて言及する際、夏期の5カ月間この葡萄に水をやらないことを記録している⁴¹。

図 3：ガズヴィーン平野のガナート分布⁴²



しかし、この後背地における広大な農村地帯とその土地の保水力の高さは、一方で都市部を常に水不足で苦しめる要因ともなってきた。なぜならば、ガナートの水が、都市部に到着する前の段階で、その大部分をこの地域で奪われてしまうためである。また、確認したとおり都市内部も南部まで十分に配水が行き届いているわけではなく、通過してくる北部の街区でその水の大半が使われてしまい、南部の街区にはわずかな水しか流れてこないため、北部に人口が集中するという偏りを生み出していたのである。

⁴⁰ 「この町は庭園を多く持ち、一年に一度氾濫期にのみ灌漑を行う。葡萄、アーモンド、ピスタチオが豊富に作られ、灌漑のすぐ後にメロンやスイカの種をまき、一度も水をやらない【中略】牧草地が豊かで特に駱駝の飼料が他の土地より良質である。そのためガズヴィーンの駱駝は他の土地よりも高価である」とある (Le Strange, 1919: 64)。

⁴¹ シャルダン (1993): 410-11.

⁴² 森谷 (1966): 501 (第2図: カズビン市周辺のカナートの分布) より転載。

この、河川による給水の難しさ、ガナートの脆弱性を解消するために、ガズヴィーンではアーブ・アンバールが重用されてきた。パフラヴィー朝期に確認されたガズヴィーンのアーブ・アンバールの総数は 106 軒であり、他都市に比べて数が多い。そのうち、都市部の水利を支える上で重要であったと考えられる物件は 15 軒存在する⁴³（表 2）。序章で確認したように、アーブ・アンバールは水を貯める施設であることから、水利用の多い施設に隣接して設置されるという性質を持っている。そのために、ほとんどのものが、水利用施設に付属する形で建てられ、モスクやマドラサほど華麗な装飾が施されたりはしてこなかった。

例えば古くから多くのアーブ・アンバールが存在するヤズドやナーイーンのものには、ほとんど装飾が見られない。これらの地域では大規模な貯水槽部分と、それに直結するバード・ギールによって、大量の水の鮮度を空気循環で保つシンプルな構造になっている。これら乾燥地帯のアーブ・アンバールの貯水槽は、周りを堅牢な壁で囲まれて、階段は貯水槽と離れた場所に作られることが多い。

一方で、ガズヴィーンのアーブ・アンバールは、基本的な構造は同じであるものの、化粧タイルによる装飾が施された壮麗なものが多い。加えて、碑文を有した美しい正門が設けられ、そこから真っ直ぐな階段を設置し、その途中で踊り場のような少し広めのスペースが設けられている場合もある。

ガズヴィーンのアーブ・アンバールの正門は、玄関口（道路から一段下がった入口部分）を覆うような形で設置されるものと、玄関の前に立てられるものと 2 種類存在する。これは玄関口の横幅によって左右され、前者は玄関部分の横幅が 1.5~3m とそれほど広くないものに作られる形式である。これはアーチ形の正門で、大会衆モスク（表 2：①）、ハーッジ・キャリム（表 2：⑬）、ハキム（表 2：⑨）のアーブ・アンバールがこれにあたる。これらの上部中央には装飾が施された額に碑文が収められている。後者はサルダーレ・ゴムラクのアーブ・アンバール（表 2：⑦）のように、玄関口の横幅が 10m あるような、大型の物件に作られる形式である。形状はアーチ型もしくは弓型で、2 本の太い柱によって支えられている。玄関部分の上部中央の壁には壁龕が作られており、そこには額縁に入った碑文が置かれている。

貯水槽へと続く階段の段数は、貯水槽の深さによって変わってくる。ガズヴィーンのアーブ・アンバールは、貯水槽が深めに作られており、それに沿うような形に階段が設けられているという特徴がある⁴⁴。その理由は、貯水槽をガナートよりも深い位置に

⁴³ *Mīnūdar*: 320-323. ゴルリーズはこれをガズヴィーンの市役所のリストから確認している。ガズヴィーンのアーブ・アンバールは名称に揺らぎがある場合が多く、特定の名前を持たないものも存在する。そのため、本論文では基本的に周辺の住民間での通称を中心にまとめている。ゴルリーズの採用した名称で分析を進めることとする。基本的にゴルリーズの名称と異なるのは、サルダーレのアーブ・アンバールのみである。名称に揺らぎがある場合は、その都度注記する。

⁴⁴ ガズヴィーンの大規模なアーブ・アンバールは平均して階段 37 段ほどを下る構造になっている（表 1：階段の項目を参照）。地下の温度は 4m 以下になれば一定に保たれるという特徴を持つ

造ることで、高低差を利用して水を引き入れるという構造上の特徴に由来すると考えられる。また、取水口が階段の最下部に取り付けられるのは、温度の上昇を防ぐことで新鮮な水を保持するためである。これは、ガズヴィーンのカナートの取水口も同じである。

ガズヴィーンのアーブ・アンバールは、夏に氷を必要としないほど冷たいという特徴があり、その水の冷たさは旅行記などでもしばしば言及されてきた⁴⁵。この冷たさの理由は、貯水槽への給水に関する習慣が関係している。ガズヴィーンのアーブ・アンバールは、個人のものであれワクフのものであれ、冬季に 40 日間カナートからの給水を止めるという習慣がある。特にワクフされたアーブ・アンバールは、氷が張るほど寒い日⁴⁶の夜 10 時以降に水を入れるのを止めるという習慣があった。これによって貯水槽内の水の動きを止め、不純物を沈殿させて水を清潔にするのである。また、この冬の寒さによって水が一端凍るため、その水は夏でも冷たいのだといわれる⁴⁷。

ガズヴィーンの重要なアーブ・アンバールのうち、貯水槽の体積が分かっているのは全部で 9 軒である（表 2：貯水槽の項目を参照）。体積が最も大きいのがサルダレー・ラーフ・レイのアーブ・アンバール（表 1：⑥）で、約 4,900 m³の体積を誇っており、約 48 段の階段が設けられている。そして、これら 9 軒の貯水槽の体積の和は 19,551 m³となる。特に重要なアーブ・アンバールは貯水槽が大きかったので、ここから全体の貯水量を概算することができない。しかし、カナートを流れる水の他に、常に 20,000 m³近くの水が確保されていたということは、ガズヴィーンの水供給の状況を好転させたことは間違いない。つまり、この時代に、ガズヴィーンはアーブ・アンバールの増加によって水不足の状況を大きく改善させたものと考えられるのである。

ガズヴィーンのアーブ・アンバールのうち、重要なものとされる 15 棟は、創建年が不明である 3 棟を除いて、サファヴィー朝の後期からガージャール朝の中期にかかる 1680 年代～1840 年代の間に建設されていることが分かる。詳しく見ていくと、大会衆モスクのアーブ・アンバール（表 2：①）の創建はサファヴィー朝第 8 代ソレイマーン 1 世（在位：1666-94 年）の時代である。これは記録が残されている最古のアーブ・アンバールである。そして、ハーン（表 2：②）とハーッジー・モッラー・アーガー（表 2：③）のアーブ・アンバールはザンド朝期の創建である。そして、残りのアーブ・アンバールは全てガージャール朝期に創建されたものである。

ているので、冬に取り込まれた水の冷たさを保持するのに適している。また、貯水槽上部にバード・ギールが作られたことで、アーブ・アンバール内の空気を常に循環されるようになっており、水の新鮮さが保たれていた。

⁴⁵ 例えば、シャルダン（1993）：410 など。

⁴⁶ ほとんどが冬至の夜（shab-e yaldā）を目安としている。

⁴⁷ この時、カナートの流水を増やして、水路の底の汚れや堆積物が一気に押し流すという、カナートの掃除の効果もある（Mīnūdar: 321）。

表 2：ガズヴィーンの重要なアーブ・アンバール⁴⁸

	名前	創建者 (創建年：西暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年：西暦, A.H.年)	碑文	質	階段	貯水槽 (m)	備考
①	大会衆モスク/ハーッジ・メフディー (masjed jāme'/ Hājji Mehdi)	'Alī Khān Omarā'-ye Lashkar (1682/3, 1093)	Hājji Mehdi (?)	○			3,750	・大会衆モスクの北側、正面入り口 (jeloukhān) の向かい ・市役所のリストにはHājji Mehdiの名で登録
②	ハーン (Khān)	Mollā Verdī Khān (1763/4, 1177)	Khān (創建者の子孫) (1835/6, 1251)	○	△			・グースファンド・メイダーン区 ・同名のモスク・マドラサに隣接 ・故 Āqā Sa'īd Mohammad Jazameīの墓の近く
③	ハーッジ・モッラー・アーガー (Hājji Mollā Āqā)	Hājji Hosein (1791/2, 1206)		○	○			・ラシュト通り ・Eltefatyeのマドラサの向かい ・ハーッジ・モッラー・アーガーのモスクと連結
④	パンジェ・アリー (Panjeh 'Alī)	Hājji Ramezān (1809/10, 1224)		○				・パンジェ・アリーのモスクとマクタブと連結
⑤	ラーラー/サブゼ・マスジド (Lālū/ Sabze masjed)	Hājji Mohammad (1809/10, 1224)		○	○			・ラシュト通りの北、サアディー通り ・大きさは○冷たさは◎ (歯にしみるほど)
⑥	サルダール/大/ラーフ・レイ (Sardār/ Sardār-e bozorg/ Sardār-e Rāh Ray)	Mohammad Hasan Khān Sardār Mohammad Hosein Khān Sardār (1812/3, 1227)	Shahrdār 1回目(1934/5, A.P.1313) 2回目(1956/7, A.P.1335)	×		48	4,900	・ラーフ・レイ区、セパフ通りの南端、東側に位置 ・長さ16ザル、幅16ザル、深さ16ザル ・未完成 (塗装、外壁、碑文がない) ・水は非常に冷たい
⑦	サルダール/小/ゴムラーク (Sardār/ Sardār-e kūchek/ Sardār-e Qomlāq)	Mohammad Hasan Khān Sardār Mohammad Hosein Khān Sardār (1813/4, 1229)		○	◎	37	2,090	・ゴムラーク区の南端、Soltān Seyyed Mohammadの墓とマドラサ ・Shīr4つ、Bādgīr (Bokhār kesh) 4本、ドーム4基 ・外観は化粧タイルをはったレンガで装飾
⑧	ハーッジ・バーバー・シーシエガル/ハティーブ (Hājji Bābā Shīshegar/ Khatībhā)	Hājji Bābā (1819/20, 1235)		○				・ゴムラーク区、M'asūmバーザルチェの後ろ ・市役所のリストにはKhatībhāの名で登録 (Khatībhāの住宅の近くにあったため)
⑨	ハキーム (Hakīmihā)	Hājji Mirzā Āqā Hakīm (1828/9, 1244)		○	◎	36		・ラーフ・チャマン区、タンヌールサーザン小道 ・碑文の詩をヘラートの詩人Jouharīが書いた
⑩	ザルガル・クーチェ (Zargar kūche)	Hājji Fath 'Alī (1829/30, 1245)		○	△			・北にHalīme Hātūn、東にモスク、西に浴場の釜戸が隣接
⑪	シーシエガル/シーシエガル・ハーネ (Shīshegar/ Shīshegar Khāne)	Hājji Hasan (1838/9, 1254)		○	○			・ラーフ・クシュク区 ・シーシエガル・モスクと連結
⑫	ハーッジ・カーゼム (Hājji Kāzem)	Hājji Kāzem Kūrepaz 協力: Hājji Esmā'īl (1840/1, 1256)		○	◎	40	1,950	・shīr2つ、bokhārkeshi4本、外側から化粧タイルで装飾 ・マグラヴアク門、タプリズ門の近く ・周辺の農民、庭園の管理人も利用する ・マグラヴアクは最も水不足が顕著な街区
⑬	ハーッジ・キヤリーム (Hājji Karīm)	?	Hājji Karīm (1908/9, 1326)	○	△		1,944	・ラーフ・クシュク区 ・Āqā Majīdモスクと公衆浴場に隣接 ・Āqā Majīd浴場の向かい、同名のモスクと連結 ・碑文によるとHājji Karīm 'Allāfが修繕した
⑭	ジャザメイ (Jazameī)	?				40		・セック・シャリー・ハーン区 ・Qūsheh浴場の近く ・名称はĀqā Seyyed Mohammad Jazameīが近所に住んでいた ことから
⑮	ザナーネ・バーザル (Zanāne Bāzār)	?						・同名のバーザルとShāモスクの西側の戸に隣接 ・バーザルの商人たちが利用した ・ガズヴィーンのエモシェドの長、Āyatollāh Hājji Mollā 'Abd ol-Wahhābの建造物の一部 ・水は極めて冷たい

このうち、ファトフ・アリー期に建てられたものは全部で 7 軒である。創建年代順に名称を列挙すると、パンジェ・アリー (表 2：④)、ラーラー (表 2：⑤)⁴⁹、サルダール・ラーフ・レイ (表 2：⑥)⁵⁰、サルダール・ゴムラーク (表 2：⑦)⁵¹、ハーッジ

⁴⁸ *Mīnūdar*: 311-322; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 409-418; *Golāmhossein* (2003) より筆者作成。創建年代順となっており、創建年代が不明のものは下にまとめてある。

⁴⁹ 別名サブゼ・モスクのアーブ・アンバール (*āb anbār-e Sabze masjed*)。

⁵⁰ 正式にはサルダールのアーブ・アンバール (*āb anbār-e Sardār*) であるが、同名のアーブ・アンバールと区別するために、現地では、街区名を冠したサルダール・ラーフ・レイのアーブ・アンバール (ラーフ・レイ区のサルダールのアーブ・アンバールの意)、もしくはサルダールの大アーブ・アンバール (*āb anbār-e Sardār-e bozorg*) と呼びならわされている。本論文では、位置関係を重視するため、前者の呼称で統一している。

⁵¹ サルダール・ラーフ・レイのアーブ・アンバールと同じ理由から、サルダール・ゴムラーク (ゴムラーク区のサルダールのアーブ・アンバールの意) で呼称を統一する。現地では、この他に、サルダールの小アーブ・アンバール (*āb anbār-e Sardār-e kūchek*) と呼ばれている。

・バーバー（表 2：⑧）⁵²、ハキーム（表 2：⑨）、ザルギヤル・クーチェ（表 2：⑩）となる。そして、モハンマド期に建造されたものは、シーシェギヤル（表 2：⑪）⁵³とハーッジー・カーゼム（表 2：⑫）のアーブ・アンバールの 2 軒である。

以上から、ガズヴィーンの都市部は短命なガナートからもたらされる少量の水によって存続してきた都市であるということが出来る。そして、地理的状況からまとめられるガズヴィーンの特徴は次の 4 点である。まずは給水のほとんどを短命なガナートに頼っていた点。次に豊富な地下水源と郊外の保水力の高い庭園地帯を持つ一方で、都市部は常に水不足に悩まされる土地柄であったという点。そのため、ガズヴィーンが大規模な発展を遂げうるに足る水の供給を確立できなかった点。そして、その水利の状態によって、都市部の南北で人口差があった点である。では、この地理的特徴を背景に、ガズヴィーンの都市部はどのように形成されてきたのか。次項でまとめていきたい。

第 2 項：都市形成史

(1) 興りから遷都まで

ここからは、ガズヴィーンの都市形成史を概観する。ガズヴィーンの興りは古く、その平野部に初めて町が出現したのはササン朝（226-651 年）第 2 代君主シャープール 1 世（在位 241-272 年）の時代である。その町は現在の都市部よりも北側にある、ハル川とアブハル川に囲まれた場所に位置していたといわれる。その後、第 10 代君主のシャープール 2 世（在位 309-379 年）の時代に、現在の大会衆モスク近くに城塞（arg）が築かれて中心地が形成され、現在まで続く都市ガズヴィーンの起源となった（図 4：左側）⁵⁴。

この時期、ガズヴィーンの城塞はカシュリーンもしくはカシュウィーン（Kashrīn, Kashwīn, “監視の境界”）とも呼ばれ、アルボルズ山系の山々を挟み、異民族ダイラムの民⁵⁵からペルシアの民を守る前線基地として機能してきた⁵⁶。ガズヴィーンがいつ頃か

⁵² 正式にはガラス吹き工のハーッジー・バーバーのアーブ・アンバール（āb anbār-e Hājji Bābā-ye Shīshegar）であるが、ガラス吹き工の部分は省略されて呼ばれることが多いため、本論文でも省略する。説教者の住居の傍に立地していたため、市役所のリストには説教者のアーブ・アンバール（āb anbār-e Khatībhā）の名で登録されていた。

⁵³ この名称は修繕者からとられた名前であり、それ以前は別の名前と呼ばれていたようであるが、後世に伝わっていない。

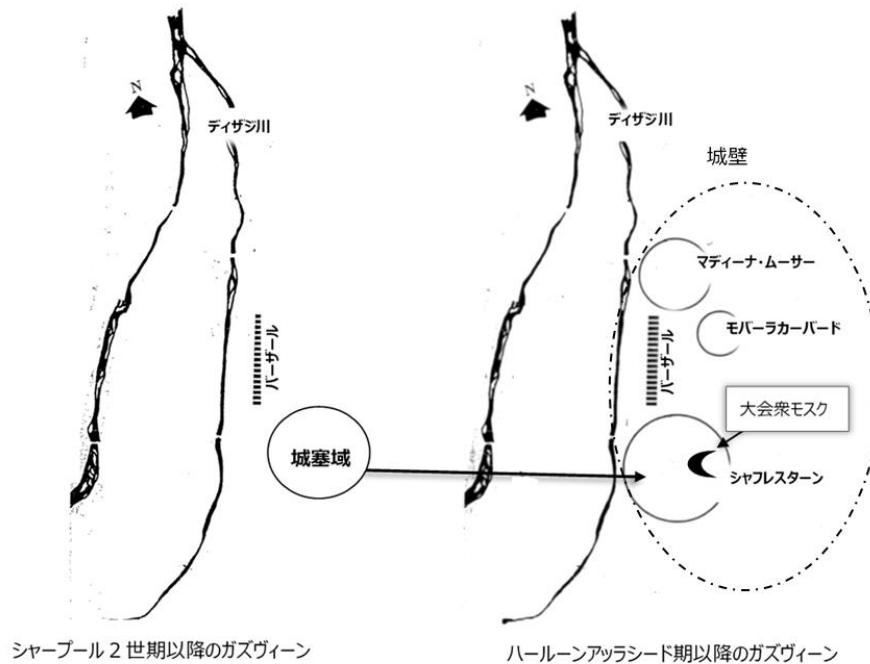
⁵⁴ Le Strange (1919): 62.

⁵⁵ ダイラム人（dailamiyān）はカスピ海南西の山岳地帯の部族。彼らの居住地域を歴史的ダイラムといい、その範囲は、北はギーラーン州のスイヤーキャル、南はシャー・ルード川、西はセフィードルード川、東はマーザンダラーン州に接するといわれる。

⁵⁶ 花田(1995): 43 ; Yāqūt (1979): 342.

ら都市 (shahr) と呼ばれるようになったのかは曖昧であるが、その前身が形成されたのがこの時期であったことだけは確かである。

図 4：ササン朝からアッバース朝期までのガズヴィーン概念図⁵⁷



ガズヴィーンは 644 年に、クーファ総督の命を受けたバラール・ブン・アージュブ (Bar ā b. ‘Āzib) の東征を契機にイスラームに改宗した。この時、アラブ系ムスリム軍人が分与された土地を整備しガナートを創建して地主となって定住している⁵⁸。その後、ガズヴィーンはイスラーム勢力のイラン方面征服の重要な前線基地となり、城塞が更に補強されて、戦士の為の諸施設が整えられるなど軍営都市 (ミスル) 化していった⁵⁹。

続くアッバース朝期 (750-1258 年) にも、辺境の地としての重要性は受け継がれ、多くの宮廷の重臣たちが統治者としてガズヴィーンに派遣されて村や町、砦を築いた。この期間にガズヴィーンにおいて最も大きな変化をもたらしたのは、アッバース朝第 5 代君主のハーロン・アッラシード (在位 786-809 年) である。彼は 807 年のホラーサーン (Khorāsān) 遠征の途上にガズヴィーンに立ち寄り、大会衆モスクの建造を命じた。大会衆モスクは金曜礼拝のための特別なモスクという意味合いだけでなく、イスラーム都市において人々が集まり心のよりどころとする中心としての役割を負っている。更にそのモスクは元々ガズヴィーンで信仰を集めていたゾロアスター教寺院の

⁵⁷ Amirshahi (1981): 33; Dabīrsiyāqī (A.P.1381) 卷末資料より筆者作成。

⁵⁸ Yāqūt (1979): 343.

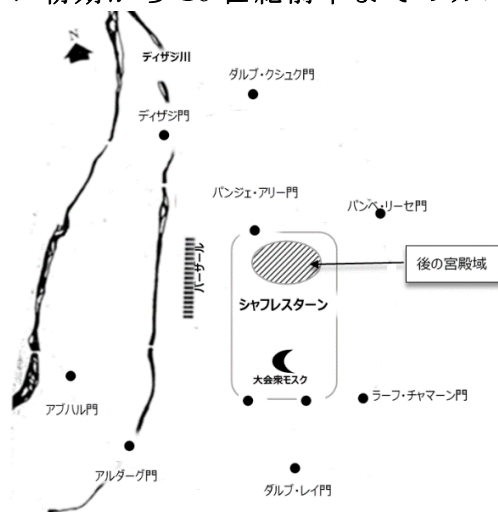
⁵⁹ 花田(1995): 47.

上部を取り壊し、その基礎の上に増築されたものである⁶⁰。つまり、この大会衆モスクの建造は、もともと求心力のあった場所を利用して新しい中心部を形成したことを意味していた。

この時期、ガズヴィーンには3つの町があった。それは、第4代君主のムーサー・アル・ハーディー（在位785-786）が建設したマディーナ・ムーサー（*madīna Mūsā*）、同時期の792/3（A.H.176）年に従者のモバーラク（*Mobārak*）が建設したモバーラカーバード（*Mobārak Ābād*）、そしてガズヴィーン城塞（*arg-e Qazvīn*）の3か所である⁶¹。アッラシード王は、大会衆モスクの建設の後、この3つの町を囲む城壁の建設を命じた。城壁は、3つの町と、ディザジ川沿いのバーザールを囲む形で、868（A.H.254）年に完成した（図4：右側）。これによって3つの町が統合され、現在へ続く都市の基礎が形成されたのである。この一番南側にあった町が、旧城塞域であり、大会衆モスクが建てられた場所である。この時から、この区域はシャフレスターン（*shahrestān*）、すなわち町の中心として機能するようになっていた。そして、バーザールは、その後、現在まで続くガズヴィーンのバーザールとなったのである。

ガズヴィーンの辺境の地としての役割はイル・ハン朝期（1258-1335年）まで続いた。この間、様々な王朝の支配や影響を受け、カスピ海地方のシーア派勢力やアラムート地方に拠点を置いたニザール派といった諸勢力へ対抗する為の前線基地として機能してきた。しかし、イル・ハン朝期に同王朝の支配領域がカスピ海西岸地域まで及んだことから辺境の地としての価値は次第に失われ、同王朝の滅亡と共にしばらく歴史の表舞台から遠ざかることとなったのである。

図5：イル・ハン朝期から16世紀前半までのガズヴィーン概念図⁶²



⁶⁰ *Mīnūdar*: 516.

⁶¹ Yāqūt(1979): 242-243; Le Strange(1919): 62-63; *Mīnūdar*: 259; Lambton(1995): 858-859.

⁶² Amirshahi (1981): 33; Dabīrsiyāqī (A.P.1381) 卷末資料より筆者作成。この時期は既に市壁が荒廃しているため、都市域を確認することができない。

第2節：サファヴィー朝期の都市変容

第1項：サファヴィー朝期の都市構成

ここから、具体的にサファヴィー朝期（1501-1736年）の都市構成についてみてきたい。ガズヴィーンは、初代君主イスマーイール1世（在位1501-1524年）の時代に、オスマン帝国との境域であるアゼルバイジャン地方と、ウズベク族との境域であるホラーサーン地方を結ぶ街道の戦略的な重要地として価値を見出された為である。そして第2代君主タフマースブ1世（在位1524-1576年）によって1544年に首都と定められたことで、人口が流入し大いに繁栄した⁶³。この時の人口増加に伴って北部、西部、東部に都市域が拡大し、宮殿域（arg）が整備された。そして、首都を表す称号であるダーロツサルタネ（Dar ol-Saltane）が冠せられたのである。

都市形成の観点からみると、サファヴィー朝期はガズヴィーンにとって、様々な都市機能が整備され、現在に続く基礎が形成された時代である。ここで、この時期に整備され、その後の都市構成に影響を与えた建造物を概観したい。まず宗教関連施設については、ハンダグバール区のアッラー・モスク（masjed-e Allāh）と宮殿域の西側にあったパンジェ・アリー・モスク（masjed-e Panje ‘Alī, 図6：⑧）の2軒が創建されている。重要なのは後者のモスクである。それは、このモスクが、シャー・タフマースブ1世による宮殿域開発にあわせて、後宮の女性たちのために創建されたものであるからである。その他、大会衆モスク（図6：11）をはじめ、ガズヴィーンの各モスクの修繕などが行われた⁶⁴。

また、サファヴィー朝期の創建であると確認できるマドラサは、大会衆モスクの向かいに建てられたハリーフエ・ソルターンのマドラサ（madrāse-ye Khalīfe Soltān, 図6：13）とパンジェ・アリーのマドラサ（masdrāse-ye Panje ‘Alī, 図6：⑧）の2軒である。前者は大会衆モスクの修繕に伴って周辺の店舗やアーケードが再整備された際に建てられたもので、目抜き通りであったセパフ通りに面した場所に建てられた⁶⁵。後者は、同名のモスクの創建に併せて建てられたものであるため、この時期にパンジェ・アリーの区画が開発されていたことが分かる⁶⁶。

また、サファヴィー朝期には、王朝の母体であるサファヴィー教団の信条を普及するために、シーア派関連施設が増加する傾向にある。そのため、伝統的な宗教関連施設を改築し、再構成する事業が多く行われた⁶⁷。サファヴィー朝発展の足掛かりとな

⁶³ ガズヴィーンへの遷都の年代及び実施過程は諸説あるが、本研究では都市の変化に着目していることから、王宮「新宮殿」が完成する1558（A.H.966）年も考慮に入れた上で、1544/45（A.H.951）年、1555（A.H.962）年、1558（A.H.966）年の3段階14年間をかけた段階的遷都であったという平野（1997）の主張に依拠し、1544年を遷都開始年として議論している。

⁶⁴ *Mīnūdar*: 588-598; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 576-611.

⁶⁵ シャルダン（1993）: 409.

⁶⁶ *Mīnūdar*: 599-619; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 419-437, 565-575.

⁶⁷ Hillenbrand (2011).

ったガズヴィーンにおいてもこのケースは見る事ができる。代表的なのはエルテフアーティーエのマドラサ (madrāse-ye Eltefātīye, 図 6 : 14) とペイガンバリーエのマドラサ (madrāse-ye Peighambarīye, 図 6 : ⑧) の改築である。前者はイル・ハン朝期に起源があるとされる有名なマドラサで、ラーフ・クシュク区の重要な宗教空間の一つであった。これがサファヴィー朝期の北部の街区開発にあわせて改築された⁶⁸。そして、後者は、古くからガズヴィーンを訪れたユダヤ教の聖人の墓廟として、有名な巡礼地の一つであった。しかし、この場所は宮殿域の西域に隣接しており、斜向かいにはパンジェ・アリー Mosk とマドラサが新設されるという立地にあつたため、改築の対象となった。この時、墓廟の南側にマドラサが建てられ、現在まで続く基礎が構築されている⁶⁹。

また、シャーザーデ・ホセイン廟 (ārāmgāh-e Hosein b. ‘Alī Mūsā or-Rezā, Shāhzād e Hosein) もこの時期に大掛かりな改築が行われ、現在へ続く基礎が築かれた。この聖者廟は、イル・ハン朝期にその起源を持つといわれているが、現存する建造物と敷地はタフマースブ 1 世が行った改築工事を基礎とするため、以前のものとはほぼ別の形となっている⁷⁰。

同様に、サファヴィー朝期に特徴的であったのが、シーア派の宗教行事の場であるテキエやホセイニーエが創建され始めたことである。これらの建築が盛んになるのは王朝が滅びて以降の時代になるが、サファヴィー朝期にも既に何軒かタアズィーエ上演の場が設けられていたことが分かっている。タアズィーエに発展が見られる 1870 年代以降、テキエとホセイニーエはイラン北部のカスピ海に近い地域を中心に広がりを見せるようになってきている⁷¹。

ガズヴィーンの子テキエは全部で 14 軒存在するが⁷²、このうち、宮殿域のナーデリー庭内に建てられた王立の子テキエ (tekīye-ye Doulat, 図 6 : ⑥) のみがアッバース 2 世期の創建であることが確認できる⁷³。それ以外の子テキエに関しては、創建年代が明らかでないので、いつ頃創建されたものであるのかは確認することができない。だが、その名称からサアドッサルタネの子テキエ (tekīye-ye Sa‘d os-Saltane) がこの時代のものであるということは分かる⁷⁴。また、モハンマド・ハーン・ベイグの子テキエ (tekīye-ye M ohammad Khān Beig) は、ここで奉納 (nazr) をしたり転がったりすると腰痛などの軽

⁶⁸ *Mīnūdar*: 600-602.

⁶⁹ *Mīnūdar*: 602-604.

⁷⁰ *Mīnūdar*: 689-704; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 437-433; また、このシャーザーデ・ホセイン廟の作りは、サファヴィー朝からガージャール朝にかけてのイラン・シーア派の聖堂建築の特徴を表すものであるといわれる。特に木造の柱列の上に屋根をかけた玄関口と、そこに施された彩釉タイルによる花や壺などの絵、煌びやかなムカルナスとそこに鑲められた鏡細工がその典型例である (スチールラン, 1987: 脚注 124; Hillenbrand, 2011)。

⁷¹ Calmard (2012); Chelkowski (2009).

⁷² 参考資料 4 (4) 参照。

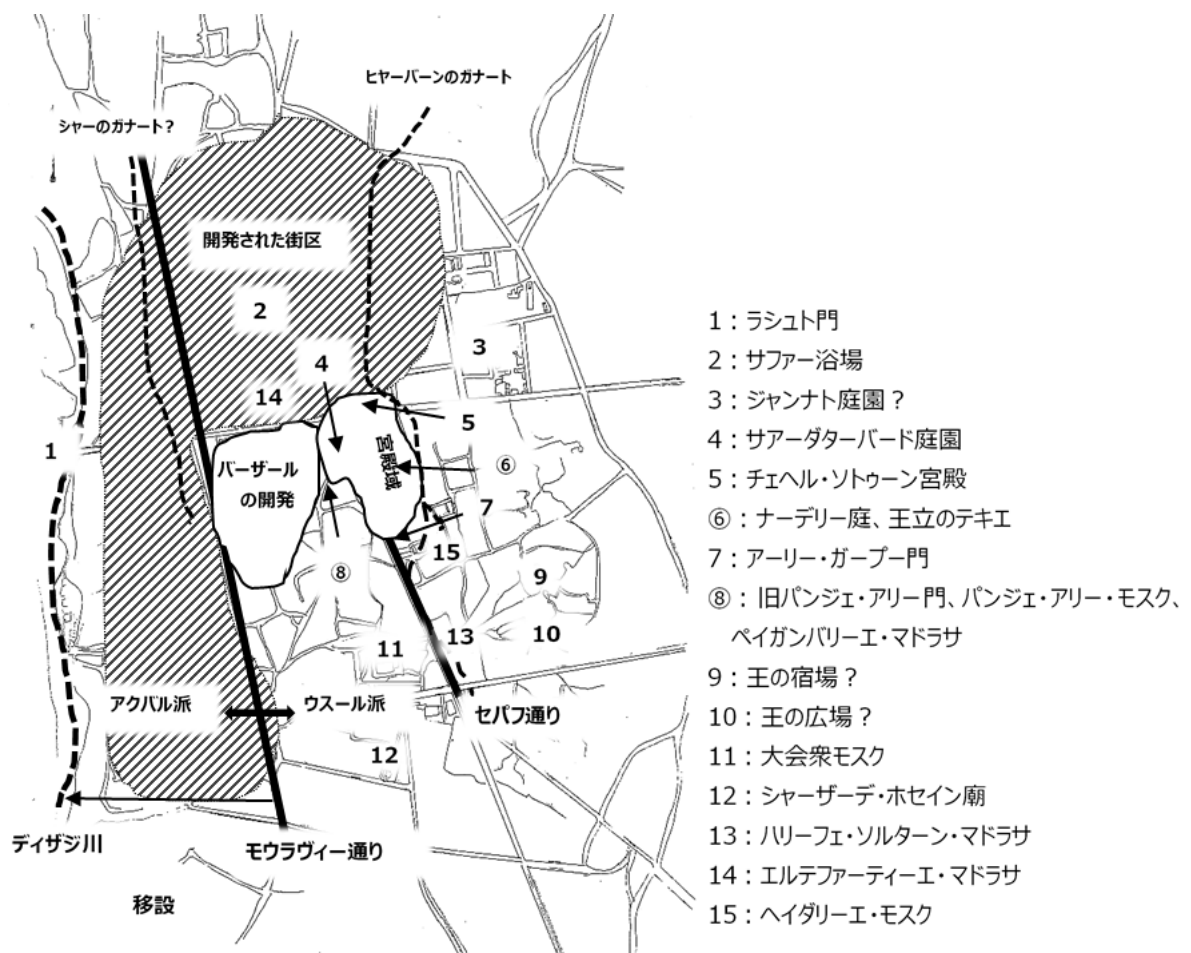
⁷³ *Mīnūdar*: 620; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 451-452.

⁷⁴ サアドッサルタネは、ナーセリー期のガズヴィーン知事。第 4 章にて後述。

い病気が治るなどのご利益があるといわれていることから⁷⁵、元々巡礼の対象である墓廟のようなものを改築して、あるいはその一区画を利用して建てられたものではないかと考えられる。

そして、ホセイニーエも 11 軒建てられていたことが分かっているが、創建年代が分かるものは 2 軒のみである⁷⁶。そのうちサファヴィー朝期の創建であると確認できるのは 1 軒で、ラシュト通り近くに建てられた謁見の間のホセイニーエ (hoseiniye-ye divānkhāne) と呼ばれるものである。これは、宮殿域の整備が行われた際に建造された謁見の間を改装したものである⁷⁷。

図 6：サファヴィー朝期のガズヴィーン概念図⁷⁸



また、シーア派の隆盛とガズヴィーンの都市構成が絡んだ事例としては、法解釈について町が 2 分されるという事態が起こっている。18 世紀のガズヴィーンはシーア派

⁷⁵ *Mīnūdar*: 620.

⁷⁶ 参考資料 4 (5) 参照。

⁷⁷ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 455-457.

⁷⁸ 筆者作成。

の法学派 (mazhab) の一つであるジャアファル法学派 (figh-e Ja'farī) が盛んとなり、その派閥であるウスール派 (usūlī) とアクバル派 (akbarī) の論争によって町が分断されていた。モウラヴィー通りを挟んで東がウスール派、西がアクバル派であったといわれる (図 6: モウラヴィー通り周辺)⁷⁹。

町を二分した現象としてもう 1 点特徴的であったのが、ヘイダリー (Heydari) とネエマティー (Ne'matī) と呼ばれる街区の連合組織によって町を二分する派閥争いである⁸⁰。これは、サファヴィー朝期に栄えた町に見られる現象で、ガズヴィーンに関しては、タフマースブ 1 世治下のガズヴィーンを訪れたイタリア人旅行者のアレッサンドリの記録が残されている。それによれば町の中が 4 区と 5 区に分かれ、それぞれヘイダリーとネエマティーの派閥となって争っていたといわれる⁸¹。しかし、どの街区がどちらの派閥に属していたのかまでは言及されておらず、この分裂がいつまで続いていたのかも確認することはできない。ただ、宮殿域の東側にあたるボラーギー区にヘイダリーエの名を冠したモスク (masjed-e Heidariye, 図 6: 15) が建てられているため、この周辺がヘイダリー派だったのではないかと推測できる⁸²。

以上から、サファヴィー朝期の宗教的建造物に関する事業は、それまでのガズヴィーンに存在していたモスク、マドラサ、墓廟もしくは巡礼地のような場を、変容させるタイプのものが多かったと考えられる。特に、学問・教育の場の変容、シーア派の祭祀の場の出現は、サファヴィー朝のシーア派国教化へ向けての動きを示すものとして象徴的な出来事であったといえる。

続いて、水利施設に関しては、ディマジ川の移設が大きな事業の一つとして挙げられる。これは、都市域の西側への拡張に伴って行われた工事である。この工事によって

⁷⁹ Momen (2003): 319.

⁸⁰ 16 世紀以降、イランの諸都市において、しばしば市内の街区がこの 2 派に分かれて争っていたという記録が残されている。元は 2 つの対立するスーフィー教団の争いから派生したもので、それぞれの名はスーフィー教団サファヴィーヤ (Safavīya) の聖者ソルターン・ハイダル (Soltān Haydar, 1221 年没) と、同じくスーフィー教団の聖者ネエマトラー (Nūr od-Dīn Ne'mat-ol lāh b. 'Abd-ollāh, 1431 年没) に由来する。

この争いは、しばしば旅行記などに散見される。例えば 16 世紀タブリーズでは 4 街区と 5 街区に分かれて 30 年以上争いを繰り返していたとある (Gray, 1873: 224)。また、17 世紀に同地を訪れたシャルダンもこの争いに触れており、「ペルシアのどの町でも大抵そうであるように」9 つの街区が二分して争っていたと記しており、中世末期のイタリアにおけるゲルフ党とギベリン党の争いと同じであると指摘している (シャルダン, 1993: 376)。また、エスファハーンやシーラーズなどでも同様の記録が残る (坂本, 1983: 26)。両派閥の争いは特に祝祭の日には更に激しくなり、特にアーシュラー ('āshurā) の日には最高潮に達し、しばしば負傷者や死亡者が出る暴力沙汰が起こった。街区を元にして都市が二分されるという現象は中東の他の地域では見られないイランの都市ならではの特徴であるといわれる。またこの争いは、サファヴィー朝期に栄えた町に多く見られる現象と言われており、19 世紀以降に発展したテヘランや、イランの東部地域ではあまり見られない (板垣他, 1992: 600; Perry, 2003)。しかし、それが何故都市の派閥争いに結びついたのかについては明確な理由は明らかにされていない。

⁸¹ Gray (1873): 224.

⁸² ガズヴィーンの中でも古いモスクで、創建は 8 世紀頃と伝えられる。1119 年の地震後にホマールターシュによって修繕されたという記録が残されている。

元の流れがあった場所は埋め立てられ、モウラヴィー通りとなった（図 6）⁸³。この工事によって、ガズヴィーンの都市部を流れる川は消滅し、以後、町の給水は全てガナートによって賄われることとなっている。

都市部の拡大に伴ってガナートの再編が行われたであろうことは想像に難くない。しかし、記録が残されていないため、詳細を明らかにすることはできない。この時期に新設が確認できるのは、ヒヤーバーンのガナートである⁸⁴。これは、アッバース 2 世（在位：1642-1666 年）によって新設されたものである。このガナートは、先述のとおり、ガズヴィーンを中心であるセパフ通り周辺とボラーギー区を給水するために創建されたものである。これまでボラーギー区は、セルジューク朝期からの伝統があるティフリーのガナートによって給水されていたが、宮殿域が出現したことによって増加した水需要を賄うために創設されたものであると考えられる。

加えてもう 1 軒、創建年代の確認されていないガナートのうち、シャーのガナートがこの時期の創建ではないかと考えられる。理由は次の 2 点ある。1 点目は、その名称である。ガズヴィーンにおいて「シャー」という呼称のついている建造物は、タフマースブ 1 世期に創建された建造物であることが多い。例えば、シャー商館（*sarā-ye Shāh / khān-e Shāh Tahmāsb*）やシャー浴場（*hammām-e Shāh Tahmāsb-e kohne/ Amīr Gūne Khān/ Qajar*）などがそれにあたる。もう 1 点は、このガナートがディマジ川跡に建てられたモウラヴィー通り、そしてこの時期に開発されたゴムラク区、ディマジ区、セッケ・シャリーハーン区の各地域を給水していたためである。砂漠地域の都市において、居住区の開発は水の確保が絶対条件となる。大幅に拡大した西側の街区の水需要を賄いきれないディマジ川を排して、その跡に恒常的な給水を可能とするガナートを引いたと考えるのが自然であろう。

そして、1682/3（A.H.1093）年には、ガズヴィーンで記録が残る最古のアーブ・アンバールが、大会衆モスクの北東部、正門の横に創建されている（図 6：11 の北東部）⁸⁵。しかし、1647 年に当地を訪れていたシャルダンが既に地下諸水槽について言及していることから⁸⁶、既にアッバース 2 世の治世までには、既にガズヴィーンの水利用においてアーブ・アンバールが重要な地位を占めていたことが分かる。

以上から、サファヴィー朝期のガズヴィーンの水利用施設は、首都になったことで給水システムの再編が行われ、新設や改築が行われていたことが分かった。また、この時期から、ガズヴィーンにおいてアーブ・アンバールの存在が確認され始めている点も重要である。この現象は、遷都による急激な人口の増加と都市域の拡大にあわせて、新

⁸³ *Sīmā*: 14-16; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 467.

⁸⁴ *Mīnūdar*: 497-310; *Sīmā*: 36-37; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 498-503.

⁸⁵ *Mīnūdar*: 312-313.

⁸⁶ シャルダン (1993): 410.

たな水利システムが必要とされていたことを示している。全体として、開発が進んだ西と北の街区及び宮殿域を給水するための事業があった点が特徴的であろう。

また、商業関連施設に関しては、この時期にガズヴィーンの伝統的なバーザールの再編が行われた点が重要であった。現在に続くガズヴィーンのバーザールの構成は、この時期に行われたものであるといわれる。確認のとれるもので、ガズヴィーンには、パフラヴィー朝期にまでに 44 のバーザールと 21 のバーザールチェ、11 のアーケード、82 の商館、66 の浴場が建てられていたことが分かっている⁸⁷。そして、これらの基礎のほとんどはサファヴィー朝期に築かれたものであった。それまでのガズヴィーンの伝統的なバーザールは、ラシュト通りから南方向に縦長に伸びる形で発達し、特に重要な部分は南側に集中していた。そしてこの時期から、ガズヴィーンのバーザールが北東方面へ拡張を始めたものと考えられている⁸⁸。また、大会衆モスクの修繕に伴って、セパフ通りを挟んで向かいにあるバーザールチェやアーケードなども再整備されている。

第 2 項：サファヴィー朝期の宮殿域

首都選定によって、宮殿の整備は特に重要な事業となった。そして、アッバース 1 世の時代までに建造物の増築や修繕が繰り返され、宮殿域が構成されたのである（図 7）。シャルダンによれば、アッバース 2 世の時代においてもなお、宮殿域は庭園が美しく整備されており、チェス盤のような市松模様で設計されていた⁸⁹。そして、この宮殿域は、ガージャール朝期にも知事の居所として機能し、御幸の際の王の居所として、ガズヴィーンの中心となっている⁹⁰。

宮殿域の中にはチェヘル・ソトゥーン（*kākh-e Chehel Sotūn*）、漆喰細工のドーム（*gonbad-e mohabbatkārī*）、庭園のイーワーン（*eivān-e bāgh*）と呼ばれる 3 つの宮殿が創建されていた。この中で現存しているのは、宮殿域の北面に建てられたチェヘル・ソトゥーン宮殿のみで、残りの 2 軒の詳細は明らかにされていない。チェヘル・ソトゥーン宮殿は、宮殿域の北側に造られ、南に大きな苑池が設えられていた。現存する北面の建物は 2 階建ての豪華な造りで、シンメトリーを意識して作られている。2 階は東西南北の 4 面にバルコニーが取り付けられた開放的な造りとなっており、ガズ

⁸⁷ *Mīnūdar*: 324-326; 441, 237-238; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380)の各街区の建造物の項; *Idem* (A.P.1381): 441-443; 450, 453; 555-559, 巻末資料 4 (7) ~ (11) 参照。

⁸⁸ *Mīnūdar*: 295-296.

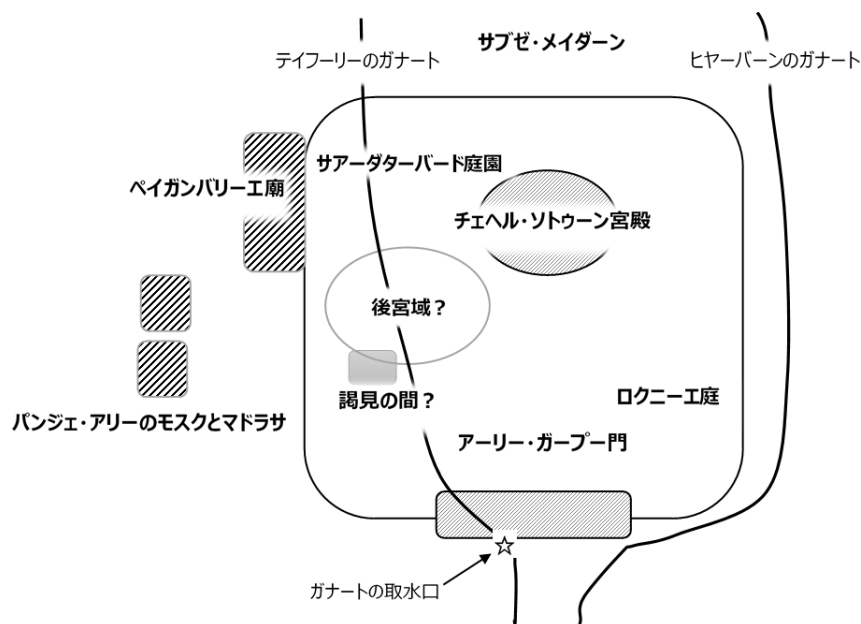
⁸⁹ シャルダン (1993): 408-409.

⁹⁰ *Kleiss* (1990); 最北面に 2 階建てのコラー・ファランギー（*kolāh-farangī*, 東屋の意）を有していたため、別名コラー・ファランギーの建造物（*'emārat-e kolāh-farangī*）と呼ばれていた。また、創建者の名をとってシャー・タフマースブのパピリオン（*'emārat-e kolāh-e farangī-ye Shāh Tahmāsb Avval*）とも呼ばれた。

ヴィーンの景観が一望できた⁹¹。この宮殿はタフマースブ 1 世によって建てられたものだが、この場所自体は、少なくともイル・ハン朝期から施政者の居所として機能していたため、基礎自体はいつのものかは分かっていない⁹²。

チェヘル・ソトゥーン宮殿の南に作られたロクニーエ庭 (haiyāt-e Roknīe, 図 7)⁹³も重要な場所であった。そしてその南面に接し、正門 (jelou-khān) として設けられたのがアーリー・ガープー門 (sardar-e ‘Ālī Qāpū, 高い門の意, 図 6 : 7, 図 7) である。そして、このアーリー・ガープー門を起点として創建されたのがセパフ通りであった (図 6 : 7 とそこから下に延びる通り)。このセパフ通りは、現存するイラン最古の広くまっすぐな大通り (khiyābān) といわれており、後にエスファハーンで建設されたチャハール・バーク通り (khiyābān-e chahāl bāgh) などのはしりともなっている⁹⁴。この通りが町の基軸となって周辺の整備が進み、宮殿域と大会衆モスクをつなぐガズヴィーンで最も華やかな場所となった。ガージャール朝期の都市変容の際にもこの機能は重視され、ガズヴィーンが目抜き通りとして再整備されている。

図 7 : サファヴィー朝期の宮殿域概念図⁹⁵



⁹¹ *Mīnūdar*: 647-650; Kleiss (1976); Idem (1990).

⁹² 1955/6 (A.P.1334) 年に宮殿の 1 階部分の修繕のための調査が行われた際、偶然ガージャール朝期の壁画の割れ目から、その下にサファヴィー朝時代の壁画が発見された。翌年、チェヘル・ソトゥーン宮殿の修繕工事で、この壁画も修復された。建物自体は現在博物館兼美術館となっている (*Mīnūdar*: 289)。

⁹³ ナーデリー殿 (dīvānkhāne/ doulatkhāne-ye Nāderī)、ナーデリー庭 (haiyāt-e Nāderī) を含むコンプレックスは、宮殿域を構成する重要な建造物であったとされているが、正確な場所は明らかになっていない (*Mīnūdar*: 652-654; Dabīrsiyāqī, A.P.1381: 466)。

⁹⁴ *Mīnūdar*: 290-292.

⁹⁵ 筆者作成。

このアーリー・ガーブー門の北西に位置していたとされるサアーダターバード庭園 (bāgh-e Sa'ādat Ābād, 図 6 : 4, 図 7) ⁹⁶と、隣接する謁見の間 (dīvānkhāne) もこの時期に作られた建造物であった。この場所は 1544/5 (A.H.951) 年から 1556 (A.H.963) 年の間、タフマースブ 1 世の居所とされていた⁹⁷。そして、サアーダターバード庭園には北と南、東と西を結ぶ小道が設えられており、いずれもガナートや隣の庭園に通じていたといわれる。また、後宮も置かれ、ペイガンバリーエ廟など庭園に接していた場所も開発されたことから、この区画がサファヴィー朝期に重要な場所であったことが分かる。しかし、ガージャール朝期に入ると宮殿域内の中心が移ったようで荒廃が進み、ナーセリー期に取り壊されたため、サアーダターバード庭園内の正確な位置関係や詳細に関しては分からない点が多い⁹⁸。

これらの建造物群のほとんどは現在失われており、残されているのは、チェヘル・ソトゥーン宮殿の北面部分と、アーリー・ガーブー門のみである。その位置・配置などは回顧録の記述などから類推するしかなく、推測の域を出ない⁹⁹。

都市部全域に関していうと、ガージャール朝期入って取り壊されたものの中で、サファヴィー朝期に重要な場所であったのは次の建造物である。先述のサアーダターバード庭園、ジャンナト庭園 (bāgh-e Jannat, 図 6 : 3)、王の宿場 (mehmānkhāne-ye Sal tanatī, 図 6 : 9)、王の広場 (meidān-e Shāh, 図 6 : 10) である。いずれも場所や詳細を確認することはできない。

まず、ジャンナト庭園であるが、この庭園には、アッバース 1 世の時代に王族の邸宅が建てられていたといわれている。そして、パフラヴィー期に市庁舎が建てられた際、敷地の一部が利用されたと記録されていることから、宮殿域の北東方向に存在していたことだけは確認できる¹⁰⁰。そして、市庁舎の場所は良質な水を運ぶハートウニーのガナートの取水口があることから、この庭園がガズヴィーンにおける最良の庭園であったことが分かる。

また、王の宿場に関しては、位置を確認することができない。サファヴィー朝期の王宮関連の建物の一つとされているので、祭典に利用された王の広場に近接して建てられていた可能性が高い。この宿場は 215 の部屋と 1 つの大きな池から成り、繁茂した木々が聳え立っていたとのことである¹⁰¹。

⁹⁶ 宮殿域の東端に位置していたこと、ラシュト通りとサブゼ・メイダーンと接触する区域にあったことは分かっているが、正確な構造などは分かっていない。

⁹⁷ Canby (1999): 68-69; Ehraghi (1982): 121-126.

⁹⁸ *Mīnūdar*: 646-647.

⁹⁹ 現在、ガズヴィーン観光局の主導で遺構の調査が行われているため、その成果によってある程度の全貌は明らかにされると考えられる。

¹⁰⁰ *Mīnūdar*: 645-646.

¹⁰¹ *Mīnūdar*: 646.

そして、王の広場は、サファヴィー朝期にガズヴィーンで最も美しいとされた場所である¹⁰²。ここには、ムガル朝第2代皇帝ホマユーンの来朝時にも大規模な催しが開かれたこともあった¹⁰³。場所はセパフ通りの南側、サーダート小路 (kūche-ye Sa‘dāt) からエマームザーデ・エスマーイール小路 (kūche-ye emānzāde-ye Esmā‘īl) までの区画に位置していたとされる。しかし、この広場はナーセリー期に取り壊されたため、正確な位置は分かっていない¹⁰⁴。

また、遷都に際して流入した人口によって、ガズヴィーン北部のダルブ・クシュク区、東部のパンベ・リーセ区の一部、西側のシェイハーバード地区、グースファンド地区、ゴムラク区、ディマジ区といった街区のほとんどが開発されたことも重要である (図6: 斜線部)。この時、王族やキズィルバーシュ (qizalbāsh) のアミール (amīr) など、有力者や身分の高い者は北部と東部の土地を与えられて居を構えた。そして、その他の廷臣、役人、兵士などは西側の土地を与えられ、移り住んだといわれる。ガズヴィーンでは特に西側の街区でアゼリー・トルコ語風の方言を話す者が多いといわれていたのは、この出来事に由来している¹⁰⁵。

この街区開発によってガズヴィーンの都市域が拡大し、現在まで続く基礎が築かれた。マルアシーによれば、遷都以前のガズヴィーンの西の境界はディザジ川であり、西の大門は宮殿域に近いパンジェ・アリー付近に存在していた。この大門はパンジェ・アリー門 (darvāze-ye Panj-e ‘Alī, 図4) と呼ばれていた¹⁰⁶。ここからラシュト門までの区域が開発されたことによって、都市域は大きく西側へ拡大した。

特に西側から西南にかけての開発は、その後の都市構成や社会を決定づける大きな出来事であった。それは、モウラヴィー通りの設置と共にバーザールの開発が行われたためと、この地域にガズヴィーンの地元有力者の居住が集中するようになったためである。前者に関しては、バーザールを含めた西側街区とラシュト通り、そしてシャーザーデ・ホセイン廟の方角をつなげる重要な導線として、現在の都市構成にも生かされている。

後者については、遷都の際ガズヴィーンに住み着いた住人のうち、身分の高い者が北部に、それ以外の者がこの西側に居を構えたことに由来する。エスファハーン遷都の際に、高位の者たちはアッバース1世と共に移住していったが、そのままガズヴィーンに定住した人口も一定数存在した。この西側街区の住民たちは、その後ガージャー朝期にガズヴィーンの都市社会を支える大きな原動力となっていた。

¹⁰² シャルダンによれば「長さ七百歩、幅二百五十歩、イスパハン【エスファハーン】の王の広場を模してつくられている」とある。競馬の広場 (meidān-e asbdavānī) とも呼ばれていた (シャルダン, 1993: 408)。

¹⁰³ 式典の際には同広場に 60,000 人の兵士が居合わせた (*Mīnūdar*: 645)。

¹⁰⁴ *Mīnūdar*: 646.

¹⁰⁵ *Mīnūdar*: 281-282.

¹⁰⁶ *Gīlān*: 330-333.

このように、ガズヴィーンは一時的に首都となったことで発展したわけだが、それ以外にも、重要な交易ルートの拠点であったことも影響していた。ロシアを經由したヨーロッパとの交易ルートの結節点としての役割である。ガズヴィーンはこの時期、コーカサス地方、カスピ海地方、ホラーサーン地方からの街道の結節点として、商業ルート上の重要な取引の場となっていた¹⁰⁷。この重要性は、後のガージャール朝期にも同様であり、都市変容のきっかけとなっていくのである。

しかしガズヴィーンの栄華は長くは続かず、1597年のエスファハーン遷都によって政治的重要性が薄れたことで緩やかな衰退が始まり、サファヴィー朝末期から始まる動乱の中で衰退の一途を辿った¹⁰⁸。ガズヴィーンの人口減少を決定づけたのは、1722年から始まったタフマースブ2世（在位1722-32年）の即位を巡る動乱であった¹⁰⁹。これはエスファハーン包囲からガズヴィーンに逃れていた皇太子タフマースブが、王位継承を宣言した（タフマースブ2世）ためにアフガン族の侵攻を受けたことによる。この時、ガズヴィーンでは市政官（*kalāntar*）が民衆を率いて決起し、大勢の死者を出している¹¹⁰。この出来事による混乱と荒廃はガズヴィーンの人口を減少させ、交易も衰退したのである¹¹¹。

サファヴィー朝の崩壊以後70年あまり、長年の抗争の中から台頭したガージャール族のアーガー・モハンマド・ハーンのテヘラン遷都と即位（1796年3月）によってガージャール朝が成立し、続くファトフ・アリー・シャーによって支配の基盤が固められる中で、ガズヴィーンは再び繁栄を取り戻していった。そして1801年には「全カスピ海交易における市場（*The Mart of All the Commerce of the Caspian*）」¹¹²と称されるほど重要都市となっていた¹¹³。

第3節：ガージャール朝期の都市構成

第1項：都市域の構成

ガージャール朝期のガズヴィーンについて議論を深めるためには、この時期のガズヴィーンの都市構成を把握しておく必要がある。都市形成史については、第4章で詳述するため、ここでは、それを理解するための都市構成についてまとめる。

¹⁰⁷ Bosworth (2007): 434.

¹⁰⁸ Hanway (1762): 156, 188, 245; Lambton (1995): 861b.

¹⁰⁹ サファヴィー朝の弱体化に乗じて、アフガン系ガルザイ族のマフムード（*Shāh Mahmūd Hota k*）が侵攻を始め、1722年3月からエスファハーンを包囲した。これに対してフサイン1世（在位：1664-1722年）は半年ほど抵抗を続けていたのだが、遂に10月21日夜に降伏し、25日にマフムードがエスファハーン入城を果たした。

¹¹⁰ Malcom (1829): 443-4.

¹¹¹ Hanway (1818): 203.

¹¹² Morier (1818): 203.

¹¹³ Issawi (1971): 118-1120, 262.

まず、ガズヴィーン市の市壁は早い段階で喪失しており、街道から町に入る際の大門（darvāze）が残されるのみであったことを確認しておきたい（図 8）。ガージャール朝期まで残されたガズヴィーンの大門は次の通りである¹¹⁴。北方面にはシェイハーバード門（darvāze-ye Sheikh Ābād）¹¹⁵とダルブ・クシュク門（darvāze-ye Darb Kusk）¹¹⁶。東には、パンベ・リーセ門（darvāze-ye Pambeh Rīseh）。南東方面にテヘラン門（darvāze-ye Tehrān）¹¹⁷とダルブ・レイ門（darvāze-ye Darb Rey）。南側にシャーザーデ・ホセイン門（darvāze-ye sālāmgāh-e Shāhzādeh Hosein）。南西にマグラーヴァク門（darvāze-ye Maghlāvāk）¹¹⁸。西側のラシュト門（darvāze-ye Rasht）¹¹⁹の計 8 門である。このうちシェイハーバード門が北西、シャーザーデ・ホセイン門が南、マグラーヴァク門が西を守る門とされていた。そして、タブリーズやラシュトへつながる街道の出入り口であるラシュト門と、テヘランへ繋がる街道の結節点であるテヘラン門、北部の農園地帯とつながるダルブ・クシュク門が重要な門とされてきた。

1885 年にガズヴィーンを通過したファラーハーニーは、これらの門うち、南東のダルブ・レイ門が廃墟となっていたと記している。更に、ダルブ・クシュク門、パンベ・リーセ門、ラシュト門、マグラーヴァク門、シェイハーバード門、シャーザーデ・ホセイン門の各大門が、彼の来訪の数年前に修繕されたことが記されており、この時期の前後でガズヴィーンの外郭が刷新されていたことがうかがえる¹²⁰。

しかし、ゴルリーズによれば、これらの大門は、パフラヴィー朝期に入る頃には既に門としての機能を逸していたようである¹²¹。そして、パフラヴィー期に行われた大規模な都市整備事業（1929/30, A.P.1308 年）によって都市域が拡大されたことに伴い、ダルブ・クシュク門とテヘラン門を除く全ての大門が取り壊されたのである¹²²。

この宮殿域は歴史を通してガズヴィーン市の政治の中心となってきた場所であり、ここを起点として都市部の構成を読み解くことができる。まず宮殿域の北面にはサブゼ・メイダーン広場（Sabz-e māidān）が位置し、ガズヴィーン市の北部の往来の起点となっている。そして宮殿域の西端にあたり、以前サアーダターバード庭園があったとされる場所から西に向かってラシュト通り（khiyābān-e Rasht）、東にはシャー通り（khiyābān-e Shāh）が伸びており、それぞれが町の東西の門に通じていた。前者は西の境界

¹¹⁴ Adamec (1976): 324; Farmayan & Elton (1990): 14-15; *Mīnūdar*: 290; Dabīrsiyāqī, (A.P.1381): 464-465.特にパフレヴィー期まで残されたものを中心に議論を進めている。

¹¹⁵ 別名サーヴェラーン門（darvāze-ye Sāvelān）。

¹¹⁶ 別名ジョウサグ門／ラーフ・クシュク門（darvāze-ye Jousaq/ Rah Kushk）。

¹¹⁷ 別名サムガン門／ラーフ・チャマン門（darvāze-ye Sāmgān/ darvāze-ye Rāh Chamān）。

¹¹⁸ 別名タブリーズ門（darvāze-ye Tabrīz）。

¹¹⁹ 別名グースファンド／コイ・メイダーン門（darvāze-ye Gūsfand/ Qoi meidān）。

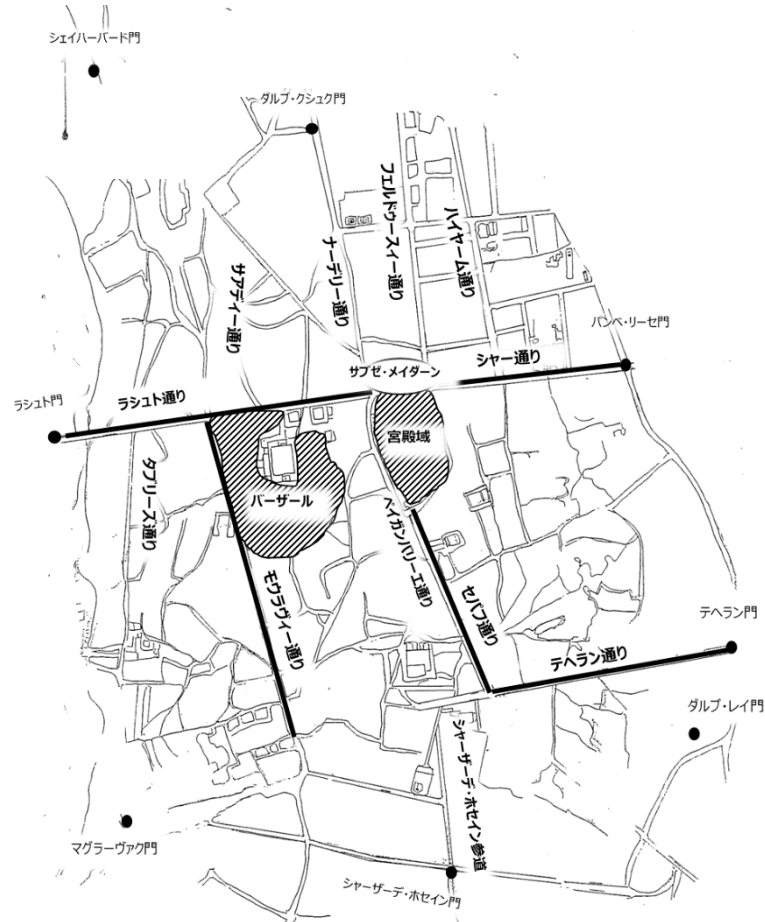
¹²⁰ Farmayan & Elton (1990): 11-12.

¹²¹ *Mīnūdar*: 281-296.

¹²² 現在ダルブ・クシュク門とテヘラン門は門としての機能は失っている。歴史的モニュメントとして保全されており、ガズヴィーン市の観光名所の一つとなっている。

であったラシュト門に通じており、その途中でバーザールの集中区域の入り口に接する都市内部の交通の要所一つであった。

図 8：ガズヴィーンの都市構成（旧市街地）概念図¹²³



ガズヴィーンの大バーザールは古くからこの場所に位置しており、ラシュト通りから内側に入り込む形で発達してきた。そして、サファヴィー朝期に首都となった際に拡張され、ガージャール朝期に更に手が加えられて発展を遂げたものである。そして、このバーザールに沿って南北に延びるモウラヴィー通りは、ラシュト通りとシャーザーデ・ホセイン廟の参道をつなぐ重要な通りとなっている。

次に中心部から南部についての構成を見ていく。宮殿の南門にあたるアーリー・ガープー門から南に延びる通りが先述のセパフ通り¹²⁴で、ヒヤバーン区の北から南に向かって伸びるガズヴィーンで最も重要な通りである。この通りはサファヴィー朝のシャー・タフマースブ 1 世の時代に、宮殿の南門から町の南部に作られた墓地 (gūrest

¹²³ 筆者作成。

¹²⁴ 別名ドウラティー通り (khiyābān-e doulatī)。

ān-e Kohanbar) に向かって整備されたものである。このセパフ通りの南西に大会衆モスクが位置しており、そこから南端から西に進むと、有名な参詣地の一つであるシャーザーデ・ホセイン廟に至る。

また、セパフ通りの南端から東に延びるテヘラン通り (khiyābān-e Tehrān) を進むと、テヘランに続く街道への結節点となるテヘラン門 (darvāze-ye Tehrān) に至る。このテヘラン通りからセパフ通りに入り、アーリー・ガプー門前から、チェヘル・ソトゥーン宮殿の西側のペイガンバリーエ通りを抜けて、ラシュト通りへと至るルートは、ガズヴィーンを通過する際の主要なルートとなっていた¹²⁵。

ガズヴィーンの市内交通の要となる大通りのうち、前述のモウラヴィー通り、セパフ通りに加え、サブゼ・メイダーンから北東の街区に向かって延びるフェルドゥースィー通り (khiyābān-e Ferdousī) の3本は、サファヴィー朝期に整備されたものである。この整備から読み取れることは、これらのいずれもがガズヴィーンの宮殿域とバーザールと北東部の居住区とを結ぶ役割を果たし、市内交通の充実に貢献していたということである。そしてガージャール朝期の都市変容は、このサファヴィー朝期の基礎の上に展開されていくこととなる。

以上を踏まえてサファヴィー朝期からガージャール朝期にかけてのガズヴィーンの都市構成の特質をまとめると、次の2点に集約される。まずはガズヴィーンがサファヴィー朝期に開発され、現在へ続く基礎が形成された点¹²⁶。そして、2点目は交易路が町の南東から北西へと抜け、それに沿って商業関連施設が作られていたため、このルート周辺がガズヴィーンの繁栄を支える経済的重要地であった点というのである。

第2項：街区構成

ガージャール朝期のガズヴィーンの都市部を構成する街区は、おおよそ16から17区であったと考えられており、その構成や名称は現在の基礎となっている¹²⁷。

ゴルリーズの地誌を元にガージャール朝期のガズヴィーンの街区をまとめると、北部の、ラーフ・クシュク区 (mahalle-ye Rāh Kushk)¹²⁸。北西のシェイハーバード区 (mahalle-ye Sheikh Ābād)、グースファンド・メイダーン区 (mahalle-ye Gūsfand Meidān)¹²⁹。西からディマジ区 (mahalle-ye Dīmāj)、ゴムラーク区 (mahalle-ye Qomlāq)。南西へ向かってアーホンド (mahalle-ye Ākhond)¹³⁰、マグラヴァク区 (mahalle-ye

¹²⁵ Farmayan & Elton (1990): 10-12.

¹²⁶ *Mīnūdar*: 281, 290; Adamec (1976): 324; Farmayan & Elton (1990): 14-15.

¹²⁷ 1881/2 (A.H.1299)年の人口調査の際は16区、パフラヴィー期のゴルリーズ記録によれば17街区とされている。

¹²⁸ 別名ダルブ・クシュク区/ジョウサグ区 (mahalle-ye Darb Kushk/ mahalle-ye Jousaq)。

¹²⁹ 別名コイ・メイダーン区 (Qoi meidān)。

¹³⁰ 別名ベン・デラフト区 (mahalle-ye Ben Derakht)。

Maghlāvak)¹³¹。南西のダッバーガーン区 (mahalle-ye Dabbāghān)、ラーフ・レイ区 (mahalle-ye Rāh Rey)¹³²。中央のセッケ・シャリーハーン区 (mahalle-ye Sekke Sharīh ān)¹³³。中央南西に位置するハンダクバール区 (mahalle-ye Khandaqbār)、中央南のヒヤーバーン区 (khiyābān)、中央から東方面のボラーギー区 (mahalle-ye Bolāghī)¹³⁴。中央南東の3街区タンヌール・サーザーン区 (mahalle-ye Tannūr Sāzān)、ラーフ・チャマン区 (mahalle-ye Rāh Chaman)、ゴルビーネ区 (mahalle-ye Golbīne)。そして、東のパンベ・リーセ区 (mahalle-ye Panbe Rīse)¹³⁵の16街区で構成されている (図9)。

図9：ガズヴィーンの街区概念図¹³⁶



ただ、この街区の捉え方は史料や研究によって若干の差が存在することには留意しておく必要がある。例えば、1881/2 (A.H.1299) 年に行われた史上初の人口調査において対象として挙げられていたのは次の16街区である。北のダルブ・クシュク区。北西

¹³¹ 別名チーニー・バンダーン区 (mahalle-ye Chīnībandān)。

¹³² 別名ダルブ・レイ区 (mahalle-ye Darb Rey)。

¹³³ 別名サルクーチェ・レイハーン区 (mahalle-ye Sarkūche Reihān)。

¹³⁴ 別名ファシュタハール区 (mahalle-ye Fash Tahāl)。

¹³⁵ 別名ダストジェルド区 (mahalle-ye Dastjerd)。

¹³⁶ 筆者作成。

のスーコルアグナーム区 (mahalle-ye Sūq ol-Aghnām)。西のディマジ区、ゴムラク区。南西のマグラーヴァク、アーホンド区。南のダッバーガーン区、ラーフ・レイ区。中央のセッケ・シャリーハーン区。中央南西のハンダクバール区。中央の南のヒヤーバーン区、中央東のボラーギー区。中央南東のタンヌール・サーザーン区、ラーフ・チャマン区、ゴルビーネ区。東のパンベ・リーセ区である¹³⁷。このうち、スーコルアグナーム区が最も広く、北西部のほぼ全域を占めており、その下位地区として7つの地区 (gozar)¹³⁸が認識されていた。そのうち、建造物の種類や数が最も多かったメイダーネ・グースファンド地区 (gozar-e meidān-e Gūsband) と、北西部との境域であったシェイハーバード地区 (gozar-e Sheikh Ābād) は、後にこれらを中心に北西街区をグースファンド・メイダーン区とシェイハーバード区として再編されたものと考えられる。

また、1885年のファラーハーニーの記録には、北のラーフ・クシュク区、北西のコイ・メイダーン区¹³⁹、南西のディマジ区、ゴムラク区、ベン・デラフト区 (mahalle-ye Ben Derakht)¹⁴⁰、マグラーヴァク区。南のダッバーガーン区、ダルブ・レイ区 (mahalle-ye Darb Rei)¹⁴¹、中央から西のセッケ区、シャリーハーン区¹⁴²、ハンダクバール区、ヒヤーバーン区、中央から東のフェシュターヴァル区 (mahalle-ye Feshtāval)¹⁴³、ボラーギー区、ダルベ・ラーフ・チャマン区 (mahalle-ye Darb-e Rāh Chaman)¹⁴⁴、シャフレスターン区 (mahalle-ye Shahrestān)¹⁴⁵、東のダルベ・サムガーン区 (mahalle-ye Darb-e Sāmqān)¹⁴⁶の名がそれぞれ記録されている。これも、数年前の人口調査時の表記と比べても、名前や範囲に若干の差があることが分かるだろう。

これらの街区の中で、現在までその名前が継承されているのは次の15街区である。北部のダルブ・クシュク区、北西部のシェイハーバード区、グースファンド・メイダーン区、西部のディマジ区、南西部のゴムラク区、アーホンド区、マグラーヴァク区、南部のハンダクバール区、ラーフ・レイ区、中央から西にかけて、サルクーチェ・レイハーン区、ダッバーガーン区、中央東のボラーギー区、タンヌール・サーザーン区、東部のパンベ・リーセ区である。また、中央南東部のゴルビーネ区とラーフ・チャマン区は統合されて、ゴルビーネ・ラーフ・チャマン区となっている¹⁴⁷。

¹³⁷ *Mīnūdar*: 427.

¹³⁸ ゴザル (gozar) の本来の意味合いは道路の一種で、大通り (khiyābān) の下位、小路 (kūch e) の上位にあたる小道に相当する。但し、これが都市内の居住空間を指す意味で使われる際には、街区の下位に分類されるため、本論文ではこれを地区と訳して議論を進めることとする。

¹³⁹ グースファンド・メイダーン区のこと。

¹⁴⁰ アーホンド区に相当する。

¹⁴¹ ダルブ・レイ区に相当する。

¹⁴² セッケ・シャリーハーン区を2分して捉えていたものと思われる。

¹⁴³ ファシュタハール区のこと、ボラーギー区に相当する。

¹⁴⁴ ラーフ・チャマン区のこと。

¹⁴⁵ ゴルビーネ区とタンヌール・サーザーン区を合わせて捉えていたものと考えられる。

¹⁴⁶ パンベ・リーセ区に相当する。

¹⁴⁷ ガズヴィーンは、その後パフラヴィー期の都市改造によって北部の後背地が開発され、都市域がガージャール朝期の旧都市域の倍以上まで広がっている。一方で、南部の開発も行われたが

これらの街区は、街区長¹⁴⁸によって治められていた。ガズヴィーンの街区長はキャドホダー (*kadkhodā*) あるいはバーバー (*bābā-ye mahalle*) と呼ばれ、上記街区の統括を行った。街区長は基本的に世襲であったが、形式上、知事からの任命という形をとっていた。彼らは、当該街区における催事 (結婚式、葬式など) の際の慈善活動や寄付活動、巡礼者やロウゼハーンが来訪した際のもてなし、タアズィーエの先導、といった街区の様々な行事、徴税、調停役といった街区内の様々な活動を統括する者であった。

また、街区長は、都市行政に関してはヒエラルキーの末端に位置し、知事の命令を執行する役割を負っていた。有名なところでは、後述する人口調査を行ったのも彼らである。その他に、町の警備に関しての責任を負っており、街区内の屈強な若者を選んで番人 (*negāh-bān*) として地元の夜警を行わせていた。また、町の中心部、監獄の警備などに関してはガズヴィーン的全街区が交代で担当する輪番制が敷かれており¹⁴⁹、これらの管理・調整をするのも街区長の役目であった。このような警備方法は、サファヴィー朝からの伝統に基づいており、立憲革命以後も街区長が街区の業務管理と都市行政の職務に責任を負っていたといわれる¹⁵⁰。

第4節：ガージャール朝期の都市社会

第1項：ナーセリー期の人口調査

ガズヴィーンの人口とその構成がある程度把握できるようになるのは、19世紀の後半の人口調査以降となる。それ以前のもの、旅行記など記述をたよりにその傾向を推測・概算することしかできない¹⁵¹。単純に政情から予測される傾向だけまとめてお

うまくいかず、鉄道駅へ向かう道沿いにパーイーン区 (*Pāyīn mahalle*) とラー・アーハーン (鉄道) 区の2街区が存在するのみである (*Mīnūdar*: 281-296)。

¹⁴⁸ イランの諸都市では、街区監督職として街区長職が置かれ、世襲された。この官職は他の都市ではキャドホダーバーシー (*kadkhodābāshī*)、ガルエベイグ (*gharyebeig*) と呼ばれた。一般的に使われるキャドホダーの名称は、基本的には首長、家長、世帯主を指し、様々な地位の管理役人を指すため逐語訳は難しい。16世紀に頃に街区、ギルド、村、部族等各集団を監督する長を表す名称となり、以後20世紀まで変わらなかった。街区長としての意味合いでのキャドホダーについては、都市行政のヒエラルキーの最下位部門であった。その職務は、街区内の徴税、来客の宿泊所整備、社会秩序の保全、街区、集団活動の管理 (紛争の鎮圧と犯罪を罰すること) 等であった。緊急時には兵士の供給と分割、見張りの分担といった他の職務もこなした (*Floor*. 2009b)。

¹⁴⁹ *Hāji Saiyāh*: 383.

¹⁵⁰ *Mīnūdar*: 798-806.

¹⁵¹ 例えば、16世紀の記録を見ると、1561年に100,000人 (*Morganr & Coote ed.* 1886: 134, 149)、1596年に100,000世帯存在したと記録されている (*Le Strange tr.& ed.* 1926: 197-202)。17世紀の記録では1627年に200,000人 (*Foster ed.* 2005: 153)、1674年に12,000世帯と100,000人の居住者 (シャルダン, 佐々木他訳, 1993: 408-413) が記録されている。そして、18世紀のものだと、1744年に1,100世帯 (*Lambton*, 1995: 861) が記録されており、数値を見るだけでもばらつきがあることが分かる。これらは旅行者が見聞きした情報の記録であるため、そ

くと、首都であった 16 世紀中葉には人口が多く、エスファハーン遷都からサファヴィー朝の滅亡、ガージャール朝の勃興に至るまでの混乱期には人口が減少傾向にあったのではないかということだけはいえるだろう。

ガズヴィーンにおいて人口調査が行われ、曲がりなりにも現実味のある数値が提示されたのは、ナーセリー期の後期のことである。1869/70 (A.H.1268) 年テヘランにおいて 2 回目の人口調査が行われた後、全国的な人口調査が行われることになるのだが、ガズヴィーンではその先駆けとして 1880/1 (A.H.1298) 年から翌 1881/2 (A.H.1299) 年にかけて、初の人口調査が行われている¹⁵²。これは後述するが、第 21 代知事のモルク・アーラーの統治期間 (1880/1-1883/4 年, A.H.1298-1301 年) にあたり、サアドッサルタネ (後述) がガズヴィーンでの影響力を増していた時期にあたる。

ただ、テヘランにおける人口調査がある程度体系だった調査であったのに比べ、ガズヴィーンの調査は正確な調査とは言い難いものであった。それは、専門家による調査や指導が行われず、調査方法、項目、報告の形態など、全てが各街区長に一任されたためである。したがって、この時期のガズヴィーンの人口調査は、街区によって数値のとり方に差がある点は留意する必要がある¹⁵³。しかし、概算としてある程度の規模を把握するには有用であり、また、ガズヴィーン初の人口調査として、本結果が大変貴重なものであることには変わりない。よって、本論文ではあくまでも概算の域をでないものとしながらも、当時の社会の大枠を掴むためにこれらの調査結果について分析を行っていききたい。

もう 1 点重要なのは、この時、人口調査の命令が直接各街区長になされている点も重要である。イランのある程度の規模都市には、地方宮廷と都市行政の結節点として、街区長と市場監督官をとりまとめる都市行政官統括職 (*kalāntar, vazīr, beglar-beig*) が置かれることがあった¹⁵⁴。しかし、この時のガズヴィーンの命令系統が、知事から直接各街区長になされていたことから、この時のガズヴィーンには都市行政官統括職が存在しなかった可能性を示している。

ここに表れる数値をそのまま受け取ってしまうのはいささか乱暴であり、大まかな人口動態を予想することぐらいしかできない。

¹⁵² 2 回目の人口調査は 1916/7 (A.H.1335) 年に行われている。

¹⁵³ 本論文で利用している数値は、ゴルリーズ、ヴァルジャーヴァンド、ダビールスィヤーギーの先行研究で計算されているものを参照している。3 者とも、計算が合わなかったり、それぞれ異なる数値を出していたりする場合は、基本的に他の先行研究でも利用されることの多いゴルリーズの数値を採用している。

¹⁵⁴ 都市行政官の統括職は知事を中心とした地方宮廷と都市行政の結節点となっていた。街区長と同じくこの職も世襲されるが、形式上君主もしくは知事からの任命という形をとっていた。15 世紀以前は都市の代表者の名称としてライース (*ra'īs*) がよく見られたが、これらの立場や職能が後のキャラクタータルと連続性があるかどうかは不明である。ヨーロッパの旅行記や先行研究では市長 (*mayor*) と表記されることが多い。その職務は多岐にわたり、都市行政一般の統括、各部署の税収管理、警備、世俗裁判、公定価格の決定など都市行政のほとんどを統括していた。またこれを補佐するものとして都市行政官補佐職 (*nāyeb-e kalāntar, nāyeb-e beiglarbeig*) が置かれることもあった (Floor, 1971; 水田, 1989)。

この時の調査によれば、ガズヴィーンの都市部の総人口は 32,181 人で、男性が 15,814 人、女性が 16,367 人、総世帯数は 4,031 戸であった（表 3）。これらは、同時期のテヘランの数値（軍人を除いた総人口：147,256 人、成人男性人口：53,972 人、成人女性人口：52,390 人、15 歳以下の子供人口：40,894 人）¹⁵⁵に比べるとかなり小規模であることが分かる。また、翌年集計されたエスファハーンの数値（総人口：73,785 人、総世帯数：9,616 戸）¹⁵⁶、翌々年のシーラーズの数値（総人口：53,607 人、総世帯数：6,327 戸）¹⁵⁷と比べても、ガズヴィーンの人口規模が他の都市と比べて小さいことが分かるだろう¹⁵⁸。

第 2 項：人口構成

ここからは、この人口調査で集計された数値を元にして、ナーセリー期におけるガズヴィーンの人口構成を読み解いていきたい。人口調査時の分類に基づいて本論文で分析可能な項目を挙げると、街区別の人口分布、男女比、世帯別の居住傾向、建造物の分布の 4 項目となる。ここでは、建物を除く 3 項目について分析し、ガズヴィーンの人口構成の特徴について考察する。

まず分かりやすいところから、街区別の人口分布について、人口と人口比に着目して分析する。ガズヴィーンにおいて最も人口が多いのは、北西のスーコルアグナム区（7,069 人）、北のダルブ・クシュク区（4,764 人）、東のパンベ・リーセ区（2,468 人）である。ここから分かるのは、ガズヴィーンの人口が北側及び東側の街区に集中しているということである。そして、これがガズヴィーンの人ロ調査の中でも最も特徴的な結果である。これら上位 3 街区、すなわちガズヴィーンの北部を占める街区の総人口は 14,301 人であり、都市部人口の実に 45%近くが集中していたことが分かる。それ以外の人口分布については、中央から南東方面に向かって人口が集中していることが分かる¹⁵⁹。一方で南西、南街区の人口は比較的少ない傾向にあった。

この人口分布の偏りはガズヴィーンの水供給の問題にも結びついていると考えられる（図 2 参照）。最も人口の多い北西部・北部の地域は、ガナートのほとんどが都市部に初めて流れ込んでくる場所であり、水量が最も多い場所である。そして、東部は、ガズヴィーンで最良の水質を運ぶハートゥーニーのガナートが給水している。そして、

¹⁵⁵ 坂本 (1984): 98-99.

¹⁵⁶ 坂本 (1980): 379-81; 同 (1981a): 145-4.

¹⁵⁷ 坂本 (1983a): 24.

¹⁵⁸ また、1913 年の報告によれば、ガズヴィーンの人ロは凡そ 40,000 人とされており、同時期のテヘラン（約 350,000 人）、タブリーズ（約 300,000 人）、エスファハーン（約 80,000 人）と比べて比率は低いものの、増加傾向にあったことがうかがえる。一方で、この時の報告ではシーラーズが 30,000 人と記録されており、上記の人ロ調査結果と比べ 20,000 人ほどの人ロ減がみられる（Issawi, 1971: 33-34）。

¹⁵⁹ 一方で中央東側に関しては、1 街区ごとの面積が他の街区と比べて小さいために数値として少なく表れているだけである。

人口の少ない南西、南の街区は、水量の少ないアーホンドのガナートと、北部から流れてくるガナートによって給水されている。図2を見る限りでは、一見これらの街区ま

表 3：ガズヴィーンの人口調査結果まとめ¹⁶⁰

	位置	街区 (区)	総人口 (人)	男性 (人)	女性 (人)	世帯数 (戸)	ウラマー、セイド、有力者 (戸)	王族 (戸)	名士、文官 (戸)	商人 (戸)	その他の階層 (戸)
1	北	ラーフ・クシュク	4,764	1,773	2,991	511	44	6	13	22	426
2	北西	スーコリアグナーム	7,069	3,632	3,437	976	44	0	5	9	918
3	西	ディーマジ	1,234	606	628	169	24	0	23	13	109
4	南西	ゴムラク	1,520	740	780	145	22	1	14	8	100
5	南西	アーホンド	1,641	817	824	206	36	1	30	11	128
6	南西	マグラヴァク	1,705	867	838	289	21	0	0	1	267
7	南	グッバーガン	1,786	946	840	160	9	0	0	4	147
8	南	ラーフ・レイ	1,355	697	658	171	6	0	11	3	151
9	中央	セックシャリーハーン	1,604	736	868	255	49	1	18	26	161
10	中央西	ハンダクバル	1,364	673	691	162	16	0	7	0	139
11	中央南	ヒヤーバーン	2,320	1,310	1,010	178	6	0	3	6	163
12	中央東	ボラーギー	1,056	549	507	140	36	4	13	0	87
13	中央東	タンヌールサーザン	714	373	341	74	5	0	5	1	63
14	中央東	ラーフ・チャマン	1,151	600	551	122	8	0	6	0	108
15	中央東	ゴルビーネ	430	225	205	62	7	0	2	0	53
16	東	バンベリーセ	2,468	1,270	1,198	411	32	2	13	24	340
		総計	32,181	15,814	16,367	4,031	365	15	163	128	3,360

で給水が行き届いている。しかし、実際には、南西部・南部に至るまでに水のほとんどが使われてしまうため、これらの街区は常に水不足に悩まされていたのである。以上のことから、給水の観点から見ると、ガズヴィーンの南北の街区での人口の偏りが生じていることが考えられる。半乾燥地域の都市にとって、給水が存続の要であるため、給水の充実度で住み分けが生じるのは自然のなりゆきであるといえよう。

次に男女比の割合を見ていく。ガズヴィーンの総人口 32,181 人のうち、男性人口は 15,814 人、女性人口は 16,367 人であり、女性人口の方が男性人口を 1,553 人ほど上回っている。割合にすると男女比は凡そ 49 : 51 となり、女性人口の方が 2%ほど多い計算となる。これはテヘランの結果¹⁶¹とは逆であり、女性人口の方が男性人口よりも多いのがガズヴィーンの特徴であったといえるだろう。

¹⁶⁰ *Mīnūdar*: 427-442; *Sīmā*: 340, 783-797; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380a)より筆者作成。色付けした部分は、出典によって表記・計算に違いや誤りが認められた数値である。数値にバラつきが出た場合は、多くの先行研究が参考にするゴルリーズの記録を採用し、ヴァルジャーヴァンドとダビールスィヤーギーの記述は副次的に参考にすることとしている。特にダビールスィヤーギーのものは、他の2人のものと大きく数値が異なっているため、原本が手元のない現時点では、数値上積極的に参照することはできなかった。

¹⁶¹ テヘランでは男性人口の方が 1,582 人多く、男女比は凡そ 37 : 36 となり、男性人口の方が 1%程大きい（軍人と子供の人口を除く）。

では、これらの男女比はガズヴィーン内部ではどのような分布を見せるのか。各街区の男女別人口、男女比に注目してみる。男性人口が多い街区を上位から順に挙げると、北西のスーコルアグナム区（3,632人）、北のラーフ・クシュク区（1,773人）、中央南のヒヤーバーン区（1,310人）となっている。男女比で見ると、上記の3街区内の男女比はほぼ同等であった。男性人口の割合が大きくなるのは、中央南側のヒヤーバーン区（56%）、次いで南のダッバーガーン区（53%）、そして中央東のラーフ・チャマン区、ボラーギー区、タンヌール・サーザーン区、ゴルビーネ区（いずれも52%）であった。

一方で、女性人口が多い街区は、1位、2位は男性と同じくスーコルアグナム区（3,437人）とラーフ・クシュク区（2,991人）で、その次は東のパンベ・リーセ区（1,198人）であった。いずれの場合も街区内の男女比は同程度である。そして、女性人口の割合が最も大きいのは北のラーフ・クシュク区（63%）、中央のセッケ・シャリーハーン区（54%）、南西のハンダグバール区、ディマジ区、ゴムラク区（いずれも51%）。

男女比の傾向をみると、ガズヴィーンでは、男性人口が女性人口を上回る街区が中央から南東の街区に集中しているのに比べ、女性人口が上回っているのは北部、中央そして西側の街区であった。これらの差はどこから生じたものであるのか、これを世帯別の人口に注目することで読み解いていきたい。

表3を確認すると、ガズヴィーンの見世帯数は4,031戸であり、その内訳はウラマー、セイエド、有力者（‘olamā, sādāt, ahl-e honar）世帯が364戸、王族（shāhzādegān）世帯が15戸、名士、文官（a’yān, ahl-e qalam）世帯が163戸、商人（tojjar）世帯が128戸、その他の階層（sāyer sonūf）の世帯が3,360戸であることが分かる。

世帯の総数が最も多いのはスーコルアグナム区（976戸）で、次いでラーフ・クシュク区（511戸）、パンベ・リーセ区（411戸）であり、この上位3街区は人口の順位に比例している。同様に、人口の最も少ないゴルビーネ区とタンヌール・サーザーン区についても同じことがいえる。

中間の街区の順位には多少のばらつきがある。特に大きな差が確認されるのが人口第4位で中央南側の街区にあたるヒヤーバーン区と、第5位で南の街区にあたるダッバーガーン区である。こちらは世帯数で見ると、それぞれヒヤーバーン区（178戸）で第7位、ダッバーガーン区（160戸）で第11位となっている。人口に対して世帯数が少ないということは、これらの街区における1世帯当たりの人数が多いことを示していると考えられる。また、これらは上述した男性人口の方が多い街区の上位2街区にもあたる。男性人口の優位に関しては、これらの街区がそれぞれ大会衆モスクと

シャーザーデ・ホセイン廟という、ガズヴィーンにおける宗教的中心地を有していることと、その周囲に店舗が集中していることが関係していると考えられる。

更にこれらの世帯の街区別の分布について見ていきたい。まずウラマー、セイエド、有力者の世帯だが、これらは町全体に分布している。中でも集中が見られるのが中央のセッケ・シャリーハーン区（49戸）で、次いで北西のスーコルアグナム区とラーフ・クシュク区（いずれも44戸）と、町の北部、中央により多くの世帯が集まっていることが分かる。このことから、ガズヴィーンにおいて、宗教的、政治的権力を持つ層が集中するのが、チェヘル・ソトゥーン宮殿周辺から北西にかけての区域であるということがいえる。

次に、王族世帯だが、総数は15世帯と少ない。居住街区については北のダルブ・クシュク区（6戸）が突出しており、次いで中央東のボラーギー区（4戸）、中央のセッケ・シャリーハーン区（2戸）と続く。王族世帯もウラマー、セイエド、有力者世帯と同様に町の北部、中央部に集まる傾向にあったようだ。これらの区域はいずれもガズヴィーンにおける最優良ガナートであるホマールターシュの給水範囲であることから、ガズヴィーンの中でも高級区域とされており、ここに王族が住んでいたこともこれに関係していると考えられる。

名士、文官世帯については、南西のアーホンド区（30戸）が最も多く、次いで西のディマジ区（23戸）、中央のセッケ・シャリーハーン区（18戸）となっており、町の西部から中央にかけて多く分布していることが分かる。このうち、南側の水不足の街区にあたるマグラーヴァク区とダッバーガーン区ではこの世帯が記録されていない。中央から西部にかけては、ガズヴィーンの大バーザールが存在していること、またこの区域がサファヴィー朝期に整備されていたという事実から、この区域にはガズヴィーン土着の勢力が多く集まっていたということがいえるだろう。

商人世帯は、中央のセッケ・シャリーハーン区（26戸）での記録が最も多く、東のパンベ・リーセ区（24戸）、北のダルブ・クシュク区（22戸）と続く。その大多数は町の中央より北部に集中しているが、全体の傾向を見ると、西側街区にも居住が広がることが確認できる。一方で、ボラーギー区、ハンダグバール区、ラーフ・チャマン区、ゴルビーネ区といった町の中央東側に近い街区ではこれらの世帯は確認されない。これらは、商人世帯が大バーザール周辺を取り囲むように居住していることを意味すると考えられる。

その他の階層については、北西のスーコルアグナム区（918戸）が最も多く、次いで北のラーフ・クシュク区（426戸）、東のパンベ・リーセ区（340戸）と、順位に多少の入れ替わりはあるものの、総世帯数の分布と類似した形となっている。

これらの各世帯の街区別分布からいえるのは、ガズヴィーンでは北部に行くほど世帯の種類が増えるということである。北側の他に、ウラマー、セイエド、有力者の世帯

、王族世帯は中央や東側にもまとまった居住が見られ、名士、文官層、商人層は西側にもまとまる傾向が見られる。これはガズヴィーンにおける政治的、宗教的な勢力が東側に、土着的、経済的勢力が西側にまとまる傾向にあったとも読み解くことができるだろう。

また、世帯当たりの人数の平均はおよそ 8 人程度であり、1 世帯当たりの人数が多い街区はヒヤーバーン区（13 人）、ダッバーガーン区（11 人）、ゴムラク区とタンヌール・サーザン区（いずれも 10 人）と南側の街区に集中している。一方で少ないのはセッケ・シャリーハーン区、パンベ・リーセ区、マグラーヴァク区（いずれも 6 名）で、中央と南西の街区に分かれた¹⁶²。これは、重要な宗教的建造物やそのための店舗の集中がみられる地域に 1 世帯当たりの人数が多い世帯が集中し、政治的に重要な地域や水の少ない地域には人数の少ない世帯が集中する傾向にあったと考えられる。

以上のことから、ガズヴィーンの人口構成の特徴は次の 3 点にあるとまとめることができる。まずは、ガズヴィーンは女性人口の方が多く、その割合は北の街区に行けば高くなり、南の街区にいくと男性人口の方が高くなるということである。2 点目は、北部に全人口の半分弱が集中し世帯数も多く、南西部にいくにつれて人口・世帯の種類が少なくなるという傾向が見られるということである。3 点目は、ウラマー・セイエド・有力者・王族といった、宗教的・世俗権力に関係する勢力が北から東側にかけて、名士・文官層・商人層といった土着的、経済的勢力が北から西側に居住するという緩やかな住み分けがあった点である。

いずれの特徴も、ガズヴィーンの水利条件が大きな影響を及ぼしていると考えられる。北部はほとんどのガナートが初めて流れ込む場所であり、各ガナートの水量も比較的豊富であるため、ガズヴィーンで最も安定的に水供給が行われる地域である。このため、ガズヴィーンのあらゆる人口・世帯が北志向の居住を展開したと考えられる。また、3 点目の東西の緩やかな差は、東側が良質の水を運ぶホマールターシュのガナートに支えられた住みやすい地域であり、特に北東部は富裕層の居住が集中し、高級住宅地を構成したものと考えられる。西側に関しては、大バーザールを有し、南東に大会衆モスク、南にシャーザーデ・ホセイーン廟を有する古くからガズヴィーンの主要な要素を有する区域であることが影響していると考えられる。特に大バーザールと大会衆モスクに挟まれた区域は、ガズヴィーンの名士層が集中していることでも有名である。しかし、この西側地域の中でも、南西の区域は特に水利条件が悪い土地柄であり、人口が最も少ない場所であった。

¹⁶² この時代の街区の境界がはっきりしていないため、面積の把握ができないので人口密度の計算ができない。そこで、テヘランの人口調査の分析において、パークマーンがまとめたアブドゥルガッファールの記述で人口を世帯数で割って 1 世帯当たりの人数を算出していたのを参考に（坂本、1983: 97）、人口を世帯数で割って、1 世帯当たりの人数を概算した。

小結

第 3 章では、ガズヴィーンがその地理的・歴史的条件から、大規模な人口を抱える程度まで成長を遂げ切ることのできない都市であったことが明らかにされた。特に水利の問題が都市規模や都市構成・構造に大きな影響を与えていたという特徴は、ガズヴィーンにおける水利施設の重要性を示唆するものである。しかし、ガズヴィーン交通の要所としての重要性は、形を変えながらガズヴィーン存続を支え、常に一定規模の都市として存在し続ける要因となってきた。

繁栄の点からみると、ガズヴィーンはサファヴィー朝期に首都となり、首都移転後、栄えることなく現在に至ったように見える。しかし、ガズヴィーンは、ザンド朝期から再び交通の要所としての価値を認められるようになっていた。複数の主要な都市や交易路のハブとなったガズヴィーンは、王朝の注目を集め、再発展を遂げていたのである。では、この時ガズヴィーンはどのように変化・変容を遂げていったのか。次章で、建造物の創建・修繕の動向を分析することを通して明らかにしていきたい。

第1節：ガズヴィーンの再興と再発展

第1項：ザンド朝期からモハンマド期までの都市の再構成

(1) 宗教関連施設の動向

本章ではガズヴィーン内部で起こった変化を建造物の創建・修繕の傾向にあわせて段階的に読み解くことで、その変化の様相を明らかにし、ガージャール朝期の地方都市がどのような要因を受けて変容を遂げたのかを考察する。ガージャール朝が勃興するザンド朝期からガージャール朝末期までの創建・修繕事業を概観すると、ザンド朝期にガズヴィーンに宗教関連施設の創建・修繕が集中していることが分かる。そして、末期にかけて徐々に減少していき、代わりに世俗的建造物に関する工事が増加する傾向がみられる。

ザンド朝期のガズヴィーンでは、キャラクタータルであるモウラー・ヴェルディー・ハーンによって、2つの大きな工事が行われた。一つは1737/8 (A.H.1150)年に行われたペイガンバリーエのマドラサの修繕である(図1:2)¹。このマドラサは、サファヴィー朝期に形成された宗教空間であり、向かいのパンジェ・アリー・モスクと共に、建てられた。この他に、スーコルアグナム区のグースファンド・メイダーン地区に、1763/4 (A.H.1177)年モウラー・ヴェルディー・ハーンのモスク・マドラサ複合体 (*masjed-madrase-ye Moulā Verdī Khān*, 図1:①)が創建された²。これは、おそらくガズヴィーンにおける初めてのモスク・マドラサ複合体と見られる。これは、サファヴィー朝期に同地区に建てられていたモスクの一部を教育空間に改築することで、複合施設としたものである。この他に、アフシャール朝期にあたる1736/7 (A.H.1149)年に、シャーザーデ・ホセイン廟の南側にミール・マアスーム廟 (*ārāmgāh-e Mīr Ma'sūm*, 図3:3)が建てられていたことが確認できる³。

ガージャール朝の支配がガズヴィーンに及ぶようになると、宗教関連施設に関わる事業も増加していく。まず、アーガー・モハンマド期において、大会衆モスク(図1:5)の南側の門扉とシャーザーデ・ホセイン廟(図1:4)のザリーフが修繕された。

続くファトフ・アリー期の始めには、全国に先駆けてシャー・モスク(図1:⑥)が創建された⁴。このモスクは、サファヴィー朝期に建てられていたモスクを全面改築して建てられたものである⁵。14,000 m²の敷地を利用して建てられ、東西の入り口はバーザールとつな

¹ *Mīnūdar*: 602-603.

² *Mīnūdar*: 616-619.

³ *Mīnūdar*: 710-711.

⁴ Scarce (1991): 910-912.

⁵ ガズヴィーンのシャー・モスクはサファヴィー朝期にはソルターニー (*masjed-e Soltanī*)、ガージャール朝期以降はアンナビー (*masjed-e an-Nabī*) と呼ばれるようになり、現在でもその名称で親しまれている。本論文では、ファトフ・アリー期のシャー・モスクの創建プロジェクトとの関連を分かりやすくするため、シャー・モスクで表記を統一している。

がっており、北の門は正門として機能していた。この北門は長いエントランスを挟んでラシュト通りとつながっているのだが、ここには大きな苑池が設けられ、左右に庭園を配する大変美しい空間となっている。シャー・モスクはガーજャール朝期に町の宗教・教育空間として重要な拠点の一つとなった⁶。

図 1：ザンド朝期からモハンマド期までのガズヴィーン概念図⁷



その後、モハンマド期までの間に、ガズヴィーンには様々なモスクやマドラサが創建・修繕されている。代表的なところを挙げると、1829/30 (A.H.1245) 年にサアディー通りの近くにザルギャル・クーチェ・モスク (masjed-e Zargar Kūche) がアーブ・アンバールと浴場を伴って創建されている (図 1：⑧)。そして 1846/7 (A.H.1263) 年には、アーホンド区のマクタブが改築され、サブズ・モスク (masjed-e Sabz, 図 1：⑨) が創建された。また、1830/1 (A.H.1246) 年には、パンベ・リーセ区にあるスーラーヘ・スーラーフの古いモスク (masjed-e Sūrākh-e Sūrākh) が街区住民の尽力によって修繕された⁸。

⁶ *Mīnūdar*: 578-587; このモスクは、現在においてもなおガズヴィーンで有数の壮麗なモスクとして有名であり、シャーザーデ・ホセイン廟に次ぐ名所の一つとなっている。

⁷ 筆者作成。

⁸ *Mīnūdar*: 588-598; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 576-611.

マドラサに関しては、まず 1815 (A.H.1231) 年にサルダール兄弟によって、ゴムラク区にサルダールのモスク・マドラサが創建された (図 1: ⑩)。このモスク・マドラサは、ロシア・イラン戦争の戦勝祈願のために創建されたものである。道路を挟んで北側に壮麗なサルダール・ゴムラクのアーブ・アンバールが建てられており、ワクフ財の店舗と併せて複合施設の様相を呈していた⁹。これは、サルダール兄弟がガズヴィーンでもまだ開発の進んでいない南部の街区に目を付け、この建物群を建設したことを意味している。また、1817 年には、サーレフ・バラージャーニー (Mohammad Sāleh Baraghānī Qazvīnī, 1753 - ?年)¹⁰によって、サーレヒーエのモスク・マドラサ (masjed-madrise-ye Sālehīye, 図 1: 11) が創建されている。どちらのマドラサも壮麗かつ大規模な建造物であり、特に後者は、その後のガズヴィーンのみならず、イランの宗教・思想界においても重要な役割を果たした¹¹。

このマドラサが創建された頃のガズヴィーンは、ウスール派とアクバル派の争いが再燃していた時期でもある。19 世紀初頭のガズヴィーンでは、大会衆モスクの礼拝導師であるモハンマド・タギー (Seyyed Mohammad Taqī) を筆頭にアクバル派が優勢で、町の西側、特にディマジ区とゴムラク区を中心に一大勢力を形成していた¹²。しかし、シャー・モスクのアブドゥルワッハーブが台頭してきたことで、次第にこのパワー・バランスに変化が生じた。この対立が決定的となったのは、1822 年にシェイヒー派の創始者シェイフ・アフマド (Sheikh Ahmad b. Zein od-Dīn b. Ebrāhīm ol-'Ahsā'ī, 1753 - 1826 年) が招かれて、シャー・モスクで教育活動を始めたためであった。これによってシェイフ・アフマドを慕う学僧がイラン全土から来訪するようになり、シャー・モスクの求心性が急激に高まったのである。そして、町はアブドゥルワッハーブを中心としたシャー・モスク周辺のウスール派と、モハンマド・タギーを中心としたディマジ区、ゴムラク区のアクバル派に再び二分されることとなった (図 1: 点線部)。この緊張状態は時の知事であったロクノッドウレの仲介でも緩和されず、1824 年にシェイフ・アフマドがガズヴィーンを去るまで、2 年ほど続いたといわれている¹³。

このような時期に、サーレヒーエのマドラサで熱心な教育活動が展開されたことは興味深い。このマドラサは、アクバル派の中心地の一つであるゴムラク区と、ウスール派の中心地であるシャー・モスクの中間という絶妙な位置に建てられていたのである。この時期、マドラサではバラージャーニー一族やその関係者だけでなく、高名なウラマーも招かれ

⁹ *Mīnūdar*: 604-610.

¹⁰ ガズヴィーンの有名なウスール派ウラマーの一族バラージャーニー家の次男。兄のモッラー・タギー (Sheikh Mollā Mohammad Taqī, 1753? - 1947 年) と共にガズヴィーンで影響力を持っていた。バラージャーニー家は、ガズヴィーンの地元名士と婚姻によって結びつき、都市社会での影響力を強めてきた。サーレフ・バラージャーニーも、シャー・モスクの礼拝導師であったアブドゥルワッハーブ (Mollā 'Abd ol-Wahhāb Sharīf Qazvīnī) の姉妹を娶っている。彼らの間に生まれた子供の一人が後のゴッラトルエインである。

¹¹ *Mīnūdar*: 599-619; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 565-575.

¹² Momen (2003): 322-325.

¹³ Momen (2003): 322-326.

て教師を務めるなど、充実した教育環境が整えられていた。そして、最盛期には 700 名もの学徒を抱えたイランでも有数の教育センターとなっていたようである¹⁴。このマドラサで学んだ者の中には、ジャマーロッディーン・アサダーバーディー (Seyyed Jamāl ol-Dīn Asadābādī "Afghānī", 1839 - 1897 年) などの高弟もいた。

この教育活動への取り組みは、モスク・マドラサ複合体の造りそのものにも表れている。この建物は、モスク・マドラサ複合体の作例としても優秀な物件であった。これはモスクを改築して建てられたものではなく、始めからモスク・マドラサとして創建されたものである。3 層構造となっており、2 階がマドラサ、地上階がモスク、そして地下階は泉亭と居住用の空間となっていた¹⁵。ソルタンザーデによれば、礼拝空間 (モスク部分) は、学生以外の人々の往来があり、喧騒の場となるため、両空間が同階におかれて交差する造りの物件は教育空間として相応しくない。そして、2 層構造であり、声の響かない上階に教育空間 (マドラサ部分) を設置したものが教育施設に最適であるとされる¹⁶。この見解に従うならば、教育空間を最上階に設置し、人の往来のある礼拝空間を外界とつながる近い部分に設置した上で、生活音のある学僧の居住空間を地階においたこの物件は、モスク・マドラサの中でも、教育空間として優秀な部類のものと考えられるのである。

(2) 水利施設の動向

ザンド朝期には、ガズヴィーンの再興にあわせて水利施設の創建・修繕が行われている。第 3 章で確認した通り、ガズヴィーンにおいて水利施設の創建は都市が大きく発展する指標である。ザンド朝期にガナートが新設されたのだが、これはガズヴィーンの再興と共に人の往来が増え、水需要が増加したことからガナートの修繕事業が進んでいたためと考えられる。この時新設されたハータム・ベイクのガナートは、パンベ・リーセ区を給水するハートゥニーのガナートの増水のために創建されたものである (第 3 章第 1 節第 1 項 (2))。創建者は先述のモウラー・ヴェルディー・ハーンであった。

そしてこの時期、ガズヴィーンの重要なアーブ・アンバルである、ハーンとハーッジ・モッラー・アーガーの 2 軒のアーブ・アンバルが創建されている。両者とも水利用のメインとなるモスクやマドラサのために建てられた物件である。前者はモウラー・ヴェルデ

¹⁴ また、このモスク・マドラサには女性用の学習部屋も設けられていた。これはバラーガーニー家の女性たちの基礎教養修練のための教室として機能していた。女性たちの間で特に優秀であった者は、基礎教育の後エスファハーンやアタバートなどへの遊学が許されていた。この中から、ファトフ・アリー・シャーの女官として文筆・能筆の業務にあたったマフ・シャラフ・ハーノム (Māh Sharaf Khānom) や、パーブ教神学者のゴッラトルエインなどが輩出されている。一族の女性に限定されていたとはいえ、女性にも高度な教育を受ける機会を設けていたという点で、このサーレヒーエのマドラサは革新的な教育空間であったといえることができる。そういった意味でも、サーレヒーエのマドラサでの教育はイスラームの宗教教育そのものに変化が生じていたことを示している。

¹⁵ *Mīnūdar*: 612-616.

¹⁶ *Soltānzāde* (A.P.1378): 63-34.

イー・ハーンのモスク・マドラサ複合体に連結する形で、1763/4 (A.H.1177) 年に複合体の創建にあわせて建てられた (図 1 : ①)¹⁷。後者も、1791/2 (A.H.1206) 年にハーッジ・モッラー・アーガーのモスクの創建に併せ、この施設に連結する形で建てられている (図 1 : 12)¹⁸。

ファトフ・アリー期に入ると宮廷から知事が派遣され、ガズヴィーンは正式にガージャール朝の支配下に入った。そして、この時期、アーブ・アンバールの創建が増加していく。特に第 2、4 代知事のロクノッドウレの時期を中心として、ナーセリー期までにガズヴィーンの主要なアーブ・アンバールのほとんどが創建された。第 3 章で確認した通り、この時期に創建されたアーブ・アンバールは全部で 10 軒確認できる¹⁹。また、先述のハーンのアーブ・アンバールが 1835/6 (A.H.1251) 年に、創建者の子孫によって修繕されている。

(3) その他の建造物の動向

商業関連施設については、前述のシャーのモスクが創建される際に、その北側に同名の浴場 (hammām-e Shāh, 図 1 : ⑥) が創建されたこと。そして、ヴァズィールのバーザール (図 1 : 7) を中心として、モスク周辺のバーザールが修繕・整備され、シャー・モスクのワクフ財とされたことが分かっている²⁰。

そして、その名称から、グースファンド・メイダーン区のハーン浴場 (hammām-e Khān) とモウラー・ヴェルディー・ハーンの商館 (kārvānsarā-ye Moulā Verdī Khān) がザンド朝期に整備されたことが推察できる。この 2 軒は、先述のモウラー・ヴェルディー・ハーンのモスク・マドラサとアーブ・アンバールに隣接している (図 1 : ①)²¹。また、両者ともモウラー・ヴェルディー・ハーンの名を冠していることから、創建者が同一である可能性が高く、これらの商業施設が同名のモスク・マドラサのワクフ財として創建されたのではないかと考えられる。ここから、モウラー・ヴェルディー・ハーンとその一族が、ガズヴィーン北西部のスーコルアグナム区のグースファンド・メイダーン地区を根拠地としていたということが考えられる。

そしてもう 1 軒、ノウ浴場 (hammām-e nou) も、これらの近くに建てられている上、新しいを意味するノウ (nou) が付されていることから²²、この一連の建造物の創建以降に建てられた可能性が高いと考えられる。この他に、1843/4 (A.H.1259) 年にハーッジー・ハサ

¹⁷ *Mīnūdar*: 318.

¹⁸ *Mīnūdar*: 314.

¹⁹ ロクノッドウレの任期中 (1798/9-1834/5 年, A.H.1222 - 1250 年) に創建されたアーブ・アンバールの名称は下記の通り。パンジェ・アリー (図 1 : 13)、ラールー (図 1 : ⑨)、サルダーレ・ラーフ・レイ (図 1 : 14)、サルダーレ・ゴムラク (図 1 : 10)、ハーッジ・バーバー (図 1 : 15)、ハキーム (図 1 : 16) の 7 軒。そして、ザルギヤル・クーチェ (図 1 : ⑧)、シーシェ・ギヤル (17)、ハーッジ・カーゼム (18) の 3 軒のアーブ・アンバールも、これに続く時期に創建されている (1838/9, A.H.1254 年と 1840/1, 1256 年)。

²⁰ *Mīnūdar*: 578-587.

²¹ *Mīnūdar*: 324-328; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 474-482, 555-559.

²² *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 559.

ン (Hājji Hasan b. Hājji ‘Abd-ollāh Tabrīz) によって、ハーッジ・モハンマド・ラヒームのバーザールチェ (bāzārche-ye Hājji Mohammad Rahīm) の中間に、同名の浴場 (hammām-e Hājji Mohammad Rahīm) が創建された (図 1 : 20) ²³。

世俗的建造物に関しては、宮殿域の改築が行われたことが分かっている。これは、ファトフ・アリー期にガージャール朝宮廷から知事が派遣されるにあたり、宮殿域の建造物がガージャール仕様に改築されたためと考えられる。その詳細は明らかになっていないのだが、知事の名を冠する謁見の間 (doulatkhāne-ye hākem, 図 1 : 19) がロクニーエ庭に創建されたのがこの時期であったと考えられている²⁴。

第 2 項 : ガズヴィーンの再発展

(1) ガズヴィーンの再興

ザンド朝期、ガズヴィーンは経済的・政治的要因からその重要性を高めており、再興の兆しがあった。この時期、ガズヴィーンの再整備に重要な役割を果たしたのは、ザンド朝期にガズヴィーンのキャラントルであったモウラー・ヴェルディー・ハーンである。第 1 項で確認したように、彼は、同一街区内に自身の名を冠したモスク・マドラサ複合体、商館、バーザールチェ、アープ・アンバールを創建している²⁵。これらの建造物の集中から、彼の一族がスーコルアグナム区のグースファンド・メイダーン地区に拠点を置いていたことが分かる。この地区は、サファヴィー朝期に開発された場所であり、バーザールを支える重要な区域の一つである。特に、彼がコンプレックスの中心として建てたモスク・マドラサは、モウラヴィー通りとラシュト通りが接する位置、すなわちバーザールとガズヴィーンから北・西方面の都市へ延びる街道を結ぶ位置に置かれた。バーザールにとって重要な地点にモスク・マドラサを置き、周辺の経済財活動を活性化させたことは、ガズヴィーンの経済そのものの活性化にも大きな影響を及ぼしていたものと考えられる。

また、ペイガンバリーエを始め、町の中央から北部にかけて建造物の修繕を行い、ガナートの増設によって東部街区の給水も改善している²⁶。これらの事業によって、モウラー・ヴェルディー・ハーンは、サファヴィー朝期に整備された町の中心を再整備したものと捉えられる。そして、この時期にガズヴィーンの北部を中心に再興が始まったといえる。

ガズヴィーン存続の要であるガナートの新設とアープ・アンバールの創建は、ガズヴィーンにおける水需要の増加と、水利施設を創建できるだけの社会の安定及び富の蓄積が存在したことを示している。つまり、このザンド朝期がガズヴィーンの再興が始まった時期

²³ この浴場は、同名の商館 (kārvānsarā-ye Hājji Mohammad Rahīm) の隣に創建されている。そして、傍にはハンダグバール区の街区門が位置していたといわれる (*Mīnūdar*: 324-235)。

²⁴ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 466.

²⁵ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380a): 103-104.

²⁶ *Mīnūdar*: 588-598; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 576-611.

であるといえる。これらのガナートの給水範囲が、町の東側の高級住宅地であったことは、この時期にガズヴィーンにある程度の地位を持った人物が定住するようになってきたことを示している。以上から、ザンド朝期において、ガズヴィーンは北西部の街区を原動力として、サファヴィー朝期の都市構成を再編するところから再興を始めたと考えられるだろう。

そして、この時期、ガズヴィーンはアーガー・モハンマド・ハーンによって勢力争いの拠点の一つとして重要視された。そのため、前述のモウラー・ヴェルディー・ハーンをテヘランに召還してガズヴィーンの統治権を献上させた。そして、代わりにガージャール族の2人が王子を統治者として派遣した。彼らは正式な知事ではなかったものの知事と同様の職務を行ったといわれている²⁷。つまり、この王子たちの派遣をもって、ガズヴィーンはガージャール朝の統治下にはいったのである。また、これ以降ガズヴィーンに都市行政を統括するようなキャラクターは置かれず、各街区長を直接知事が統括する形で都市行政が行われることになったと考えられる²⁸。

ガズヴィーンに正式に知事が派遣されたのは、ファトフ・アリー期である。そしてここから、モッザファリー期の終わりまでに32代27名の知事が派遣された²⁹。初代知事のモハンマド・アリー・ミールザー (Mohammad 'Alī Mīrzā Doulatshāh) が派遣されたのは1798/9 (A.H.1213) 年のことで、これはファトフ・アリー・シャーの即位の翌年である。ファトフ・アリー・アシャーは地方の統治に自身の子供たちを派遣することで国内の安定を図ったといわれているが、ガズヴィーンもその一例であった。

ファトフ・アリー期は、王朝とガズヴィーンとの血縁によるつながりが最も強かった時期である。第2代知事ロクノドウレは、初代知事と同様にファトフ・アリー・シャーの実子(第8子)であり、その母がガズヴィーン出身であったことからガズヴィーンに派遣されてきた³⁰。

²⁷ *Montazem Nāserī*: 1428; *Sīmā*: 241-245.

²⁸ ガージャール朝期の都市行政の職務については、中央から派遣される知事 (*hākem, beiglar beig, farmān dār* など) とその随行者・関係者による地方宮廷と地元出身の行政官職に大別される。前者は任期付きでの赴任であり数年後には転任するため、地元とのつながりは弱い。そのため、実際の都市行政は後者に任せられ、その職務は世襲されることが多かった。地方中心都市における都市行政の一般的な構造のみを概観しておくとして、宮廷から派遣された知事とその補佐官 (副知事, *nāyeb ol-hokūme* など) の下に、地元出身の都市行政官職がおかれ、その下に各街区を治める街区監督職 (*kadkhodā bāshī, gale beig*) とバーザールを治める市場監督職 (*dārūghe, muhtahib*) がある。ただし、この都市行政官の役職、職務、名称そして行政機構そのものについても都市毎に差異があり、史料への反映がどの程度なされていたかも不明瞭なものがあるため注意が必要である (Abrahamian, 1974:16-21; Hambly, 1991: 564-570; Floor, 1971, 253-268; Idem, 2009b; 水田, 1989)。

²⁹ 参考資料6参照。

³⁰ ベイゴム・ジャーノム (Beigom Jān Khānom) はハーッジー・サーデク (Hājji Sādeq Qazvīnī) の娘でファトフ・アリー・シャーの36人目の妃。シャーとの間に3人の王子をもうけた (*Mīnūdar*: 363)。

ロクノッドウレの任期は前半が約 16 年³¹、後半が約 11 年³²、あわせて約 27 年あまりとなる。また、彼がガズヴィーンを離れた 1 年あまり³³は、ファトフ・アリー・シャーの第 1 2 子にあたるエマーム・ヴェルディー・ミールザー (Emām Verdī Mīrzā Īlkhānī) が第 3 代知事を務めている。彼はロクノッドウレの同腹の弟で、その代理という立場で赴任していた。つまり、この 1 年あまりの間も、ロクノッドウレの間接的な影響下にあった期間といっただろう³⁴。

ロクノッドウレとガズヴィーンをつなぐは、その後彼の一族がガズヴィーンに定住して地元の名家となった点からもうかがえる。彼自身もガズヴィーンに埋葬され、一族はロクニーエ家 (Rokniye) として都市社会に根付いていくこととなった³⁵。

ロクノッドウレの長い任期の中で、首都から何人もの廷臣がガズヴィーンに派遣され、彼の補佐を務めている³⁶。中でもガズヴィーンの都市構成に大きな影響を与えたのが、ホセイン・ハーン・サルダール (Mohammad Hosein Khān Sardār Qazvīnī, 1737/8 or 1740, A. H.1150 年頃～1829/30, A.H.1245 年) と、ハサン・ハーン・サルダール (Hasan Khān Sardār Khān Bābā Khān Sārī Aslān, 不明 - 1854/5, A.H.1271 年) の兄弟である³⁷。彼らは共同で 1 軒のモスク・マドラサ複合体を創建し、大規模なアーブ・アンバールを 2 軒創建することで、ガズヴィーンの都市構成の充実に貢献した。建造物の創建には莫大な投資を必要とすることから、彼らのような大きな力を持った存在がガズヴィーンに一時拠点を置いたことは、変化を引き起こす契機となったのである。

この兄弟の派遣の背景には、イラン・ロシア戦争と頻発する国内の反乱があり、ガズヴィーンにはテヘラン＝タブリーズ間の中継地としての役割が求められていた。サルダール兄弟とガズヴィーンとの関係は、兄のホセイン・ハーンが 1800 年から 1802 年の間 (初代知事の時代)、テヘラン＝ガズヴィーン間の街道警護のためガズヴィーンに配属されたことから始まった。彼は、その後第一次イラン・ロシア戦争で活躍し、1806/7 (A.H.1221) 年にはイエレヴァンの軍司令官 (sardār) に任命されている³⁸。

³¹ 1807 年 4/5 月 - 1823 年 6/7 月以前 (A.H.1222 年サファル月 - 1238 年シャッヴァール月以前)。

³² 1823/4 - 1834/5 (A.H.1239-1250) 年

³³ 1823 年 6/7 月以前 - 1823/4 年 (A.H.1238 年シャッヴァール月以前 - A.H.1239 年)

³⁴ その任期は前半・後半をあわせると四半世紀を超えており、ガズヴィーン of 歴代知事の中で最長である。

³⁵ ロクノッドウレは地元有力者の娘を何人か娶り、28 人の子供 (息子 14 名、娘 14 名) をもうけている (Nāsekh ol-Tavārīkh: 281, Mīnūdar: 364)。また、ナーセロドディー・シャーが第 1 回訪欧旅行のためにガズヴィーンに來訪した際、ご機嫌伺いに來た名士の中にロクノッドウレの子孫の姿を確認していることから (Nāser od-Dīn Shāh I: 10)、その後もガズヴィーンの名家として栄えていたことが分かる。

³⁶ *Sīmā*: 257- 263.

³⁷ 2 人の父はモハンマド・ホセイン・ハーン (Mohammad Hosein Khān Sardār Qājār) で、ファトフ・アリー・シャーの重臣であり、彼の娘を妻に迎え、更に自分の娘を皇太子アッパース・ミールザーに嫁がせている。そのため、彼ら兄弟はガージャール王家とは姻戚関係にある。

³⁸ 彼はイエレヴァンに拠点を置き、積極的にモスクや商館などを建造してワクフすることによって、富と名声を得た (Bournoutian, 1976: 163-165)。

そして弟のハサン・ハーンは、1820/1 (A.H.1236) 年からロクノッドウレの側近 (pīshkār) として副知事を務めた³⁹。サルダール兄弟の創建とされる建造物は、ホセイン・ハーンがイエレヴァンで活躍している時期から創建が始まっており、ハサン・ハーンが副知事になる数年前に完成している。つまり、これらの建造物によってサルダール兄弟に富と名声がもたらされ、弟の副知事としての赴任が決定したのではないかと考えられるのである。ガズヴィーンにおいてサルダールの名を冠して創建された建造物は、いずれも碑銘でこの兄弟の創建であると確認できるため、兄がガズヴィーンとの関わりを持った頃から弟の任期にかけて、連続的に当地との関わりがあったことを示している。

(2) : ガズヴィーンの再発展とアーブ・アンバールの充実

ザンド期からモハンマド期にかけて、ガズヴィーンでの重要なアーブ・アンバール 15 軒のうち、実に 9 軒が創建されている (第 3 章表 2 参照)。その創建年代を見ると、ファトフ・アリー期からモハンマド期にあたる 1810 年代から 1840 年代の 30 年間に、ガズヴィーンで集中的にアーブ・アンバールの建設が行われていたことが分かる。そして最も多くの建造が記録されるのは 1809/10 年から 1819/20 年の約 10 年間である。この時期は、第一次イラン・ロシア戦争の後半から次の戦争までの戦間期、そして、ガズヴィーンの前代知事の中で最長の任期を誇るロクノッドウレの時代にあたる。

ロクノッドウレの統治期間には主要なアーブ・アンバールのうち、6 軒が創建されているが、そのほとんどが壮麗な装飾が施され、貯水槽自体も大きい物件である。そして、この時期に特徴的であったのが、ガズヴィーンで水不足に悩まされる南部、南西部の街区に大規模なアーブ・アンバールが創建されたことである。特に先述のサルダール兄弟が創建した、サルダール・ゴムラーク (図 1 : 10) とサルダール・ラーフ・レイ (図 1 : 14) のアーブ・アンバールは、それぞれの街区の水不足を解消するためにその場所を選んで建てられたものである⁴⁰

後者は外装がなされないまま工事が終了してしまったため、前者のような壮麗な造りにはならなかった。ゴルリーズはこれを、サルダール兄弟が何らかの理由のために資金不足に陥り、工事がストップしたためと推察している⁴¹。しかし、パフラヴィー朝期に市役所主導で 2 回も修繕が行われていることから⁴²、貯水槽自体は機能しており、当該街区の水利に重要な役割を果たしていたことがわかる。

³⁹ Bargī: 96.

⁴⁰ 1810 年 6 月 (ロクノッドウレの任期の前半部) にガズヴィーンを訪れたモーリアは、副知事のセイエド・アリー・ハーン (Seyyed 'Alī Khān) からガズヴィーンの諸状況について知らされており、水が乏しく大変貴重なものであったと伝えられている (Morier: 203)。

⁴¹ Mīnūdar: 317.

⁴² Mīnūdar: 317.

サルダール・ゴムラークのアーブ・アンバールの碑文は、他の碑文と異なり、創建者であるサルダール兄弟を讃える、長い詩篇となっているのが特徴的である。これらは正門上部に、3 辺を囲むようにしてナスターリク体にて刻まれている。碑文から読み取れることは、このアーブ・アンバールが、サルダール兄弟の威光を示すために作られたものであるということ。同時にロシア・イラン戦争の必勝祈願を名目として建てられたものであるということである。

ガズヴィーンの他のアーブ・アンバールの碑文は、創建者もしくは修繕者については、1 篇か 2 篇程度詩の中に読み込まれる程度である。それに比べてこの碑文は、14 篇のうち 5 篇が創建者を讃えるものとなっている⁴³。また、何度も天国の泉や川が引き合いに出され、ガズヴィーンを持つラカブである「天国の門 (bāb ol-Jannat)」を連想させる造りとなっている。また、善行が強調されていることから、このアーブ・アンバールがワクフされたことが読み取れる。サルダール兄弟は、このアーブ・アンバールの他に、前述のモスク・マドラサ複合体も創建し、これらのワクフ財として 12 軒の店舗を設定している。これらはナーセリー期にも機能していたことが確認されている⁴⁴。このことから、サルダール兄弟が、南部の貧しい街区に発展の基盤を形成したことで、そこを中心に当該街区が活性化していたことが分かる。

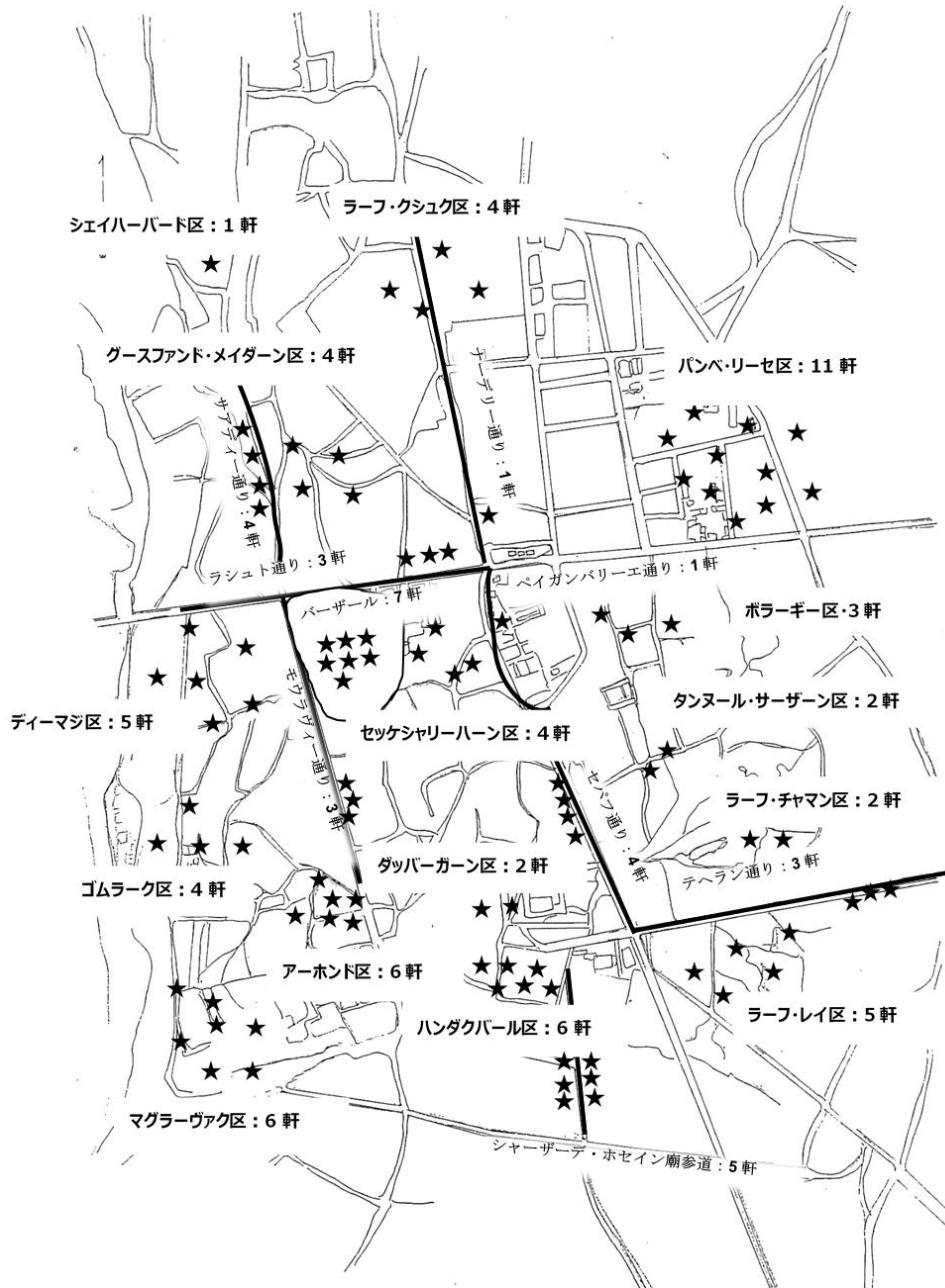
アーブ・アンバールは貯水施設であるため、基本的に水利用施設の付属施設として創建される場合が多い。しかし、このサルダールの 2 軒のアーブ・アンバールを含め、ハーッジ・カーゼム (図 1 : 18) やハキーム (図 1 : 16) のアーブ・アンバールは、単体で創建されている物件である。これらのアーブ・アンバールは、大きく作られ壮麗な装飾を施されている。特徴的なのは、これらのアーブ・アンバールが付属施設としてではなく、アーブ・アンバール単体で創建されているという点である。これは、周辺住民のための生活用水となることを第一目的として置かれたためである。これらのほとんどが町の南側の街区に建てられていることから、水不足の街区においてアーブ・アンバールが重要な役割を果たしていたことが分かる。

ここで所在が確認されている 106 軒のアーブ・アンバールの分布をみてみたい。ガズヴィーンの分布を概念化したのが図 2 である。

⁴³ 巻末資料 5 を参照。

⁴⁴ *Mīnūdar*: 433, 440-441; *Sīmā*: 789; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380a): 58.

図 2: ガズヴィーンのアーブ・アンバル分布概念図⁴⁵



この分布で目立つのは、7軒建てられているバーザール区域と、11軒立てられているパンベ・リーセ区である。前者については、バーザールという人の往来が多い場所であることと、周辺にモスクやマドラサといった水利用施設も多いことがその理由であろう。更に、バーザールの基軸であるモウラヴィー通りとそこから北に延びるサアディー通りは、シャ

⁴⁵ *Mīnūdar*: 320-323; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 409-418 より筆者作成。立地がはっきりしているものはその地点に★印をつけている。ほとんどのアーブ・アンバルが「○○区」、「○○通り」といったあいまいなアドレスしか書かれていないため、その場合は該当する場所の中心にまとめて印をつけてある。

一のガナートが流れてくる場所でもある⁴⁶。この2つの通りの周辺に建てられたアーブ・アンバールを合わせると、この周辺には少なくとも14軒以上のアーブ・アンバールが建てられていたことが分かる。バーザールという比較的狭い区域の中に複数のアーブ・アンバールが集中的に建てられていることから、この周辺には小型の物件が多かったと考えられる。

パンベ・リーセ区に関しては、給水するのがハートゥーニーのガナート1本であったため他の地域よりも数が多くなっていると考えられる。また、パンベ・リーセ区自体がガズヴィーンの高級住宅地であって、裕福な世帯が集中する区域であることから、他の街区と比べて水利用の頻度が高い場所であったことも理由の一つとして考えられる。

また、水不足の多い西側から南側にかけの街区も平均して5・6軒のアーブ・アンバールが建てられており、街区の範囲に比べてアーブ・アンバールの数が多いことが分かる。また、西南のゴムラク区とマグラーヴァク区、東南のラフ・レイ区にはそれぞれサルダールの2軒のアーブ・アンバールとハーッジ・カーゼムのアーブ・アンバールという、大型のアーブ・アンバールが建てられている。このことは、ガズヴィーンの南部の水不足解消のために、アーブ・アンバールが欠かせない存在であったことを示している。

水利用の面から見ると、人が集まるシャーザーデ・ホセイン廟から大会衆モスク周辺にかけても、アーブ・アンバールが集中するのは当然のことと考えられる。また、この区域がナーセリー期にメフマーンハーネのコンプレックス（後述）が創建され、更に水需要の増した場所であることも理由の一つであろう。

このように、ガズヴィーンのアーブ・アンバールは、水利用の多いバーザールやモスクなどの施設周辺、またガナートの本数が少ない場所に加え、水不足の街区に多く建てられていたことが分かる。そして、これらは、水利用の多い施設周辺の物件は付属型で小規模なものが、水不足の区域のものは単体で大型のものが作られる傾向があったのである。しかし、ガズヴィーンの水需要の増加は、再発展による定住人口の増加だけに促された現象ではない。この背景には、それ以外に、ガズヴィーンを往来する人口が急増したことを受けていると考えられる。この往来の活発化は、ナーセリー期に街道の整備事業が興り、都市間交通が活性化した影響を受けている。では、何故都市間交通の再整備がガズヴィーンの都市構成に影響を与えるに至ったのか。この点については、次節の後半で考察していきたい。

⁴⁶ 第3章第1節第1項(2)を参照。

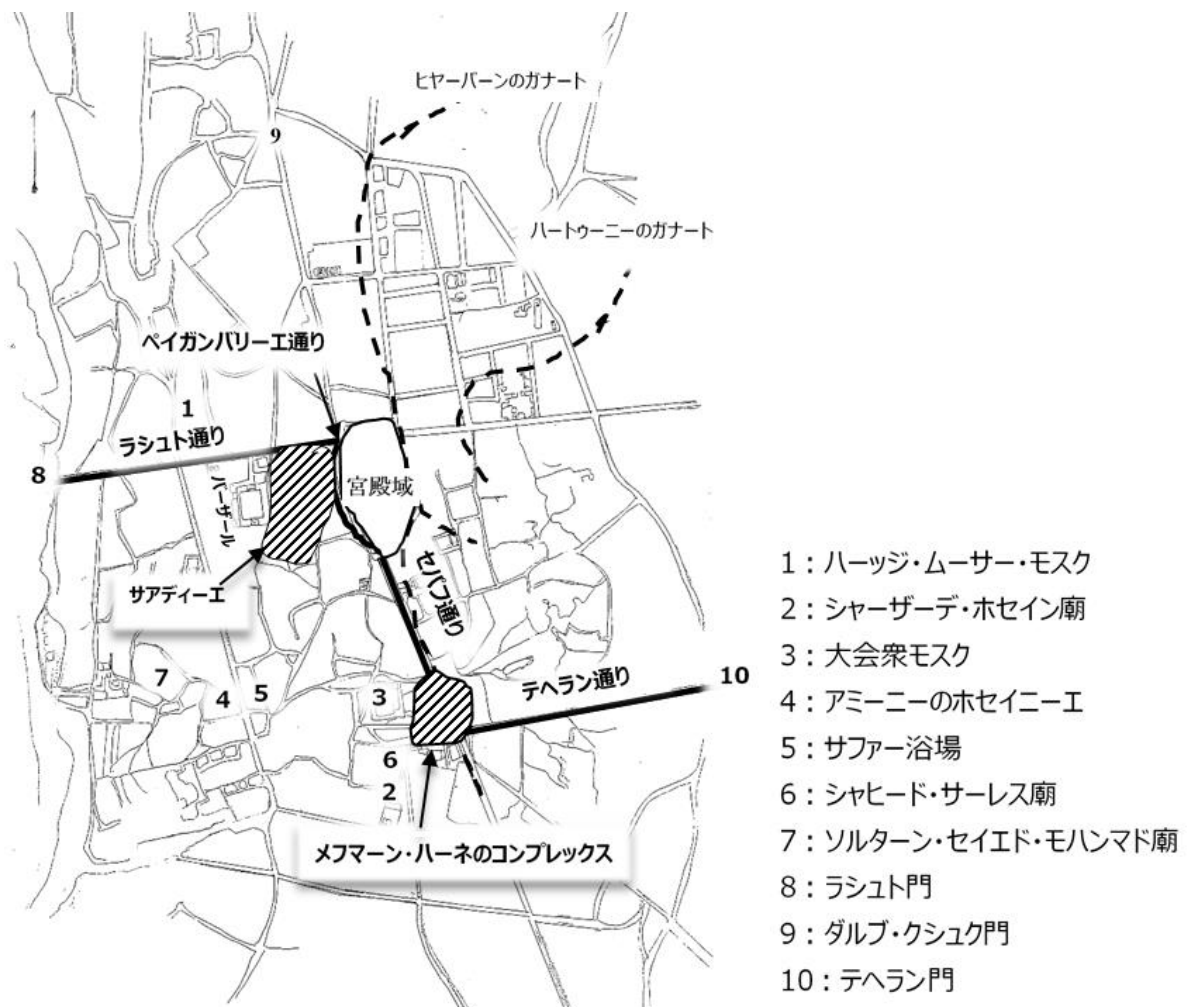
第2節：都市内交通の整備と都市変容

第1項：ナーセリー期の都市変容

(1) 宗教関連施設の動向

ナーセリー期に入ると、宗教関連施設の創建は減少傾向となる。モスクの創建に関しては、ハーッジ・ムーサー・モスク (masjed-e Hājji Mūsā, 図3:1) 以外に確認することができない。一方で修繕事業はそれまでの時代と同じかそれ以上に行われていたようである。大会衆モスク (図3:3) やシャーザーデ・ホセイン廟 (図3:2) などの主要な施設の修繕が行われていることから、財政的には安定していたことが分かる。

図3：ナーセリー期のガズヴィーン概念図⁴⁷



シャーザーデ・ホセイン廟の修繕は、1873/4 (A.H.1293) 年にアミーニー家のモハンマド・バーゲル (Mohammad Bāqer Amīnī) によって、ハラムのイーワーンと墓廟が修繕さ

⁴⁷ 筆者作成。

れ、建物内部にも鏡細工が施された⁴⁸。そして、サアドッサルタネ (Bāqer Khān Sartīp Sa‘d os-Saltane, ?- 1907/8, A.H.1325 年) によって、1889/90 (A.H.1307) 年に北側のイーワーンを含めた前庭が、1895/6 (A.H.1313) 年には聖者廟そのものが改築されている⁴⁹。

シャーザーデ・ホセイン廟とサアドッサルタネの関わりは深く、街道整備事業の責任者としてガズヴィーンにやってきた頃からワクフ財関係の係争に関わっていたことが記録されている。シャーザーデ・ホセイン廟に関する文書の中で、サアドッサルタネに関連するものは 5 編残されている。そのうちの 4 編が知事就任以前の 1887 年 6 月頃から 1888 年 7 月頃にかけて作成されたもの⁵⁰、残りの 1 編が、知事就任後の 1889 年 9 月頃に作成された文書⁵¹である。これらの文書は全てシャンスダグ村 (qarye-ye Shansdaq) をワクフ財として定める旨の文書である。同じような文書が 5 編も存在するのは、再三の通告にも関わらず、この村に関して寄進がうまく進んでいなかったことを示している⁵²。

シャーザーデ・ホセイン廟以外の施設との関わりに関しては、前述のサアドッサルタネのテキエもこの時期の創建であったと考えられるが、場所を確認することができない。恐らく、彼の拠点であり、人の集まる場であるサアディーエ (後述) の中に設けられたものと考えられる。

ホセイニーエは、アミーニーのホセイニーエ (hoseinīye-ye Amīnīhā, 図 3 : 4) が新設された。これは、ガズヴィーンの有名な商人であるハーჯジー・レザー (Hājji Razā-ye Amīnī) によって、アミーニー家の個人邸宅として建てられたものである。そして、1885 (A.H. 1303) 年にワクフに設定され⁵³、イランの中でも有数の壮麗なホセイニーエに数えられるようになった⁵⁴。しかし、このホセイニーエは、ハーჯジー・レザーがこのワクフの相続割り当て (sahm ol-ers) や管理を自身の一族に設定しており、その後もアミーニー家の管理下にあった⁵⁵。つまり、このホセイニーエは、厳密に言えば世俗的建造物の類に属する建造物であったと考えられる。

⁴⁸ *Bargī*: 32; *Mīnūdar*: 695-696.

⁴⁹ *Bargī*: 32; *Mīnūdar*: 691-692; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 428.

⁵⁰ 1 編目: 1887 年 6/7 月 (A.H.1304 年シャッヴァール月), *Bargī*: (130), 386-387.

2 編目: 1887 年 7/8 月 (A.H.1304 年ズイーガッデ月), *Bargī*: (131), 387-388.

3 編目: 1888 年 6 月 24 日 (A.H.1305 年シャッヴァール月 14 日), *Bargī*: (132), 389-390.

4 編目: 1888 年 7 月 4 日 (A.H.1305 年シャッヴァール月 24 日), *Bargī*: (133), 390-392.

いずれもサアドッサルタネが知事に就任する以前で、18 代目知事アッラー・ゴリー・ハーン・イールハーニーのピーシュカールとして副知事を務めていた時代に作成されたものである。

⁵¹ 5 編目: 1889 年 9/10 月 (A.H.1307 年サファル月), *Bargī*: (135), 394-395.

⁵² *Sīmā*: 364-365.

⁵³ 郷土史研究家のヌーモハンマディによれば、このコンプレックスがホセイニーエとされた背景には、シャーによる接收を回避する目的があったものとされる。シャーがガズヴィーンに立ち寄った折、この豪華な邸宅を目にして大変気に入ったため、上納するよう申し入れたが、自身の邸宅を奪われることを避けようとしたハーჯジー・レザー・アミーニー自身が、邸宅をまるごとホセイニーエとしてイマーム・ホセインへの寄進財としてしまったのである。この出来事は、一地方の商人一族が、シャーへの恭順を示さないレベルにまで、力をつけていたことを示す好例であるとも考えられる。

⁵⁴ Calmard (2012).

⁵⁵ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 455.

(2) 水利施設の動向

ガズヴィーンにおけるガナートの新設はザンド朝期のみで、ガージェール朝期においては、修繕事業の方が盛んであった。記録が残されているのは、ナーセリー期に行われた次の3件の工事である。まず、1875 (A.H.1292) 年に王族のアフマド・ミールザー (Shāh-zād e Ahmad Mīrzā) によって、セパフ通りを給水するヒヤーバーンのガナートが修繕された。次に、1883 (A.H.1301) 年にミールザー・アボルガーセム (Mīrzā Abo-l-Qāsem Tabīb) によって、パンベ・リーセ区を給水するハートゥーニーのガナートの修繕がなされた。このガナートは、後にミールザー・エスマーイール・ハーン (Mīrzā Esmā'il Khān Vakīl or-Ro'āyā) にも修繕されている。両方ともガズヴィーンにとっては重要な区域を給水する重要なガナートである (第3章: 図2, 2・3参照)。特に後者は勃興期にモウラー・ヴェルディー・ハーンにも修繕されていることから、特に重要なガナートであったことが分かる。

また、この時期のアーブ・アンバールについては創建の動向はつかめない。管見の限りでは、主要なアーブ・アンバールは全てナーセリー期以前に創建が終わっている。しかし、人口調査時の記録とパフラヴィー期の市役所のリストを比較すると、明らかに後者の数が多い⁵⁶。これには2つの可能性が考えられる。1つは、人口調査時に記録されなかったアーブ・アンバールが多数存在するということである。もう1つは、人口調査以降にアーブ・アンバールの創建があったということである。全体的な傾向を見ると、どちらかといえば前者の可能性の方が高い。しかし、アーブ・アンバールは何らかの水利用施設の創建・修繕に伴って新設・修繕されることの多い施設である。このことから、人口調査以降に創建された建造物に対してアーブ・アンバールが設けられた可能性も否定することはできない。

いずれにせよ、パフラヴィー朝までの間に、106軒のアーブ・アンバールが建てられ、それが利用され続けていたということだけは確かである。このアーブ・アンバールの多さには、ガズヴィーンという都市が長年かけて水不足と戦い、その弱点を乗り越えて都市として存続してきた努力を見て取ることができよう。

(3) 商業関連施設の動向

ナーセリー期では、ガズヴィーンのパラザール空間に変容が起こる。これは、サアドッサルタネによって、ラシュト通りからパラザールにつながる商業空間が創出されたためである。この商業空間は、サアディーエ (Sa'dīye, 図4) と呼ばれ商業コンプレックスで、ガズヴィーンの伝統的なパラザールに連結させる形で新設されたものである。これは、宮殿域の西端のサアダーターバード庭園の廃墟を利用して創建された。ここからシャー・モスクまでの区域を利用して、東側に自身の邸宅を、そこからパラザールに向けて1軒の屋根付きパラザールと1軒のパラザールチェを設け、更にパラザールを利用する商人のための

⁵⁶ 市役所のリストには106軒 (参考資料2 (5))、人口調査では51軒のアーブ・アンバールが記録されている (Mīnūdar: 320-323, 440-441; Dabīrsiyāqī, A.P.1381: 409-418; Idem, A.P.1380a)

7つ商館と1軒の公衆浴場を創建した。これらの建物は互いに連結し、一つのコンプレックスとなっていた。そしてこのコンプレックスの一番西側の商館と、ガズヴィーンのパーズールが連結されたのである。このコンプレックスはサアドッサルタネの称号をとってサアディーエと名づけられた⁵⁷。

ガズヴィーンのパーズールはラシュト通りからモウラヴィー通りに沿って南に入り込む形で発達しており、商館群もこのモウラヴィー通りの中ほどから東方面、すなわちパーズールに入り込む場所に建てられていたため、ラシュト通りとの連結は悪かった。そこにこのサアディーエが設置されたことにより、パーズールとラシュト通りを連結する導線が増え、人と物の流れをより加速することに繋がったのではないかと考えられる。

図 4：ガズヴィーンのパーズール概念図⁵⁸



⁵⁷ *Mīnūdar*: 293.

⁵⁸ 文化芸術省調査報告・1021; *Mīnūdar*: 295-296 より筆者作成。

(4) 世俗的建造物の動向

ナーセリー期になると、ガズヴィーンには世俗的建造物を始め、改革事業の影響を受けた事業が増加する。列挙すると、宮殿域の修繕・改築、壮麗な個人邸宅の創建、テヘラン門及びテヘラン街道の整備、メフマーンハーネのコンプレックスの創建、セパフ通りの整備、ペイガンバリーエ通りの創建、ラシュト通り及びラシュト門の整備の設置である。いずれも列強からの影響や改革事業の影響を受けて行われた事業であるのがこの時代の特徴である。

まず、宮殿域の修繕であるが、ここは、1879年以降にサアドッサルタネによって行われたものがある。この時、チェヘル・ソトゥーン宮殿、ナーデリー庭、ロクニーエ庭を始め、ほとんどの建物・庭園が修繕された。建物の内装もシャンデリアをはじめとした豪華な調度品と家具が新調されている。第3回訪欧旅行時に立ち寄ったシャーの日記によれば、「このガズヴィーンは、あの【かつての】ガズヴィーンではない。2年前ここに来たときと全く違うのだ。実際にアーガー・バーゲル【サアドッサルタネ】が魔法を使ったかのようだ」⁵⁹とある。シャーの寝所となったチェヘル・ソトゥーン宮殿内も、豪華な調度品で飾り立てられていた他、上階の居室には菓子や果物の他に、数々の贈り物が並べられ、絢爛な様子であった。第2回訪欧旅行時にはさびれていたはずのガズヴィーンが⁶⁰、この約10年の間にまるで「新設 (nou-sāzī) したかの如く」⁶¹に修繕されていたのである。

個人邸宅に関しては、アミーニー家のホセイニーエが、モウラヴィー通りの西側の敷地に創建されている (図3:4)。先述の通り、これはアミーニー家の邸宅である⁶²。この邸宅のメインの建物となったのは3棟のターラールで、その南北に中庭を作り、アーホンドのガナートをこの庭園内に引き込んだ⁶³。このターラールは大変美しく豪勢な装飾が施されていた⁶⁴。また、モウラヴィー通りを挟んで向かい側のバーザールチェにあったハーッジ・モハンマド・ラヒーム浴場を、使用人用に改築した。そのため、この浴場もアミーニーのホセイニーエのコンプレックスの中に入れることができるだろう。浴場はサファー浴場 (hammām-e Safā, 図3:5) と呼ばれ、男女別2棟の浴室を備えた立派な造りとなっている。そして、男性用の方が女性用のものの倍ほどの大きさに造られていた。この浴場は、パフラヴィー期まで経営されていた浴場のうち、最上の浴場であったといわれている⁶⁵。

⁵⁹ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 47.

⁶⁰ *Nāser od-Dīn Shāh II*: 3-4.

⁶¹ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 47.

⁶² *Mīnūdar*: 655-658; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 455-456.

⁶³ 北の中庭はパフラヴィー期に小学校設立の用地とされている。南の中庭は北のものよりも規模が大きく、中央に園地が設えられ美しい庭園となっていた (*Mīnūdar*: 656)。

⁶⁴ 第1次世界大戦時にロシア兵による破壊などもあったものの、現在まで建物は保存され、ガズヴィーン随一の美しさといわれた漆喰細工、鏡細工、ステンドグラス、上げ下げ窓 (orosī) といった豪華な装飾が残されている (*Mīnūdar*: 657-658)。

⁶⁵ *Mīnūdar*: 324-235; この浴場は現在観光用に改装されて喫茶店となっている。また、アミーニー家はその後パフラヴィー朝期にもガズヴィーンの公共施設建設に尽力しており、公衆衛生関連の機関が

これ以外の工事は全てテヘラン＝ガズヴィーン街道の整備に関連して興されたものである。この中で、テヘラン門及びテヘラン街道の整備、メフマーンハーネ及びコンプレックスの創建、セパフ通りの整備、ペイガンバリーエ通りの創建、ラシュト通り及びラシュト門の整備は、街道とガズヴィーン市内の交通をつなげる事業であった（図 3：斜線部と太線）。これら全ての事業に関わったのが、当時、同街道整備事業の監督官であったサアドッサルタネであった。

第 2 項：幹線道路整備と関連事業の影響

(1) テヘラン＝ガズヴィーン街道と都市間交通

ガズヴィーンの都市変容のきっかけとなった、テヘラン＝ガズヴィーン街道の重要性については、既に第 1 章第 3 節で述べた通りである。ここでは、この時成立した都市間交通の概要と、それがガズヴィーンに与えた影響について見ていきたい。

テヘラン＝ガズヴィーン街道の整備事業の全行程は次の通りである。まず 1878 年 7/8 月（A.H.1295 年シャアバーン月）にガズヴィーン街道と宿場建設の命令が發布された。そしてこの時、同時にメフマーンハーネ（*mehmānkhāne*）⁶⁶の建設命令も出されていた⁶⁷。この一大事業がナーセロドゥイーニ・シャーの関心を強く受けていたことは、1878 年 11 月 26 日（A.H.1295 年ズィーハッジェ月 1 日）に、シャー自ら建設途中の街道を視察したことからもうかがえる。工事はテヘラン方面から順次進められ、1879 年 5 月 24 日（A.H. 1296 年ジョマーダーII月 2 日）にガズヴィーンに到達している。その後、他の施設の創建や街道の駅通の整備なども含め、約 10 年の歳月をかけ、1888 年に全工程を完了した⁶⁸。この工事により、安全な馬車での往来が可能となり、今まで 2 日かかっていた行程が、一気に 12 時間にまで短縮された⁶⁹。北街道の要であるテヘラン＝ガズヴィーン間の移動が高速化は、イラン北部の都市関係に、大きな変化をもたらしたものと考えられる。

この街道がガズヴィーンに到達した翌年にあたる 1880 年に、日本の吉田正春使節団がこの街道を通過してガズヴィーンを訪れている。吉田は 12 月 30 日の午前 9 時ごろにテヘランの西門にあたるガズヴィーン門から馬車で出発した。この時、シャーの特命が各駅通に伝えられており、一行は快適な旅を約束されていた⁷⁰。このことはこの街道の連絡網・命令

集中したフェルドゥースィー通りに、病院とそれ専用の浴場（*hammām-e Amīnī*）を創建した（*Mīn ūdar*: 823-824）

⁶⁶ ガズヴィーンのマフマーンハーネ（*mehmānkhāne-ye Qazvīn*）、王立のマフマーンハーネ（*mehmānkhāne-ye Doulatī*）などと呼ばれる。マフマーンハーネ自体は宿場を指す言葉であるが、このマフマーンハーネは、従来のものと異なり、2 階に迎賓館の機能を持つ新しい時代を象徴する建造物であるため、本論文でこの建物を扱う場合、訳出をせず、マフマーンハーネで呼称を統一する。

⁶⁷ *Ma'āther va Āthār*: 77.

⁶⁸ *Parhīzkārī* (A.P.1386): 45-48.

⁶⁹ *Parhīzkārī* (A.P.1386): 19-20.

⁷⁰ 波斯之旅: 178-179.

系統がうまく機能していたことを示している。また、彼らがテヘラン入りする前に通り過ぎてきたイラン南部の街道が大変な悪路で、駅通もほとんど機能していなかったことと比較すると、このテヘラン＝ガズヴィーン街道の整備は充実していたようである。

テヘランから街道に出ると「一直線の大道坦然としてガズビーンに達し、その間埃樹参差として蔭を成し、両辺の耕地も南方においてかつて見ざるの殷阜なり」⁷¹とある。街道の両脇に農地が広がっていたことから、街道整備に伴って周辺の灌漑がおこなわれていたことが分かる。同様の記述は同行者の古川宣誉の記述にも見られる。古川によれば、この街道は「其幅七八間【約 12～14 メートル】⁷²許両側ニ小溝ヲ穿チ數里間直ニシテ平恰モ砥ノ如ク修造尤モカヲ盡シタル者ナリ」⁷³と記されており、広く舗装された道路がずっと続いていた様子が示されている。この広く真っ直ぐに舗装されるという特徴は、馬車での往来や馬車同士のすれ違いや追い越しを可能としたため、人とモノの流れの加速化に大きく貢献した要素であるといえる⁷⁴。

吉田正春の一行は、テヘラン出発から 3 時間後に、一つ目の駅通であるシャーハーバード (Shāh Ābād) に到着している。記録には「この駅館は欧州風にして臥床椅子卓子等整列せり。国王が欧州に巡幸させられし折にこの道途駅館はすべて改築せられたるものなりとぞ」⁷⁵とある。ここからは、シャーが訪欧旅行の前後に、その欧風趣味の一環でこの駅館が改装されたことが読み取れる。他の駅通もすべて欧風に設えられおり⁷⁶、この駅通が整備された当時にシャーの西洋化への意欲が高まっていた様子が読み取れる。また、この街道について、古川はテヘラン出発の際に見送りに来たアミーノルモルク (Mīrzā Esmā'īl Amīn ol-Molk, 1867-98, A.H.1284 - 1316 年) に「将来の道途は尋常ペルシャの道途を以って見る事勿れと。国費を抛ってその功奏せしや知るべし」⁷⁷と伝えられていた。ここからも、この街道整備がその後の全土に及ぶ街道整備の先駆けであり、アミーノッソルターンを中心とした勢力が、イラン全土の幹線道路整備に力を入れていたことがうかがえる。

ちなみに、一行が通過した 5 年後の 1885 年に同じ街道を通ったファラーハーニーは、テヘラン＝シャーハーバード間にかかる時間は平均で 1 時間半から 1 時間 40 分程度であったと記録している。そして、そこで馬を代えるのに 20 分かかることから、駅通間にかかる移動時間は 2 時間程度であると述べた⁷⁸。

また、この 16 年後にあたる 1896 年に同じ街道を通った福島安正は、8 月 1 日の午後 3 時 30 分に馬車にてテヘランを出発し、途中の駅通で宿泊せずに夜通し走り続け、翌日午前

⁷¹ 波斯之旅: 179-180.

⁷² 尺貫法では 1 メートル = 0.55 間なので、 $7 \div 0.55 = 12.7272\dots$ 、 $8 \div 0.55 = 14.5454\dots$ となる。

⁷³ 古川紀行: 258.

⁷⁴ 現代日本の道路でも、13 メートル以上は 4 車線用の道路となるため、この道路が広めのものであったことが分かる。

⁷⁵ 波斯之旅: 180.

⁷⁶ 波斯之旅: 180.

⁷⁷ 波斯之旅: 180.

⁷⁸ Elton & Farmayan (ed. & tr.) (1990): 3-5.

7時20分にガズヴィーンに到着している。全行程は約16時間であり、途中で駅通が5駅あることを考えると、1区間凡そ3時間かかる計算となる。

話を吉田一行に戻すと、彼らはヤンギー・エマーム (Yanghī Emām) の駅通にある隊商宿に一泊し、翌日の12月31日午後4時ガズヴィーンに到着している。つまり、この時期、特に急ぐ旅でもなければ、テヘラン＝ガズヴィーン間は、大体中間の駅通で1泊して2日かけて到達するのが普通であったようだ。

吉田は、この街道整備が行き届いていた様子に満足を覚えていたようで、次のような感想を残している。「強霸の政は毫も人民に利なし言う能わず、如何となればこの道途は一人の国王が旅行のために造られたるものとはいえ、またこれあればこそ過ぎ行く旅客余らの如きも愉快に宿泊をなすことを得たり」⁷⁹この吉田の記述からは、この時のテヘラン＝ガズヴィーン街道の整備は、国を挙げての近代化事業というよりは、国王の意向によるものと捉えられていたことが読み取れる。しかし、吉田が続けるように、その事業によって街道が広くまっすぐに設えられたことは、人と物の往来を活発化させることにつながったといえる。

このテヘラン＝ガズヴィーン街道とメフマーンハーネの監督はガズヴィーンの市政とは別とされ、全てサアドッサルタネの管轄とされていた⁸⁰。そのため、この事業の総監督であったサアドッサルタネが力をつけ安い環境であったことは確かである。このメフマーンハーネはサアドッサルタネがガズヴィーンを去るまで、彼の本拠地の一つとして機能していた。1888年にメフマーンハーネに滞在したファラーハーニーは、そこの監督者 (modīr) がミールザーアブドゥッラー (Mīrzā‘Abd-ollāh) であったと記している。彼はサアドッサルタネの息子の一人である。このことから、彼が知事職に就いた後も、メフマーンハーネを自身の影響下においていたことがうかがえる⁸¹。

また、ホサーモッサルタネがヤンギー・エマームの商館において書いた覚書にも、彼の影響力の大きさを見ることができる。この記録は1894年10月18日 (A.H.1312年ラビーI月17日)のもので、サアドッサルタネ再びガズヴィーン知事職を手に入れたことについて書かれたものである。そこには「この【ヤンギー・エマームの】商館はガズヴィーンの知事、バーゲル・ハーン・サアドッサルタネの手にある。この道は作られた当初より現在に至るまで彼の手中にあった。もし他の誰かを知事にしようと望んだならば、直ちに彼は道を放置して、馬、馬車、そこにあるものは何でも取り払ってしまうだろう。道は公道であり、特に外国の大使たちや大臣たちが通行しなければならぬので、再び彼自身に統治を委ねざるを得ない。ホサーモッサルタネが知事となり、6ヶ月以上続かなかつたように、道のことを考えて、再びサアドッサルタネに【知事職が】与えられた」⁸²とある。

⁷⁹ 波斯之旅: 180.

⁸⁰ Parhīzkārī (A.P.1386): 132.

⁸¹ Elton & Farmayan (ed.&tr.) (1990): 11-12.

⁸² Mīnūdar: 370 参照。

ここから、街道上の駅通も事実上サアドッサルタネの管理下にあったことが分かる。また、この街道が単なる都市間道路ではなく、テヘランをイラン北西部とヨーロッパにつながる重要道路であったことも大きかった。街道の駅通を統括し、その要であるガズヴィーンを抑えているサアドッサルタネがこの地域で大きな影響力を有していたことがうかがえる。そして、その権勢が彼のガズヴィーンにおける権力に直結していた。そして彼の勢いは現職の知事を凌ぐほどであり⁸³、「舗装道路と宿場の監督者は彼であるとはいえ、ある意味で自分勝手に振舞う知事であった」⁸⁴と評されるほどであった。

では、このメフマーンハーネとは一体どのようなものであり、ガズヴィーンの都市変容にどのように関わっていたのか。次項で確認していきたい。

(2) メフマーンハーネと都市内交通

メフマーンハーネのコンプレックスは、テヘラン＝ガズヴィーン街道からテヘラン門をくぐり、テヘラン通りを直進した先に建てられている（図3：10とそこから延びる太線）。すなわち、テヘラン方面からガズヴィーンを訪れた者が初めて目にし、テヘラン方面へ出発する者が最後に目にするのがこのメフマーンハーネのコンプレックスなのである。この立地からも、コンプレックスが都市間交通と都市内交通の結節点となっていたことが分かるだろう。

このメフマーンハーネは、テヘランから進められていた街道の整備がガズヴィーンに到達した後、1879年10/11月（A.H.1296年ズィーガッデ月）に着工した。そして、1880年1月19日（A.H.1297年サファル月6日）に完成している。そして、敷地内に街道管理のための様々な建造物を建造し、コンプレックスとなっていた。

⁸³ 当時の知事モルク・アーラーは、メフマーンハーネとサアドッサルタネについて次のように書き残している。「街区のメフマーンハーネは町の暴徒ども全ての逃げ場であった。私が罰しようと望んでいたところのどの有罪者たちもここに逃げ込んでしまうと、もはや私の力は及ばなくなってしまうのであった。宿場が放埒なものであるので、そこでは酒は無料で振舞われ、あらゆる種類の放蕩のもととなるものが存在する。アーガー・バーゲル【サアドッサルタネ】は望むことを何でも行っていた」（*Molk Ārā*: 163）。

⁸⁴ 事実上の知事（*hākem-e esteqbāl*）といっぴはつきりと知事（*hākem*）という単語を出して嘆いている。そして、サアドッサルタネの権力の背景について、次の3つの理由が背景にあったと指摘している。一つ目は「街道の護衛兵の200の騎兵から成る護衛隊は彼に預けられているのであり、知事【サアドッサルタネ】の奴隷たちはあらゆる方面に30人もいたから」（*Molk Ārā*: 162）である。街道護衛兵の指揮権の他に、子飼いの部下が存在していた事実を挙げており、ガズヴィーンにおいて、彼が実質的な軍勢力を有していたことを指摘している。

そして、2番目の理由として「4,000ハルヴァールであったのだが、政府所管の穀物はそのほとんどを強奪されており、彼の管理下にあった。王領地（*khālese*）の穀物であれば2ゲラーンから3ゲラーンの手数料を払ったが、地主の穀物であれば、地所の地主の所から荷を積み、町で受け取って、そして1ゲラーンの手数料も払わなかった。例えば3トマンの価値のある小麦があったとすると、彼はパン屋に5トマンで渡した。徴税吏の力で金を奪った」（*Molk Ārā*: 162）と述べている。これは、ガズヴィーンにおける徴税に関する一切を彼が取り仕切っていたことを示している。第3の理由は、「軍事資金が彼の管理下にあったこと」を挙げ、軍事関連の資金を着服していたからであると述べている（*Molk Ārā*: 162-163）。

このコンプレックスは、官衙 (*majmū‘e-ye doulatī*) と呼びならわされる複合施設であった⁸⁵。これらは、政庁関係のコンプレックスと呼ぶには小規模であり、足りない要素も多いが、サアドッサルタネの台頭時期から知事の任期にかけて、ここを自らの拠点の一つとしていたことから、一時期はガズヴィーンのもう一つの政治の中心地と機能していた。そのため、サアドッサルタネがガズヴィーンに滞在していた時期に限っては、このコンプレックスは官衙と呼んでも差し支えない存在であった。

このコンプレックスは、テヘラン通りの西端とセパフ通りの南端が重なる地点に、約 500 m²の敷地を利用して創建されている。そして、メフマーンハーネは敷地の北部に建てられていた (図 5 : 1)。これは 2 階建ての建物で、1 階部分が宿場、2 階部分に迎賓の間 (*tālār*) を備えた当時としては新しい造りをしていました。この建物は、隊商の宿泊所や取引所を兼ねた商館とは区別されており、来賓や外国人旅行者の宿泊や接待を視野に入れた近代的なホテルに近い物であった。そのため、このガズヴィーンにおけるメフマーンハーネが、イランにおける西洋式のホテルの始まりであるといわれている⁸⁶。

そして、同じ敷地内に次の建造物が建てられていた。それは、馬車管理場 (*doroshkehāne, kāleskehāne*, 図 5 : 2)、駅通 (*postkhāne, chāpārkhāne*, 図 5 : 3)、電信局 (*telegrāfkhāne*, 図 5 : 4)、馬車修理工場 (*kārkhāne-ye kāleskesāzī*, 図 5 : 5)、街道守備隊詰所 (*pāsdārkhāne*, 図 5 : 6)、税関 (*gomrokkhāne*, 図 5 : 7) である。これらは互いに連結してコンプレックスとなっていた。これらは全て街道の流通と安全を支える重要な建造物であった。このことから、コンプレックスの創建が、街道整備と共に人とモノの流れを加速化する意図を持った画期的なプロジェクトであったことがうかがえる。

馬車管理場は、中庭を取り巻くように建物があり、従来の宿場の機能を有していた。この建造物は、メフマーンハーネの中庭の南面と繋がっていることから、しばしばメフマーンハーネの一部としてもとらえられてきた。しかし、この 2 棟はそれぞれ出入口が分かれており、別々の機能を有した独立の機関であった。ちなみに馬車管理場への出入口は東側のテヘラン通りに面する方面にあり、メフマーンハーネの出入口はセパフ通りの側にあった⁸⁷。そして、ここには軽馬車 (*doroshke*)、箱馬車 (*kāleske*)、荷馬車 (*gārī*)、馬 (*asb*)

⁸⁵ このメフマーンハーネには正式な名称があるわけではなく、様々な呼称が存在する。代表的なものは上述の官衙の名称以外に次の 3 つが挙げられる。ガズヴィーンのマフマーンハーネ (*mehmānkhāne-ye Qazvin*)、王立のマフマーンハーネ (*mehmānkhāne-ye doulatī*)、サアドッサルタネのマフマーンハーネ (*mehmānkhāne-ye Sa‘d os-Saltane*) である。前者 2 つは、立地と設立の経緯から付いた呼称だと考えられる。最後のものは、サアドッサルタネの尽力による創建であるという事実だけでなく、彼がこのメフマーンハーネを自身の本拠地としていたためであると考えられる。本論文では混乱を避けるため、メフマーンハーネのコンプレックスで表記を統一し、適宜、官衙の表記を用いることとする。

⁸⁶ この時、テヘランにもフランス資本によって同様のホテルが建てられたが、規模や豪華さの面でガズヴィーンのものの方がよりホテルに近い物であったといわれる (*Parhīzkārī, A.P.1386: 19-20*)。

⁸⁷ ホサーモッサルタネによれば「馬小屋 (*tavīle*) と馬車管理場の入口は西、もう一方はパフラヴィー【セパフ】通り、アーリー・ガーブー方面であった」とある (*Parhīzkārī, A.P.1386: 31-32* 参照)。

が常備され、旅人と荷物の運輸を取り仕切る事務所が設置されていた⁸⁸。そして創業当時は、20台以上の上等な馬車が常設されていたようである⁸⁹。

図 5：メフマーンハーネ概念図⁹⁰



次に駅逓は、コンプレックスの中で最もテヘラン街道に近い区画に建てられていた。これは、ガズヴィーン＝テヘラン間の人・モノ・情報の流れを統括する重要な場所であったためと考えられる。そして、ここを起点として、コンプレックス内の各施設へアクセスできたため、この場所が街道管理のためのメインの事務所として機能してきたものと考えられる⁹¹。駅逓の役割は、郵便の中継ぎと駅馬車の提供によって、人とモノの流れを迅速にすることと、郵便・配送による物資・情報のやりとりを担うこと、隊商宿を管理して宿泊・取引の場を設けること、街道間の警備のための拠点を設けることなどが挙げられる。ガズヴィーンの駅逓は当地が中継する街道の全ての業務を監督するセンターのような位置づけであったと考えられる。

電信局に関しては詳細が分かるような文献が残されていない。分かっているのは、メフマーンハーネに近接していた点⁹²、インド・ヨーロッパ電信会社の管理下にあり、テヘラン＝タブリーズ・ラインの中継局であったという点である⁹³。しかし、これはガズヴィーンで初の電信局ではなかった。1859年の段階でイラン主導の電信線がテヘラン＝ソルターンニ

⁸⁸ Parhīzkārī (A.P.1386): 32-34.

⁸⁹ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 49.

⁹⁰ Parhīzkārī (A.P.1386): 37-38 より筆者作成。

⁹¹ *Mīnūdar*: 786-787.

⁹² Elton & Farmayan (ed. & tr.) (1990): 11.

⁹³ Parhīzkārī (1996/7, A.P.1386): 34.

エ間に開通しており、ガズヴィーンにも支局が置かれていたのである⁹⁴。つまり、このコンプレックス内に創建されたのは、インド・ヨーロッパ電信会社の支局であった。これは、同社主導の下、1880年代にイラン全土に広がった電信による通信網の中にガズヴィーンが組み込まれたことを意味している。

また、税関に関しても、電信局同様に記録が残されておらず、このコンプレックスの南の方に建てられていたということしか分かっていない⁹⁵。

そして、街道守備隊の詰所は、馬車管理場の北側、メフマーンハーネの南側に位置していたことが分かっている。ここは、テヘラン＝ガズヴィーン街道の治安維持を任された200騎の街道守備騎兵隊の駐屯所として機能していた。常に人がいて、馬車管理場や他の建物に出入りをしていたとのことである。この詰所と使用人詰所（*farrāshkhāne*、図5:9）は官衙内の独立した建物で、いずれもサアドッサルタネの管理下にあった⁹⁶。そして、官衙内で最も重要なメフマーンハーネの建物と、貨物・情報の取り扱いをする場である馬車管理場の結節点に位置していることから、これらの護衛と共に、ガズヴィーンを往来する人・物・情報を監視する役割があったことが伺える。そして、これらの街道守備隊と使用人はサアドッサルタネの私兵であったことから（後述）、彼がコンプレックス内に軍事力を保有していたということが分かる。

では、これらのコンプレックスがガズヴィーンの都市構成にどのような影響を与えたかについて見ていきたい。重要であったのは、このコンプレックスがテヘランとつながる都市間街道とガズヴィーンの宮殿域へつながるメイン・ストリートとの結節点に建てられたということである。このコンプレックスの出現は、ガズヴィーンの中に情報・流通・取引・迎賓・宿泊といった複合的な交流の場が設けられたことを意味していた。更に、サアドッサルタネの拠点であったことから、ガズヴィーンにおいて新たに政治・軍事的な拠点が出現したことも意味している。

コンプレックスの北面にあるメフマーンハーネは、イラン北西部を往来する王族や政府の役人が集まる場となっていた。御幸の際も、ここはお付きの外国人医師・秘書の居所とされていたように⁹⁷、シャーにとっても外国人に対し、自国の近代的な一面を披露する場となっていたと考えられる。迎賓の間はメフマーンハーネの上階に位置し、そのバルコニーに出ると、北西には大会衆モスク、正面にセパフ通りと宮殿城南門のアーリー・ガープ

⁹⁴ 例えば、1878年4月8日（A.H.1295年ラビーII月5日）、第2次訪欧旅行でガズヴィーンに立ち寄ったナーセロドディーン・シャーは、当地でテヘランからの電信を受け取っている（*Nāser od-Dīn Shāh II*: 3）。

⁹⁵ *Parhīzkārī* (A.P.1386): 35-36.

⁹⁶ Elton & Farmayan (ed. & tr.) (1990): 11; *Molk Ārā*: 162; *Parhīzkārī* (A.P.1386): 34-35.

⁹⁷ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 49.

一門を一望することができる。このことから、このコンプレックスが、この時期のガズヴィーンで最も景観のよい場所に建てられていたことが分かる⁹⁸。

ナーセロディーン・シャーも何度かこのメフマーンハーネを訪れている。特に印象的であったのが 1889 年 4 月 18 日 (A.H.1306 年シャアッバーン月 17 日) の記録である。この時、シャーは第 3 次訪欧旅行のためにガズヴィーンに滞在していたのだが、その 2 日目の夜、これまでの功績が称えられ、サアドッサルタネにその称号とガズヴィーンの知事職が授けられたのである。そしてその祝賀行事としてセパフ通りを中心に灯火行事 (ガス灯によるイルミネーション) と花火が行われたのである⁹⁹。シャーは初めこの様子をアーリー・ガープー門の前で見学し、続いて門の 2 階部分に上がって眺めた。その時、セパフ通りの先に見えるメフマーンハーネが大変煌びやかに輝いているのを見て興味を惹かれ、そのまま少数のお付きの者と共にメフマーンハーネに見学に出かけたのである¹⁰⁰。

その様子をシャーは日記の中に「メフマーンハーネのシャンデリアは素晴らしい灯りであって、まるで光の川のようにであった。実際大変に素晴らしく明かりが灯されていて、まるでヨーロッパのシャンデリアのようであった」¹⁰¹と記している。シャンデリアは、シャーが好んで当世風の建造物に取り入れた要素であり、何度も繰り返される賛辞からも、シャーがこのメフマーンハーネのイルミネーションを大変気に入ったことが読み取れる。

シャーはそのままメフマーンハーネ上階の迎賓の間に登り、多くの菓子、果物、贈り物などが並べられた贅沢な空間に腰を下ろし、しばし従僕たちとオレンジを食し、水タバコ (qalyān) を吸うなどしてくつろいだ後、馬車管理場の馬車を 3 台借りて宮殿に戻った。シャーはこのメフマーンハーネに関して「本当に、このメフマーンハーネはとても素晴らしい建物である。このようなメフマーンハーネは、ヨーロッパでも僅かしか見たことがない」¹⁰²と最上の賛辞を送っている。この出来事がシャーの 3 回目の訪欧旅行の途上であり、ヨーロッパ見学を心待ちにするシャーから出た感想であることを考えると、異例の賛辞であったと考えられる。

⁹⁸ 先述の吉田正春一行も、1880 年の大晦日にこのメフマーンハーネに宿泊し、この 2 階を貸し切って、年越しをしている (波斯之旅: 203-204)。

⁹⁹ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 48-49; 同日の記録は、シャーに随行していたエエテマードッサルタネの日記にも見ることができる「今夜はガズヴィーンの灯火行事【ランタンによる祝祭】である。バーゲル・ハーンにサアドッサルタネのラカブが授けられたからである。このバーゲル・ハーンは故アミーノッソルターン【Āqā Ebrāhīm】と妻方で縁戚関係がある。(欠落) いずれにしても第 1 次訪欧旅行においては、アミーノッソルターンの料理人であった。そして私は彼【サアドッサルタネ】に拝謁の許可を与えなかったものだ」 (*Rūznāme E'temād os-Saltane*: 633-634)。この記述からは、サアドッサルタネへ対する嫌悪感が読み取れる一方で、第一次訪欧旅行 (1873 年) からの 16 年あまりの間に出世したこと、アミーノッソルターンの一族と婚姻関係を結んだことも示されている。つまり、サアドッサルタネの出世の裏に、アミーノッソルターンという強大な権力者が存在していたことを示唆しているのである。

¹⁰⁰ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 48-49.

¹⁰¹ *Nāser od-Dīn Shāh III*: 49.

¹⁰² *Nāser od-Dīn Shāh III*: 49.

コンプレックスの出現は、ガズヴィーンに新しく求心性のある場が出現したことを意味していた。そして、これらの施設をつなぐ工事が行われていたことが、ガズヴィーンの都市構成に大きな変容をもたらした。サアドッサルタネがまず取りかかったのは、テヘラン街道との結節点となる東の大門と、そこからメフマーンハーネまで続く大通りの整備である。大門は元々テヘラン方面への出入り口であったため、テヘラン門と呼ばれていた。しかし、この時期には舗装道路門 (*dervāze-ye Rāh-e Shose*) とも呼ばれていたようである¹⁰³。これは、に伴って大幅に修繕されたことにちなんでいる。そして、テヘラン門からメフマーンハーネまでまっすぐに伸びるテヘラン通りを創建した。テヘラン通りは、両側に樹木が植えられ、馬車での往来を可能とするように平らにそして広く整備された。これによって、テヘラン＝ガズヴィーン街道という都市間交通が都市内部までスムーズに入り込む導線が出来上がったのである。

1880年の大晦日にガズヴィーンに到着した吉田も、このテヘラン通りの様子を「新道は城の正門より切り開き、その広袤六、七十曲尺状に府庁に達す。その途上は砂礫を敷き、両側に風楊の樹木を培植せり」¹⁰⁴と記している。ここからも、テヘラン＝ガズヴィーン街道から都市内に入る際に、テヘラン門からテヘラン通りを通過して、メフマーンハーネに突き当たってから、直角に曲がり、宮殿域に向かうというルートが出来ていたことが分かる。この16年後に同じ場所を通った福島も「東門内街路廣潤、珍しく両側に並木を見る」とテヘラン通りが変わらずに壮麗であったことを記録している¹⁰⁵。

次に行われたのは、メフマーンハーネのコンプレックスと宮殿域をつなぐセパフ通りの再整備である。セパフ通りはサファヴィー朝期に整備された目抜き通りであるが、これを馬車の往来が可能となるように更に幅広く、平らな道へと再整備した。更に、メイン・ストリートとして恥ずかしくないよう、北端にあるアーリー・ガープー門の前に池を設え、通りの両脇には木陰を作るための植樹と大樹への水遣りを徹底した。そして、街灯も設置している¹⁰⁶。このガス燈が、サアドッサルタネがそのラクブを授かった日の灯火行事で灯されたものである。このように再整備されたセパフ通りとイルミネーションは、メフマーンハーネに滞在するシャーやガージャール朝の高官たち、外国の使節らに対して、ガズヴィーンの繁栄を披露する役割も果たしていたのである。

この時、大通りの拡張のために、ガズヴィーンの南東部の街区が再整備された。そして、王の宿場、王の広場、ハリーフェ・ソルターンのマドラサのような、サファヴィー朝期に重要であった建造物が多く取り壊された¹⁰⁷。これは、伝統的な都市構成を受け継ぎながら、その中で建造物の創建・修繕を繰り返すという都市発展の流れを変える出来事であった。

¹⁰³ Elton & Farmayan (ed. & tr.) (1990): 14.

¹⁰⁴ 波斯之旅：203.

¹⁰⁵ 福島紀行：96.

¹⁰⁶ *Mīnūdar*: 290.

¹⁰⁷ *Mīnūdar*: 645-646; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 568.

更に伝統的な街区構成を取り壊し、細く入り組んだ袋小路を取り除いて広くまっすぐな大通りに変容させたという意味でも、これは象徴的な出来事であった。

都市内交通の変容は更に続いた。これまでガズヴィーンの宮殿域とバーザールとは、隣接する小路や、大会衆モスク裏の小路などを通してつながっていた。これを、宮殿域の西側の小路を大通りに改築することで、セパフ通りからラシュト通りへと抜ける主要道路を創出したのである。工事の時期は、サアディーエの創建と同時期と考えられる。この大通りは、ペイガンバリーエ通りと名付けられ、現在までこの名称で親しまれる重要な通りとなった。これにより、セパフ通りとラシュト通りという、政治・宗教・文化の中心と商業の中心をスムーズにつなぐ人とモノの流れが出来上がったのである。更に、テヘラン門からテヘラン通り、メフマーンハーネを經由してセパフ通りからペイガンバリーエ通りを抜けて、ラシュト通り、そしてラシュト門からイラン北西部へ広がる都市間交通へとつながる導線が完成したのである（図3：太線）。

このように、メフマーンハーネのコンプレックスとそれに関する事業は、ガズヴィーンの都市構成に変容をもたらし、そのトポグラフィに大きな影響を与えることになった。サアドッサルタネの事業は、テヘラン＝タブリーズ、あるいは、テヘラン＝ラシュトという街道にそった人と物の流れに沿って、町の中もこの流れがスムーズ行われることを意図して施工されたものと考えられる。

この時、メフマーンハーネからセパフ通りに曲がることなくこれを迂回して町の東南方面からラシュト通りへ抜けるアクセス道路を作る計画があったが、これはアミーニー家のハーッジー・レザーとの抗争を呼び、最終的に頓挫している。サアドッサルタネが大通りを創建しようとしていたルート上に、先述のアミーニー家のホセイニーエが建っていたことから、両者の間に衝突が起こったためである¹⁰⁸。

(3) 都市社会の変容

ガズヴィーンは、サアドッサルタネの尽力によって、テヘランとタブリーズあるいはラシュトとをつなぐ役割を強化するような形に都市が変容した。特にこれらを結ぶ街道にそった人とモノの流れが、街中をスムーズに通って抜けられるように道路を整備した点が大きな影響を及ぼした。そして、メイン・ストリートであるセパフ通りと都市間交通をつなぐテヘラン通りの結節点にメフマーンハーネのコンプレックスが置かれたことは、都市間交通と都市内交通の流れをより強固なものとしたと考えられる。そして、サアディーエを置

¹⁰⁸ サアドッサルタネは手下を使ってアミーニー家の邸宅を打ち壊そうとしたが、最終的にハーッジー・レザーの上奏によって失敗した。この抗争の際、両者はナーセロッディーン・シャーの御前に訴え出て仲裁を願い出た。この時期、サアドッサルタネは宮殿域の北部と東部、ハーッジー・レザーは西部の城壁の修繕事業を任されていたのだが、ハーッジー・レザーはそのことを持ち出して、サアドッサルタネが資材に安価な日干し煉瓦を利用する不正をしていたとシャーに暴露して勝訴している（*Sīmā*: 357-358）。

いたことで、古くからあるバーザールの機能がそこを經由して、この人とモノの流れにせり出す効果をもたらし、流通の面で合理化をもたらしたと考えられる。

個人の存在が一つの都市に影響をもたらすというのは、地方における近代化の進展に地方名士や篤志家の果たす役割が大きかったという観点から見れば、そう珍しいことではない。ただ、非西欧地域において、地方の近代化を担ったのが、近代教育を受けた新興のブルジョワ層であることを鑑みると、文盲かつ王朝の関係者というサアドッサルタネの立ち位置は特異なものであると考えられる¹⁰⁹。

ナーセリー期には、ガズヴィーンに 20 代、16 人の知事が派遣されたが¹¹⁰、交代が早く、時代が進むにつれガージャール王族だけでなく、地方の有力者や宮廷の高官の関係者なども知事職に就くなど、知事の出自や身分が変化してきている。これは、知事職の売官が進んでいたことが関係している。売官そのものがいつごろから盛んになったのかは不明である。だが、第 21 代知事のモルク・アーラーが自身の回顧録において、一切の賄賂 (pīshke sh) なくガズヴィーン統治の任命を受けたと述べていることから¹¹¹、少なくともナーセリー期の後期には地方統治職の売官は通例になっていたと考えられよう¹¹²。そして、続くモザッファリー期も同様であった。サアドッサルタネはこのような時代の流れに乗って、ガズヴィーン知事職を得たのである。

ガズヴィーンにおける中央集権化事推進の背景には、人による結びつきが存在していた。例えば、人口調査を命じたセパフサーラールはガズヴィーンニーのニスバ (nisba, 出自名) が示す通り、ガズヴィーンに縁のある人物であった。更にこの時期のガズヴィーン統治は、ナーセロディーン・シャーの異母兄弟である第 21 代目の知事モルク・アーラーに任されていた¹¹³。しかし、ガズヴィーンと王朝との繋がり自体は、ファトフ・アリー期に比べると弱まってきていたと考えられる。その大きな要因は、売官の進展によって、知事の

¹⁰⁹ サアドッサルタネは、アミーノッソルターン料理人 (āshpazī) から身を起こして知事にまで上り詰めた異色の人物である (*Sīmā*: 353-355) ; パームダードによれば、サアドッサルタネは若いころからアミーノッソルターンの有能な召使として寵愛を受けており、シャーの第 1 次訪欧旅行にも随行していた。文盲で無学ではあったが、非常に利口で有能な人物であったことから、後に出世してシャーの宮廷の側近の一人となり、次のような実入りの良い職務をいくつも兼任することで、経済的にも成功を取めた。その職務とは、ギーラーンとマーザンダラーンとカスピ海のいくつかの港の税関の管理、ガズヴィーン穀物関連の職務、王の配膳室と水のみ場の担当、ターロムの知事、ラシュトネシャーの知事、マジドドウレ (Amīr Aslān Khān Majd od-Doule) の没収された地所の管理。これに加えて、ガズヴィーン街道の護衛隊の騎馬隊長職、ガズヴィーン舗装道路の監督、ガズヴィーン統治、そして知事職にあった時代にゴムの舗装道路 (テヘラン=ゴム道) も彼の仕事となっている (*Bāmdād*, vol.1: 181-184)。

¹¹⁰ モハンマド・タギー・ミールザー (Mohammad Taqī Mīrzā Rokn od-Doule) だけは、他地域との兼任でガズヴィーンに常駐していなかったため、タバータバーイーは知事として記録していない (*Ta bātabā'ī*: 92) そのため、本論文でも彼を正式な知事としてカウントをすることを避けている。

¹¹¹ *Molk Ārā*: 158-159.

¹¹² 河田 (2006) : 62-63.

¹¹³ *Bargī*: 95-97. タバータバーイーによれば、この時期副知事は置かれず、知事の家臣であるミールザー・アブー・タラーブ・モスタシャール (Mīrzā Abū Tarāb MostaShāhr) が断続的に廷臣 (vazīr) として補佐を行っていた。その期間は、一度目が 1881/2 - 1882 (A.H.1299 - 1300)年、二度目が 1884/5 - 1885/6 (A.H.1301 - 1302)年、三度目が 1892/3 (A.H.1310)年 (*Sīmā*: 340 - 341) であった。

任命が王朝の意図を反映するものから変容したためである。現にモルク・アーラーの回顧録からも、この時期に地方の知事職の売官が進展していたことが読み取れる¹¹⁴。そして先述のとおり、この時期になるとたとえガージャール王族、シャーの兄弟であったとしても、知事になる際は官職を得るために取引をする必要があった。つまり、血族を通して地方を統治するというファトフ・アリー期の政策そのものが、ナーセリー期に至るまでに変容していたのである。

しかし、血族による統治の効力が薄まったとはいえ、中央の意向が地方統治に反映されなかったわけではない。1885/6年（A.H.1303年）の内政改革委員会の設置から始まった税制改革は、中央政府をトップとした徴税体制を構築する意向で進められた。この影響で、それまで地元出身の行政官に一任されていた徴税や地方財政の統括が、中央から派遣された知事へと移る流れが生じた。この財政改革は部分的にしか実現しなかったといわれているが、中央統治と地方統治の結節点として、知事の重要性が高められたという影響をもたらした¹¹⁵。つまり、地元出身の都市行政官を統御しやすくなり、都市行政において、知事の影響力が増したといえるのである。

前述の通り、サアドッサルタネは舗装道路建設に関わる軍事力を背景に経済力を身に着け、知事を凌ぐ影響力を蓄えていた。サアドッサルタネが表舞台に登場するのは、1887/88（A.H.1305）年に副知事に任命されてからである。しかし、彼の勢力は既に第19代目の知事シャーザーデ・アズドッドウレ（Soltān Ahmad Mīrzā ‘Azd od-Doule）の任期中（1875/76 - 1879/80, A.H. 1292 - 1297年）に形成され始め、メフマーンハーネが完成する頃には、その影響力は既に知事を越えるになっていた¹¹⁶。

サアドッサルタネは全部で3回ガズヴィーンの知事職に就き¹¹⁷、その間、ガズヴィーンでは様々な変化・変容が起こった。彼のもたらした影響を要約すると、次の3点となる。まず、都市内の建造物の創建・修繕を通して都市内交通に変容をもたらした点。2点目は、サアドッサルタネがメフマーンハーネを自身の拠点としたことで、チェヘル・ソトゥーン宮殿以外の場所にもう一つの政治的中心地が生まれたこと。3点目は彼の存在とふるまい

¹¹⁴ *Molk Ārā*:158.

¹¹⁵ ラムトン (1978): 169-171.

¹¹⁶ *Sīmā*: 353; また、第3回訪欧旅行の際、シャーは、ガズヴィーン滞在中に当時副知事に過ぎなかったサアドッサルタネについて何度も言及するものの、当時の知事についてほとんど言及していない。例えば、大門で出迎えの人々の中にサアドッサルタネを見付け、彼が大変素晴らしい着物を着て立派な様子であったことを書き留めている。そして、2晩の滞在期間中、サアドッサルタネと彼によって変化した町の様子を、賞賛をもって書き記している（*Nāser od-Dīn Shāh III*: 47）。

¹¹⁷ 1回目：1889 - 1891/2 (A.H.1309)年、25代目知事として。2回目：1892年11/12月(A.H.1310年ジョマダーI月) - 1895/6(A.H.1313)年、27代目知事として。3回目：1895/6(A.H.1313) - 1896年10/11月 (A.H.1314年ジョマダーII月)。3回目については、モザッファロドディーン・シャーの即位と同時に知事職を解任されるもすぐに同じ地位に返り咲いている（*Sīmā*: 365）。バームダードなどでは再任までの期間がほとんどないため3回目として数えない（*Bāmdād*,1968/9, A.P. 1347, Vol.1: 181-184）。

によって、ウラマーや名士といったガズヴィーンの地元の勢力と対立するなど、都市社会に変化が起こされたことである。

これらの変化・変容は、イラン社会全体の流れの中であるいは王朝の政策によって引き起こされたものではなく、サアドッサルタネの強力なイニシアティブによって起こされたものである。ファトフ・アリー期のロクノッドウレの時代も同様に大きな変化・変容があったが、この時知事の背景にあったのは、王朝によるガズヴィーンへの注目と王室との血縁によるつながりがあった。これが、ナーセリー期においては、廷臣とのつながり、知事本人の経済力・軍事力へと変化している。特に、王室との血縁的なつながりが途切れたことで、より知事個人の意向が反映されることとなったと考えられる。

これは、第1章で述べたように、当時のイランには社会変革を担うような新興ブルジョワ階層が育ちにくい環境にあったことが影響していると考えられる。当時のイランは、外交的敗北や利権譲渡によって世界経済システムの最下層に位置付けられていく過程にあり、産業資本家が育ちにくい環境となっていた。この時社会変化をもたらせるだけの経済力を有していたのは、海外交易のネットワークを確立しようとしていた一部の商人層と、利権に絡む事業によって力をつけてきた宮廷の役人たちであった。サアドッサルタネは後者の部類に属するものである。特に彼の場合はアミーノッソルターンの関係者であったことから、ロシア権益との関連が強く、道路利権に絡む事業を経て力をつけてきた。ロシアとの関連から、イラン北西部交通の要であるガズヴィーンにおいて影響力を強めたのは当然の成り行きであったといえる。

サアドッサルタネにとってガズヴィーンは出身地ではなく、テヘラン＝ガズヴィーン街道の整備事業によって初めて関係をもった土地であった。つまり、郷土愛的な心性でもって当地に様々な変化をもたらしたとは考えにくい。彼の立場から考えると、流通の要であるガズヴィーンを、より合理的に流通を行える形に変容させるという視角で様々な事業を展開したと考える方が自然であろう。つまり、この時代の変化・変容は、ナーセリー期の改革の意向を背景に、サアドッサルタネ自身のイニシアティブを発揮する形で進められたものであるといえる。そのため、ガズヴィーンの都市社会、特に上流階級と折り合いが悪く、しばしば衝突を繰り返している¹¹⁸。そして、地元名士に先導された反乱によって、ガズヴィーンから追放されてしまったのである¹¹⁹。

サアドッサルタネが去ると、これまでに起こったの変化・変容は勢いを失っていくことになる。1899年にテヘラン＝ガズヴィーン街道を通った家永豊吉は、この街道の様子を「道路と云へ馬車と云ひ其の完備夫のクーム、テヘラン間のものに比しては悲惨と云ふの外な

¹¹⁸ ゴルリーズによれば、サアドッサルタネはしばしば名士たちの酒宴に乱入して賄賂を請求したり、シャーザーデ・ホセイン廟でのバストを無視したりなど、地元の有力者と対立するような行動をとっていた (*Mīnūdar*: 292-293)。

¹¹⁹ *Sīmā*: 365-367.

シテヘラン、ガズヴィーン間の道路は毫も興味のあるなし」¹²⁰と述べている。ここからは、テヘラン＝ガズヴィーン街道の管理が行き届いていなかったことが読み取れる。

また、拠点の一つであったメフマーンハーネには、既に荒廃の様子が見られるようになっていた。サアドッサルタネがガズヴィーンから離れた直後、1896年にガズヴィーンを訪れた福島フクシマの記録によれば、「馬糞堆積して臭気粉々、處々に疲馬を見る、すなわち喀斯温【ガズヴィーン】の驛站である」¹²¹と、既にこの時点で、馬車管理場も、王に相応しい立派な馬車が並んでいると賞賛されたかつての姿¹²²を失っていたようだ。

福島フクシマの記録からは、メフマーンハーネの荒廃具合も見る事ができる。特に用水に関しては滞っていたようで「館前一池を湛へられたが、水瀦して流れず、赤色の小蟲無数の浮游するを見る。但だ土人は革囊を擔ひ來つて此池水を汲み去り、盛に飲用に供しつゝありといふ。池邊一花園あつて、多く草木の植ゑられたる、想ふに經營の當時に於いては清麗なるものであつたであろうが、今は不潔見るに堪へぬ狀況である」¹²³とある。メフマーンハーネに池が設えられていたことはこの記録にしか見ることはできないが、既にこの時点で手入れがされていなかったこと、同様に中庭も荒廃していた様子を読み取れる。このメフマーンハーネのある地区はガズヴィーンカズヴィンの南、すなわち給水の滞る場所の一つである。そのため、コンプレックス内部の排水・貯水には細心の注意を必要としていたはずである。しかし、福島フクシマの記述からは、既にそれが不可能になっていたことが分かる。

福島フクシマはこのメフマーンハーネに一泊しているが、快適な宿泊とは言い難いものであったようである¹²⁴。これらの記録から、サアドッサルタネが去った直後から、メフマーンハーネの運営が滞っていたことが読み取れる。

また、セパフ通りの景観の一つであった大樹も、鳥が巣を作るからという理由で1908/9 (A.H.1326)年には伐採されてしまっている¹²⁵。このように、サアドッサルタネによって創建された都市における新しい要素は、彼が去ると失われてしまうものが多かった。しかし、テヘラン門から町中を通り、ラシュト門へと抜ける人とモノの流れが決定づけられたことは、後世のガズヴィーンカズヴィンに大きな影響を与えたと考えられる。そして、ガージャール朝末期になると、力を持った一個人による単発の事業から、意思を持った集団による連続した事業が生まれてくるようになるのである。

¹²⁰ 西亜細亜紀行：106.

¹²¹ 福島紀行：96.

¹²² *Nāser od-Dīn Shāh III*: 49.

¹²³ 福島紀行：96.

¹²⁴ 寝台が不潔で一睡もできず、喫茶しようにも変色した汚いサモワールで件の池の水を沸かしており、異臭がして飲めなかった。そして、翌日の朝食も羊肉と腐った卵しかなかったため、ほとんど食せなかったと記されている（福島紀行：97）

¹²⁵ *Mīnūdar*: 290.

第3節：都市社会の変化

第1項：ガージャール朝末期の都市構成

(1) 宗教関連施設・水利施設・商業関連施設の状況

ガージャール朝末期における宗教関連施設に関する事業は、創建ではなく修繕のみとなる。モスク単体の修繕は次の2軒である。1902/3 (A.H.1320) 年にハーッジ・キャリームによってラーフ・クシュク区のハーッジ・キャリーム・モスク (図6:①) が修繕された¹²⁶。そして、1912/3 (A.H.1331) 年から1913/4 (A.H.1332) 年にかけて、ハーッジ・メフディーと街区の住民によって、ハンダグバール区のメIMUMネ・モスク (masjed-e Maimūne, 図6:2) が修繕されている¹²⁷。また、マドラサ単体としては、1915/6 (A.H.1334) 年にボラーギー区のヘイダリーエのマドラサ (図6:3) に修繕が見られる¹²⁸。

モスク・マドラサ複合体については、1903年にセパフ通り東側のモスクが改築され、シェイホルエスラムによって、モスク・マドラサ (masjed-madrased-ye Sheikh ol-Eslām/Mas'ūdīye/Āqāsī, 図6:4) が創建されている。そして、このモスク・マドラサは、1912/3 (A.H.1331) 年に修繕が行われている。

また、シャーザーデ・ホセイン廟については、1900 (A.H.1318) 年にアミーニー家のモハンマド・アリー (Hājji Mohammad 'Alī Āqā-ye Amīnī) によってハラムのドームの外壁の修繕と化粧タイルの装飾工事が行われた。また、1905/6 (A.H.1323) 年に、シェイホルエスラムによって宮殿域西側のペイガンバリーエの墓廟が修繕されている。この時、シェイホルエスラムは、自身の墓を敷地の西側に建てた (図6:⑤)¹²⁹。

水利施設に関しては、1908/9 (A.H.1326) 年にラーフ・クシュク区のハーッジ・キャリームのアーブ・アンバールの修繕が行われたことが分かっている¹³⁰。これは、上記のハーッジ・キャリーム・モスクに連結されている (図6:①)。このモスクの修繕が行われた6年後に修繕されており、双方とも修繕者の名前と呼ばれていることから、この時の修繕が大規模な改築に近いものであったと考えられる。

商業関連施設については、記録がないため分かっていない。

¹²⁶ *Mīnūdar*: 597; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 594.

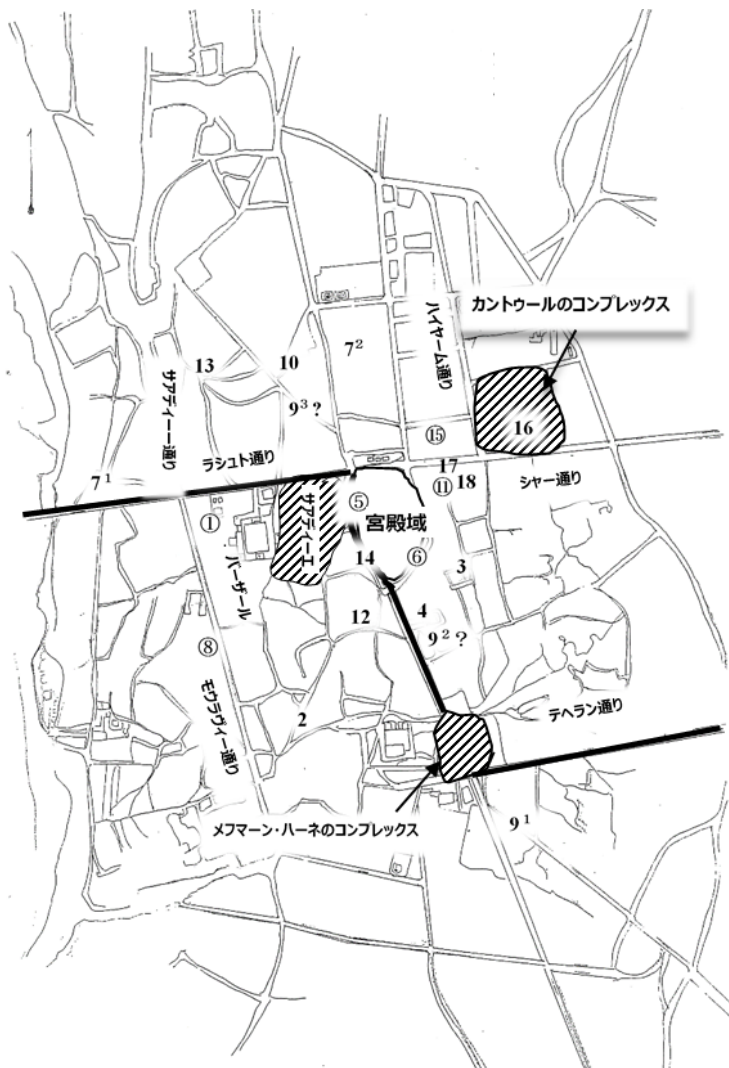
¹²⁷ *Mīnūdar*: 598; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 610.

¹²⁸ *Mīnūdar*: 604.

¹²⁹ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 432-422.

¹³⁰ *Mīnūdar*: 315.

図 6：ガージャール朝末期のガズヴィーン¹³¹



- ①：ハーッジ・キャリム・モスク、アーブ・アンバル
- 2：メイムネ・モスク？
- 3：ヘイダリーエのマドラサ
- 4：シェイホルエスラームのモスク・マドラサ
- ⑤：ペイガンバリー工廟、シェイホルエスラームの墓
- ⑥：オミード校・『オミード紙』事務所
- 7：エスラーミーエ校
- ⑧：ファルハング校・『ナスィーハット紙』事務所？
- 9：ドゥーシーゼガン校
- 10：ナームス校（女子校）？
- ⑪：タヴァッコル校（男子校・女子校）
- 12：シャムス（公立学校）
- 13：アダブ校（公立学校）
- 14：アリー出版・印刷所
- ⑮：アルメニア正教会・学校
- 16：ロシア正教会・学校
- 17：アダブ校（クルド人学校）
- 18：アッシリア正教会

(2) 世俗的建造物の増加

ガージャール朝後期に目立つのが世俗的建造物の増加である。特に目立つのが新式学校や出版・印刷所といった、新しい時代を象徴する建造物である。特に、新式学校は、新式教育の拠点として、これからのガズヴィーンを担う若い世代の教育の場となった。これらの学校は、ガズヴィーンの伝統的な教育を展開していた宗教勢力と拮抗する象徴的な場として都市社会の中に現れてきた。

ガージャール朝末期にガズヴィーンに建てられた新式学校は次の 11 校である。オミード校 (madrasede Omīd, 図 6 : ⑥)、サアードト校 (madrasede Sa'ādat)、エスラーミーエ校 (madrasede Eslāmīye, 図 6 : 7)、ファルハング校 (madrasede Farhang, 図 6 : ⑧)、ド

¹³¹ 筆者作成。

ウーシーゼガン校 (madrase-ye dūshīzegān, 図 6 : 9)、タヴァッコル男子校 (madrase-ye Tavakkol benīn, 図 6 : ⑩)、タヴァッコル女子校 (madrase-ye Tavakkol-e banāt, 図 6 : ⑪)、シャムス校 (madrase-ye Shams, 図 6 : 12)、アダブ校 (madrase-ye Adab, 図 6 : 13)、ナームース校 (madrase-ye Nāmūs)、オミード成人学級 (madrase-ye akābor-e Omīd) である。このうち立憲革命前に立てられたのはオミード校とサアーダト校の 2 校で、個人もしくは有志の団体によって創建されたのは最初の 7 校、政府によって創建されたのが後の 4 校であった¹³²。

出版・印刷所に関しても、上記の新式学校とのつながりが強い。立憲革命の際、ラシュトから印刷機がもたらされ、シェイフ・アボルガーセム (Āqā Sheikh Abū ol-Qāsem) によって、アリー出版・印刷所 (matba‘e-ye ‘Alī, 図 6 : 14) が設立された。これはガズヴィーンで初めての出版印刷所であり、アーリー・ガーパー門近くに創建されている¹³³。

また、アルメニア正教会の敷地にも、学校が建てられたのであるが、こちらもガズヴィーンの都市社会に影響を与えることとなった。このアルメニア学校 (madrase-ye Arāmene, Mollā Vārtāniyān, 図 6 : ⑬) は、アルメニア正教会員の尽力により、1903 年に設立されている。ダビールスィヤギーによれば、国際語と認識されていたフランス語の授業が行われていた¹³⁴。順番からすると、オミード校に続いてガズヴィーンで 2 番目に建てられた新式学校であるといえる。

また、ナーセリー期の後半から、イラン全土に近代化事業の影響を受けた建造物が増加していくが、ガズヴィーンにも同様の傾向が見られる。それは始め、改革事業の流れに沿って、王室主導の電信線や街道整備のような形で表れてきた。そして、1880 年にメフマーンハーネのコンプレックスにインド・ヨーロッパ電信会社の支局が置かれ、1890 年にペルシア帝国銀行 (New Oriental Banking Corporation) の支店が置かれるなど、次第に列強の拠点となるような建造物も置かれ始める。その中で、ガズヴィーンに大きな影響を与えたのは、1895 年にロシアの道路建設会社の事務所 (kāntūr, 図 6 : 北東部の斜線部) がパンベ・リーセ区に建てられたことであった。これは、ロシアの道路建設会社の拠点として置かれた事務所である¹³⁵。この事務所は、ガズヴィーンの高級住宅地であるパンベ・リーセ区の北部に構えられた。そして、ハートゥーニーのガナートの取水口を独占し、町の人が使えないように蓋をして周囲を柵で囲んでしまったために¹³⁶、東部の水利事情が変容してしまったのである。

¹³² Qāsemīpūyā (A.P.1377): 445-448; Mīnūdar: 621-626;

¹³³ Mīnūdar: 753-754; Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 454.

¹³⁴ Dabīrsiyāqī (A.P.1380b): 53.

¹³⁵ ロシアは、1893 年 6 月 5 日にガズヴィーン＝アンザリーの道路建設に関する利権を獲得しており、1895 年にはテヘラン＝ガズヴィーン間の舗装道路建設に関する利権も獲得され、アンザリー＝テヘラン道路会社とタブリーズ道路会社が設立された (Sīmā: 773)。

¹³⁶ Mīnūdar: 304-305.

この事務所は、教会や学校も含む複合施設として整備され、カントゥールのコンプレックス (majmū‘e-ye kāntūr) と呼ばれていた。そして、その中に建てられていたロシア人学校 (madrase-ye Rūs-hā, 図 6 : 16) も、ガズヴィーンに影響を与えた学校の一つである。正確な開校時期は分かっていないが、この学校で学んだマジド・ファテノッサルタネ (Majd Faten os-Saltane) によれば、4 クラス 30 人ほどの生徒がおり、半数がムスリム、半数がアルメニア正教徒の子供であった。また、言語、歴史、地理、数学が教えられていたとのことである¹³⁷。

また、このカントゥールのコンプレックスが置かれたシャー通りの周辺は、外国勢力やマイノリティ集団が集まるエリアとなっていたようである。先述のアルメニア教会のコンプレックスに加えて、1914/5 (A.P.1293) 年には地元在住のクルド人によって、サブゼ・メイダーンとハイヤム交差点の中間の位置にクルド人学校であるアダブ校 (madrase-ye Adab, 図 6 : 17) が創建された¹³⁸。そして、1915 年にはアッシリア教会 (Assyrian, 図 6 : 18) が、シャー通りを挟んでアルメニア正教会の向かいに建てられている¹³⁹。ここから、この時期には、かつての高級住宅地だったエリアが、外国人とマイノリティ集団が集まったり、近代的な教育を展開したりする場所となっていたと考えられるのである。

第 2 項：近代化事業の影響

(1) ガズヴィーンの識者の活躍

サアドッサルタネの時代に起こった都市変容は、彼の在任期間のみでその後収縮していったのだが、その後、中期的にガズヴィーンの都市変容を起こす主体が現れてきた。それが、ガズヴィーン教育協会を始めとした、地元有志の集まりである。これらは、立憲革命前最後の知事である第 31 代知事サーラーレ・アクラム (Mīrzā Sāleh Khān Baghmīshīeī Tabrizī, Sālār-e Akram, Vazīr-e Akram, Āsaf od-Doule) の招集をきっかけに発足し、その後のガズヴィーンの変革を支える主体へと成長していった。

サーラーレ・アクラムは、代々タブリーズの街区長を務める有力者一族の出身で、ナーセリー期、モザッファリー期の近代化事業の影響を受けた改革派官僚である¹⁴⁰。そして立憲革命前ガズヴィーンの知事を務めた最後の人物である。ヴァルジャーヴァンドによれば、

¹³⁷ *Sīmā*: 1795-1796; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380b): 57-58.

¹³⁸ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380b): 69.

¹³⁹ *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 549.

¹⁴⁰ タブリーズ時代には皇太子モザッファロディーン・ミールザーの従僕 (pīshkār) を務めつつ、モザッファリー士官学校にて教育を受け、近代的な軍事学に通じると共に、アラビア語、フランス語、ロシア語を理解しており、後にロシア遊学も果たしている。

1895/6 (A.H.1313)年から父の代理としてタブリーズの市政を任せられ、手腕を発揮した。特に、子供と失業した若者に手に職をつけさせるため絨毯織の工房を作ったことが大きな功績である。しかし、次代の皇太子アフマド・ミールザーとの折り合いが悪く、タブリーズを離れることになり、テヘランへと移動した。

サーラーレ・アクラムは、赴任するとすぐに地元の有識者や改革志向の有力者たちを集め、テヘランの教育教会を模してこの教育協会を設立した。この協会はテヘランと同様に、メンバーの私費によって運営されていたようである。そして、地元の有力者たちの手によって、新式学校を設立させることで、地元民による改革運動が広がるきっかけを作った。政府が教育や学校に関する援助を行わなかったため、政府主導で学校設立の始まる 1918/9 (A.H.1337) 年までは、こうした事業は地方の個人や有志の手によって行われていたのである。

ガズヴィーンでは、教育協会が発足した 1902 (A.H.1320) 年に、初の新式学校であるオミード校が設立されている。この時サーラーレ・アクラムによって、宮殿城南門のアーリー・ガープー門の東側区画が提供され、1 階建てで 4 部屋の校舎が新築された。この学校は、当地初の新式学校であるというだけでなく、その立地が非常に重要であった。テヘランでも宮殿域の北面にダーロールフォヌーン校が設立されて変革の中核を成した。これと同様に、ガズヴィーンでも、宮殿域の一區画であり、ガズヴィーンの目抜き通りであるセバフ通りに面した場所が開かれたのは、象徴的意味があった。

政府のため以外に宮殿域の敷地が利用されるのは、ガズヴィーン史上初めての出来事である。ナーセリー期の知事サアドッサルタネも、かつて宮殿域西側のサアータターバード庭園を改築しているが、これはあくまで廃墟となっていた区画を利用したものである。この度提供された区画は、宮殿の正門であり、町のメイン・ストリートに面する位置にあった。そのような町の中で最も目立つ場所に政務関連以外の施設が出現することは、この新式学校が政府の公認があることを暗に示すものであったことから、ガズヴィーン社会にとっては大きな衝撃をもたらしたものと考えられる。そして、この場所が、ガズヴィーンの最も古く重要な教育空間の一つであるヘイダリーエのモスク・マドラサに近接していたことも、ガズヴィーンの伝統的な宗教教育に対して大きな圧力を生んだと考えられる。

そのため、オミード校は創立当初から激しい反発を招き、立憲革命後までガズヴィーン都市社会に受け入れられることはなかった。初代校長は、協会員の一員であったモッラー・アリー (Mollā Alī Qāzī-ye Ardāqī) であったのだが、バーク教徒であるとみなされ、町の有力者の子弟の獲得が難しかったようである。モッラー・アリーは立憲革命の際に、革命家として逮捕・連行され¹⁴¹、1908/9 (A.H.1326) 年にマジドルコッターブ (Sheikh M ohammad Khoshnevīsī Chālī Majd ol-Kottāb) が 2 代目の校長に就任した。彼と息子のミールザー・アリー (Āqā Mīrzā 'Alī) の尽力により、次第に都市社会に受け入れられ始め、入学者が増加した。この時期には 4 名の教師が在籍していたことが分かっている¹⁴²。1918/9 (A.P.1297) 年の統計では、この学校は 7 クラスで、教師が 8 名、生徒が 126 名いたこと

¹⁴¹ *Sīmā*: 1790.

¹⁴² モハンマド・シャヒーディー (Mohammad Shahīdī)、モハンマド・ヘイリー (Mohammad Kheirī Pa jūheshgar Qazvīnī)、モハンマド・タギー (Mohammad Taqī Nourūzī)、アボルガーセム・ダーネシュ (Abū ol-Qāsem Dānesh) の 4 名 (*Sīmā*:1791)。

が確認されている。そして、1927 (A.P.1306) 年の統計では、教師が 7 名、生徒が 113 名、その他に授業料免除の生徒が 42 名いたことが確認されている¹⁴³。

また、オミード校創建後に、サーラーレ・アクラムが個人的に創建したサアードト校については資料が残されておらず、詳細は分からない¹⁴⁴。しかし、短期間に 2 校の新式学校が設立されたということは、この時期のガズヴィーンの都市社会に刺激を与える出来事であったと考えられる。

ガズヴィーンのエデュケーション協会はサーラーレ・アクラムが当地を離れた後も、ガズヴィーンの新式教育の普及に貢献した。むしろ、去った後に更に活動が広がったといった方がよいだろう。教育協会のメンバーである新式学校の校長たちは、ガズヴィーン社会変化を担った。1908/9 (A.H.1326) 年にオミード校の校長に就任したマジドルコッターブは、その人柄も相俟って人気を博し、評判の悪かったオミード校への人々の視線を緩和させ、生徒数を一気に増加させた¹⁴⁵。また、1909 年にガズヴィーンで 3 番目の新聞である「オミード (haft enāme-ye Omīd)」の編集長となり、教育だけでなくジャーナリズムの分野に進出した¹⁴⁶。同様にファルハング校の 3 代目の校長であり、同校の発展と生徒数増加に貢献したミールザー・ヤフヤー (Hojjat ol-Eslām Mīrzā Yahyā Vā‘ez Keivānī Qazvīnī) も、ガズヴィーンで 8 番目の新聞でとなる「ナスィーハト (haftenāme-ye Nasīhat)」紙の編集長となっている¹⁴⁷。

こうした活躍は、サーラーレ・アクラムが教育協会を設立して彼らを団結させたことから始まっている。テヘランのエデュケーション協会が勢力争いによって短期間で内部分裂したことを鑑みると、ガズヴィーンのエデュケーション協会は比較的まとまった動きをしていたものと考えられる。また、主催者が去った後もその活動が発展していったことから、この協会が有意義な組織であったことを示していると見てよいだろう。

教育協会の主導によって創建された新式学校は全部で 5 校である。そのうちの 2 校にあたる、タヴァッコル男子校と女子校については、統計以外の記録が残されておらず、詳細は分かっていない。シャー通りのクルド人学校とアッシリア教会の近くに位置していたこと、1905 (A.H.1323) 年に男子校が、その 6 年後の 1908/9 年 (A.H.1326) 年に女子校が建てられたことが分かっているだけである。1918/9 (A.P.1297) 年の統計では、この男子学校は 4 クラス、48 名の生徒がいたことが記録されている。そして、1927 (A.P.1306) 年の統計では、教師が 7 名、生徒が 34 名、その他に授業免除の生徒が 67 名いたことが分かって

¹⁴³ 続くパフラヴィー朝期にも、同校は重要な教育拠点の一つであった。学校の運営は、1941 年 8/9 月 (A.P.1320 年シャフラーヴァール月) までゴラーム・レザー・ハーン (Ghorām Rezā Khān Shams) に任されていたが、その後パフラヴィー小学校 (dabīrestān-e Pahlavī) に改名され、公立の初等教育の場となった (Qāsemīpūyā, A.P.1377: 445-446)。

¹⁴⁴ Qāsemīpūyā (A.P.1377): 446.

¹⁴⁵ Qāsemīpūyā (A.P.1377): 245-246.

¹⁴⁶ Nurmohammadi (A.P.1380): 5.

¹⁴⁷ Qāsemīpūyā (A.P.1377): 446-447; Nurmohammadi (A.P.1380): 82-86.

いる。一方で女子校は、1918/9 (A.P.1297) 年の統計では、5 クラス、40 名の生徒が記録され、1927 (A.P.1306) 年の統計では、教師 9 名、生徒 50 名、授業免除の生徒 46 名が記録されている¹⁴⁸。このことから、パフラヴィー朝期に入って、女子校の方がわずかに規模を広げた様子が見受けられる。

創立年代を見ると、タヴァッコル女子校は、ガズヴィーンで初めての女子校ということになる。テヘランにおける女子校の設立が 1900 年代から盛んになり、1910 年代以降、その傾向がイラン全土に拡大していくという傾向からすれば¹⁴⁹、ガズヴィーンには他の地域よりわずかに早く女子教育の場が開かれたということになる。この約 7 年後に開かれた 2 校目の女子校ドゥーシーゼガーン校が、地元住民から強烈な反発を受けたことを鑑みると、このタヴァッコル女子校へ対する風当たりも強かったものと考えられる。ただ、この学校が男子校とあわせて建てられていたこと、そして学校がマイノリティ校の密集するエリアにあったことをある程度考慮する必要があるだろう。

このタヴァッコル男子校と女子校の創建の合間に建てられたのが 1911 (A.H.1330) 年創建のエスラーミーエ校である。この学校は、教育協会のラズバーン (Shāhdorvān ‘Abd-ol lāh Razbān)、シェイフ・モーメン (Sheikh Mo’men) ら計 7 名の手によって設立された。初めはラシュト門のそばに設けられており、学校経営自体はラズバーンに一任されていた¹⁵⁰。この学校は、始めの頃は新しい建造物を創建したわけではなく、ラシュト門付近の一角を間借りして授業を開いていた (図 6: 7¹)。諸経費と比較すると、授業料が高額に設定されていたが、これは毎月 35 リヤールの赤字がでる計算となっており、ラズバーン自身がこれを補填していたという¹⁵¹。

ラシュト門付近での学校運営は軌道にのり、その後、ラズバーンは学校の場所をハーッジ・エスマイルのアーブ・アンバル小路 (kūche-ye Āb Anbār-e Hājji Esmā’il) に移転し、校舎を新設した (図 6: 7²)。クラスも 3 クラスから 6 クラスに増設されている。また、その機会にあわせて夜間学校 (madrāse-ye doure-ye shabāne) や成人学級 (t’alīm-e bozorg sālān) も設置されている。この学校では、クルド人学校のアダブ校やアルメニア人学校と同様に、国際語として認識されていたフランス語の教材が使用されていたようである。後の調査では、4 クラスに 3 人の教師、105 人の生徒が存在していたことが分かっている¹⁵²。

続いて建てられたファルハング校とドゥーシーゼガーン校も、教育協会の尽力によって建てられた新式学校であり、都市社会に大きな影響を与えた学校である。ファルハング校

¹⁴⁸ Qāsemīpūyā (A.P.1377): 446.

¹⁴⁹ 山崎 (2007): 161-170.

¹⁵⁰ ラズバーンは、この学校の授業料を、第 1、第 2 クラス目を 60 リヤール、第 3、第 4 クラスを 50 リヤールに設定した。そして諸費用を月額で設定し、校長 (modīr) の給料を 60 リヤール、教頭 (nāzem) を 30 リヤールとした。教師は、第 1~第 3 クラスの担当の総額が 20 リヤール、職員給料総額が 30 リヤール、家具代 40 リヤール、賃貸料 70 リヤールとなっている (Sīmā: 1791)。

¹⁵¹ Sīmā: 1791.

¹⁵² Qāsemīpūyā (A.P.1377): 446.

は、1914 (A.H.1333) 年に設立され、ガズヴィーンの都市社会に最も親しんだ学校として知られている。初代校長ミールザー・アボルガーセム (Mīrzā Abū ol-Qāsem Bādkūbeī)、2代目校長ミールザー・アリー・アクバル (Mīrzā 'Alī Akbar)、3代目校長ミールザー・ヤフヤー (Mīrzā Yahyā Vā'ez Keivānī) は、いずれも教育協会のメンバーであった。特に3代目のミールザー・ヤフヤーの時代にファルハング学校は発展を遂げ、多くの市民が同校への関心を寄せるようになったといわれる。同校は、1918/9 (A.P.1297) 年の統計では、4クラス、教師5名、生徒84名が確認されている。また1927 (A.P.1306) 年の統計では、教師が7名、生徒が76名、その他に授業免除の生徒が76名在籍していたことが確認されている。

一方でドゥーシーゼガン校であるが、その名の通り女子校であり¹⁵³、同校の設立に関してはガズヴィーン社会に大きな論争を呼んだといわれている。先述の通り、同じく女子校であったタヴァッコル校についての記録は残されていないが、このドゥーシーゼガン校に関してはガズヴィーンの宗教指導者層 (mollā, ahl-e menbar) を中心に大きな反発を招いたものとして記録されている¹⁵⁴。

同校の創立は1914 (A.H.1333) 年で、これも教育協会によって行われた。創立者はメンバーの一人であるミールザー・ホセイン (Mīrzā Hosein Khayāt "Pedar") である¹⁵⁵。彼は開校に併せて自分の姉妹でテヘランにて教師をしていたビーネシュ (Bīnesh) を同校の教師として呼び寄せて、教育内容の充実を図った。初めての校舎はラーフ・レイ区のホラファー広場にあるターゲ・ボフルール・モスクの敷地に建てられた (図6:9¹)¹⁵⁶。

この学校は、1918/9 (A.P.1297) 年の統計では、4クラス、教師4名、生徒65名が記録され、1927 (A.P.1306) 年の統計では、教師5名、生徒59名、その他授業料免除の学生が59名の在籍が確認されている¹⁵⁷。

ガージャール朝期ガズヴィーンにおいて、政府による学校設立が始まる以前に建てられた7つの学校は、いずれもガズヴィーンの地元の宗教指導者層の反発を招き、関係者への誹謗中傷や妨害活動を誘発しながらも、都市社会に大きな影響を与えていた¹⁵⁸。ガズヴィーン社会にとって特に有益であったのは、この学校設立運動を通して、地元の改革志向の有力者たちが団結し、都市社会の変革を担う主体へと変化を遂げたこと。そして、これ

¹⁵³ ドゥーシーゼガン校は直訳すると処女たちの学校となる。

¹⁵⁴ *Mīnūdar*: 622.

¹⁵⁵ ガズヴィーンにおける女子教育の普及に貢献したことから、ペダル (pedar: 父の意) の尊称を送られるようになった (*Mīnūdar*: 622)。

¹⁵⁶ パフラヴィー朝期に入って同校は何度か場所を変えている。まず1935/6から1936/7 (A.P.1314 - 1315) 年の間、セパフ通り付近に移転し (図6:9²)、その後1936/7から1937/8 (A.P.1315 - 1316) 年の間はダルブ・クシュク区に移転していたようである (図6:9³)。その後も何度か移転をし、1956/7 (A.P.1335) 年にソライヤー校 (madrāse-ye Soraiyā) と名前を変えた (Qāsemīpūyā, A.P.1377: 69 - 70)。

¹⁵⁷ Qāsemīpūyā (A.P.1377): 447.

¹⁵⁸ *Mīnūdar*: 622-623.

らの新式学校によって、近代的な教育を受けた新しい世代の都市民を育む土壌が形成されたことである。

以上のことから、ガージャール朝後期のガズヴィーンの変化・変容は、知事サーラーレ・アクラムが教育協会を発足させたことがきっかけとなったといえることができるだろう。ガズヴィーン教育協会の歴史的意義は、ガズヴィーン有力者・識者を団結させたことで、地元民が主体的に都市社会の変革に関わる機会を提供したことにある。特にガージャール朝政府が教育や学校に対する援助を行わなかったことを考慮すると、町の有力者が自主的に活動できる組織を作り上げたことは、ガズヴィーンその後大きな影響を残したといえる。また、この協会の構成員が、ガズヴィーンジャーナリズムを担う存在になっていたことも間接的とはいえ、サーラーレ・アクラムの功績の一つに数えてもよいだろう。

そして最後に、これらの動きは今まで街区ごとにまとまっていた住民の意識を、ガズヴィーン全体のまとまりへと変化させるきっかけになったと考えられる。それまでは一つの街区の中にモスクやバーザールチェ、ガナートの取水口などの公共施設が作られ、その中で生活が営まれていたことで、住民の帰属意識はまず街区にあったと考えられる。そこにガズヴィーン全体の教育を考える教育協会が組織され、都市全体の衛生が等しく管理され¹⁵⁹、ガズヴィーン全体を巻き込んで新式学校を巡る対立が起こる、といったように、街区から都市全体へと目が向けられるような出来事が起こり、変化していったのではないかと考えられる。

(2) ガージャール朝末期のガズヴィーン都市社会

ナーセリー期がガズヴィーンに中央集権化の影響が及ぶ時代であった一方で、モザッファリー期は近代化事業の影響を受けて社会変化・変容が起こる時期であった。そして、ガズヴィーンにとっては、先述のサーラーレ・アクラムの赴任がそのきっかけであった。

サーラーレ・アクラムの任期は4年とそう長くはなかったが、彼の行った事業は、先述の教育協会の招集など、後のガズヴィーンに多くの影響を残した。サーラーレ・アクラムの事業は、はっきりと都市社会の改革を志向したものであった点が特徴的である。ファトフ・アリー期までは、宗教・水利関係施設が周辺住民に利益をもたらすため、これらの施設の創建・修繕が公共事業のような役割を果たしていた。先述のサアドッサルタネの時代にも、街区の貧者への施し¹⁶⁰や夜警¹⁶¹、各施設への貢献などが、結果的に住民の生活の質を向上させている。しかし、これらの事業は、いずれもはっきりと住民の福祉を想定して

¹⁵⁹ 第3章第3節第2項(4)参照。

¹⁶⁰ 従者を遣ってモスクの前で炊き出しなどを行っている (*Sīmā*: 362-363)。

¹⁶¹ 自ら夜警を行って、夜盗やそれに加担する役人の監視を行った (*Mīnūdar*: 292-293)。

いたわけではなく、しかも単発のものであって、都市社会全体を巻き込んだ大きな事業とは言い難いものであった。

その点、サーラーレ・アクラムの取り組みは、都市社会における利益や福祉、すなわち公共という概念に当てはめ得る事業であったことは確かである。彼は特に社会改革、公衆衛生、治安維持に関して、並々ならぬ関心を注いでいた。

例えば、1904年（A.H.1902）年のコレラ流行の際には、ガズヴィーン全体の公衆衛生を徹底する政策をとり、大きな成果を上げている。その内容は次の通りである。サーラーレ・アクラムは、コレラ流行の報告を受けると、ガズヴィーンを流れる1つの側溝（*nahre*）に対して2人の見張りをつけて、洗濯や排水を監視させた。そして、キャッレ屋（*kalle pazī*、モツ屋）、ケバーブ屋（*kababī*、焼き肉屋）、ハリーム屋（*halīm pazi*、雑炊屋）、皮なめし工場（*dabbāghkhāne*）といった汚物が出る店舗を全て休業させて、代わりにこれらの店にかかる税金（*māliyāt-e dīvānī*）を彼の私財で立て替えた。更には住民たちに果物の接種を禁じ、加熱済みの清潔な食事をとるように徹底させた。そして、町の全ての大門に監視を置き、町に入る者全員に薬や清潔な衣服を与えて着替えさせ、町に汚れた空気が入り込むのを防いだ。また町中のゴミや汚物を集めて、1ファルサフ（約6km）郊外に埋めた。加えて空気の澱みをなくすために側溝や通路全てに水を流し、ゴミの堆積を一掃した。また、遺体からの感染を防ぐため、遺産相続人たち（*vorrās*）に対価を払って、死者の服を全て買い取り、それらを全て焼却処分した。これらの対策によって、40,000人近くいる住民のうち、罹患者を140人程度にとどめることに成功している¹⁶²。

このように、サーラーレ・アクラムは、公共政策といっても過言ではない政策を幾つも行って、ガズヴィーンの都市社会を支えた。そして、彼の功績の中で、その後のガズヴィーンに大きな影響をもたらしたのが、先述の教育協会の設立であった。サーラーレ・アクラムは赴任直後に協会を立ち上げて新式学校の設立に着手していることから、知事就任以前から既に計画を温めていたものと考えられる。そして、ガズヴィーンのエデュケーション協会の構想は、第1章で述べたテヘランのエデュケーション協会（活動期間：1898～1900年）の影響を多分に受けたものと考えられる。サーラーレ・アクラムがタブリーズからテヘランに移動してきたのが1896年の末から1899年の間であるとするならば¹⁶³、協会の活動時期にテヘランに滞在していたことになる。記録の中に彼の名を見つけることはできないが、タブリーズ時代にも改革派との交流が深かったので、この会合に顔を出したこともあったと推察される。サーラーレ・アクラムは4年の任期を終えるとガズヴィーンを離れたが、先述の通り、この教育協会は、その後もガズヴィーンで精力的に活動を続けていった。このことから、彼の

¹⁶² *Sīmā*: 383-384 ヴェルジャーヴェンドはこの典拠をタルビヤト紙（*rūznāme-ye Tarbiyat*）に求めているが、日付等が明記されていない。

¹⁶³ 彼のテヘラン移動の時期を正確に把握することはできない。1896年に皇太子の移動で冷遇が始まったこと、1899/1900（A.H.1317）年のシャーの訪欧旅行に随行する際にはテヘランにいたことを鑑みると、この1896年の末から1899年の3～4年の間に移動があったものと考えられる。

最大の功績は、知事のような一人の力ある人物によって短期的な変化がもたらされる状況から、地元民の合議によって変化が起こされていくような体制を整えたことにあったといえよう。

小結

ガージャール朝期を通して創建・修繕された建造物の傾向を見ると、次のようなことが分かる。それは、ナーセリー期に入るまでは、モスク、マドラサ、アーブ・アンバールといった、伝統的に都市を構成するのに不可欠な要素とされてきた建造物に関する事業が多いこと。ナーセリー期に入ると、この要素に加えて、流通・通信に関する事業が現れてくること。そして、後期になると更に新式学校などの近代的な要素が加わることである。

ガズヴィーンはナーセリー期までは伝統的な都市発展の流れに則って変化していたが、それ以降はテヘランを頂点とした中央集権化システムに組み込まれる形に変容を始める。この時代に都市間交通の流れが都市内に入り込み、都市内交通に人とモノの流れを加速化する導線が出現し、その後、この流れにそって今までのガズヴィーンに存在しなかった近代的な要素が町に現れてくることとなったのである。

変化の中心は、始めのうちは北部から西部にかけてのエリアに興り、次第にその範囲を広げた。そして、テヘラン門からラシュト門へ抜ける導線が完成してからは、そこを中心に広がっていき、最終的には都市域全体へくまなく変化・変容の影響が及ぼされるようになっていったのである。

総括と課題

イランは列強が政治的・経済的に世界進出をしていく一連の流れに巻き込まれる形で近代化の必要性に直面した。改革の試みは軍事的な危機に直面したタブリーズで始まり、後に首都テヘランで展開していったが、いずれも単発であり、長期的な改革の機会には恵まれなかった。また、イランにおける改革は、財源確保の難しさ、周囲の圧力などから、これらの動きを牽引できる大きな力を持った個人に拠るところが大きかったのがその特徴といえる。しかし、アッバース・ミールザーの留学生派遣が後の教育・出版事業の促進につながり、アミーレ・キャピールの駅通整備が中央集権化への布石を敷いたように、一つずつの成果が結実して、小規模ではあるが確実に変化を遂げていった。このような変化の積み重ねが最終的に大きな変容をもたらしたのである。

ガージャール朝期のテヘランは、この近代化事業の舞台でもあった。ガージャール朝成立後、テヘランはサファヴィー朝期に築かれた基礎の上に、都市が発展し、宮殿域も建造物が増加していた。特に、連続した土地購入によって、バーザールが北西方向へ拡張され、サブゼ・メイダーンの重要性が高まった点が特徴的である。そして、この都市構成は、ナーセリー期の大改造によって大きく変容した。この時の変容で重要であったのが、大通りが建設されて都市内交通が整備されたことで、人とモノの流れが加速した点である。トゥープハーネ広場を中心に、大通りと馬車鉄道が整備されたことで都市内交通が充実した。また、大門が結節点として機能し、都市間交通を都市内交通都市へ結びつけるなど、都市の外観も中央集権化に対応した形に変容を遂げている。

また、ガージャール朝期を通じた変化として、ファトフ・アリー期にシャー・モスク・プロジェクトによるイラン北部の地方都市の再建があった点。モスク・マドラサ複合体の増加や個人邸宅の充実が見られる点も明らかとなった。これらの変化・変容は、いずれも交通の要所に多く見られることから、中央集権化事業による人とモノの流れの加速化が、都市変容を引き起こす要因となっていた点が見出された。

テヘラン＝タブリーズ街道とテヘラン＝ラシュト街道の結節点であり、ガージャール朝期における屈指のハブ都市として栄えたガズヴィーンは、この人とモノの流れによって変容を遂げた都市であった。ガズヴィーンは、ザンド朝期からガージャール朝のモハンマド期にかけて、北部と西部の街区を原動力としながら再興・再発展を遂げた。その中で、良質なモスク・マドラサ複合体の創建や、壮麗かつ大型のアーブ・アンバール創建の集中など、独自の発展が見られるようになり、給水と地元勢力の動きに影響を受けながら、独特のトポグラフィが形成されていった。

これらの都市構成は、ナーセリー期のサアドッサルタネによる一連の事業によって大きく変容した。特にメフマーンハーネのコンプレックスは、都市間交通と都市内交通の結節点となった。そこを起点として、テヘラン＝ガズヴィーン街道から、テヘラン門を抜けて町に入り、メフマーンハーネを經由して、セパフ通り、ペイガンバリーエ通り、ラシュト通り、そしてラシュト門からタブリーズもしくはラシュト方面へ抜ける街道へとつながる導線が完成されたのである。そして、これ以降の変化は、この導線に沿った形で発展していったことも明らかとなった。立憲革命前後に教育協会の主導で、新式学校や印刷所といった近代的な建造物が現れてくるが、これらのほとんどはこの導線に沿う形で創建されている。また、パフラヴィー朝期の近代化もこの導線を中心に、更に数を増やすような形に道路整備をし、都市域を拡張するところから始まっているのである¹。

ガージャール朝期のガズヴィーンにおける建造物の創建・修繕の傾向を見ると、次のようなことが分かる。それは、モハンマド期までは、宗教関連施設や水利施設といった、伝統的に都市を構成するのに不可欠な要素に関する事業が多いこと。対して、ナーセリー期に入ると、この要素に加えて、流通・通信に関する事業が現れてくること。そして、モザッファリー期に入ると、これに加えて新式学校などの近代的な要素が加わるようになってくることである。つまり、ガズヴィーンは、ナーセリー期以降、テヘランを頂点とした中央集権化システムに組み込まれる形に変容を始めたということである。

本論文を通して、ガージャール朝期の都市に起きた都市変容について、首都テヘランの都市形成に関する概要と、地方都市ガズヴィーンに関する詳細が明らかとなった。特にガズヴィーンについては、ザンド朝期からガージャール朝末期までの長いスパンで定点的にその変化・変容を追うことができた。そして、ガズヴィーンにおける開発が、ザンド朝期に北部・西部の街区から始まり、アーガー・モハンマド期からモハンマド期にかけて徐々に町の南北に広がっていったことが分かった。そして、ナーセリー期に人とモノの流れに沿って都市構成の変容が起こり、モザッファリー期までに、この流れに沿いながら、全体に開発の手が及ぶようになった点も明らかとなっている（図 1）。

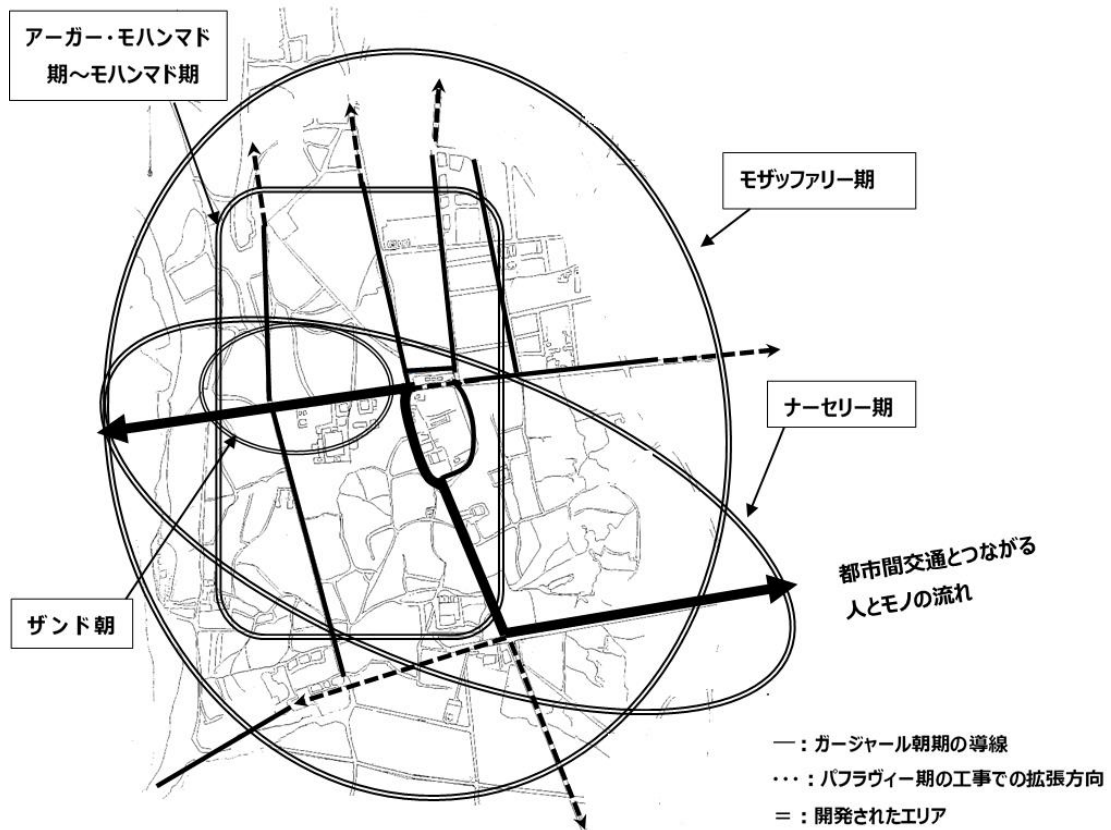
また、ガズヴィーンにおける建築活動については、ファトフ・アリー期のロクノッドウレ、ナーセリー期のサアドッサルタネ、モザッファリー期のサーラーレ・アクラムといった、知事によるイニシアティブがあった点も明らかとなった。特に、都市変容をもたらしたテヘラン＝ガズヴィーン街道に関わる事業を行ったサアドッサルタネの功績は大きい。

本論文から見出された課題として、次の 2 点が挙げられる。1 点目は、他の地方都市における変容についても明らかにし、その累積によって、ガージャール朝期の中央集権化事業が、イラン全体ではどのような動きを見せるのかについて考察する必要が挙げられる。もう 1 点は、ガージャール朝期がイランの近代化に果たした役割についての考察である。

¹ *Mīnūdar*: 290.

これについては、パフラヴィー朝期に行われた近代化事業後の都市構成との比較を行い、伝統的な都市と近代的な都市の差異について考察する必要があると考えられる。

図 1： ガーシャル朝期ガズヴィーンの開発エリア概念図



近代化の問題は、分野の如何を問わず、現代社会をとらえる上で欠かせない議論となっている。特に非西洋地域の近代化に関しては、未だ十分な議論がされているとはいえず、今後も発展が望まれる領域である。イランの都市変容を基軸として、この問題に取り組んでいきたいと考える。

(了)

参考資料

- 参考資料 1 : テヘランにおける建造物の創建・修繕まとめ 169
- 参考資料 2 : ガズヴィーンの街区別人口調査データ 171
- 参考資料 3 : ガズヴィーンにおける建造物の創建・修繕まとめ 189
- 参考資料 4 : ガズヴィーンの建造物 191
- 参考資料 5 : ガズヴィーンのアーブ・アンバール碑文 204
- 参考資料 6 : ガズヴィーンの知事と副知事一覧 210
- 参考資料 7 : 図・写真資料 212

参考資料1：テヘランにおける建造物の創建・修繕まとめ

シャー (統治期間)		工事の時期 西暦 (A.H.) 年	建造物名称
A.M. (1779-1797)	1	1791/2 (1206)	謁見の間 (dīvānkhāne)
	2	? - 1801/2 (? - 1216)	ナッガーレハーネ (naqqārkhāne, 'emārat-e khorūjī)
	3	?	アーガー・モハンマド・ハーンの塔 (borj-e Āqā Mohammad Khānī)
F.A. (1797-1834)	1	1798/9 (1213)	ガージャール宮殿 (qasr-e Qājār)
	2	1807/8 - 1811/2 (1222 - 1226)	ネガーレスタン宮殿 (kākh-e Negārestān)
	3	1808/9 - 1824/5 (1223 - 1240)	シャー・モスク (masjed-e Shāh, Emām)
	4	?	サドル・マドラサ (madrase-ye Sadr)
	5	1808/9 - 1813/4 (1223 - 28)	バーザール正門 (sardar-e bāzār)
	6	1809/10 (1224)	ソレイマーニー宮殿 (kākh-e Soleimāniye)
	7	1814/5 (1230)	マルヴェー・マドラサ (madrase-ye Marvī)
	8	?	ラーレザール宮殿 (kākh-e Lālezār)
	9	?	バードギール ('emārat-e bādgīr)
	10	1808/2 (1216)	ダイヤモンド宮殿 (kākh-e almās)
M. (1834-1848)	1	1836/7 - 1845/7 (1252 - 1262)	ラジャブ・アリー・モスク (masjed-e Hājji Rajab 'Alī)
	2	1837/8 (1253)	ガヴァーモッドウレ邸 (khāne-ye Qavām od-Doule)
	3	1845/6 (1262)	エスマーイーール廟 (emāmzāde-ye Esmā'īl)
	4	1845/6 (1262)	モハンマディーエ門 (darvāze-ye Mohammadiye)
N. (1848 - 1896)	1	1849/50 - 1851/2 (1266 - 68)	ダーロルフオヌーン校 (madrase-ye Dār ol-Fonūn)
	2	1852/3 (1269)	ドシャーン・テッペ宮殿 (qasr-e Doshān Teppe)
	3	1852/3 (1269)	フィールーズ宮殿 (qasr-e Firūz)
	4	1853/4 - 1854/5 (1270 - 1271)	軍事施設 ('emārat-e Nezāmīye)
	5	1853/4 - 1864/5 (1270 - 1281)	シェイフ・アブドゥルホセインのモスク・マドラサ (masjed madrase-ye Sheikh 'Abd ol-Hosein)
	6	1857/8 - 1887/8 (1274 - 1305)	サルタナターバード宮殿 (kākh-e Saltanat Ābād)
	7	1857/8 (1274)	フェルドゥース庭園 (bāgh-e Ferdūs)
	8	1861/2 (1278)	競馬の広場 (medān-e asb davānī)
	9	1863/4 - 1882/3 (1280 - 1300)	ネザーモルモルク邸 (khāne-ye Nezām ol-Molk)
	10	1865/6 - 1867/8 (1282 - 1284)	シャムソル・エマーレ (Shams ol-'emāre)

シャー (統治期間)	工事の時期 西暦 (A.H.) 年	建造物名称
N. (1848 - 1896)	11 1866/7 (1283)	セバフサーラールのモスク・マドラサ (masjed madrase-ye Sepahsālār-e qadīm)
	12 1867/8? (1284?)	王立銀行 (bānk-e Shāhi)
	13 1867/8 - 1873/4 (1284 - 1290)	モアイエロルママーレクのモスク・マドラサ (masjed madrase-ye M'ayyer ol-Mamālek)
	14 1857/8 (1284)	トゥーブ・ハーネ広場 (medān-e tūpkhāne)
	15 1867/8 - 1877/8 (1284 - 1294)	テヘランの諸大門 (darvāzehā-ye Tehrān)
	16 1868/9 (1285)	王立のテキエ (tekiye-ye Doulat)
	17 1869/70 - 1870/1 (1286 - 1287)	イギリス公使館 (sefārat-e Engelīs)
	18 1873/4 (1290)	王立病院 (marīzkhāne-ye Doulatī)
	19 1874/5 (1291)	エシュラターバード宮殿 (qasr-e Eshrat Ābād)
	20 1874/5 - 1877/8 (1291 - 1294)	ゴレスターンの建造物 (‘emārat-e Golestān)
	21 1873/4? (1290?)	モアイエロルママーレクの建造物 (‘emārat-e Mo ‘ayyer ol-Mamālek)
	22 1876/7 - 1878/9 (1293 - 1296)	セバフサーラール宮殿 (kākh-e Sepahsālār)
	23 1877/8 - 1878 (1294 - 1295)	シャフレスターン宮殿 (qasr-e Shahrestān)
	24 1878 (1295)	マスウーディーエの建造物 (‘emārat-e Mas‘ūdiye)
	25 1878/9 (1296)	セバフサーラールのモスク・マドラサ (masjed madrase-ye Sepahsālār-e Motahharī)
	26 1879/80 (1297)	サーヘブ・ゲラーニーエ宮殿 (kākh-e Sāheb Qerāniye)
	27 1882/3 (1300)	後宮の建造物 (‘emārat-e Haramkhāne, Andarūn)
	28 1883/4 (1301)	士官学校 (madrade-ye Nezām)
	29 1884/5 - 1885/6 (1302 - 1303)	ヤーカート宮殿、赤壁 (qasr-e Yāqūt, sorkh-e hesār)
	30 1884/5 - 1885/6 (1302 - 1303)	内廷の建造物、赤壁 (‘emārat-e andarūnī, sorkh-e hesār)
	31 1885/6 (1303)	シャムソル・エマーレの正門 (sardar-e shams ol-‘emāre)
	32 1885/6? (1303?)	アミーリーエ宮殿 (qasr-e Amīriye)
	33 1885/6 - 1886/7 (1303 - 1304)	寝殿の建造物 (‘emārat-e khābgāh)
	34 1878以降 (1295以降)	カムラーニーエの建造物 (‘emmārat-e Kāmranīye)
	35 1886/7? (1304?)	電信局 (‘emārat-e telegrāfkhāne)
	36 1886/7 - 1888/9 (1304 - 1306)	アターバク公園の建造物 (‘emārat-e Pārک-e Atābak)
	37 1887/8 (1305)	鉄道駅 (istgāh-e rāh āhan)
	38 1882/3前後 (14世紀の初め)	アミーノドゥレの建造物 (‘emārat-e Amīn od-Doule)
	39 1888/9 - 1891/2 (1306 - 1309)	白亜宮殿 (kākh-e Abyez)
	40 1895/6 (1313)	マリージャク宮殿 (kākh-e Malījak)

参考資料 2 : ガズヴィーンの街区別人口調査データ

* G : *Mīnudar*, V: *Sīmā*, D: *Dabīrsiyāqī* (A.P.1380)

* 本文に表記がない場合は空欄とする

* 傍線部は計算が合わない数値

【北、北西の街区】

データ 1 : ラーフ・クシュク区 (*mahalle-ye Rāh Kushk*)

日付 : 1881/2 年 12/1 月 (A.H. 1299 年 サファル月)

責任者 : 街区長 ミールザー・ホセイン (*Mīrzā Hosein*)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
1,773	2,991	4,764	G
1,782	2,992	<u>4,764</u>	V
<u>1,778</u>	2,991	4,769	D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	44	44
王族	6	6
名士、文官	13	13
商人	22	22
その他の階層	426	436
総数	511	<u>511</u>

D:

世帯	戸数 (戸)
ウラマーとセイイド	330
王族	35
文官	135
その他	3,240
総計	3,740

建造物 :

建造物	名称	軒
モスク	ハーガーネ・ファグフル (<i>Khqān-e Faghfūr</i>)	1
	セイイド・アリー (<i>Jenāb-e Āqā Seyyed 'Alī</i>)	1
	ハーッジ・モッラー・アーガー (<i>Āqā-ye Hājji Mollā Āqā</i>)	1
	セイイド・ハサン (<i>Jenāb-e Āqā Seyyed Hasan</i>)	1
	シェイフ・サーレフ (<i>Āqā Sheikh Sāleh</i>)	1
	アブドルホセイン (<i>Āqā Sheikh 'Abd ol-Hosein</i>)	1
	アーガー・ミール (<i>Āqā Mīr</i>)	1
	シェイフ・アフマド (<i>Jenāb-e Hājji Sheikh Ahmad</i>)	1
	墓所	ペイガンバリエ (<i>Peighambariye</i>)
ハリメ・ハートゥーン (<i>Halīme Khātūn</i>)		1
公衆浴場	チャハルダ・マアスム (<i>Chahāldah Ma'sūm</i>)	1
	ハーッジ・セイイド・ホセイン (<i>Hājji Seyyed Hosein</i>)	1
	ハーッジ・ナスロッラー・ハーン (<i>Hājji Nasr-ollāh Khān</i>)	1
	ホラファー (<i>Kholafā</i>)	1
	ガージャー (<i>Qājār</i>)	1
	アーガー・マジード (<i>Āqā Majīd</i>)	1

データ 2 : スーコルアグナーム区 (mahalle-ye Sūq ol-Aghnām)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年)

人口 :

①総数

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
3,632	3,437	7,069	G, V, D

②地区 (gozar) ごとの人口

地区 (gozar)	男性	女性	総数	世帯
サルケラグ地区 (gozar-e Sarkelag)	655	679	1,334	198
メイダーネ・グースファンド地区 (gozar-e Meidān-e Gūsfand)	712	649	1,361	205
アギヤリー・クーチェ地区 (gozar-e Agārī Kūche)	157	155	312	47
ホイニー地区 (gozar-e Khoynī)	380	321	701	41
サンゲ・クーベ地区 (gozar-e Sange Kube)	599	578	1,178	150
シェイハーバード地区 (gozar-e Sheikh Ābād)	595	550	1,145	174
スーフィー地区 (gozar-e Sūfi)	534	505	1,039	161
	3,632	3,437	7,070	976

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイド、有力者	44	44
王族		
名士、文官	5	
商人	9	14
その他の階層	918	918
総数	976	976

建造物 :

①サルケラグ地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	不明	1	バーザールチェの隣
マクタブ	不明	1	アブドゥル・ハミード・ハーン ('Abd ol-Hamīd Khān Bā yervand) が創建
アーブ・アンバル	ハーჯジー・メフディー (Hājji Mehdī)	1	
水飲み場	不明	1	アーホンドのガナートから ラZZāq・ジャーバルの家の前 (Razzāq Jābar)
	アーホンドの水 (āb-e Ākhond)	1	マクタブの隣
バーザールチェ	不明	1	故アーガー・ホセイン・アリー (Āqā Hosein 'Alī Marhūm) の相続人の所有
店舗	不明	1	ザージ売りの所有 (zājforūsh)
門	メイダーネ・グースファンド (Meidān-e Gūsfand)	1	

②メイダーネ・グースファンド地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	不明	1	マハッレの住民によって創建
モスク・マドラサ	モウラー・ヴェルディー・ハーン (Marhūm Moulā Verdī Khān)	1	
マクタブ	モウラー・ヴェルディー・ハーン (Marhūm Moulā Verdī Khān)	1	同名のモスク・マドラサの付属
	不明	1	ハーッジー・サーレフ・ハーンのアーブ・アンバルの隣、廃墟
アーブ・アンバル	ハーッジー・サーレフ・ハーン (Hājī Sāleh Khān)	1	
	ハーッジー・ミールザー・バーバー (Hājī Mīrzā Bābā 'Attār)	1	
	ハーッジー・メフディー (Hājī Mehdī)	1	
公衆浴場	サルダール (Sardār)	1	
	ノウ (nou)	1	
	テイムール・ベイギー (Teimūr Beigī)	1	モウラー・ヴェルディー・ハーンのワクフ財の一部で、子孫たちの所有
水飲み場	不明	1	アーホンドのガナートから
	不明	1	アーホンドのガナートから サルダールの公衆浴場の側
バーザールチェ		1	
商館	モウラー・ヴェルディー・ハーン (Marhūm Moulā Verdī Khān)	1	店舗とつながっている
	不明	1	ハーッジー・エスマーイール (Hājī Esmā'īl Esfahānī) の所有
店舗	不明	6	ミールザー・アサドッラー・ハーン (Mīrzā Asad-ollāh Khān Mo'tīn) の所有、新設
	不明	9	商館に隣接 個人の所有
診療所	ミールザー・ゴラーム・レザー (Mīrzā Gholām Rezā-ye Tabīb)	1	モウラー・ヴェルディー・ハーンのワクフ財の一部
門	メイダーネ・グースファンド (Meidān-e Gūsfand)	1	
橋	不明	1	バーザールの入り口 (dahne) 穀物商と干物商の店舗の拡大が原因

③ホイニー地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	アーガー・ゴル・アリー (Āqā Gol 'Alī)	1	
マクタブ	不明	1	アーブ・アンバルに隣接
アーブ・アンバル	ラーラー (Lālū)	1	マクタブに隣接
水飲み場	アーベ・シャー (āb-e Shāh)	1	
店舗	不明	1	食料雑貨店 (baqqālī) に付属
橋	不明	1	アーブ・アンバルに隣接 ハーッジー・モハンマド・レザー (Hājī Mohammad Rezā-ye Habbāz) が創建
	不明	1	モスクの隣 ハーッジー・ラヒーム (Hājī Rahīm) が創建

④サンゲ・クーベ地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	モラー・ジャアファル (Mollā Ja'far)	1	マクタブとしても機能
マクタブ	不明	1	個人の邸宅の隣
テキエ	アーガー・ホセイン (Āqā Hosein Nāyeb)	1	
アーブ・アンバル	ハーッジー・ラスール (Hājī Rasūl Dervīsh)	1	
	ハーッジー・マレク・モハンマド (Hājī Malek Mohammad Marhūm)	1	以前はマクタブがあった場所
	ハーッジー・マアスム (Hājī Ma'sūm Marhūm)	1	
	不明	1	廃墟、個人の邸宅の隣にあった
公衆浴場	ハーッジー・セイイド・ホセイン (Hājī Seyyed Hosein Marhūm)	1	
水飲み場	アーベ・シャー (āb-e Shāh)	1	バーザールチェに付属
バーザールチェ	不明	1	モスクに付属
商館	小 (kūchek)	1	バーザールチェの中ほど オスタド・アリー・ナジャール (Ostād 'Alī Najār) が創建
店舗	不明	1	ナン屋 (khabbāzi)
	不明	1	食料雑貨店 (baqqālī)
橋	不明	1	テキエに付属
	不明	1	バーザールチェの隣 ハーッジー・ホセイン・アリー (Hājī Hosein 'Alī) が創建

⑤シェイハーバード地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	不明	1	廃墟 ロトフ・アリー・ベイグ (Lotf 'Alī Beig) が創建
	アフマド・ベイギー (Ahmad Beigī)	1	
	不明	1	バーザルチェの隣
マクタブ	不明	1	浴場の隣
アーブ・アンパール	不明	1	ノウ門の隣
	不明	1	バーザルチェの隣 付属の水飲み場と共に、夏に祈祷 (namāz) が行われる
	ハーჯジー・アブドラー (Hājji 'Abd-ollāh Marhūm)	1	廃墟
公衆浴場	モハンマド・サデーグ・ハーン (Mohammad Sādeq Khān Marhūm)	1	
水飲み場		1	バーザルチェの隣 隣接するアーブ・アンパールと共に、夏に祈祷 (namāz) が行われる
バーザルチェ	不明	1	
店舗	不明	6	バーザルチェの内部
街区門	シェイハーバード	1	サーヴェラン (Sāvelān) の名でも有名
橋	不明	1	郊外から入ってくる川にかかる
	不明	1	個人の邸宅の前 ハーჯジー・ファトフ・アリー (Hājji Fath'Alī Marhūm) が創建
	不明	1	アッタールハーの小路 (sar kūche-ye 'Attārhā) の戸口 (dar) の付属施設

⑥スーフイー地区

建造物	名称	軒	備考
モスク	モハンマド・ハーン・ベイグ (Mohammad Khān Beig)	1	
マクタブ	不明	1	モスクの隣
アーブ・アンパール	アーガー・ハサン (Āqā Hasan Nāyeb Marhūm)	1	
公衆浴場	モハンマド・ハーン・ベイグ (Mohammad Khān Beig)	1	

【西、西南の街区】

データ 3 : ディマジ区 (mahalle-ye Dimaj)

日付 : 1881 年 11/12 月 (A.H. 1299 年モハッラム月)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
606	628	1,234	G.V.
817	824	1,641	D

世帯数 :

世帯	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	24	24
王族		
名士、文官	23	23
商人	13	13
その他の階層	109	109
総数	169	169

D

世帯	人数 (人)	戸数 (戸)	備考
ウラマーとセイイド	195	17	うち4軒が政府関連の建物 (doultkhāne)
セイイド	58	8	
名士	173	24	うち4軒が政府関連の建物 (doultkhāne) 2軒が外庭 (hayāt-e birūn)
商人	114	13	
小商人・職人 (Kasabe)	555	76	
その他住人	197	29	
総計	1,292	167	

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ハーッジー・ミールザー・マルフーム (Hājji Mīrzā Marhūm)	1	アーブ・アンバール有
	ハーッジー・モッラー・タギー・エ・シャヒード (Marhūm Hājji Mollā Taqī-ye Shahīd)	1	アーブ・アンバール有
	ハーッジー・モッラー・サーレフ (Marhūm Hājji Mollā Sāleh)	1	
	ハーッジー・エブラーヒーム (Hājji Ebrāhīm Marhūm)	1	アーブ・アンバール有
	ホセイン・ハーン・アグメシエ (Hosein Khān Aqmeshe)	1	荒廃
アーブ・アンバール	不明	1	各建造物に連結したもの
公衆浴場	ハーッジー・ミールザー・ホセイン (Marhūm Hājji Mīrzā Hosein)	1	
	ハーッジー・モッラー・タギー・エ・シャヒード (Marhūm Hājji Mollā Taqī-ye Shahīd)	1	アーブ・アンバール有
商館	ハーッジー・ミールザー・ホセイン (Marhūm Hājji Mīrzā Hosein)	1	バーザールチェと連結
	ハーッジ・カルブ・アリー (Hājji Kalb 'Alī)	1	
バーザールチェ	不明	1	建造物に連結したもの

データ 4 : ゴムラーケ区 (mahalle-ye Qomlāq)

日付 : 1881/2 年 12/1 月 (A.H. 1299 年サファル月)

責任者 : 街区長アッバース・アリー (‘Abbās ‘Alī)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
740	780	1,520	G, V
780	740	1,520	D

世帯数 :

	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	22	22
王族	1	15
名士、文官	14	
商人	8	8
その他の階層	100	100
総計	145	145

D

世帯	人数 (人)	戸数 (戸)
ウラマーとセイエド	202	22
王族と名士	186	14
商人	112	8
その他	165	101
総計	665	145

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ハーッジ・ミール・アリー (Hājji Mīr‘Alī Akbar Naqīb)	1	
	ハーッジ・モッラー・サーレフ (Hājji Mollā Sāleh Marhūm)	1	マドラサと連結
	アーガー・マアスムの隣の隣 (dar Janb-e Sarā-ye Aqā M‘asūm)	1	
マドラサ	ホセイン・ハーン・サルダール (Hosein Khān Sardār)	1	
	不明	1	モスクと連結したもの
テキエ	ハーッジ・ミールザー・ファスィーフ (Hājji Mīrzā Fasīh Marhūm)	1	
アープ・アンバル	ホセイン・ハーン・サルダール (Hosein Khān Sardār)	1	
	ハーッジ・カーゼム (Hājji Kāzem Kūrepaz)	1	
	ハーッジ・モハンマド・ラヒーム (Hājji Mohammad Rahīm Roughtānī)	1	
	ハーッジ・バーバー (Hājji Bābā Shīshegar)	1	
	ハーッジ・ミール・アリー (Hājji Mīr‘Alī Akbar Naqīb)	1	
	ハーッジ・アーベディーン (Hājji ‘Abedīn)	1	
公衆浴場 (Hammām)	ミールザー・エスマイーール・ハーン (Sarkār-e Mīrzā Esmā‘īl Khān Vakīl or-Ro‘āyā)	1	
	ソルターン・サリム・ミールザー (Soltān Salīm Mīrzā Marhūm)	1	
店舗	サルダールのマドラサ周辺 (Madrāse-ye Hosein Khān Sardār)	12	
	アーガー・マアスムの商館周辺 (Sarā-ye Aqā M‘asūm)	6	廃墟
庭園	ソルターン・サリム・ミールザー (Soltān Salīm Mīrzā Marhūm)	1	
	ハーッジ・ファラジョラー (Hājji Faraj-ollāh Marhūm)	2	
	ハーッジ・モハンマド・ラヒーム (Hājji Mohammad Rahīm Roughtānī)	3	

データ 5 : アーホンド区 (mahalle-ye Ākhond)

日付 : 1881/2 年 12/1 月 (A.H. 1299 年サファル月)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
817	824	1,641	G, V
611	621	1,638	D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	36	35
王族	1	1
名士、文官	30	30
商人	11	11
その他の階層	128	128
総計	206	205

D

世帯	人数 (人)	戸数 (戸)
ウラマー	143	25
セイイド	73	12
名士	196	41
職人その他 (Kasabe va Motafarreqe)	1,145	205
総計	1,557	283

建造物 :

建造物	名称	軒
モスク	デホダー・アサドラー (Dehkhodā Asad-ollāh)	1
	モッラー・メフディー (Mollā Mehdī)	1
	キヤルバラ-イェ・ユースフ (Karbālā-ye Yūsof)	1
	セムサル・クーチェ (Semsār kūche)	1
マドラサ	アーホンドの墓所 (maqbare-ye Marhūm Ākhond)	1
	ジャディード (jadīd)	1
	シーシエギヤル・ハーネ (shīshegarkhāne)	1
エマームザーデ	ソルターン・セイイド・モハンマド (boq'e-ye Motabarreke-ye Emānzāde-ye Vajeb ot-T'azīm Soltān Seyyed Mohammad)	1
公衆浴場	ボールル (Boūr)	1
	アーホンド (Ākhond)	1
	ハーჯイー・モッラー・アブドラー (Hājji Mollā 'Abd-ollāh)	1
	アーガー・ミールザー (Āqā Mīrzā Abū Tarāb Vazīr)	1
アープ・アンバル	アーホンド区内部 (jouf-e mahalle-ye Ākhond)	1
	セムサル・クーチェ内部 (jouf-e Semsār kūche)	1
	シーシエギヤルハー (Shīshegarhā)	1
	サブズ・モスク (masjed-e Sabz)	1
	アブドラー・ベイグ (Marhūm 'Abd-ollāh Beig)	1
商館	アーホンド区 (mahalle-ye Ākhond)	1
ガラス工房	不明	1

データ 6 : マグラヴァク区 (mahalle-ye Maghlāvāk)

日付 : 1881/2 年 12/1 月 (A.H. 1299 年サファル月)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
867	838	1,705	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	21	22
王族		
名士、文官		
商人	1	
その他の階層	267	267
	289	289

D

人数 (人)	戸数 (戸)
セイエド	109
ガナート職人 (moqqaniyān)	70
デルヴィーシュ (darāvīsh)	22
その他	437
総計	638

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ハージェ・ショハダー (Hāje Shohadā)	1	
	ハーン・ジャンハーン (Khān Jānkhān)	1	
アーブ・アンバール	ハーン・ジャンハーン (Khān Jānkhān)	1	
	クルド人地区の (mahalle-ye Akrād)	1	
	ズイーレ・ボルジュ (zīr-e borj)	1	
公衆浴場	ボナク (Bonak)	1	廃墟

データ 7: ダッバーガーン区 (mahalle-ye Dabbāghān)

日付: 1881/2 年 (V)

人口:

	男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
総数 (Nafs)	946	840	1,786	G, V, D
成人 (kabīr, kabīre)	640	530	1,170	
未成年 (saghīr, saghīre)	306	310	616	

世帯数:

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	9	13
王族		
名士、文官		
商人	4	
その他の階層	147	147
総数	160	160

建造物:

建造物	名称	軒	備考
墓廟	シャーザーデ・ホセイン (Shāhzāde Hosein)	1	
アーブ・アンパール	シャーザーデ・ホセイン (Shāhzāde Hosein)	1	
店舗	ナッジャーリー・ナギー (Najjārī Naqī)	1	
	不明	1	食料雑貨店、マシュハディー・アリー (Mashhadī 'Alī) の所有
	オスタード・エブラーヒーム (Ostād Ebrāhīm Salmānī)	1	
	ハッジー・アリー (Hājī 'Alī)	1	
	アーガー・セイエド・アリー (Āqā Seyyed 'Alī)	1	
	アーガー・セイエド・アブー・タラブ (Āqā Seyyed Abū Tarāb)	1	
	マシュハディー・ナギー (Mashhadī Naqī)	1	
	アーガー・ジャヴァード (Āqā Javād)	1	

データ 8 : ラーフ・レイ区 (mahalle-ye Rāh Rey)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
697	658	1,355	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	6	20
王族		
名士、文官	11	
商人	3	
その他の階層	151	151
総数	171	171

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	サンジデー (Sanjīde)	1	
テキエ	ミールザー・アフマド (Mīrzā Ahmad)	1	
アープ・アンパール	サルダール (Sardār)	1	未完成
	ジャディード (jadīd)	1	付属
	ハーッジー・アムー・ジャーン (Hājji 'Amū Jān)	1	付属
	サーデグ・ハーニー (Sādeq Khānī)	1	

【中央から西側の街区】

データ 9 : セッケ・シャリーハーン区 (mahalle-ye Sekke Sharīhān)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年) (V)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
736	868	1,604	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	49	48
王族	1	
名士、文官	18	19
商人	26	27
その他の階層	161	161
総計	255	255

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ハフト・ダル (haft dar, jadīd)	1	新しい
	モッター・ミールザー・モハンマド (Marhūm Mollā Mīrzā Mohammad-e jadīd)	1	新しい
	不明	1	ヴァズィールのバーザールの 中に位置する、古い
マドラサ	パンジェ・アリー (Panje 'Alī, qadīm)	1	古い
	モッター・ハサン・モジュタヘド (Marhūm Maghrūr Mollā Hasan Mojtahed, jadīd)	1	新しい
アーブ・アンパール	ハーッジー・ハーディー (Hājji Hādī, qadīm)	1	古い
	ハーッジー・アリー (Hājji 'Alī, qadīm)	1	廃墟
	アーガー・セイエド・ホセイニー (Āqā Seyyed Hoseinī, qadīm)	1	古い
	ハーッジー・ラビー (Hājji Rabī, qadīm)	1	古い
公衆浴場	キャラントル (Kalāntar, qadīm)	1	古い
	ハーッジー・カリーム (Hājji Karīm, qadīm)	1	古い
	ジェロウダール・パーシー (Jeloudār Bāshī, qadīm)	1	古い
商館	ハーッジー・レザー・ボゾルグ (Hājji Rezā-ye bozorg, qadīm)	1	古い
	ハーッジー・レザー・ジョヌービー (Hājji Rezā-ye Jonūbī, jadīd)	1	新しい
	シャー・タフマースブ (Shā Tahmāsb, qadīm)	1	古い
	キャラントル (Kalāntar)	1	廃墟
	ヴァズィール (Vazīr, jadīd)	1	新しい
	ハーッジー・チョラク (Hājji Chorak, qadīm)	1	古い
	ハーッジー・モハンマド・ハサン (Hājji Mohammad Hasan, jadīd)	1	新しい
バーザールチェ	ハーッジー・モハンマド・ハサン (Hājji Mohammad Hasan, jadīd)	1	新しい

データ 10 : ハンダグバール区 (mahalle-ye Khandaqbār)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
673	691	1,364	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)		
	G	V	
ウラマー、セイイド、有力者 王族	16	14	* 名士と商人も含む
名士、文官	7	8	
商人			
その他の階層	139	140	
総数	162	162	

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	不明	3	地区 (Gozar) のモスク
アーブ・アンバール	不明	6	寄進
公衆浴場	ハーッジー・モハンマド・ラヒーム (Hājī Mohammad Rahīm)	2	男性用と女性用
商館	ハーッジー・モハンマド・レザーの花園 (Golshan-e Hājī Mohammad Rezā- ye Vakīl or-Ro'āyā-ye Gīlān)	1	
	ハーッジー・モハンマド・バーゲル (Hājī Mohammad Bāqer)	2	
	モハンマド・レザーの新設の (Nou-ye Mohammad Rezāi)	3	
バーザールチエ	ハーッジー・モハンマド・ラヒーム (Hājī Mohammad Rahīm)	1	
店舗	50店舗	50	ハーッジー・モハンマド・ラヒーム (Hājī Mohammad Rahīm) の バーザールチエの中
城壁 (hesār)	不明	4	

データ 11 : ヒヤーバーン区 (mahalle-ye Khiyābān)

日付 : 表記なし

人口 :

	男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
総数	1,310	1,010	2,320	G, V, D
成人 (kabīr, kabīre)	800	710	1,510	
未成年 (saghīr, saghīre)	510	300	810	

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	6	15
王族		
名士、文官	3	
商人	6	
その他の階層	163	163
総数	178	178

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	大会衆モスク (Jāme')	1	
テキエ	ターゲ・パフラーヴィー (Tāq Pahravī)	1	Dの表記はBohlūl Vの表記に従う
	ミールザー・ガラーク (Mīrzā Qalāq)	1	qalāqは鳥 (kalāgh) のガスヴィーン訛
アープ・アンパール	ミールザー・ジャアファル (Mīrzā Ja'far)	1	
	ミールザー・タギー (Mīrzā Taqī)	1	
公衆浴場	ハーッジ・モハンマド・バーゲル (Hājji Mohammad Bāqer)	1	
	アッバース・ゴリー・ハーン (‘Abbās Qolī Khān)	1	
	ハーッジ・ベイグラル (Hājji Beiglar)	1	
	セイイドヤーン (Seyyedyān)	1	
	ハーッジ・ミール・メフディー (Hājji Mīr Mehdī)	1	
	ハーッジ・スィールダーニー (Hājji Sīrdānī)	1	Dのみ表記あり、G, Vにはなし
メフマーン・ハーネ	モバーレケ (Mobāreke)	1	ドウラティー、ガスヴィーン、サアドッサルタネとも
大通りの店舗 (dakākīn-e khiyābān)		58	Dに店舗名一覧あり
小道の店舗 (dakākīn-e gozar)		31	Dに店舗名一覧あり

【中央から東側の街区】

データ 12 : ボラーギー区 (mahalle-ye Bolāghī)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年) (V)

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
549	507	1,056	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイエド、有力者	36	35
王族	4	
名士、文官	13	
商人		
その他の階層	87	87
総数	140	140

建造物:

建造物	名称	軒	備考
マドラサ	ハーჯジー・アーガースイー (Hājji Āqāsi)	1	
エマームザーデ	エスマーイー (Esmā'il Bene Ja'far Sādeq)	1	
	アフマド (Ahmad)	1	
墓廟	チェヘル・タン (chehel tan)	1	宮殿域の近隣
アーブ・アンバール	不明	1	ハーჯジー・アーガースイー (Hājji Āqāsi) のマドラサの隣
	不明	1	宮殿の付属
	不明	1	アーガー・セイエド・レザー (Āqā Seyyed Rezā) の邸宅の付属

データ 13 : タンヌール・サーザン区 (mahalle-ye Tannūr Sāzān)

日付 : 表記なし

人口 :

	男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
総数	373	341	714	G, V, D
成人	258	250	508	
未成年	115	91	206	

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	5	13
王族		
名士、文官	5	
商人	1	
その他の階層	63	61
総数	74	74

建造物 :

建造物	名称	軒
モスク	不明	5
エマームザーデ	ガーセム (Qāsem)	1
テキエ	チャーヴォシユハー (Chāvoshhā)	1
	タンヌール・サーザン (Tannūr Sāzān)	1

データ 14 : ラーフ・チャマン区 (mahalle-ye Rāh Chaman)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年) (V)

人口 :

	男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
総数	600	551	1,151	G, V, D
成人	400	381	781	
未成年	200	170	370	

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	8	14
王族		
名士、文官	6	
商人		
その他の階層	108	108
総数	122	122

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ハージェ・アブドラー (Khāje 'Abd-ollāh)	1	
	ハーヅィー・ミールザー (Hājī Mīrzā Shafī')	1	廃墟、テヘラン街道のそば サアドツサルタネにより再建
	不明	21	廃墟、
墓廟	ビービー・シャフル・バーヌー (Khazrat-e Bībī Shahr Bānū Bent-e Emām Mūsā Kāzem)	1	
店舗	ハーヅィー・ユースフ組合 (sherākt-e Hājī Yūsof)	4	テヘラン街道のそば コーヒーハウス (qafvekhāne)、食 料雑貨店、肉屋 (qassābī)、ナン 屋 (khabbāzī) の4店舗
	街区長の店舗	2	食料雑貨店、飼料店 ('allāfī)

データ 15 : ゴルビーネ区 (mahalle-ye Golbīne)

日付 : なし

人口 :

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
225	205	430	G, V, D

世帯数 :

世帯	戸数 (戸)	
	G	V
ウラマー、セイイド、有力者	7	9
王族		
名士、文官	2	
商人		
その他の階層	53	53
総数	62	62

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	不明	1	廃墟 古い建物で来歴不明
アーブ・アンバル	不明	1	廃墟
公衆浴場	ピーレ・サール (Pīre Sāl)	1	
店舗	不明	1	

データ 16 : パンベ・リーセ区 (mahalle-ye Panbe Rise)

日付 : 1881/2 年 (A.H. 1299 年) (V.)

人口 :

①総数

男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	典拠
1,270	1,198	2,468	G, V
1,270	1,196	2,466	D

世帯数 :

世帯	G	V
ウラマー、セイド、有力者	32	71
王族	2	
名士、文官	13	
商人	24	
その他の階層	340	340
総数	411	411

②地区 (Gozar) ごとの人口

地区 (Gozar)	男性 (人)	女性 (人)	総数 (人)	世帯 (戸)
バーゲ・シャー地区 (gozar-e Bāgh-e Shā)	215	188	403	81
スーフイーヤーン地区 (gozar-e Sūfiyān)	231	226	457	72
メイダーン・ガー地区 (gozar-e Meidān Gāh)	249	281	530	88
ハヴァーリー・ハーネイエ・キヤドホダーの戸の上区 (gozar-e bālā dar-e Havālī Khāne-ye Kadkhodā)	318	248	566	94
アーメネ・ハートゥーン地区 (gozar-e Āmene Khātūn)	85	75	160	28
ハーჯジ・ジャッバル地区 (gozar-e Hājji Jabbār)	172	180	352	48
総数	1,270	1,198	2,468	411

建造物 :

建造物	名称	軒	備考
モスク	ミールザー・アボルガーセム (Āqā-ye Mīrzā Abo-l-Qāsem)	1	バーゲシャー地区
	アーメネ・ハートゥーン (Āmene Khātūn)	1	アーメネ・ハートゥーン地区、廃墟
	メイダーン・ガー (Meidān Gāh)	1	メイダーン・ガー地区
マドラサ	ヘイダリーエ (Heidarīye)	1	
エマームザーデ	アーメネ・ハートゥーン (Āmene Khātūn)	1	アーメネ・ハートゥーン地区
テキエ	ハーჯジ・エスマイル (Hājji Esma'īl)	1	
公衆浴場	ミールザー・キャリム (Mīrzā Karīm)	1	
	ミールザー・アブドラー (Mīrzā 'Abd-ollāh)	1	
	ダールーゲ (Dārūghe)	1	
バーザールチエ	メイダーン・ガー (Meidān Gāh)	1	メイダーン・ガー地区
	バーゲ・シャー (bāgh-e Shā)	1	バーゲ・シャー地区
	キヤドホダー (Kadkhodā)	1	ハヴァーリー・ハーネイエ・キヤドホダーの戸の上地区

参考資料3：ガズヴィーンにおける建造物の創建・修繕まとめ¹

王	通し 番号	工事の年代 西暦 (A.H.)年	建造物 の種類	建造物名	工事 の種類	携わった人物	
	1	1736/7 (1149)	墓廟	Mīr Ma'sūm	創建		
	2	1737/8 (1150)	マドラサ	Peighambarīye	修繕	Moulā Verdī Khān	
	3	1763/4 (1177)	モスク・マドラサ	Moulā Verdī Khān	創建	Moulā Verdī Khān	
	4	1763/4 (1177)	アーブ・アンバール	Khān, Moulā Verdī Khān	創建	Moulā Verdī Khān	
	5	?	ガナート	Hātām Beik	創建	Moulā Verdī Khān	
A.M.	6	1777/8 (1191)	モスク	Masjed Jāme' 正門	修繕		
	7	1791/2 (1206)	墓廟	Shāhzāde Hoseinガリーフ	修繕		
	8	1791/2 (1206)	アーブ・アンバール	Hājji Mollā Āqā	創建	Hājji Hosein	
F.	9	1805/6-1806/7 (1220-1221)	モスク	Shāh (Soltānī)	創建	Fath 'Alī Shāh	
	10	?	公衆浴場	Shāh	創建	Fath 'Alī Shāh	
	11	?	謁見の間	Hākem	創建	?	
	12	1809/10 (1224)	アーブ・アンバール	Panje 'Alī	創建	Hājji Ramezān	
	13	1809/10 (1224)	アーブ・アンバール	Lālū	創建	Hājji Mohammad	
	14	1812/3 (1227)	アーブ・アンバール	Sardār (Rāh Ray)	創建	Mohammad Hasan Khān Sardār Mohammad Hosein Khān Sardār	
	15	1813/4 (1229)	アーブ・アンバール	Sardār	創建	Mohammad Hasan Khān Sardār Mohammad Hosein Khān Sardār	
	16	1815(1231)	モスク・マドラサ	Sardār (Qomlāq)	創建	Mohammad Hasan Khān Sardār Mohammad Hosein Khān Sardār	
	17	1845	モスク・マドラサ	Sālehīye	創建	Mollā Sāleh Barāghānī	
	18	1819/20 (1235)	アーブ・アンバール	Hājji Bābā Shīshegar	創建	Hājji Bābā	
	19	1822/3 (1238)	モスク	Masjed Jāme'ミフラーブ	修繕		
	20	1828/9 (1244)	アーブ・アンバール	Hakīmhā	創建	Hājji Mīrzā Āghā-ye Hakīm	
	21	1829/30 (1245)	アーブ・アンバール	Zargar kūche	創建	Hājji Fath 'Alī	
	22	1829/30 (1245)	モスク	Zargar kūche	創建	Hājji Fath 'Alī	
	23	?	墓廟	Hājji Seyyed Javādiyī	創建		
	24	1380/1(1246)	モスク	Sūrākh-e Sūrākh	改築	Mīrzā Karajeiとパンベ・リーセ区の住民	
	25	1834/5 (1250)	墓廟	Hājji Mollā 'Abd ol-Wahhāb	創建		
	26	1834/5 (1250)	モスク・マドラサ	Moulā Verdī Khān	修繕	創業者の子孫	
	M.	27	1835/6 (1251)	アーブ・アンバール	Moulā Verdī Khān	修繕	創業者の子孫
		28	1835/6 (1251)	正門	Masjed Jāme'	修繕	
29		1838/9 (1254)	アーブ・アンバール	Sīshegar Khāne	創建	Hājji Hasan	
30		?	モスク	Sīshegar	創建	Sīshegarの一人	
31		1840/1 (1256)	アーブ・アンバール	Hājji Kāzem	創建	Hājji Kāzem Kūzegar	
32		1843/4 (1259)	公衆浴場	Safā (Hājji Mohammad Rahīm)	創建	Hājji Hasan b. Hājji Abdollāh	
33		1846/7(1263)	モスク	Sabz	創建	Hājji Yūsof Qazvīnī	
34		1846/7(1263)	墓廟	Shahīd Sāles	修繕	Hājji Mohammad Taqī Baraghānī	

¹ 表中の略号は次の通り。M.A.：モハンマド・アリー・シャーの統治期間（1907 - 1909年）。A.：アフマド・シャーの統治期間（1909 - 1925年）

N.	35	1850/1 (1267)	堰	? (Dizaj川)	創建	Nāser od-Dīn Shāh	
	36	1855/6 (1272)	正門	Masjed Jāme'	修繕		
	37	1858/9(1275)	邸宅/ホセイニーエ	Hoseiniye Amīnīhā	創建	Mohammad Rezā Amīnī	
	38	1859	電信局	telegrāhkhāne	創建	E'tezād os-Saltane	
	39	1868/9 (1285)	アーブ・アンパール	Moulā Verdī Khān	修繕	Hājji Malek Mohammad 'Alī Mortezā	
	40	1873/4頃(1290頃)	モスク	Hājji Mūsā	創建	Hājji Mūsā Bazzāz Qazvīnī	
	41	1875(1292)	ガナート	Khiyābān	修繕	Shāhzāde Ahmad Mīrzā	
	42	1880, 01, 19 (1297, Safar, 06)	メフマーン・ハーネ	Mehmānkhāne	完成	S'ad os-Saltane	
	43	1880 (1297/8)	電信局	telegrāhkhāne	完成	S'ad os-Saltane	
	44	1882/3(1300)	マドラサ	Panje 'Alī	修繕		
	45	1883/4(1301)	ガナート	Khātūnī	修繕	Mīrzā Abū'l-Qāsem Tabīb	
	46	1888 (1305/6)	街道	Tehrān - Qazvīn	完成	S'ad os-Saltane	
	47	1889/90 (1307)	聖者廟	Shāhzāde Hosein	修繕	S'ad os-Saltane	
	48	?	宮殿	'emārat-e Saltanatī	修繕	S'ad os-Saltane	
	49	?	大門	Rasht	修繕	S'ad os-Saltane	
	50	?	複合施設	Sa'dīye	創建	S'ad os-Saltane	
	51	?	大通り	Khiyābān-e Tehrān	整備	S'ad os-Saltane	
	52	?	大通り	Khiyābān-e Peighambarīye	整備	S'ad os-Saltane	
	53	?	大通り	Khiyābān-e Rasht	整備	S'ad os-Saltane	
	54	1890	銀行	New Oriental Banking Corporation (branch)	創建	New Oriental Banking Corporation	
	55	1892/3 (1310)	聖者廟	Slotān Seyyed Mohammad	修繕	Hājji 'Alī Akbar Lavvāf Qazvīnī	
	56	1895/6 (1313)	聖者廟	Shāhzāde Hosein	改築	S'ad os-Saltane	
	Mz.	57	1896-1899	街道	Tehrān-Anzālī	整備	ロシア
		58	?	事務所	Kāntūr	創建	アンガリ=テヘラン道路建設会社
		59	?	宮殿	'emārat-e Saltanatī	修繕	Sālār-e Akram, Farhang-e Dūstān
		60	1902/3 (1320)	新式学校	Omīd	創建	Sālār Akram
61		1902/3 (1320)	モスク	Hājji Karīm	修繕	Hājji Karīm	
62		1903 (A.P.1281)	学校	Arāmene	創建	アルメニア正教会	
63		?	新式学校	Sa'adat	創建	Sālār Akram	
64		1905/6 (1323)	新式学校	Tavakkol-e Benīn	創建	Mīrzā Mūsā	
65		1905/6 (1323)	モスク・マドラサ	Sheikh ol-Eslām	修繕	Mīrzā Mas'ūd Seikh ol-Eslām	
66		1905/6 (A.P.1284)	印刷所	matba'e-ye 'Alī	創建	Āqā Sheikh Abū ol-Qāsem	
67		1906	鉄道	Tehrān - Qazvīn	創建	ロシア	
M.A.	68	1908/9 (1326)	新式学校	Tavakkol-e Banāt	創建	Mīrzā Mūsā	
	69	1908/9 (1326)	アーブ・アンパール	Hājji Karīm	修繕	Hājji Karīm	
	70	1909/10 (1327)	大通り		拡張	mojāhedīn	
A.	71	1911/2 (1330)	新式学校	Eslāmiye	創建	Sheikh 'Ebād-ollāh Razbān、教育協会のメンバー	
	72	1912/3 (1331)	モスク・マドラサ	Sheikh ol-Eslām	修繕		
	73	1913/4~1914/5 (1331~2)	モスク	Meimūne	修繕	Hājji Mehdīとハンダグパール区住民	
	74	1914/5 (1333)	新式学校	Farhang	創建	教育協会のメンバー	
	75	1914/5 (1333)	新式学校	Dūshīzegān	創建	Mīrzā Hosein Khaiyāt "Pedar"	
	76	1914/5 (A.P.1293)	新式学校	Adab	創建	ガスヴィーン在住のクルド人	
	77	1915	教会	Āsūrīhā	創建		
	78	1915/6 (1334)	モスク	Heidarīye	修繕		
	79	1918/9 (A.P.1297)	新式学校	Shams	創建		
	80	1918/9 (A.P.1298)	新式学校 (公立)	Adab	創建	政府	
	81	1922/3 (A.P.1301)	新式学校	Nāmūs	創建		

参考資料4：ガズヴィーンの建造物

(1) モスク

	名前	創建者 (創建年：西暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年：西暦, A.H.年)	街区	備考
1	大会衆モスク (masjed jāme')	Hārūn ar-Rashīd (807/8, 192)		ダッバーガーン	元ゾロアスター教寺院
2	ヘイダリーエ (Heidarīye)		Amīr Khomārtāsh (12世紀ごろ)	バンベリーセ	元ゾロアスター教寺院 改築後はマドラサと同空間
3	シャー (Shāh)				
4	ハーッジ・モッラー・アーガー (Hajji Mollā Āqā)			ラーフ・クシュク	同名のアーブ・アンバルと連結 Eltefatīyeマドラサ向かい
5	アーガー (Āqā)	Hājjī Mohammad Sādeq (?)		セツケ・シャリーハーン	以前Mollā Kātebīモスクだった
6	アーマアスーム／アーガーマアスーム (Āma'sūm, Āqā Ma'sūm)			ゴム・ラーク	同名のバーザールチェと連結
7	アフマディーエ (Ahmadiye)			ヒヤーバーン	Sheikh Ahmad Ghazārīの墓がある
8	アミーニハー (Aminihā)			ハンダクバル	Hājjī Mohammad 'Alī Āqā-ye Aminihā邸宅と連結
9	ハーッジ・エスマイーール (Hājj Esmā'īl)	Hājj Esmā'īl (?)			同名のアーブ・アンバル、マドラサと連結 周辺住民のための施設 Sūkhte Chenārのそば
10	ハーッジ・エブラーヒーム (Hājj Ebrāhīm)	Hājj Mohammad Ebrāhīm (?)		ディーマジ	同名のアーブ・アンバルと連結 Āhangarバーザールの近く 1946(A.P.1325)年にゴルリーズが調査している
11	アフマド・ベイグ (Ahmad Beig)	Ahmad Beig (?)		シェイハーバード	
12	バーザールチェ (Bāzārche)				
13	パンジエ・アリー (Panje 'Alī)	Shāh Tahmāsb (サファヴィー朝期)			後宮のためのモスクとして創建 碑文なし Hājjī Karīm浴場の近く
14	ハーッジエ・シャヒード (Khājje Shahīd)			マクラアヴァク	
15	ハーン・ジャン・ハーン (Khān Jān Khān)	Khān Jān Khān (?)		マクラアヴァク	
16	ザルギヤル・クーチェ (Zargar kūche)	Hājjī Fath 'Alī (1829/30, 1245)			Hājjī Fath 'Alīアーブ・アンバルと連結 do dar浴場の近く
17	スーフテ・チェナール (Sūkht-e Chenār)			ラーフ・クシュク	
18	ソルターニーエハー (Soltāniyehā)			ラーフ・クシュク	Āqā Kabīrバーザールチェの近く
19	サンジデー (Sanjīde)		セルジューク朝期	ラーフ・レイ	元ゾロアスター教寺院
20	セムサーレ・クーチェ (Samsār-e kūche)			ハンダクバル	

21	ボルール浴場の先 (sar-e hammām-e Bolūr)			アーホンド	Bolūr浴場の近く 以前はMollā Ebrāhīm Tāleqānīマ クタブだった
22	サブズ (Sabz)	Hājji Yūsof Qazvīnī (1846/7, 1263)		アーホンド	以前はマクタブだった
23	スーラーヘ・スーラーフ (Sūrākh-e Sūrākh)		Mīrzā Karajēīと街区 の人々 (1830/1, 1246)	バンベリーセ	非常に古いモスク
24	シーシエギヤル (Shīshegar)	Shīshegarの一人 (?)		ラーフ・クシュク	同名のアーブ・アンバルと連結
25	シャヒード (Shahīd)	Hājji Mollā Mohammad Taḡī Borqānī (?)		ディーマジ	Sābeq川と連結 Dabbāqānバーザールと東側で連結 同名のアーブ・アンバル、ホセイニー エあり
26	ターゲ・ボフルール (Tāq-e Bohlūl)			ラーフ・レイ	ヘイダリーエ・モスクの近く 同名のアーブ・アンバル、公衆浴場と 連結 敷地内にテキエあり
27	ハーッジ・セイエド・アリー (Hājji Seyyed ‘Alī)			ラーフ・クシュク	Sa’dātマドラサの向い 現存していない
28	ハーッジ・キャリーム (Hājji Karīm)		Hājji Karīm ‘Allāf (1902/3, 1320)	ラーフ・クシュク	アーブ・アンバル、公衆浴場と連結 (おそらく本来の名はĀqā Majīd)
29	キャラントル (Karāntar)	キャラントルの一人 (?)		セツケ・シャリーハーン	
30	クーチェク (kchek)			ラーヘチャマーン	
31	ラールー (Lālū)			グースファンド メイダーン	同名のアーブ・アンバルと連結
32	アッラー (Allāh)	王子の一人 (サファヴィー朝)		ハンダクバル	
33	キャルバライー・マレキー (Karbarāi-ye Malekī)	Karbarāi-ye Malekī (?)		シェイハーバード	Zāfarāniyeのバーザールチェと連結
34	アーガー・セイエド・モハンマド (Āqā Seyyed Mohammad Charmforūsh)	Āqā Seyyed Mohammad Charmforūsh (?)		ラーフ・クシュク	
35	ハーッジ・ムサー (Hājji Mūsā)	Hājji Mūsā Bazzāz Qazvīnī (1873/4頃, 1290頃)		ラーフ・クシュク	ĀqāバーザールチェとLālūアーブ・アン バルの向かい
36	メIMUMネ (Maimūne)		Hājji Mehdīと街区の 人々 (1912/3-1913/4, 1331-32)	ハンダクバル	古いモスク アーブ・アンバルと連結 別名Smadiye ?
37	モッラー・メフディー (Mollā Mehdī)	Mollā Mehdī (?)	街区の人々 (1935/6, 1354)	アーホンド	
38	モウラー・ヴェルディー・ハーン (Moulā Verdī Khān)	? (1648)	Moulā Verdī Khān (1763/4, 1177)	グースファンド メイダーン	同名のマドラサと同敷地 Khānアーブ・アンバルと連結
39	ハフト・ダル (haft dar)			セツケ・シャリーハーン	バーザールチェの始まりにある
40	モガベル (moqāber)				Shahīd廟と連結

* Minūdar: 588-598; Dabīrsiyāqī (A.P.1381) : 576-611 より筆者作成。

(2) マドラサ

	名前	創建者 (創建年：西暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年：西暦, A.H.年)	場所	備考
1(1)	アーガーノ・ハーヅジ・セイイド・タギー (Āqā/ Hājji Seyyed Taqī)			ハンダクバル	Hājji Seyyed Taqī A'lā Allā (所有、彼の死後半壊)
2	アーガーシーノ・シェイホルエスラムノ・マスウディーエ (Āqāsī/ Sheikh ol-Eslām/ Mas'ūdiye)		Mīrzā Mahmūd Sheikh ol-Eslām Qazvīnī (1903) ? (1912/3, 1331)	セツケ・シャリーハーンノ ヒヤーハーン	セバフ通りの東
3(2)	エブラヘミーエノ・ハーヅジ・セイイド・エブラヘーム・トノ カーボナーノ・ジャディード (Ebrāhīmīye/ Hājji Seyyed Ebrāhīm Tonokā bonā/ jadīd)	Hājji Seyyed Ebrāhīm Tonokābonā (?)		ラーフ・クシュク	モウラヴィー通り, タブリーズ通り, Sardār小路 Lālūアーブ・アンパール (連結) Āqāバーザールチエ (ワクフ財) 創建者はQazのモジタヘドの一人
4	アブ・アブドラー・モハンマド (Abū 'Abd-ollāh Mohammad b. Ebrāhīm Khalīlī)				
5(3)	エルテファアティエ (Eltefātiye)	Khāje Eltefātの助力 (イルハン朝期)	サファヴィー朝期に改築	ラーフ・クシュク	ラシュト通り北部 Hājji Moulā Āqāモスクの向かい
6	アミール・ザーヘド (Amīr Zāhed)			バンベリーセ	
7	アミール・アリー・オルホサーミー (Amīr 'Alī ol-Hosāmī)				
8	イトギントルキー (Ītqīn Torkī)				
9(4)	パンジ・アリーノ・エマーム・サードク (Panje 'Alī/ Emām Sādeq)	Mohammad Sādeq Taleqānī? (サファヴィー朝期、年代は不明)	? (1882/3, 1300) ? (1938/9, 1357)	セツケ・シャリーハーンノ ヒヤーハーン	Panje 'Alī聖廟 (西で連結) Hājji Karīm浴場・市場 (南で連結) Peighambarīye通りに西南と南に門でつながる 創建者は28の創建者の可能性あり
10(5)	ペイガンバリーエ (Peighambarīye)	Mohammad Taqayā b. Mīrzā Hedāyat Esfahānī (1645年9/10月, 1055年シャアバーン月完成)	Moulā Vīrdī Khān (1737/8, 1150)	セツケ・シャリーハーンノ ヒヤーハーン	Peighambarīye廟 (北で連結) Peighambarīye通り (東で連結) Chehel Sotūnの庭園 (南西で連結)
11(6)	エブラヘミーエノ・ジャディード (Ebrāhīmīye/ jadīd)	Hājji Ebrāhīm (?)		アーホンド	Soltān Seyyed Mohammad聖廟の南に位置 南側にモスク (礼拝室)
12	サンジデー・モスク (Janb-e Sanjīde masjid)				Sanjīdeモスク (南で連結)
13(7)	ヘイダリーエ (Heidārīye)	? (セルジューク朝期)	? (1915/6, 1334)	バンベリーセ (ボラー ギー)	
14	ハリーフェ・ソルトーン (Khalīfe Soltān)	'Alā od-Dīn Hosein (サファヴィー朝期)			セバフ通り (東で連結) 大会衆モスク (向い) サアドツァルタネ期に解体
15	ハリール (Khalīl b. 'Abd ol-Jabbār)	Khalīl b. 'Abd ol-Jabbār (1096/7, 490)			
16	ラズムサーリーエ (Razmsārīye)				Malek Tifūr Anjandānīによる伝聞
17(8)	サルダール (Sardār)	サルダール兄弟 (1815, 1231)		ゴムラク	タブリーズ通り Sardārアーブ・アンパール (向い)
18	サアド (Sa'd b. 'Abd ol-Majīd)				
19(9)	シャアバーン・コルディー (Sha'bān Kordī)	Sheikh Mohammad Hasan Sha'bānkordī (?)		セツケ・シャリーハーン	創建者はガズヴィーンノ・ウラマーの一人
20	サーヘブ (Sāheb b. 'Abbād)	Abū ol-Qāsem Esmā'īl b. 'Abbād Vazīr (983/4, 373)			大会衆モスク近く
21(10)	サーレヒーエ (Sālehiye)	Mollā Sāleh Barāghānī (1817)		ゴムラク	街区の北部 Sālehiye小路 (西側) モウラヴィー通りの西 バーザールの向かい ホマルターシュノ・ガナート西から東へ通り抜ける
22	アブドラーフマーノ・ルカラジー ('Abd ol-Rahmān ol-Karājī)				
23	アンバリーエ ('Anbarīye)				
24	ガーズイー・オマルノ・マジドルマレク (Qāzī 'Omar b. 'Abd ol-Majīd ol-Malek)	Qāzī 'Omar Zein od-Dīn b. 'Abd ol-Majīd ol-Malek (?)			大会衆モスク
25	アーホンド墓所 (maqbare-ye Marhūm Ākhond)			アーホンド	Ākhond Mollā Khalīlā Khalīl b. Ghāzī Qazvīnī墓 廟
26	モッター・ハサン (Mollā Hasan Mojtahed)			セツケ・シャリーハーン	
27(12)	モウラー・ヴェルディー・ハーン (Moulā Verdī Khān)	Moulā Verdī Khān (1763/4, 1177)	創建者の子孫 (1834/5, 1250)	グースファンド・メイター ン	同名のモスクと同敷地
28	ナヴァーブ・ソルトーン (Navāb Soltān)	Navāb Soltān (1653/4, 1064)	シャー・アッバース2世期		

(数)はMinūdarでガージャール朝期の重要モスクとしてリストアップされたものの通し番号

* Minūdar: 599-619; Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 565-575 より筆者作成

(3) 墓廟

	名前	創建者 (創建年：西 暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年：西暦, A.H.年)	場所	備考
1	アーメネ／アミーネ・ハートゥーン (emānzāde-ye Āmene/ Amīne khātūn ben. Ja'far Sādeq)			バンベ・リーゼ区	
2	ビービ・シャフル・バーヌー (emānzāde-ye Bībī Shahr Bānū ben. Mū sā b. Ja'far)			ラーフ・チャマーン区 テヘラン通り Chaman Ā b ād小路	テヘラン門の近く
3	ピール・セフィード (ārāmgāh/ maqbare-ye Pīr Sefīd)	サファヴィー朝 期？		バンベ・リーゼ区 Meidān-gāh地区	Mīrzā Karīm浴場の南 以前は巡礼地だったが、名前は残っていない 恐らくサファヴィー朝期に同地区の住人であったSheikh Jamā od-Dīnの墓
4	ピール・アラム・ダール (ārāmgāh/ maqbare-ye Pīr 'Alamdār)			ラーフ・レイ区 テヘラン通り Rakhtshūr小路	テヘラン門の近く Pīr sāl浴場の北の入り口の近く 以前は巡礼地だったが、名前・由来は残っていない
5	サブゼ・モスクそばのピール (ārāmgāh/ maqbare-ye Pīr kenār-r Sabze masjid)			アーホンド区	Sabzeモスク（以前はマクタブ）の南西と連結 以前は巡礼地だったが、名前は残っていない
6	ベイガンバリーエ／チャハール・アンビヤーとサーレフ (ārāmgāh-e peighambarīe/ chahār-anbiy ā va emānzāde-ye Sāleh)		1回目：サファヴィー 朝期に改築？ 2回目：Mīrzā Mahmūd Sheikh ol-Eslām Qazvīnī (1905/6, 1323)	ベイガンバリーエ通り	宮殿域の西側 4人の予言者 (chahār anbiyā / peighambarī ye) が埋葬された地として有名な巡礼地だった サファヴィー朝期に南側にマドラサが隣接されたことで、ベ イガンバリーエの名で知られるようになった 修繕者のSheikh ol-Eslāmの墓が西側の一等地に 建てられた
7	チェヘル・タン／チェヘル・ドホタラン (ārāmgāh/ mazār-e Chehel-tan/ Chehel- dokhorārān)	サファヴィー朝 期？		セバフ通り	Omid校の向かい、アーリー・ガーバー門と連結 イスマール2世（在位：1576-1577年）に肅清 された王族たちの墓といわれている
8	ハーッジ・セイエド・ジャヴァーディヤーン (ārāmgāh/ maqbare-ye Hājji Seyyed Jav ādiyān)			Hājji Seyyed Javādiyān通り	シャーザーデ・ホセイン廟の北側の墓地 Hājji Mollā 'Abd ol-Vahhāb Dār osh-Shefā'īの 墓の南側にある
9	ハーッジ・モッター・アブドゥル・ヴァッハーブ (ārāmgāh/ maqbare-ye Hājji Mollā 'Abd ol-Vahhāb Dār osh-Shefā'ī)				シャーザーデ・ホセイン廟の北側の墓地
10	ハムドラー・モストウフィー (ārāmgāh-e Hamd-ollāh Mostoufi)		・街区の人々 (20世紀初頭) ・vezārat-e farhang (1940/1, A.P.1319)	バンベ・リーゼ区 Meidāngāh地区	Āmene Khātūn廟とAlī廟の中間に位置 北にアーブ・アンバールが連結
11	モッター・ハリラー／ハリール (ārāmgāh-e Mollā Khalīlā/ Khalīl b. Ghāz ī Qazvīnī)		？ (1669/70, 1080)		現存していない
12	スーフテ・チェナル／ダーヴード (ārāmgāh-e Sūkhte Chenār/ Dāvūd b. Soleimān Qāzī)			ダルブ・クシュク区 Sūkhte Chenār地区	
13	ソルトターン・セイエド・モハンマド (emānzāde-ye Soltān Seyyed Mohammad b. Ja'far os-Sādeq)		Hājji 'Alī Akbar Lavvāf Qazvīnī (1892/3, 1310)	アーホンド区	jadīdマドラサの北 創建者はダルブ・クシュク区の住人
14	シャーレフ・ガームース (ārāmgāh-e Shāreh Qāmūs)	サファヴィー朝 期？		ラーフ・レイ区 テヘラン通りの南	サファヴィー朝期のMohammad b. Yahyā b. Mohammad b. Shafī' Qazvīnīの墓 その後マクタブ→家屋となって現存していない
15	シャーザーデ・ホセイン (ārāmgāh-e Hosein b. 'Alī Mūsā ol-Rezā)			ダッバーガーン区	
16	シャーヒード・サーレス (ārāmgāh/ maqbare-ye Shahīd Sāles)	Hājji Mīrzā Ab ū ol-Qāsem Shīrāzī (?)	Hājji Mohammad Taqī Baraghānī (1846/7, 1263)	シャーザーデ・ホセイン廟参道	シャーザーデ・ホセイン廟の西側 創建者自身のために建てられた墓所を、改築して墓地 とした
17	アフマド・ガザリー (ārāmgāh/ mazār-e Ahmad Ghazālī)				
18	シェイフ・アラク (ārāmgāh/ mazār-e Sheikh Alak Qazvīnī)				
19	サーレフ (emānzāde-ye Sāleh)				
20	タリーゲ・ダストジェル (ārāmgāh/ maqbare-ye Tarīq-e Dastjerd)				
21	アリー (emānzāde-ye 'Alī b. Ja'far Sādeq)			バンベ・リーゼ区	アーブ・アンバールとマクタブが隣接
22	ガーセム (emānzāde-ye Qāsem)			タンヌール・サーザン区	
23	ガヴァーム (ārāmgāh/ maqbare-ye Qavām)			モウラヴィー通り	Sabzモスクの前
24	ミール・マアスム (ārāmgāh-e Mīr Ma'sūm)	？ (1736/7, 1149)			シャーザーデ・ホセイン廟の南
25	ゾベイデ・ハートゥーン (boqe'-ye Zobeide Khtūn)			ヒヤバーン区の東	アーブ・アンバールあり

(4) テキエ

	名前	創建者 (創建年：西 暦, A.H.年)	街区	備考
1	アーガー・ホセイ・ナイーブ (Āqā Hosein Nāyeb)		グースファンド・メイダーン	サアディー通り, Sange Kūhe小通, Sābeq/ bāzār 川のそば 煉瓦使用の簡素な造り 碑文なし 創建・修繕に関する情報なし かつては2日間タスイー工上演 バフラーヴィー朝期にはShāyegān小学校となっていた
2	アフシャリーエ (Afsḥāriye)			
3	タンヌール・サーザン (Tannūrsāzān)		タンヌール・サーザン	
4	ジャヴァーン・シール (Javānshīr)			
5	チャーヴーシュ (Chāvūsh)		タンヌール・サーザン	
6	ハーッジ・エスマーイール (Hājji Esmā'īl)		バンベ・リーセ	
7	ハーッジ・ミールザー・ファスィーフ (Hājji Mīrzā Fasīh)		ゴムラーク	
8	国立 (doulat)	シャー・アッパース2 世の時代		ナーテリー庭 1854/5(A.H.1271)年に閉鎖された
9	デルヴィーシュ・ホスロウ (Dervīsh Khosrou)		ラーフ・クシュク	
10	サアドッサルタネ (Sa'd os-Saltane)			
11	ターゲ・ボフルール (tāq-e Bohlūl)		ラーフ・レイ	同名のモスクとアーブ・アンバルと連結 同名のモスクの通路に建てられており, 中庭を通して出 入りする アーシューラーの際に黒布で覆う
12	モハンマド・ハーン・ベイグ/マド・ハーン・ベイグ (Mohammad Khān Beig/ Mad Khān Beig)		グースファンド・メイダーン	Shīrīn Ābād ここでナズルをしたり転がったりすると腰痛などの軽い病 気が治るといふ利益があるとされている
13	食料雑貨商ミールザー・アフマド (Mīrzā Ahmad Baqqār)		ラーフ・レイ	
14	ミールザー・ガラーグ (Mīrzā Qalāq, Mīrzā Ghalāgh Mīrzā Kalāgh)		ヒヤーバーン	シャーザーデ・ホセイ・ン廟参道 浴場の向かい qalāqは鳥 (kalāgh) のガスヴィーン訛

* Mīnūdar: 620 Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 451-452 より筆者作成

(5) ホセイニーエ

	名前	創建者 (創建年：西 暦, A.H.年)	街区	備考
1	アーガー・セイエド・レザイー (Āqā Seyyed Rezaīhā)			ベイガンバリーエ通り, ベイガンバリーエ廟の向かい
2	アミーニー (Amīnīhā)	Hājji Mohammad Rezā Amīnī (1858/9, 1275)	アーホンド	1885 (A.H.1303) 年創建者によってワクフとされる
3	タギー (Taqavīhā)			Āqā Seyyed 'Abd os-Sam'dモスクと同敷地
4	ハーッジ・セイエド・アーガー・イェ・アディー ブ (Hājji Āqā-ye Adīb)			モウラヴィー通り, Safā浴場の向かいの小路
5	ハーッジ・セイエド・アブー・タラーブ・ア ブー・タラービー (Hājji Seyyed Abū Tarāb Abū Tarābī)		ハッラー ジャー	6の近く
6	ハーッジ・セイエド・ジャマール (Hājji Seyyed Jamāl)			セバフ通りの南西, 大会衆モスクの裏, Hājji Seyyed Jamāl小道 アーブ・アンバルあり
7	ハーッジ・セイエド・ホセイ (Hājji Seyyed Hosein)			西側の入り口がベイガンバリーエ通りとつながる アーリー・ガブー門の南から西にかけて
8	ヒヤーバーン (khiyābānī)			Shaffī小路の終わり 西側の入り口がセバフ通りとつながる
9	謁見の間 (dīvānkhāne)	Amīr Ma'sūm (サファヴィー朝 末期)		Dīvānkhāne小路 Vazīrバーザール近く
10	黒幕 (siyāhpūshhā)			Zīr Tāqī Asīd Rabī小路 説教台がある
11	殉教者 (Shahīdīhā)		ディーマジ	モウラヴィー通り Shahīd Sālesモスクと同敷地

* Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 455-457 より筆者作成

(6) アーブ・アンバール

	名称	所在地 (街区名は下線付きで区/mahalleを省略した形で示す)	備考
1	Āqā	gozar-e Dabbāghān, kūche-ye Āqā Mīr ‘Abd os-Samad	
2	Āqā Bālā	Panbeh Rīse, gozar-e Gol Bīne, kūche-ye Pīr	
3	Āghāsī	khiyābān-e Sepah, maṣjed Sheikh ol-Salām	
4	Āb-gūshfīhā	<u>Khandaqbār</u> , kūche-ye Semsār	
5	Āghā Dā‘ī	<u>Khandaqbār</u>	Khandaqbār門近く
6	Āhanīhā	<u>Qomlāq</u>	Khājjī Mohammad Āhan Forūshの邸宅と連結
7	Ansālī	sālāmgāh-e Shāhzāde Hohein, kūche-ye Ansālī	
8	Anbār-e bozorg	<u>Gūsfand Meidān</u> , gozar-e Sar Kalleg, kūche-ye Tākestānīhā	
9	Anbār-e kūchek	<u>Gūsfand Meidān</u> , gozar-e Sar Kalleg, kūche-ye Tākestānīhā	
10	Arjomandī	<u>Gūsfand Meidān</u> , kūche-ye Īrā → Frāmīrz	
11	Ekhvān	<u>Qomlāq</u> , kūche-ye E‘temād	
12	Emānzāde ‘Alī	<u>Panbeh Rīse</u>	‘Alī廟の南
13	Amīne Khātūn	<u>Panbeh Rīse</u> , kūche-ye Malek Ābād	
14	Bārūtīhā	khiyābān-e S‘adī, Shīrīn Ābād	Sābeq川の側
15	Pāshā	Rāh Kushk, kūche-ye Haddādihā	Sang-e pānzdahの前
16	Pālān-dūz	khiyābān-e Tabrīz, gozar-e Sar Kalleg	
17	Panj-e ‘Alī (4)	khiyābān-e Peyghambarīeh, kūche-ye Panj-e ‘Alī	
18	Tannūr Sāzān	gozar-e Tannūr Sāzān, kūche-ye ‘Attārī	
19	Jazameī (14)	<u>Sekke Sharīhān</u>	Gūshe浴場近く
20	Hājjī Āqā Tabīb (9)	<u>Rāh Chamān</u> , kūche-ye Tabīb	
21	Hājjī Mollā Āqā (3)	khiyābān-e Rasht	Eltefātīeh マドレセ向い
22	Hājjī Āqā Mohammad	khiyābān-e Moulavī	Shahīd浴場側
23	Hājjī Ebrāhīm	bāzār-e Āhangar	Sābeq川の側
24	Hājjī Seyyed Ebrāhīm	bāzār-e Vazīr, kūche-ye Faqīhzāde	
25	Hājjī Esmā‘īl	khiyābān-e Nāderī	Sūkhte Chenārの近く
26	Hājjī Javād	<u>Ākhond</u>	Ākhond広場
27	Hājjī Mīr Hasan	Dīmāj, bāzār-e ‘Allāf	Sābeq川の側
28	Hājjī Khāleq	<u>Rāh Rey</u> , kūche-ye Fakhkhār	街区の南
29	Hājjī Rahīm Bandkadār	khiyābān-e Moulavī, kūche-ye Shīrāzīhā	
30	Hājjī Rezā	<u>Panbeh Rīse</u> , kūche-ye Manāf	広場
31	Hājjī Zeynal	khiyābān-e S‘adī, Farāmarz	
32	Hājjī Sālef	Dīmāj, bāzār-e ‘Allāf	
33	Hājjī Tabīb	kūche-ye Amīr Amjad Majīd	
34	Hājjī ‘Abdī	gozar-e Bolāghī, kūche-ye Kesmā‘īhā	
35	Hājjī ‘Abd or-Razzāq	Dīmāj, kūche-ye ‘Abd ol-Razzāq	Hājjī Mīr Hasan浴場の側
36	Hājjī Gholām Hosein	<u>Dīmāj</u> , kūche-ye Morād	Hājjī Mīr Hasan浴場の側
37	Hājjī Kāzem (12)	<u>Maqlāvāk</u>	Tabrīz門の近く
38	Hājjī Karīm (13)	<u>Rāh Kushk</u>	Āqāモスクと浴場に隣接
39	Hājjī Karīm	sālāmgāh-e Shāhzāde Hohein,	
40	Hājjī Mohammad	kūche-ye Yazdīhā	
41	Hājjī Mehdi	<u>Khandaqbār</u>	
42	Hājjī Mehdi Me‘mār (1)	khiyābān-e Sepah, maṣjed Jam‘e	
43	Hājjī Mīr ‘Alī	khiyābān-e Rasht	
44	Hājjī Vakīl	<u>Khandaqbār</u>	Amīnī邸宅の向い
45	Hallājān	gozar-e Hallājān, kūche-ye Nourūzī	
46	Heidariye	gozar-e Bolāghī, kūche-ye Dabestān-e Ferdous	
47	Hamd-ollāh Mostoufi	<u>Panbeh Rīse</u>	Hamd-ollāh Mostoufi墓の側
48	Khān (2)	khiyābān-e Rasht	Moulā Verdīkhān マドラサの側
49	Khūzīn	<u>Sekke Sharīhān</u> , kūche-ye Khorkhor	
50	Khāne Jānkhān	<u>Maqlāvāk</u>	
51	Khatūbhā/ Hājjī Bābā (8)	<u>Qomlāq</u> , bāzārche-ye Āghā M‘asūm	Khatūbhā邸宅の近く
52	Rajab ‘Alī	bāzārche-ye Samadiye	庭園の裏
53	Rafī‘ī	khiyābān-e Tabrīz	Sardār浴場の近く

54	Rāh Chamān	Rāh Chamān, khiyābān-e Tehrān	
55	Zobeide Khātūn	Panbeh Rīse, kūche-ye Lāme‘	
56	Zīr-zamīn-e masjid Shā	bāzār-e Vazīr	Shāモスクの東門向い
57	Zanāne bāzār (15)	bāzār-e Zanāne	Shāモスクの西側と連結
58	Zargyar kūche (10)	Rāh Kushk, khiyābān-e Rasht, kūche-ye Zargyar	浴場の2つ扉と連結
59	Sang-bast	khiyābān-e Tehrān kūche-ye Hājji Gholām	
60	Sardāre Rāherī (6)	Rāh Rey, khiyābān-e Sepah	駅通り
61	Sardāre Qomlāq (7)	Qomlāq	Sardārモスクの向い
62	Saqqā-Khāne	sālāmgāh-e Shāhzāde Hohein	Shahzāde Hoseinの敷地内
63	Salāmgāh	sālāmgāh-e Shāhzāde Hohein, khiyābān-e Dabbāghān	
64	Seyyed Javād /Āb-e Forūshhā	khiyābān-e Sepah, kūche-ye Īzādī	
65	Siyāh-Pūsh	Sekke Sharīhān, kūche-ye Khorkhor	
66	Sabz-e masjid	Ākhond	Sabzeモスクの向い
67	Sībe	Maqlāvāk	門の近く
68	Soltān Seyyed Mohammad	Ākhond	同名のマドラサの内部
69	Sanjīde masjid	Rāh Rey, kūche-ye Deh-Khodā Bāshī	
70	Sheikh Mohsen ‘Arab	gozar-e Tannūr-sāzān, kūche-ye Mrzā Bāqer Hakīm	
71	Shafā‘ī	kūche-ye Dār-ol-Shafā‘	電気工場の近く
72	Shourān Khāne	gozar-e Hallājān, kūche-ye Sheikh Kharrzī	
73	Sheikh Ābād	Sheikh Ābād	Sheikh Ābād門の側
74	Shahīdihā	bāzār-e ‘Allāf	
75	Shīshegar (Ākhond)	Ākhond, kūche-ye Shīshegar-Khāne	
76	Sheikh Hasan	Khandaqbār	
77	Shīshegar (Rāh Kushk) (11)	Rāh Kushk	Shīshegarモスクと墓地と連結
78	Shahrdār	Maqlāvāk	
79	Sālehī/ Sālehiye	khiyābān-e Moulavī	Sālehiyeモスクとマドラサに連結
80	Sābūnīhā	Panbeh Rīse, kūche-ye ‘Azīzī	
81	Tāq Bahlūl	Rāh Rey, kūche-ye Dabestān-e Badr	Tāq Bahlūl
82	‘Azīzī	bāzārche-ye Āghā M‘asūm kūche-ye Hammām	
83	Ghiyās Nozzām		Golestān庭園の向い、電信局側
84	Fakhkhārāhā		Shahzāde Hosein門外
85	Kalāntarī	khiyābān-e Tehrān	旧警察署
86	Kāshānī	Gūsfand Meidān, kūche-ye Farāmarz	
87	Gazle	gozar-e Pā‘īn mahalle, kūche-ye Behtū‘ī	
88	Elāh		Zolam Ābād庭園の近く
89	Lālū (5)	khiyābān-e S‘adī, bāzārche-ye Āqā	
90	Me‘mār-Zāde	sālāmgāh-e Shāhzāde Hohein, kūche-ye Hammām-e Kalāntar	
91	Majd -ol-Salām	khiyābān-e Sepah, kūche-ye Shahrbānī	
92	masjed Bolāghī	gozar-e Bolāghī	Bolāghīモスクと連結
93	Meimūne	Sekke Sharīhān, bāzārche-ye Samadiye	Meimūneモスクと連結
94	Mīrzā ‘Abd-ol-‘Alī	Dīmāj	Hājji Mīr Hasanのハンマームの側
95	Mohammad Sādeq	Panbeh Rīse, gozar-e Sūfiyān, kūche-ye Rūdbārīhā	
96	Me‘mār-Bāshī	Panbeh Rīse, gozar-e Gol Bīne , kūche-ye Me‘mār-Bāshī	
97	Monshī-Bāshī	kūche-ye Yakh-Chāl	Shāh庭園, Panbe Rīse門
98	Nou	Rāh Rey, kūche-ye Sheikh Mahmūd	Rāh Rey門の西
99	Nāyeb	khiyābān-e S‘adī, kūche-ye Tekieh-ye Hasan Nāyeb	
100	Nazar Beik	gozar-e Dabbāghān	
101	Nokhod-Berīzhā	Maqlāvāk kūche-ye Bārūte	
102	Nourūz Khān	Panbe Rīse, gozar-e Gol Bīne, kūche-ye Nāyeb Nourūz	
103	Nou	Panbe Rīse, kūche-ye Tehrānche	
104	Valad Ābād	Khandaqbār	Khandaqbār門近く
105	Moulā Hādī	Ākhond	Jadīdモスクの近く
106	Yakh-Chāl	Maqlāvāk, kūche-ye Yakh-Chāl	
(数字): 主要なアープ・アンパールの通し番号			

* *Mīnūdar*: 311-322; *Dabīrsiyāqī* (A.P.1381): 409-418 より筆者作成

(7) バーザール

	名前
1	鍛冶屋 (Āhangerān)
2	シルク売り／組紐商 (Abrīsham-forūshhā/ ‘Alā qebandī)
3	呉服商 (Bazzāzhā)
4	クリスタルガラス商 (Bolūr-forūsh)
5	荷蔵造り (Pālān-dūz)
6	革商人 (Pūst-forūshān)
7	油脂商 (Pīh-forūshhā)
8	煙草売り (Tūtūn-forūshhā)
9	金物職人 (Chelengarhā)
10	ハーヅジ・エドリース (Hājji Edrīs)
11	梳綿工 (Hallājhā)
12	ブリキ職人 (Halabī-sāzihā)
13	小間物屋 (Kharrāzī-forūshhā)
14	ろくろ師 (Kharrāthā)
15	乾燥果物店 (Khoshkbār-focūshhā)
16	既製服商 (Dūkhte-forūshhā)
17	綱はかり (Rīsmān-sanj)
18	金銀細工師 (Zargarhā)
19	馬具屋 (Sarrājhā)
20	サアドツサルタネ (Sa‘d os-Saltene)
21	食料品雑貨卸売商 (Saqat-forūshhā)
22	古物商 (Semsārhā)

23	櫛製造人 (Shāne-tarāshhā)
24	石工 (Sang-tarāshhā)
25	朝 (Sabāh)
26	箱製造人 (Sandūqsāzāh)
27	飼料商 (‘Allāfhā, ‘Allāf rāste)
28	薬種・香料商 (‘Attārkhā)
29	絨毯商 (Farsh-forūsh)
30	ふるい造り (Gharbār-sāzhā)
31	フェルト帽製造人 (Kolāh-mālhā)
32	ゲイセリーエ (Qeisariye)
33	枺量り人 (Kayyālhā)
34	靴屋 (Kaffāshhā, Orosī-dūz)
35	テント用品造り (Lavvāfhā)
36	古バーザール (Kohne)
37	大工 (Najjārkhā)
38	下足番 (Gīve-keshhā)
39	銅細工師 (Mesgarhā)
40	新バーザール (Nou)
41	ヴァズイーール (Vazīr)
42	大十字路 (Chahār-sūq-e bozorg)
43	小十字路 (Chahār-sūq-e kūchek)
44	ザナーネ・バザール (Zanāne bāzār)

* Mīnūdar: 295-296; Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 441 より筆者作成

(8) パーザールチェ

	名前	街区	備考
1	アーガー (Āqā)		サアディー通り
2	アーキャビール (Ākabīr)	ラーフ・クシユク	
3	アーマアスーム (Āma'sūm)	ゴムラーク	
4	大工オスタードアリー (Ostād 'Alī Najjār)	スーコルアグ ナーム	Sange Kūhe地区
5	バーゲシヤール (Bāgh-e Shā)	パンベリーセ	6店舗
6	モッラー・ジャアファル (Janb-e Masjed Mollā Ja'far)	スーコルアグ ナーム	Sange Kūhe地区
7	ハーッジ・エドリース (Hājji Edrīs)		中にArmanīhā商館
8	ハーッジ・ハサン・アリー・ニヤー (Hājji Hasan 'Alī Niyā)	スーコルアグ ナーム	Sange Kūhe地区
9	ハーッジ・シェイフ (Hājji Sheikh)		中にHājji Sheikh Amīnī, Hājji Mollā Bāqerの 大小2館、Mollā 'Alī Akbarの各商館
10	ハーッジ・モハンマド・エブラーヒーム (Hājji Mohammad Ebrāhīm)	ハンダグバール	
11	新ハーッジ・モハンマド・ハサン (Hājji Mohammad Hasan Jadīd)	セッケ・シヤリー ハーン	
12	ハーッジ・モハンマド・ラヒーム (Hājji Mohammad Rahīm)	ハンダグバール	モウラヴィー通り 中に Gol-shan-e Hājji Mohammad Rezā-ye Vakīl or-Ro'āyā商館と同名の浴場
13	ハーッジ・ミール・ハサン/ディーマジロ (Hājji Mīr Hasan/ dahān-e Dīmaji)	ディーマジ	中に同名の商館
14	ヒヤーバーン (Khiyābān)		入り口2箇所、セパフ通り、大会衆モスクの向かい
15	サフラン (Za'farāniye)	シェイハーバード	
16	サアドッサルタネ (Sa'd os-Saltene)		ラシュト通り、サアドッサルタネの商館の そば
17	サマディーエ (Samadiye)		サマディーエのモスクとアープ・アンバールの そば(?)
18	キヤドホダー地区 (Kadkhodā)	パンベ・リーセ	4店舗
19	シェイハーバード地区 (gozar-e Sheikh Ābād)	グースファンド・ メイダーン	6店舗
20	メイダーン・ガー地区 (gozar-e Meidān-gāh)	パンベ・リーセ	2店舗
21	アーガー・ハサン・アリーの相続人 (varase-ye Āqā Hasan 'Alī Marhūm)	グースファンド・ メイダーン	Salkalag地区

* Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 442-443 より筆者作成

(9) アークード

	名前	創建者 (創建年：西暦, A.H. 年)	修繕者 (修繕年： 西暦, A.H. 年)	場所	備考
1	ハーッジ・セイエド・アフマド (pāsāzh-e Hājji Seyyed Ahmad)			モウラヴィー通り	呉服商の場
2	ハーッジ・セイエド・カーゼム (tīmche-ye Hājji Seyyed Kāzam)			馬具屋(Sarrājhā)バーザールの中間	2/3の革屋の取引の場 現在は革屋と野菜卸売商の場
3	ハーッジ・モハンマド・タギー (tīmche-ye Hājji Mohammad Taqī)	Hājji Mohammad Taqī Yazdī		鍛冶屋(Ahangerān)バーザールの中	商人たちの居場所 現在は野菜卸売商の場
4	ハーッジ・ミール・ハサン (pāsāzh-e Hājji Mīr Hasan)			モウラヴィー通り	野菜卸売商の場
5	デルヴィーシュ・メフディー (tīmche-ye Dervīsh Mehdī)			大十字路(Chahār-sūq-e bozorg)バーザールの中間 馬丁(Jelou-dār)浴場のそば 貨幣鋳造所(Zarrāb-khāne)商館の南戸の向かい	秤造り(Shāhīn-sāz)の場 現在は野菜卸売商の場
6	ラザヴィー (tīmche-ye Razavī)	Hājji Seyyed Abu ol-Qā sem Rezavī Esfahānī		ラシユト通りの北	2階建て 現在は材木商の場に改築された
7	サルバーズ (tīmche-ye Sarbāz)			大市場(Qeisariye)の北 西側：バーザールにつながる 南側：大市場につながる	商人や店主たちの場
8	屋根付き (tīmche-ye Sar-pūshīde)			大市場(Qeisariye)の南 南側：大市場につながる 西側：呉服商(Bazzāzhā)バーザール、小十字路(Chahār-sūq-e kūchek)バーザールの終わりにつながる	かつては呉服商と布問屋の場 現在も服関連の取引の場である
9	シャールーディー (pāsāzh-e Shāh-rūdī)			モウラヴィー通り	野菜卸売商の場
10	シャールーディー (pāsāzh-e Shāh-rūdī)			ラシユト通り	喫茶の場
11	ゴラーム・レザー (pāsāzh-e Gholām Rezā)			モウラヴィー通り	野菜卸売商の場

* Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 450, 453 より筆者作成

(10) 宿場・隊商宿

	名前	場所		名前	場所
1	アーラーズコルド (kārvānsarā-ye Ārāz-kord)	マグラーヴァク門外	16	トノカーボナー (kārvānsarā-ye Tonokābonā)	モウラヴィー通り
2	アースラーン (kārvānsarā-ye Āslān)	ラシユト通り	17	チェラグ・アリー (kārvānsarā-ye Cherāgh-e ‘Alī)	ラシユト通り
3	アーガー・ハーッジ・バーバー (kārvānsarā-ye Āqā Hājji Bābā)		18	チャハールダ・マアスーム (sarā-ye Chahārdah Ma’sūm)	
4	アーガー・マアスーム (sarā-ye Āqā Ma’sūm)	ゴムラーク	19	櫛製造人ハーッジ・アフマド (kārvānsarā-ye Hājji Ahmad Shāne-tarāsh)	ラシユト通り
5	アルメニア (kārvānsarā-ye Armanīhā)		20	ハーッジ・アスガリー/アスカリー (kārvānsarā-ye Hājji Asgharī/‘Askarī)	
6	らば売り (kārvānsarā-ye Astar-forūshān)		21	ハーッジ・タラーブ (kārvānsarā-ye Hājji Tarāb)	バーザール
7	エスマーイーール・タッヤール (kārvānsarā-ye ‘Esmā’īl Tayyār)	セバフ通り	22	ハーッジ・ジャヴァード (kārvānsarā-ye Hājji Javād)	ラシユト通り
8	大砲職人のアクバル (kārvānsarā-ye Akbar-e Tūpsāz)		23	古ハーッジ・チュールク (khān-e Hājji Chūruk-e Qadīm)	
9	駱駝追いのアスガル (kārvānsarā-ye Asghar-e Sārebān)	ベイガンバリーエ通り	24	ハーッジ・ラスール (kārvānsarā-ye Rasūl)	
10	ベヘシュティ (kārvānsarā-ye Beheshtī)	ラシユト通り	25	古ハーッジ・レザー大商館 (sarā-ye Hājji Rezā-ye bozorg-e qadīm)	バーザール
11	パークラヴァーン (kārvānsarā-ye Pāk-ravān)	ラシユト通り	26	新ハーッジ・レザー南館 (sarā-ye Hājji Rezā-ye junūb-e jadīd)	バーザール
12	ペゼシュカーン (kārvānsarā-ye Pezeshkān)	セバフ通り	27	ハーッジ・シェイフ・アミーニー (kārvānsarā-ye Hājji Sheikh Amīnī)	ハンダダ バル
13	パンベ (kārvānsarā-ye Panbe)	ラシユト通り	28	ハーッジ・アスカリー/アスガリー (kārvānsarā-ye Hājji ‘Askarī/ Asgharī)	
14	タージェル・バーシー (kārvānsarā-ye Tājer-bāshī)	ラシユト通り	29	ハーッジ・ゴラーム・ホセイーン・アミーニー (kārvānsarā-ye Hājji Ghlām Hosein Amīnī)	ラシユト通り
15	軍人のタギー (kārvānsarā-ye Taqī-ye Nezāmī)	マグラーヴァク門外	30	ハーッジ・キャルブ・アリー (kārvānsarā-ye Hājji Kalb ‘Alī)	ディーマジ

31	ハーッジ・マジード・ハーニヤーン (kârvânsarâ-ye Hâjji Majîd Khâniyân)		54	シャヒーディー (kârvânsarâ-ye Shahîdî)	ラシユト通り
32	両替商ハーッジ・マジード (kârvânsarâ-ye Hâjji Majîd Sarrâf)		55	シール・ホルシード (sarâ-ye Shîr khorshîd)	サル・クー チェ・レイ ハーン
33	ハーッジ・モハンマド・エスマーイール (kârvânsarâ-ye Hâjji Mohammad 'Esmâ'îl)		56	貨幣鑄造所 (sarâ-ye Zarrâb-khâne)	バーザール
34	ハーッジ・モハンマド・ハサン・ヤズディー／アーホン ド区 (kârvânsarâ-ye Mohammad Hasan Yazdî/ mahalle-ye Âkhond)	アーホンド	57	アリー・モハンマド (kârvânsarâ-ye 'Alî Mohammad)	
35	新ハーッジ・モハンマド・ハサン (sarâ/ khân-e Mohammad Hasan Jadîd)	セッケ・シャ リーハーン	58	アリー・ナッジャール (kârvânsarâ-ye 'Alî Najjâr)	
36	ハーッジ・モハンマド・ラヒーム (kârvânsarâ-ye Hâjji Mohammad Rahîm)	ハンダグ パール	59	ギヤース (sarâ-ye Ghiyâs)	サブゼ・メイ ダーンの向 かい
37	大ハーッジ・モッラー・バーケル (kârvânsarâ-ye Hâjji Mollâ Bâqer-e bozorg)	ハンダグ パール	60	ゴルバーン・アリー・ガザン (kârvânsarâ-ye Qorbân 'Alî Ghâzân)	ディーマジ
38	小ハーッジ・モッラー・バーケル (kârvânsarâ-ye Hâjji Mollâ Bâqer-e kûchek)	ハンダグ パール	61	兵器廠長 (kârvânsarâ-ye Qûr-chî-bâshî)	
39	ハーッジ・ムサー (kârvânsarâ-ye Hâjji Mûsâ)	ラシユト通り	62	キャラクタータル (khân/ kârvânsarâ-ye Kalântar)	セッケ・シャ リーハーン
40	ハーッジ・モオメン (kârvânsarâ-ye Hâjji Mo'men)		63	小商館 (kârvânsarâ-ye kûchek)	グースファン ド・メイダーン
41	ハーッジ・ミール・ハサン (sarâ-ye Hâjji Mîr Hasan)	ディーマジ	64	小商館 (sarâ-ye kûchek)	グースファン ド・メイダーン
42	ハーッジ・ミールザー・ナスロッラー (kârvânsarâ-ye Hâjji Mîrzâ Nasr-ollâh)	モウラヴィー 通り	65	花園 (sarâ-ye Gol-Shan)	ラシユト通り
43	ハーッジ・ミール・アブドゥル・バーギー (kârvânsarâ-ye Mîr 'Abd ol-Bâqî)		66	宰相ハーッジ・モハンマド・レザーの花園 (sarâ-ye Gol-shan-e Hâjji Mohammad Rezâ-ye Vakîl or-Ro'âyâ)	ハンダグ パール
44	ハーッジ・ハーディー (kârvânsarâ-ye Hâjji Hâdî)		67	税関 (kârvânsarâ-ye Gomrok)	セッケ・シャ リーハーン
45	長回廊 (kârvânsarâ-ye dâlân-e derâz)		68	マジドッサラーム (kârvânsarâ-ye Majd os-Salâm)	セバフ通り
46	シャー／ラザヴィー (sarâ-ye Shâ/ Razavî)	ラシユト通り	69	チェヘル・ドホタラーンの墓所 (kârvânsarâ-ye mhalle-ye maqbare-ye Chehel Dokhotarân)	セバフ通り
47	サアディーエ／サアータト (sarâ-ye S'adiye/ S'âdat)	ラシユト通り	70	マッダーフ (kârvânsarâ-ye Maddâh)	ラシユト通り
48	サアドッサルトタネのテヘラン道りの隊商宿 (kârvânsarâ-ye Sa'd os-Saltane dar Khiyâbâne Tehrân)	テヘラン通り	71	モラード (kârvânsarâ-ye Morâd)	グースファン ド・メイダーン
49	サアドッサルトタネの商館・元駱駝小屋 (shotorkhkân-e sâbeq, kârvânsarâ-ye Sa'd os-Saltane)		72	モルタザー (kârvânsarâ-ye Mortazâ)	ラシユト通り
50	シャー／古シャー・タフマースブ1世 (sarâ-ye Shâ/ khân-e Shâ Tahmâsb)	セッケ・シャ リーハーン	73	メエマール・ザーデ (kârvânsarâ-ye Me'âr-zâde)	ラシユト通り
51	シャー・ルーディー (sarâ-ye Shâh-rûdî)	モウラヴィー 通り	74	モッラー・アリー・アクバル (kârvânsarâ-ye Mollâ 'Alî Akbar)	
52	シャー・ソレイマーン (kârvânsarâ-ye Shâh Soleimân-e Safavî)		75	マイヤール (kârvânsarâ-ye Momaiyâl)	
53	シャアバーン・コルディー (kârvânsarâ-ye Sha'bân Kordî)	セッケ・シャ リーハーン	76	モウラー・ヴェルディー・ハーン (kârvânsarâ-ye Moulâ Verdî Khân)	グースファン ド・メイダーン
			77	ミールザー・アブー・タラーブ (kârvânsarâ-ye Mîrzâ Abû Tarâb)	
			78	新モハンマド・レザー (sarâ-ye Nou Mohammad Rezâ)	
			79	新ハーッジ・モハンマド・エブラーヒーム (kârvânsarâ-ye Nou Hâjji Mohammad Ebrâhîm)	
			80	ヴァズィール (sarâ-ye Vazîr/ khân-e Vazîr-e Jadîd)	セッケ・シャ リーハーン
			81	中間の商館 (sarâ-ye vasat)	ハンダグ パール
			82	ハーシエム (kârvânsarâ-ye Hâshem)	

(11) 浴場

名前	創建者 (創建年：西 暦, A.H.年)	修繕者 (修繕年：西 暦, A.H.年)	街区	備考
1 アーホンド (Ākhond)			アーホンド	現存していない
2 アーガー・マジード (Āqā Majīd)			ラーフ・クシュク	
3 アーガー・ミールザー・アブー・タラブ / ヴァズイー (Āqā Mirzā Abū Tarāb/ Vazīr)			アーホンド	Ākhond Mollā Khān廟の西 小規模
4 アフマド・ベイグ (Ahmad Beig)			アーホンド	
5 エマーム・ジョムエ (Emām Jome‘)			アーホンド	Softān Seyyed Mohammad近く 小規模
6 アムジャド (Amjad)				セバフ通り
7 アミール・ギヤーソッディーン・ホセイニー (Amīr Ghiyās od-Dīn Hoseinī)			シャフレスターン	イスマール1世の聖域(āstāne)のワクフ
8 アミール・グーネ・ハーン / 古シヤー・タフマースプ1世 / ガジャ (Amīr Gūne Khān/ Shāh Tahmāsb-e kohne/ Qajar)	Amīr Gūne Khān (1647/8, 1057)		ラーフ・クシュク	Ākabīr / パーザールチェと連結 13と同じものとも考えられる 現在は人類学博物館になっている
9 アミーニー (Amīnī)				フェルドゥースイー通り アミーニー病院と連結
10 バージー・ハートウー (Bāji Khātū)				Ja‘far Ābād
11 バイヤンドル・クーチェ (Bāyandar kūhe)				セバフ大通, Bāyandar小路
12 ババム (Babam)[sic]			ダッバーガーン	大会衆モスクの裏
13 ボラーギー (Bolāghī)			ボラーギー	ヘイダリーエのモスク・マドラサの近く 8と同じものとも考えられる
14 ボルール (Bolūr)	サファヴィー朝 期?	ガージャール朝 期	アーホンド	
15 ボナク (Bonak)			マグラウヴァク	現存していない
16 バフラーム・ミールザー / 謁見の間 (Bahram Mirzā/ Dīvān-khāne)				
17 ビーレ・ヘサル / ビーレ・サル / ペッレ・サル (Bīle Hesār/ Pīre Sāl/ Perre Sāl)			ゴルビーネ	ラーヘ・チャマーン?
18 パーク (Pāk)				フェルドゥースイー大通
19 テイムール・ベイギー (Teimūr Beig)			グースフアンド・メイ ダーン	
20 馬丁 / 馬丁長 (Jelou-dār/ Jelodār-bāshī)			セッケ・シャリーハ ーン	Zarrāb-khāne商館の近く、パーザールの中
21 チャハールダ・マアスム (Chahārdah Ma‘sum)			ラーフ・クシュク	
22 ハーჯィ・ベイグラー (Hājji Beiglar)			ラーフ・クシュク	テヘラン通り
23 ハーჯィ・セイエド・ホセイ ン (Hājji Seyyed Hosein)			ラーフ・クシュク	
24 ハーჯィ・セイエド・ホセイ ン (Hājji Seyyed Hosein)			スーコルアグナム	Sange Kūhe地区
25 セイルダーニー (Scir-dānī)			ヒヤーバーン	
26 ハーჯィ・キヤリーム (Hājji Karīm)			セッケ・シャリーハ ーン	
27 ハーჯィ・モハンマド・バーケ ル (Hājji Mohammad Bāqer)			ヒヤーバーン	
28 ハーჯィ・モハンマド・ラヒーム / サファ ー (Hājji Mohammad Rahīm/ Safā)	Hājji Hasan b. H ājji ‘Abd-ollāh Tabriz (1843/4, 1259)	アミーニー家 (?)		モウラヴィー通り 同名のパーザールチェの中間に位置 同名の商館のそば ハンダグバール門のそば
29 ハーჯィ・モッラー・モハンマド・タ ギー / シヤーヒード (Hājji Mollā Mohammad Taqī/ Shahīd)			ディーマジ	モウラヴィー通り
30 ハーჯィ・モッラー・アブドワッ ラー (Hājji Mollā ‘Abd-ollāh)			アーホンド	
31 ハーჯィ・ミール・ハサン (Hājji Mir Hasan)			ディーマジ	現存していない
32 ハーჯィ・ミール・メフデー ー (Hājji Mir Mehdi)			ヒヤーバーン	
33 ハーჯィ・ナスロッラー・ハーン (Hājji Nasr-ollāh Khān)			ラーフ・クシュク	

34	ハーッジ・ナザル (Hājji Nazar)				
35	ホセイン・ハーン・サルダール (Hosein Khān Sardār)			グースファンド・メイ ダーン	現存していない
36	ハーン (Khān)			グースファンド・メ イダーン	Moulā Verdī Khānマドラサの近く
37	ホラファー (Kholafā)			パンベ・リーセ	Amīne Khātūn廟の向かい
38	ホラファー (Kholafā)			ラーフ・クシュク	現存していない
39	ダールーゲ (Dārūghe)			パンベ・リーセ	Amīne Khātūn廟の向かい
40	2つ戸 (Do-Dar)			ラーフ・クシュク	戸1: Zargar小路 戸2: Āqāバーザールチェと連結
41	サル・チェシュメ (Sar-Cheshme)				シャー通り, Kāntūrのそば
42	サアディーエ/サアード (Sa'ādāt/ Sa'dīye)				サアディーエの東側のアーケード, Sa'd os-Saltebe商 館, ラシト通りの近く
43	サアドヤーン (Sa'dīyān)				
44	ソルターン・サリーム・ミールザー (Solhān Salīm Mīrzā)			ゴムテーク	
45	セイエドヤーン (Seyedyān)			ヒヤーバーン	大会衆モスクと連結
46	シャー (Shā)	ファトフ・アリー・シャー			Shāモスクの北
47	シャーザーデ (Shāhzāde)			ディーマジ	サルダールm南
48	シャー・タフマースプ1世/シャーヒー (Shāh Tahmāsb/ Shāhī)	シャー・タフマースプ1世			Ja'far Ābād
49	シェイフ・アフマド (Sheikh Ahmad)				
50	シェイホルエスラム (Sheikh ol-Eslām)				セバフ通り, Chāq-sūsāzān小路
51	サーレム・ラシュキヤル (Sārem Lashkar)			アーホンド	Ākhond Mollā Khaḥān廟向い 小規模
52	ボフルール (Bohlūl)			ラーフ・レイ	Tāq-e Bohlūlモスクとアープ・アンパールのそば
53	アッバース・ゴリー・ハーン (*Abbās Qolī Khān)			ヒヤーバーン	
54	古アーチ/キャラントル (Gouse-ye qadīm/ Kalāntar)			セッケ・シャリーハー ン	
55	キャラントル (Kalāntar)			ラーフ・レイ	シャーザーデ・ホセイン廟参道近く
56	花園 (Gol-shan)			セッケ・シャリーハー ン	
57	モハンマド・ハーン・ベイク (Mohammad Khān Beig)			スーコルアグナム	Sūfī小道 サーレヒーエマドラサのワクフ 現存していない
58	モハンマド・サーデク・ハーン (Mohammad Sādeq Khān)			スーコルアグナム	Shaikh Ābādī小道
59	モオタメディー/ハーッジ・ホセイン・ハーン (Mo'tamedī/ Hājji Hosein Khān)			ラーフ・クシュク	ダルブ・クシュク門近く
60	宰相ミールザー・エスマーイーール・ハーン (Mīrzā Esmā'īl Khān Vakil or-Ro'āyā)			ゴムテーク	
61	ミールザー・ジャヴァード (Mīrzā Javād)				セバフ通り, Emāmāde-ye Esmā'īl
62	ミールザー・アブドゥウッラー (Mīrzā 'Abd-ollāh)			パンベ・リーセ	
63	ミールザー・アリー・アクバル (Mīrzā 'Alī Akbar)			ラーフ・レイ	
64	ミールザー・キヤリーム (Mīrzā Karīm)	ガージャール朝期		パンベ・リーセ	Meidān-gāh地区
65	新浴場 (Nou)			グースファンド・メ イダーン	飼料商('Alāfthā, 'Allāf rāste)バーザールと連結 Moulā Verdī Khānマドラサの向かい
66	ヤズディー (Yazdī)			ディーマジ	Āma'sūmバーザールチェの近く

* *Mīnūdar*: 324-326 Dabīrsiyāqī (A.P.1381): 555-559 より筆者作成

参考資料 5 : ガズヴィーンのアーブ・アンバール碑文¹

①大会衆モスクのアーブ・アンバール

慈悲深く、慈愛あまねきアッラーの御名において

ジャムシードの末裔のソルターン時代に ソレイマーンの下僕である私は 全世界の王の時代に

彼は[……]に類するものを持っていないような王 七つの星が誇りに誇りに思うたような王である

[……] [……]考えがいまや定められた

ホセインを追憶して人々に水を[……]アッラーの恵みから定め 1093 年にアリーシャーに[……]した

その特典をある男へと決意させた、その栄誉が宝石で飾られるのをながめた

イランの将軍栄誉あるアリー・ハーンは勝利に満ちた 1093 という数字の年に正しい手段で建設した

《アラール・オッディーン・ガズヴィーニー記す》

神の慈悲をガズヴィーンに建設した この天国の門の中にコウサル川に似たものを建設した

恩寵と幸運はモスクの貯水槽と結びついた 小沐浴が礼拝と一つになった アッラーは偉大なり

祈りが実現と結びつくようになった 唇を乾かした愛しき者の誠実さ故に訪れたあの時

池と水槽のその広さが何と驚くべきことか 何と海のようなものか かたや宝石のような水でいっぱい

その正義の力によりそれは弱き者たちの心強きもの その憤怒と激怒から圧制者の肝臓の血のようである

②ハーンのアーブ・アンバール

天の如き偉大なハーン モッラー・ヴェルディー・ハーン 彼は善良な心から真理の道を歩んだ

悪を根絶し 宗教の求心点 ザムザムの源の基礎を作った

生命の水の如きアーブ・アンバールを作った 神の慈悲から死者を甦らせる

その後その基礎に損害が出始めた時 新春に創設者の命は尽きた

慈悲深く 慈愛あまねきアッラーの御名において

ナスルロッラーの努力によって完成した

<1285> 《装飾 石工ハーッジ・マレク・モハンマド・アリー・モルタザー》

③ハーッジ・モッラー・アーガーのアーブ・アンバール

永遠なる最後の審判者たるアッラーの恩寵により 恵み深き創造主 最も偉大なる者のお助けにより

ハーッジ・ホセインの基礎において 慈善のあらわれであるこの池を完成させた

¹ *Mīnūdar*: 312-319 より訳出。[……]は欠落、<>はアブジャド（アラビア文字による記数法、ゴルリーズの読解に基づく）、《》は碑銘を指す。順番は第3章表2（p.96）と対応する。

この池と水槽の何と海のように広く 宝石のようなきらめきのあることが
おおアッラーよ 彼に 慈善に報い少しの水を与えたまえ マフシャルの荒野の暑い最中に
そのアクルは言った建造の日付の年を求めると
創造主にコウサルの水の権利を与えた <1206>

④パンジェ・アリーのアーブ・アンバール

賞賛あれ アッラーの恩寵により 私によってこの世において慈善行為がなされた事が明らかになった
つまり幸運にも素晴らしい 1 つの水槽が世界の支配者の慈悲によって作られた
春の雨のもとで孕む貝に降るのではなく この水滴は乾いた唇に降り注ぐ
透明な水槽 その流れる清い水が文人たちのように明らかであれ
生命の泉であるこのヘズルの海は 唇が乾いた者たちの慈善施設とされた
パンジェ・アリーのモスクの近接した場所にこの慈善施設は建てられた 素晴らしい設備をもって
ある殺された者が手を出した
日付を書く時がきた 天国の泉で流れる水から <1224> 《ハーჯー・ラメザーン》

⑤ラーラーのアーブ・アンバール

賞賛あれ アッラーの創造の御業により 8 つの天は 1 粒の泡 7 つの海は 1 つの水溜りになる
そのような恩寵により 純粋な宗教の巡礼者ハーჯー・モハンマドは
彼の行為は全能なる永続者に財産を捧げることである
この堅固な建物をウラマーの勉学のために作った
マフシャルの場で彼がアッラーの慈悲によって手を引いてもらえますように
十分に堅固で魅力的で優美で清潔な池 並ぶものがないザムザムの如く 並ぶものがないコウサルの如く
真心から彼はホセインの巡礼者たちの王様に寄進した それはそこから老いも若きも人々が水をのむように
建物の基礎の年を私が求めた時 神秘からの声が私に知らせた
その池はマアイーンの水で溢れると言った <1224>

⑦サルダーレ・ゴムラークのアーブ・アンバール

王冠と宝石に飾られたファトフ・アリー・シャーの御代に 彼への跪拝の為に頭を打ち付ける 東方の王よ
ホセイン・ハーンとハサン・ハーンは 2 人の獅子の如きサルダール 2 人の王の騎兵 2 人の勇敢な戦士
2 人の高貴な兄弟 2 人高名なサルダール 2 人の不滅の勇士 2 人の復讐を遂げる指導者
幸運なものよ 常勝の王にとっては賞賛された総司令官 敵を鎮圧するアミールにとっては勝利を広げる者
彼らの名声故にロスタムとソフラブが無名に 彼らの気前のよさ故にハーテムとジャファルの慣習が終わった

彼らの姿勢の高潔さがこの幸運な水場の基礎を置いた 彼らはこの賞賛された水場を描き出した
天国の中庭の如く喜びをかきたてられんことを 生命の泉のように精気を育むものであらんことを
キアルバラの唇の乾いた者 殉教者ホセイン 全世界のアミール ジンとエマームを祈念して
天国の中庭がコウサルを誇るように ガズヴィーンの地がそれを自ら誇りに思うようになるように
池はその広さが果てしない海の如くであって 水はその美しさがザムザムの泉以上である
精気を与える水を求める者にはその泉はヘズルの泉 この池の方向へ向う者にはその元に導く人が現れる
アーガー・モハンマド・エスマーイルの努力と尽力により 彼から黄金の如き貨幣の生業が盛んになるように
この池が世界において天球となって完成したときに 天国の住人の褒美を求めて人々は一斉に列を作った
年代について望むときにドゥアーの中で言った
一人一人にザムザムとコウサルから分け前がありますように <1229>

⑧ハーჯジー・バーバーのアーブ・アンバール

ハーჯジー・バーバーはアッラーのご満足を求めてこの素晴らしい池を建てた
水から喉を潤す者は誰でも 不幸の苦悩の王を思い出す
この水のひと飲みごとの報いは 高貴な 5 人の友人たちからの報いであるのである
アッラーよ 殺人者への限りない呪いを与えたまえ 最後の審判の日に正義がなされるように <1235>

⑨ハキームのアーブ・アンバール

ハーჯジー・アーガーイェタビーブ 夜を徹して祈るあの英知ある者は
バドルとホネインの勝利者である者の下僕
ここにやって来る者は誰でもキアルバラの唇の乾いた者たちを
孤立無援のホセインを 両手を切断されたアッバースを思い出すだろう
ユーフラテス河のほとりでのシエムルとエブン・サウドの冷酷さを思い出すだろう
身体が血の海にのたうって そして頭は 2 本のロープの間に歓楽の糸を断ち切り 忍耐の服を引き裂いた
さよう さよう 真の宗教に従う人々にとって まさにそのときタアズイーエ・ダーリーとなるのである
それから偉大なるファティマの息子を記念して池を作った
ホセインとその一行の上にアッラーの平安あれ
ホセインの殺害者たちの上にアッラーの呪いあれ
それによってガズヴィーンだけでなくイラン全体がきらびやかな飾りを得た
その水が賢者たちの涙のように純粹であるところの池よ
その土が王冠座の星や北極星よりも素晴らしいところの池よ
抑圧された者たちの王ホセインを記念して建造された故
抑圧された者たちの王の友人へワクフされた

そこからの水の一滴を飲む者は誰でも

ヤズィードと彼の従者たちに対して呪いをかけることが個人の義務であるということに自ずと気づくであろう

ジョウハリーはその建造の日付を尋ねた　するとアクルはこう言った

ホセインを追憶せずしてこの池から決して飲むなかれ、ああ、シーア派教徒よ　<1244>

⑩ザルギャル・クーチェのアーブ・アンバール

巡礼者たちの栄誉ファトフ・アリーにとって　現世は旅であることが明らかである

彼は友人たちに言った　我が子レザーに対して彼が遺言の執行者であり　代理人であることに同意すると

私より後　貯水槽の基礎を作るように　ガズヴィーンにおいてその水が少ない所どこにでもよいから

レザーは遺言の執行者となり勤勉に行った　彼の努力は豊かな報いをもたらした

喉が渴いた者たちにとってエジプトにとつてのナイル川であるかのような美しい貯水槽の日付を求めるならば
その完成の年に関してそれを書いた

ところでこの地は　その水は　サルサビール（天国の泉）である　<1245>

⑪シーシェギャルのアーブ・アンバール

神の恵みがもたらされた者にとって　導く者は善行の種を運命の庭園に蒔いた

神が清らかな魂を与えた者にとって　その性質に醜いものではなく善きものをあらわす

慈善の日干しレンガよ　灰燼に帰すな　レンガの土くれが汝のもとにやってくるより前に

ハーヅジ・ハサンは尽力した　彼の墓は天国の庭園の囲われた場所となるように

彼は性質の善良さ性質の新鮮さからこのめでたい池の基礎をおいた

聖火の守護天使が拝火殿を作るに違いないほどにまでおもてにあらわれるために

清らかな魂とは汝が醜悪な行いを自制するものであり　汝は自らを善良さに見出す

夜ではなく白昼の輝きを見出せ　シナゴークではなく真実の光を求めよ

この高き建物が完成したとき　存在界の裁きの場によってこの建物は運命づけられた

建造の年代を清浄な筆は　コウサルの水源からの泉　と書いた　<1254>

⑫ハーヅジ・カーゼムのアーブ・アンバール

碑文 1:

神の被造物の善行は　各々にとって心の本姓に埋め込まれたものの如くとなった

慈善の段階に応じてそれを行う　その善行は神の慈悲により報われる

巡礼者の手本ハーヅジ・エスマーイルは神の恩寵により指揮者になったので

肝臓の乾いた殉教者たちの王のために　この偉大な池を作り寄進した

アッラーよホセインとその従者たちの為に平安あらしめよ

《ミールザー・カーゼム》

碑文 2 :

このハーヅ・カーゼムにその慈善行為ゆえに アッラーよ 数限りない報いを与えたまえ
コウサル川からの一杯の水を彼に与えたまえ マフシャルの荒野の暑さから彼が救われんがため
建造年代の日付をサファー（誠実さ）が書く 水源はコウサルの泉の水より <1256>

《監督モハンマド・レザー 碑文ミールザー・カーゼム、アーベディー工房》

碑文 3 :

慈悲深く 慈愛あまねきアッラーの御名において
モルタザーの子孫たちがこのように望んだそれはなんと素晴らしいことか
その祝福された池の創設者は偉大なる子孫 巡礼者たちの指揮者 モハンマド・エスマーイルである
この荒れた土地が復興したことに 100 倍もの感謝を
太陽の顔の反映を水の中に見た
この慈善行為の平原で これ以上の素晴らしいつくり そしてこの慈善行為の海で
これ以上の素晴らしく気持ちよく瑞々しい一面の宝石はなかったので
それを 人類の最善の者の最愛の者の聖墓に捧げさせてワクフにした
キヤルバラの唇の乾いた者たちの庇護者たちが
ホセインから水をとることを妨害する者たちの呪いにおいて
庇護民たちが自らを免除しないようにするために

この水を飲むものは誰でも、私から飲め そして彼の殺人者に無限に呪いを行うように

聖墓に刻まれた功德は ハーヅ・ムハンマド・カーゼムのトゥーバーの木に宿る靈魂に授けられた

《カーゼム・ガズヴィーニー》

⑬ ハーヅ・キャリームのアープ・アンバール

慈悲深く 慈愛あまねきアッラーの御名において
卑しき下僕ハーヅ・キャリームは おおアブー・アブドゥッラーよ
慈悲深い神に人々の許しを枯渇し
近づくとこの建物が根元から荒廃し おおアブー・アブドゥッラーよ
朽ちた骨の如くであることに気がついた
1320 年から 6 年後に おおアブー・アブドゥッラーよ
この大きな建物を修繕した
唇の乾いた者たちの王が希望を抱き

おおアブー・アブドゥッラーよ

地獄の業火から免れるように彼の調停者とならんことを希望して

《アリー・サッカーキー》

参考資料6：ガズヴィーンの知事と副知事一覧

統治	知事 (Hākem)			副知事 (Nāyeb ol-Hokūme)			備考 (同じ書きかたは知事に関する覚書)
	代	名前 (アラビア数字は再任の回数)	任期 西暦 (A.H) 年	父	代	名前	
A.	i	Mirzā Mohammad Khān Qājār	1785/6-? (1200-?)				
	ii	Kāmkār Mirzā Mohammad Khān	1794/5-? (1209-?)				
F.	1	Mohammad 'Alī Mirzā Doulatshāh	1798/9-1806/7 (1213-1221)	F, 長子	1	Seyyed 'Alī Khān	1217~ (1802/3)~ 1807/8-1808/9 (1222-1223)
	2	'Alī Naqī Mirzā Rokn ol-Doule (I)	1807年4/5月 - 1823年6/7 月以前	F, 第8子	2	Mehrab Khān Afshār	1807/8-1808/9 (1222-1223)
	3	Emām Verdī Mirzā Īlkhānī	1222年Safar月 - 1238年 Shawwāl月以前	F, 第12子	3	Khān Bābā Khān Sardār (Hasan Khān Sardār)	1820/1-1821/2 (1236-1237)
M.	4	'Alī Naqī Mirzā Rokn od-Doule (II)	1823/4-1834/5 (1239-1250)	F, 第8子			ロクナドールの弟 大衆衆モスクのイマームに名を列んだ (1823/4, 1238)
	5	Soltān Badī' oz-Zāmān Mirzā	1834-1836年4/5月 (O - 1252年Moharram月)	Rokn-ol-Doule			Mの即位後に全権委任 1835/6, 1251年に大衆衆モスクの正門を修理 →大衆衆の碑文
	6	Bahrām Mirzā Mo'ezz od-Doule	1837/8-1848 (1253-O)	'Abbās Mirzā 第2子	4	Tahmāsb Qolī Khān Qazvīnī	1837/8-? (1253-?)
N.	7	Hamza Mirzā Heshmat od-Doule	?	'Abbās Mirzā 第21子			Mの統治の終わりで 統治の詳細は不明、5代目、6代目の知事の任期中に何度かがズヴィーンの統 治にも加わっていた
	8	Eskandar Mirzā	1848-?	'Abbās Mirzā 第6子	5	Mirzā Mūsā Mostoufī	
	9	Khosrou Khān Vālī	?	Amān-ollāh 'Alī Kordī	6	Hādī Khān	
N.	10	Seif-ollāh Mirzā	1864/5-? (1271)	F, 第42子			新ヶ月間 Nの妻でモイーノドワレ (Mo'in od-Doule) の母であるタージノドワレ (Khojaste Khānom, Tājī od-Doule) の父
	11	'Abd os-Samd Mirzā 'Ezz od-Douleh (I)	1864/5-? (1271-?)	M, 第3子	7	Hājī Hasan 'Alī Khān Khoṭ Ājūdānbāshī Sabeg	1854/5-1856/7 (1271-1273)
	12	'Abd os-Samd Mirzā 'Ezz od-Douleh (II)	1856/7-1860/1 (1273-1277)	M, 第3子	8	Hājī 'Abd-ollāh Khān 'Alā' ol-Malek Qazvīnī	1856/7-1860/1 (1273-1277)
	13	Amīr Aslān Khān 'Omīd ol-Molk Majd od-Doule	1861年4/5月 - 1863/4 (1277年Shawwāl月 - 1280)	Amīr-Qāsem Khān	9	Mirzā Zakī Mostoufī Tafreshī ī Ziyā' ol-Molk	1860/1-? (1277-?)
	?	Mohammad Taqī Mirzā Rokn od-Doule		M, 第4子			Nの弟 ザンジャーンやムセの統治と共に1860/1(1277)年、1861/2(1278)年、 1865/7(1282)年にガズヴィーンの統治も断続的に行っている
	14	Soltān Ahmad Mirzā 'Azod od-Douleh (I)	1865/6- 1867/8 (1282-1284)	F, 第48子			
	15	Firuz Mirzā Nosrat od-Doule Fairmānfarmā	1867/8-1868/9 (1284-1285)	'Abbās Mirzā 第16子			
				10	Mirzā Rasūl	1869/70-? (1286-?)	

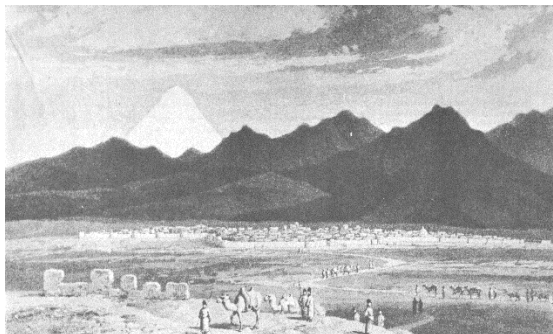
統治	代	名前 (アラビア数字は再任の回数)	任期 西暦 (A.H) 年	父	代	名前	任期 西暦 (A.H) 年	備考
	16	Mohammad Rahīm Khān Amīr Nezām 'Alā' od	1870/1-? (1287-?)					(但し書きがなければ知事に関する覚書)
	17	Gholām Hosein Khān Sepahdār	1871/2-? (1288-?)	Yūsof Khān Goṛī Sepahdār				
	18	Allāh Qoīf Mīrzā Īlkhānī (I)	1872/3-1875/6 (1289-1292)	Hosein Qoīf Khān (Fの兄弟)の息子	11	Mīrzā Shaīr' Āshtiyānī		母はMの叔母 (amme) にあたる Ezzat Neshā Khānom
	19	Soltān Ahmad Mīrzā 'Azd od-Doule (II)	1875/6-1880/1 (1292-1297)	F、第48子				1879年9月19日(1296年Shavval月2日)にダリア・クシコグ門の北隣タイルを修繕
	20	Hājī Mīrzā Hosein Khān Moshīr od-Doule Sepahsālār	1879/80 (1297)の終わり	Mīrzā Nabī Khān n Amīr Dīvān				カズヴィンの Zein ol-'Abedīn の孫 ロカドグル統治下のカズヴィンで生まれ育つ 任命の数日後、アゼルバイジャンの Sheikh 'Obaid-olīh Kord の反乱平定に 派遣され、実際に統治していない
	21	'Abbās Mīrzā Molk Ārā	1881年3/4月 - 1883/4 (1298年Rabī' II月 - 1301)	M				
	22	Mīrzā Rezā Mo'īn os-Saltaneh	1883/4-? (1301-?)					
	23	Mīrzā Hosein Khān Mo'tamed ol-Malek	1886/7-1887/8 (1304-1305)	Yahyā Khān Moshīr od- Doule	12	Hājī 'Abbās Qoīf Khān Qazvīnī	1887年3/4月-? (1304年Rajab月-?)	母がNの姉妹でフニレ・キヤビールの妻 (Ezzat od-Doule) セハフサーラーの期にある
	24	Allāh Qoīf Mīrzā Īlkhānī (II)	1887/8-1888/9 (1305-1306)		13	Esmā'īl khān Nāyeb ol-Hok ūme	1887年6/7月-? (1304年Shavval月-?)	幼少期に派遣されたため、副知事が補佐としておかれた
	25	Bāqer Khān S'ad os-Saltane (I)	1888/9-1891/2 (1306-1309)		14	Bāqer Khān S'ad od- Saltane	1887/8-1888/9 (1305-1306)	サアトサルタネはハーケムへの昇格に伴って副知事の任を解かれた
	26	Hājī Abo-I-Nasr Mīrzā Hosām os-Saltane	1891/2-1892年10/1月 (1309 - 1310年Rabī' II月)	Soltān Morād M īrzā Hosām os- Saltane				シヤースター・ホセイノ廟の修繕 (sahn, 北側のtalār)
	27	Bāqer Khān S'ad os-Saltane (II), (III)	1892年11/2月 - 1895/6 (1310年Jomāda I月-1313)					1887年にヴクトリア女王統治50周年を祝う式典に派遣された
	28	'Abd os-Samad Mīrzā 'Ezz od-Doule (III)	1896/7-1897/8 (1314-1315)	M、第3子	15	Mīrzā Ismā'īl	1897/8-? (1315-?)	大会衆モスクの修繕 副知事は知事の pishkār
	29	Badī' ol-Molk Mīrzā 'Emād od-Doule	1898/9-1901/2 (1316-1319)					
Mz.	30	Soltān Mohammad Mīrzā Seif od-Doule Amīr Tomān	1901/2-? (1319-?)	'Ezz od-Doule				Mの宰相 (sadr-e a'zam) のエイノドグリの兄弟
	31	Mīrzā Sāleh Khān Tabrīzī Sālār-e Akram	1902/3-1905/6 (1320-1323)	Hājī Kalāntar Bāghmīshīcī				
	32	Sedq od-Doule	1906/7-1907 (1324-O)					

* アラビア数字：王朝成立以前 ○：元々西暦で年号がわかっているもの ?：タバーターバニーに記録されていないもの
Bargī: 89-98; Sīmā: 241-382; Bāmdād の各知事の項目より筆者作成。

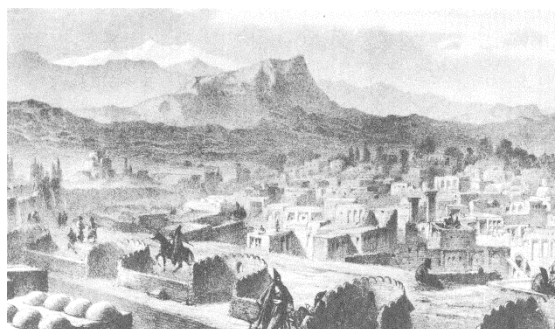
参考資料 7 : 図・写真資料

図 1 : テヘランの様子

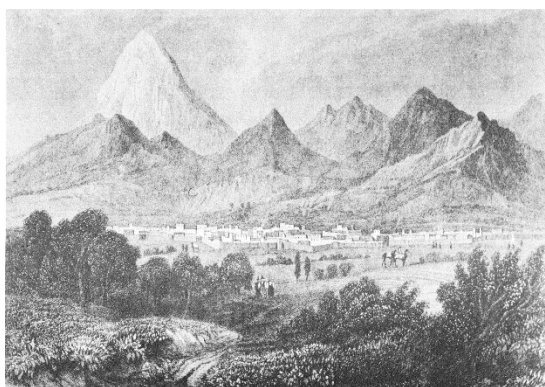
①1808/9 年頃



②1840/41 年頃

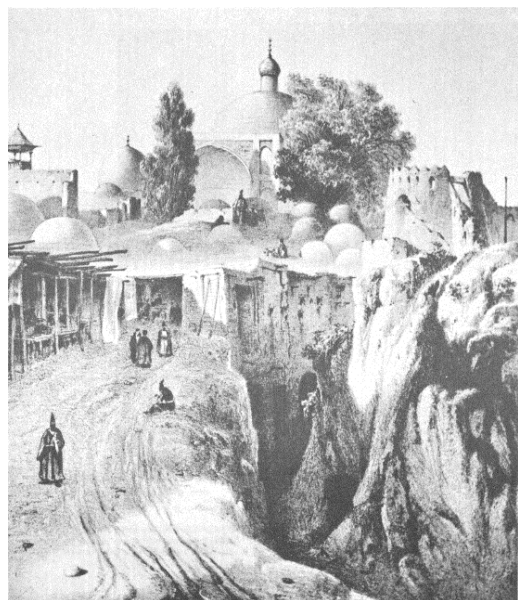


③1850 年頃



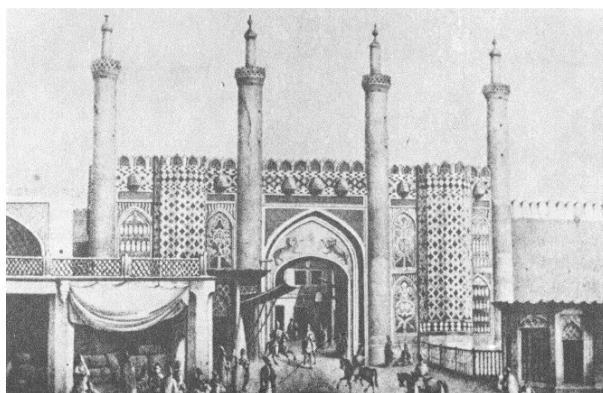
①～③ : Zoka & Semsar(A.P.1369): 18, 26, 35 より

図 2 : 宮殿城の堀 (1840/1 年頃)



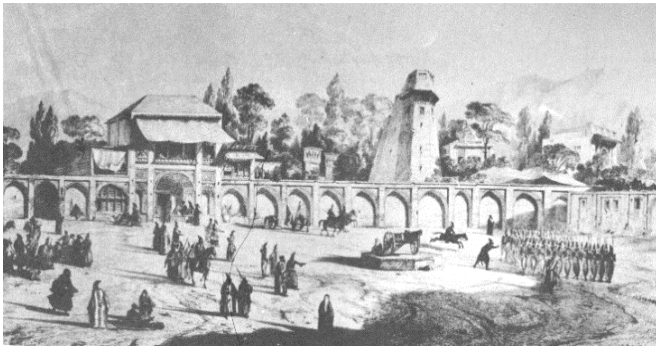
Zoka & Semsar (A.P.1369): 47 より

図 3 : 宮殿城の南の城門 (1860/1 年頃)



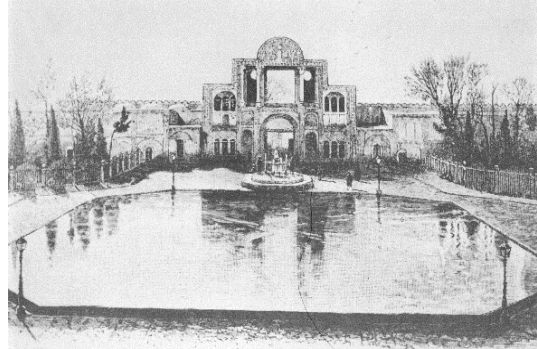
Zoka & Semsar (A.P.1369): 56 より

図 4：宮殿、トゥープハーネ広場、
砲台、塔（1840/1 年頃）



Zoka & Semsar (A.P.1369): 64 より

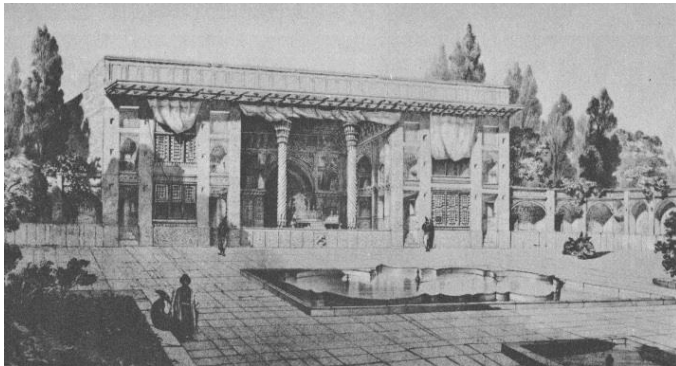
図 5：宮殿側から砲台とナッガーレハーネ
を見た様子（1887 年）



Zoka & Semsar (A.P.1369):80 より

図 6：大理石の玉座の間のイーワーン

① ガージャール朝期の様子（1838/9 年頃）



Zoka & Semsar (A.P.1369): 95 より

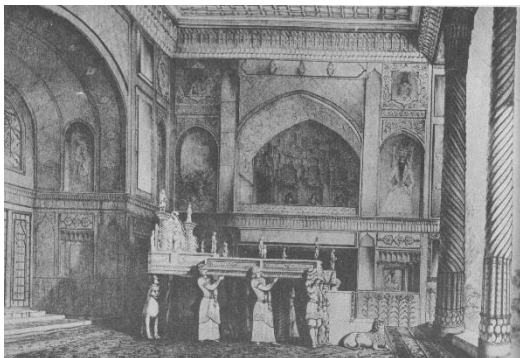
② 現在の様子



筆者撮影（2012 年 1 月 4 日）

図 7：大理石の玉座

① ガージャール朝期の様子（1840/1 年頃）



Zoka & Semsar (A.P.1369): 97 より

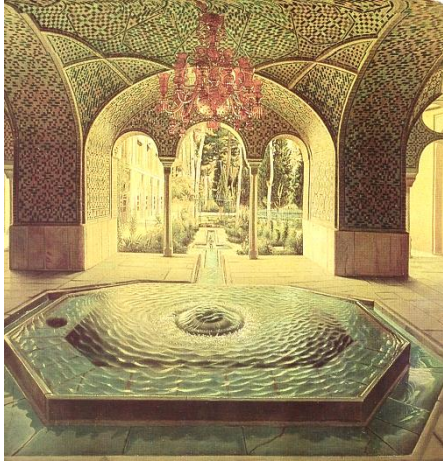
② 現在の様子



筆者撮影（2012 年 1 月 4 日）

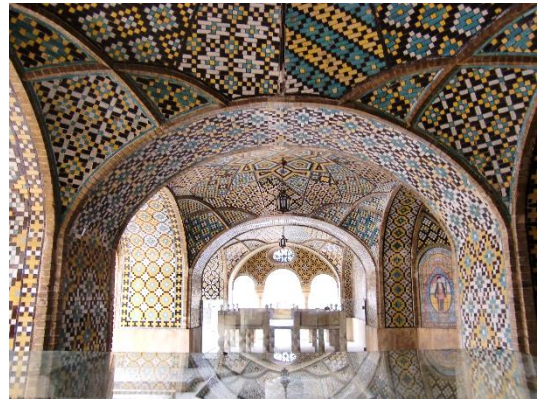
図 8：キャリーム・ハーンの間

①ガージャール朝期の様子（1890年）



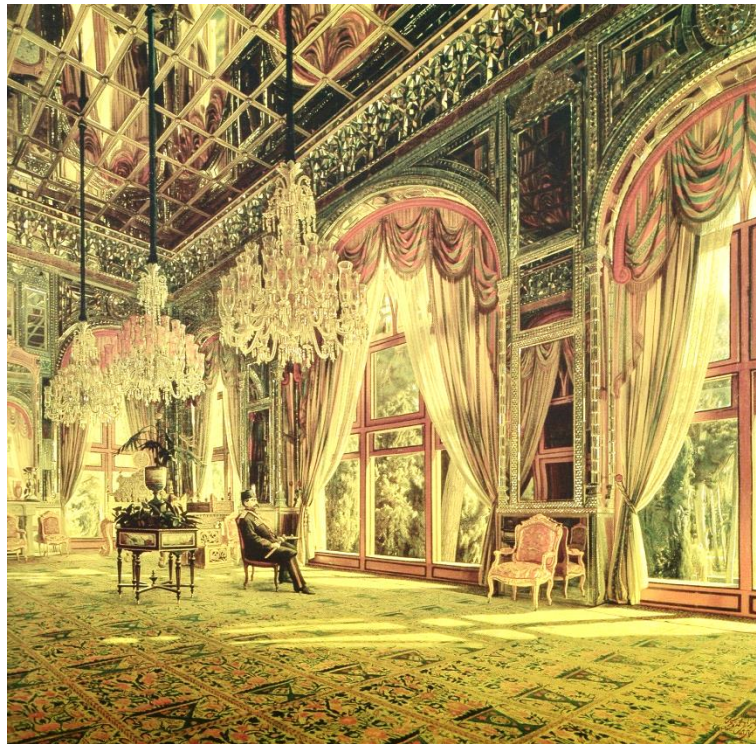
Semsar & Saraian (2003): 91 より

②現在の様子



筆者撮影（2013年3月4日）

図 9：鏡の間とナーセロッディーン・シャー（1896年）



Semsar & Saraian (2003): 85 より

* 図 20①、図 21、図 23①はナーセリー期の宮廷画家で初の西洋画家でもあったキャマーロールモルク（Mohammad Khān Ghaffārī Kamāl ol-Molk, 1859–1940年）の筆である。

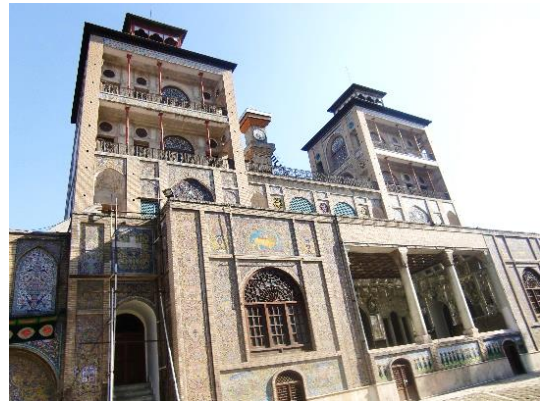
図 10 : シヤムソルエマーレ

① ガーシャル朝期の様子 (1867 年)



Zoka & Semsar (A.P.1369): 348 より

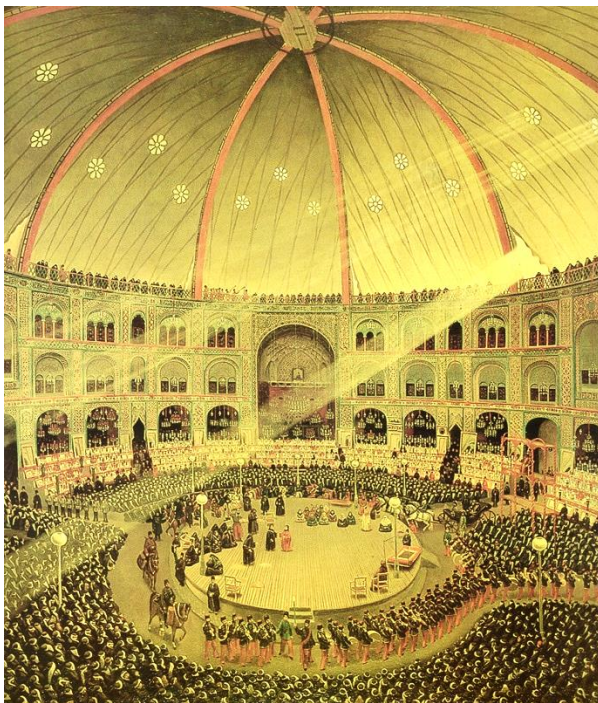
② 現在の様子



筆者撮影 (2012 年 1 月 4 日)

図 11 : テキエ

① 王立のテキエの内部の様子



Kianoosh (2007): 148 より

② 王立のテキエ (1894/5, A.H. 1312 年の様子)



③ ナーイェボツサルタネのテキエ

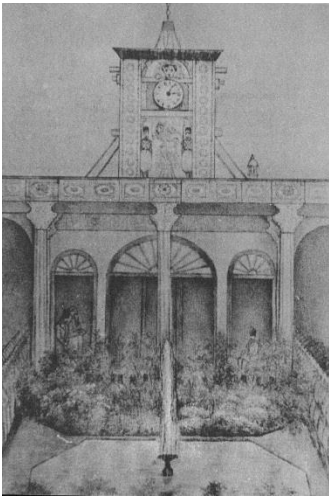
(1894/5, A.H. 1312 年の様子)



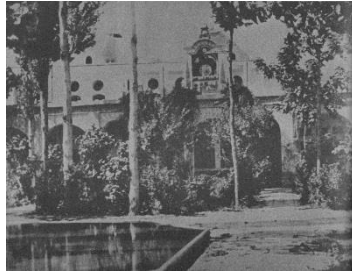
②③ : Kianoosh (2007): 149, 148 より

図 12：ダーロルフオヌーン校

①校舎（1853年）



②校舎の様子



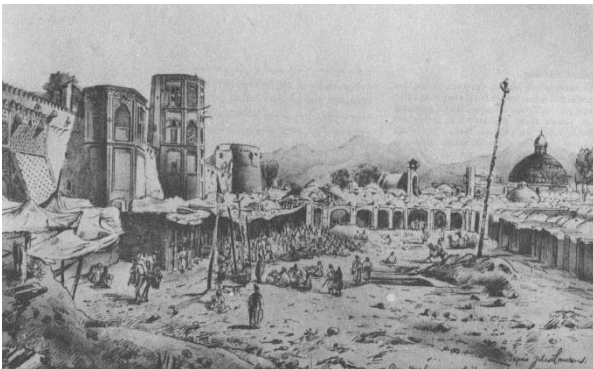
③建物と中庭の様子



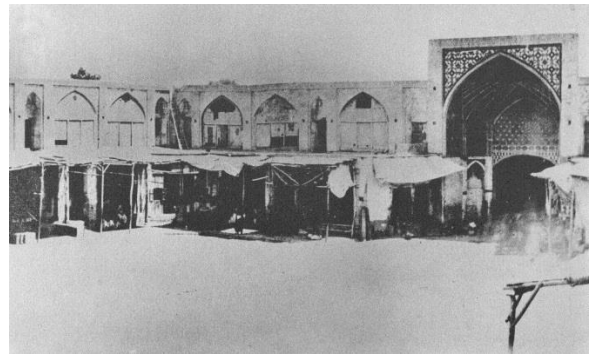
①～③：Zoka & Semsar (A.P.1369): 219-222 より

図 13：サブゼ・メイダーン

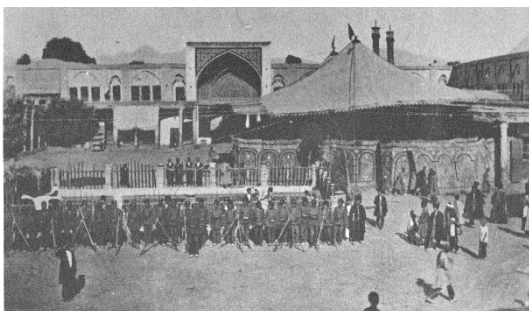
①ナーセリー期初期の様子（1848年）



②大改造直前の様子（1862年）

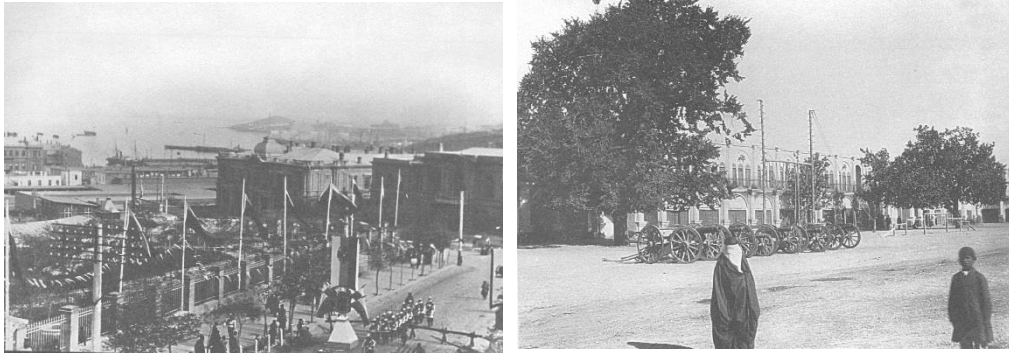


③大改造後の様子



①～③：Zoka & Semsar (A.P.1369): 228, 229, 232 より

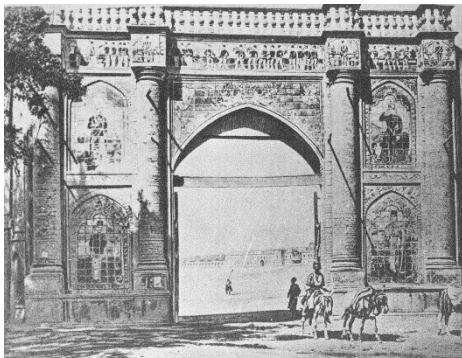
図 14 : トゥープハーネ広場 (1873/4, A.H. 1290 年の様子)



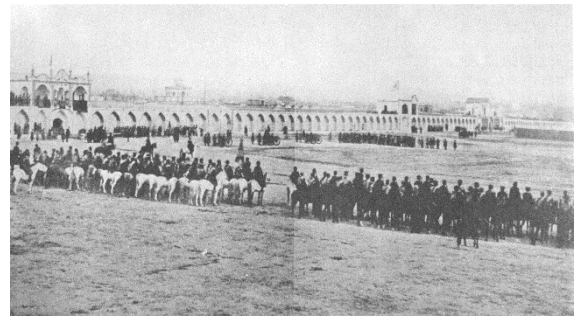
Kianoosh (2007): 165, 166 より

図 15 : マシュク広場

①正門



②広場の様子



Zoka & Semsar (A.P.1369): 331, 339 より

図 16 : ナーデリー通りの様子



Kianoosh (2007): 155 より



Zoka & Semsar (A.P.1369): 370 より

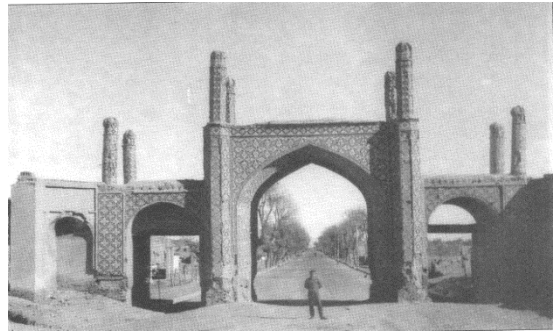
図 17：テヘラン門

①現在の様子



筆者撮影（2012年2月2日）

②パフラヴィー朝期の様子



撮影：Mohammad Nīmā（A.P.1338年）

Nurmohammadi（A.P.1390）：139番より

図 18：ダルブ・クシュク門

①現在の様子



筆者撮影（2012年2月2日）

②パフラヴィー朝期（？）の様子



撮影：不明（撮影年不明）Soltānzāde（1994）：161より

図 19：チェヘル・ソトゥーン宮殿・北面

①現在の様子



筆者撮影（2012年2月2日）

②ガージャール朝期の様子

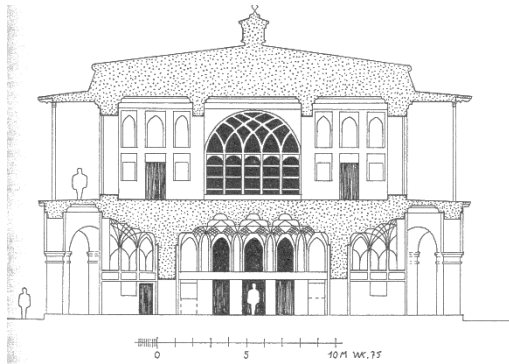


撮影：不明（1889/90, A.H.1307年）

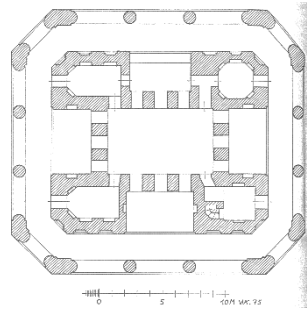
Nurmohammadi（A.P.1390）：153番より

図 20：チェヘル・ソトゥーン宮殿の建築プラン

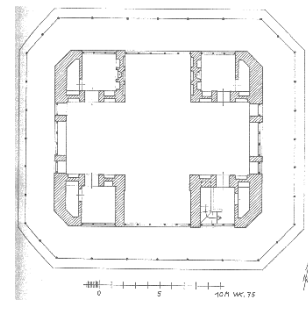
①東西面の概観



②1階の見取り図



③2階の見取り図



Kleiss (1976): 255-259 より

図 21：チェヘル・ソトゥーン宮殿・南面

①現在の様子



筆者撮影 (2013年4月3日)

②パフラヴィー朝期の様子



撮影：Hamīd Sāberihā (A.P.1348年)

Nurmohammadi (A.P.1390)：144番より

②ガージャール朝期の様子



撮影：不明 (A.H.1307年)

Nurmohammadi (A.P.1390)：155, 156番より

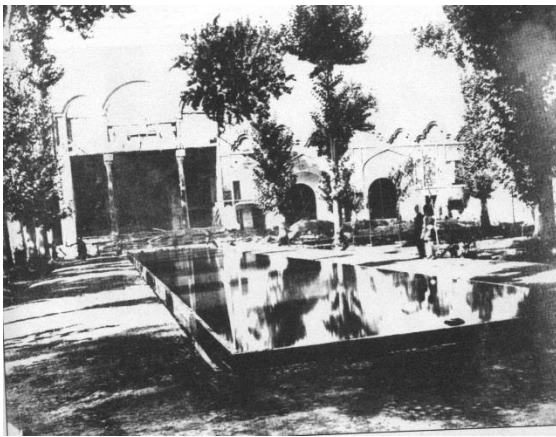
図 22 : ナーデリー庭

①現在の様子



筆者撮影 (2013年3月14日)

②ガージャール朝期の様子その1



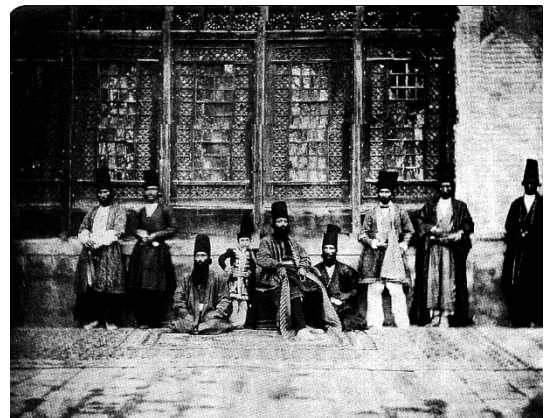
③ガージャール朝期の様子その2



④ロクノッドウレの塔 (東部)



⑤第13代知事マジドドウレ (中央)

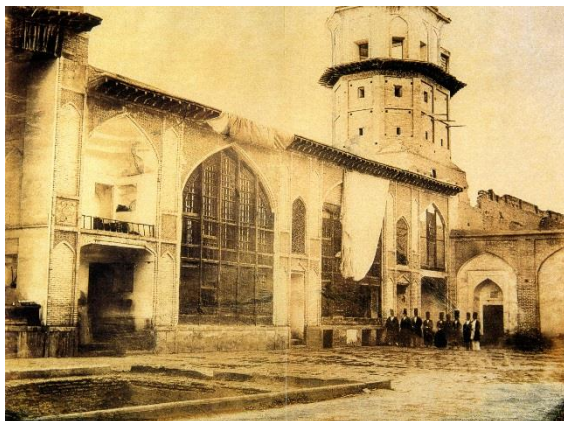


①～③撮影：不明 (A.H.1307年)

撮影：Montabone, Liogi (1862年)

①～④：Nurmohammadi (A.P.1390) : 176, 178, 177, 6番より

⑥知事の執務室



Tariqi (ed.) (2012): 62-63 より

図 23 : ナーデリー庭の解体の様子

①ナーデリー庭の解体



②隣接する邸宅部分の解体（右が庭）



撮影 : Mohammad Hamrang (A.P.1303-4 年の間)

Nurmohammadi (A.P.1390) : 90, 91 番より

図 24 : アーリー・ガープー門（現在の様子）

①旧セパフ通りからの様子



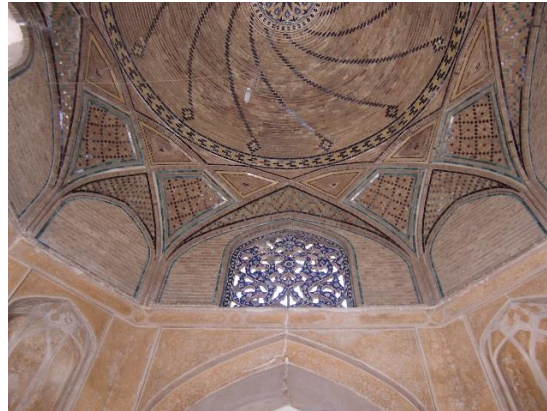
②左側の歩道からの様子



③入口の碑文とヌール・ギール



④内部の天井とヌール・ギール



筆者撮影（①：2012年3月1日、②：2012年12月15日、③④：2013年3月14日）

図 25：アーリー・ガープー門（過去の様子）

①パフラヴィー朝期



撮影：Hamīd Sāberīhā（A.P.1348年）

②ガージャール朝期



撮影：不明（1889/90, A.H.1307年）

①②Nurmohammadi（A.P.1390）：143, 183番より

図 26：セパフ通り

③現在の様子



筆者撮影（2012年3月1日）

④パフラヴィー期の様子



撮影：Mohammad Nīmā（A.P.1337年）

①モザッファリー期の様子



撮影：不明（不明）

②ナーセリー期の様子

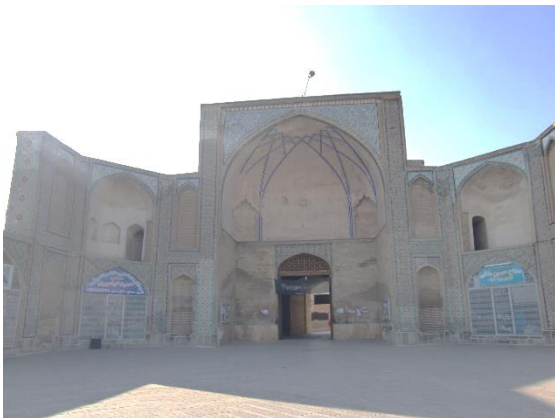


撮影：不明（A.H.1307年）

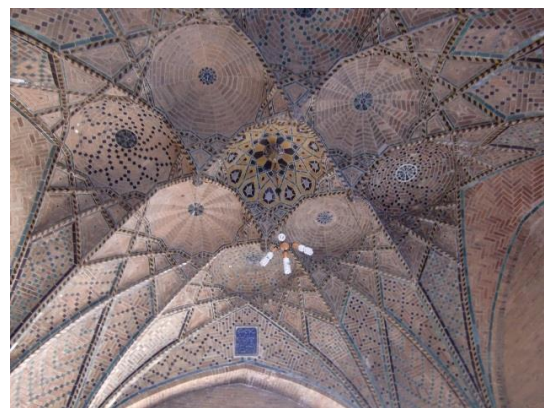
②～④：Nurmohammadi (A.P.1390)：135, 185, 182 番より

図 27：大会衆モスクのドーム・現在の様子

①旧セパフ通りに面した入口



②入口の天井部分と碑文



③サルダル（東側）



④北側のイーワーン



⑤南側のイーワーン



⑥西側のイーワーン



筆者撮影（①②：2012年12月5日、③～⑥：2012年2月5日）

図 28：大会衆モスク・過去の様子

①セパフ通りに面した入口（1840年頃）



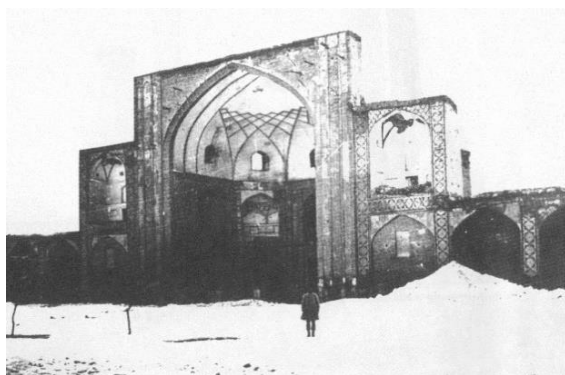
Parhīzkārī (A.H.1386): 25.

②北側のイーワーン（N期）



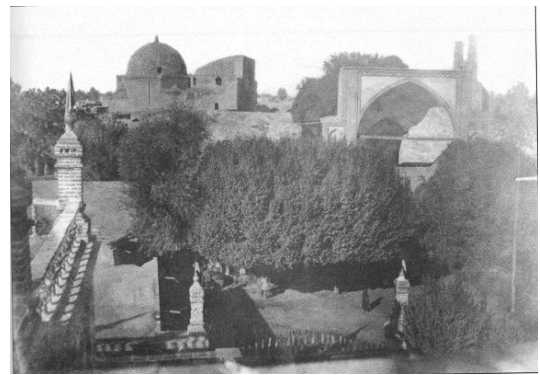
撮影：不明（A.H.1307年）

③南側のシャベスターン（N期）



撮影：不明（A.H.1307年）

④メフマーンハーネから見た光景

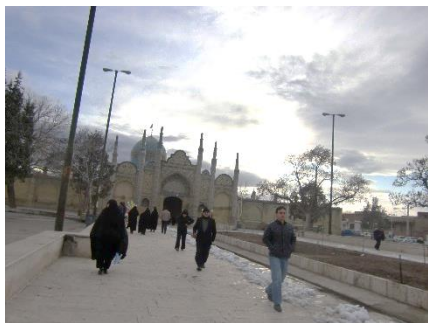


撮影：不明（A.H.1307年）

②～④：Nurmohammadi (A.P.1390)：170, 172, 174 番より

図 29：シャーザーデ・ホセイン廟・現在の様子

①参道



②門



③廟



④町の南からの光景



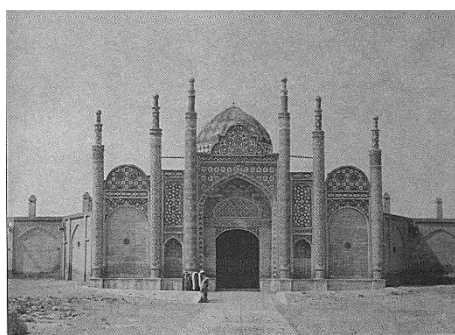
筆者撮影（①②：2012年2月2日、③：2013年3月14日、④：2012年12月5日）

図 30：シャーザーデ・ホセイン廟・過去の様子

①参道とその周りの墓地



②門



③廟

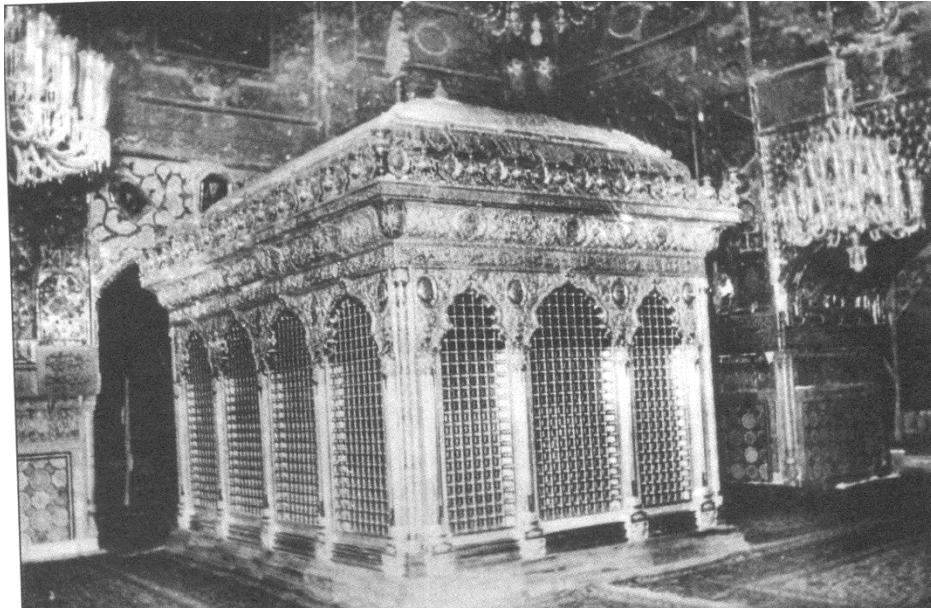


④町の南からの光景



撮影①：Āqā Yānus (A.H.1307年)、②④：不明 (A.H.1307年)、③Sārem Lashkar (ガージャール朝末期)。Nurmohammadi (A. P.1390) : 161, 162, 71, 160 番より

図 31：シャーザーデ・ホsein廟のザリーフ



撮影：Yūsof Kāshī（パフラヴィー朝期），Nurmohammadi (A.P.1390)：132 番より

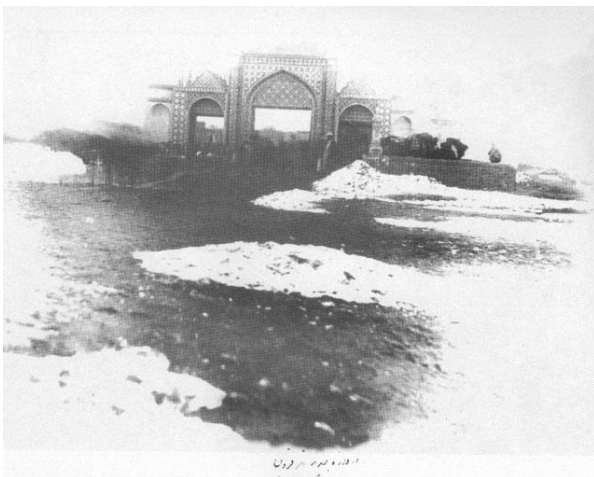
図 32：テヘラン通り

①テヘラン＝ガズヴィーン街道より門を見る

②テヘラン門よりテヘラン通りを見る

（奥に続いているのがテヘラン通り）

（右手奥に大会衆モスクが見える）

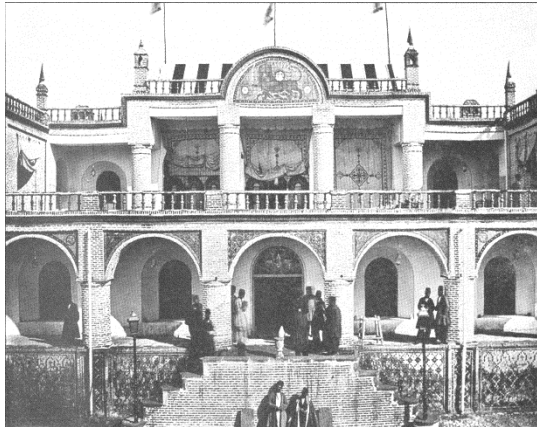


①②：撮影：不明（A.H.1307 年）

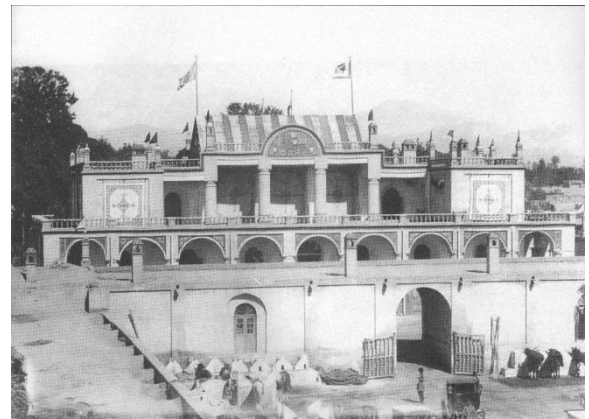
Nurmohammadi (A.P.1390)：167, 179 番より

図 33 : ガズヴィーンのマフマーンハーネ

①マフマーンハーネ (南面)



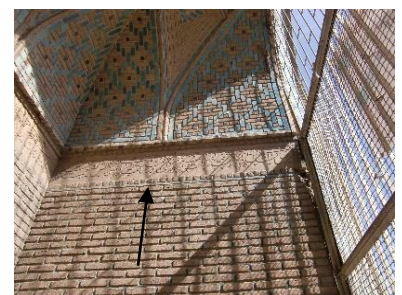
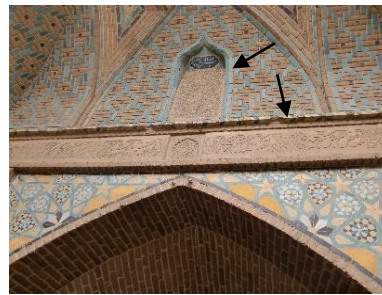
②駅通入り口



①② : ナーセリー期, Parhīzkārī (A.H.1386): 196, 203.

図 34 : ガズヴィーンのアーブ・アンバール

①サルダールレ・ゴムラークのアーブ・アンバール (正門と碑文)



正面玄関左側の碑文

正面の碑文

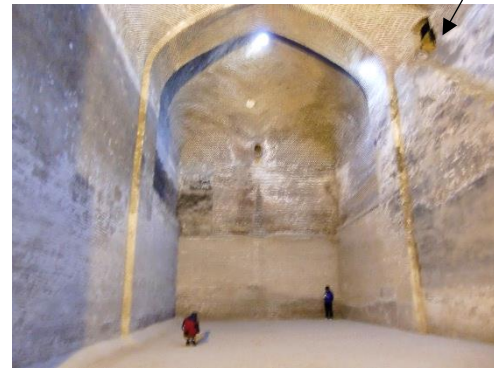
正面玄関右側の碑文



アーブ・アンバール正面玄関

* 筆者撮影 (①③④ : 2012 年 3 月 1 日, ② : 2013 年 4 月 3 日, ⑤ 2012 年 2 月 2 日)

②サルダーレ・ゴムラークのアーブ・アンバール（階段と貯水槽内部）



ガナートからの給水口

③サルダーレ・ラーフ・レイのアーブ・アンバール（ドームと正門）



④サルダーレ・ラーフ・レイのアーブ・アンバール（階段と玄関口の天井）



⑤ハキームのアーブ・アンバール（正門と階段）

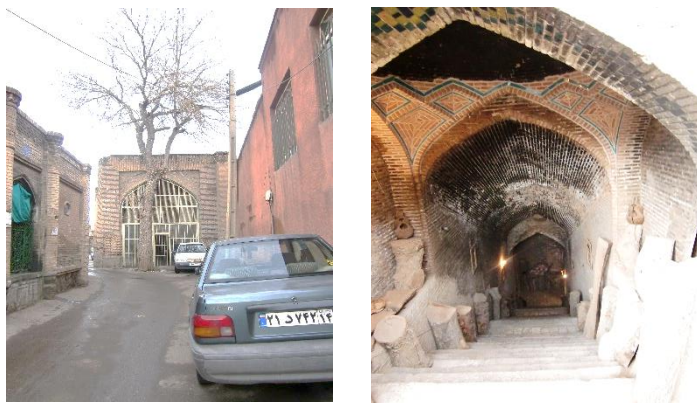


図 35：サルダールのモスク・マドラサ複合体（正門と建造物）



* Sarbakhsh 氏撮影（2012 年 3 月 1 日）

* 筆者撮影（2012 年 3 月 1 日）

図 36：サーレヒーエのモスク・マドラサ複合体



* 筆者撮影（2013 年 4 月 3 日）

図 37：サアディーエ（隊商宿部分の中庭とラシュト通りへ出入口口）

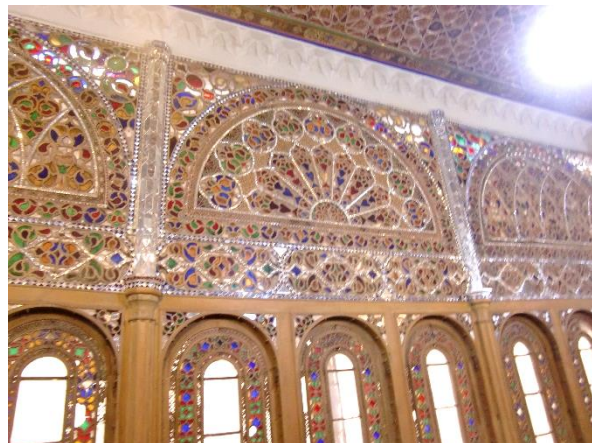


図 38：アミーニーのホセイニーエ

①モウラヴィー通りに面した中庭



②内装



③上げ下げ窓



④部屋の中の様子



* 筆者撮影（①～③：2013年4月3日，④：2012年3月1日）

図 39：サファー浴場



*筆者撮影 (2013年4月3日)

図 40：オミード校



* Nūrmohammadi, (A.P.1390): 113



*筆者撮影 (2013年1月22日)

図 41：シャー・モスク

①北面のエントランス



*筆者撮影 (2012年3月1日)

②北面のイーワーン



*筆者撮影 (2013年3月14日)

図 42：街区の人々

①アーホンド区の人々



②ディマジ区の人々



①～② 撮影：Sārem Lashkar（ガージャール朝末期）

Nurmohammadi (A.P.1390)：45 番、56 番より

図 43：ホsein・ハーン・サルダール



Mīnūdar: 258 より

図 44：モルク・アーラー



Mīnūdar: 335.



Molk Ārā: 表紙

図 45:サアドッサルタネ

①サアドッサルタネの肖像



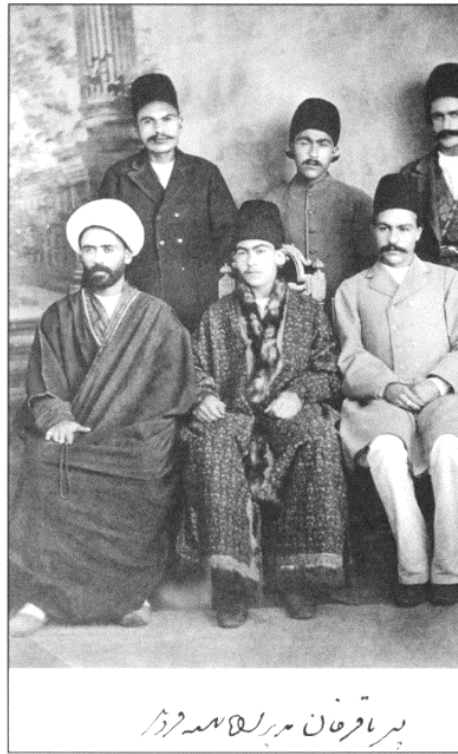
②宴席でのサアドッサルタネ（右から2人目）



* 右から、ホサーム・ラシュキヤル（*Mīrzā Seyyed Karīm Khān Hosām Lashkar*）、本人、主催者、モエッヅルマレク（*Mo'ezz ol-Malek*）

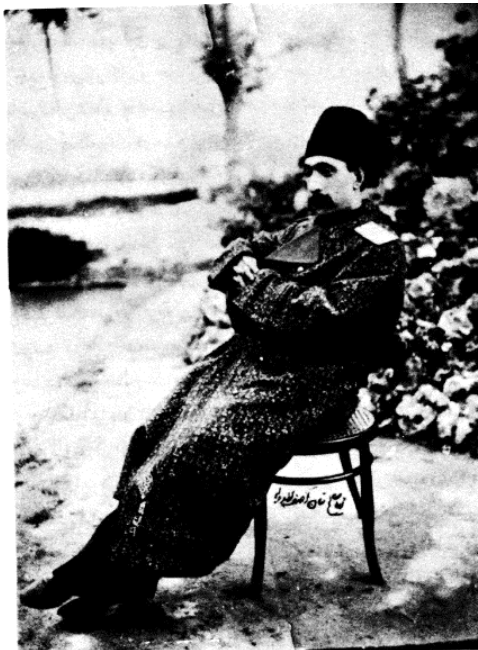
①②：Bāmdād (A.P. 1347), Vol.1: 181 より

図 46:ミールザー・アブドゥル・アリー (サアドッサルタネの息子)



Parhīzkārī (A.P.1386): 212 より

図 47: サーラーレ・アクラム



Mīnūdar: 38

参考文献一覧

【史料】

<ペルシア語史料>

- Amīn od-Doule*: *Khāterāt-e Siyāsī-ye Mīrzā 'Alī Khān Amīn od-Doule*, Farmayan, Hafez (ed.), 1962.
'Asr bī Khabarī: *'Asr-e bī Khabarī*, Teimūrī, Ebrāhīm(ed.), Eqbāl, A.P.1363, 1984/5.
Bāmdād: *Sharkh-e Hāl-e Rejāl-e Īrān* (dar Qarn-e 12 va 13 va 14 Hejrī), Bāmdād Mehdī, 6vols, Tehran, A.P. 1347, 1968/9.
Gīlān: *Tārīkh-e Gīlān va Dailamstīān*, Seyyed Zahīr ol-Dīn b. Seyyed Nasī ol-Dīn Mar'ashī, Sotūda, Manūchehr (ed.), Etelā'ā t, Tehran, A.P.1364, 1985/6.
Gozīde: *Tārīkh-e Gozīde*, Hamd-ollāh Mostoufī, Abd-ol-Hosein, Navā'ī, Doktor (ed.), A.P.1339, 2008, Amīr Kabīr, Tehran.
Hājji Saiyāh: *Khāterāt-e Hājji Saiyāh*. Hamīd Siyāh (ed.), Tehran, A.P.1346, 1985/6.
Ma 'āther va Āthār: *Chehel Sāl-eTārīkh-e Īrān "ol-Ma 'āther va ol-Āthār"*, Īraj Afshār (ed.), Tehran, A.P.1363, 1984.
Merāt ol-Boldān: *Merāt ol-Boldān*, Navā'ī 'Abd ol-Hosein & Mohaddes, Mīrhāshem (eds.), Dāneshgāh-e Tehrān, A.P.1368, 1989/90.
Mokhber os-Saltane: *Khāterāt va Khāterāt*, Mehdīqolī Hedāyat Mokhber os-Saltane, 6th ed., Tehran, A.P.1385, 2006/7.
Molk Ārā: *Sharkh-e Hāl-e 'Abbās Mīrzā Molk Ārā*, Navā'ī, 'Abd ol-Hosein, Doktor (ed.), Bābak, Tehran, A.P.1361, 1982/3.
Montazem Nāserī, *Tārīkh-e Montazem-e Nāserī*, E'temād os-Saltane, Razvānī, Mohammad Esmā'il (ed.), vol.3, Tehran, *Nāser od-Dīn Shāh I*: *Rūznāme-ye Khāterāt-e Nāser od-Dīn Shāh: dar Safar-e Sevvom-e Farangestān*, Razvānī, Mohammad Rezā (ed.), Sāzmān-e Asnād-e Mellī-ye Īrān, Tehran, A.P.1367, 1988/9.
Nāser od-Dīn Shāh II: *Rūznāme-ye Khāterāt-e Nāser od-Dīn Shāh: dar Safar-e Dovvom-e Farangestān*, Qāzīhā, Fāteme (ed.), Sāzmān-e Asnād-e Mellī-ye Īrān, Tehran, A.P.1379, 2000/1.
Nāser od-Dīn Shāh III: *Rūznāme-ye Khāterāt-e Nāser od-Dīn Shāh: dar Safar-e Sevvom-e Farangestān*, Razvānī, Mohammad Rezā (ed.), Sāzmān-e Asnād-e Mellī-ye Īrān, Tehran, A.P.1369, 1990/1.
Nāsekh ol-Tavārīkh: *Nāsekh ol-Tavārīkh: Tārīkh-e Qājāriye*, Mohammad Taqi Lisan ol-Malek Sepehr, Ehtemam Jamshid Kīyanfar, 3 vols, Enesharat-e Asatir, Tehran, A.P.1377, 1998/9.
Rūznāme E 'temād os-Saltane: *Rūznāme-ye Khāterāt-e E 'temād os-Saltane*, Afshār, Īraj (ed.), Amīr Kabīr, Tehran, A.P.1356, 1977/8.
Rūznāme Nāser od-Dīn Shāh: *Rūznāme-ye Khāterāt-e Nāser od-Dīn Shāh*, Navā'ī'Abd ol-Hosein (ed.), Tehran, A.P.1390,

<邦人旅行記>

- 西亜細亜紀行：家永豊吉『西亜細亜紀行』民友社，1900年。
福島紀行：福島安正「波斯紀行」『伝記・福島安正：中央亜細亜より亜刺比亜へ』（福島将軍遺蹟・続）太田阿山（編）（初版：1943年）大空社，1997年。
古川紀行：古川宣誉「波斯紀行」『明治シルクロード探検紀行文集成』第2巻（初版：1894）ゆまに書房，1988
波斯之旅：吉田正春「回疆探検：波斯之旅」『明治シルクロード探検紀行文集成』第2巻（初版：1894）ゆまに書房，1988年。
波斯遊記：大庭柯公（景秋）「波斯遊記」『柯公全集』第4巻，山下武（監）1995年（初版：1925）大空社，1995

<統計資料>

- 総務省統計局（編）（2016）『世界の統計：2016年版』日本統計協会。
UN1: United Nations, *World Population Prospects: The 2015 Revision* (2016年10月アクセス)
UN2: United Nations, "Population of Capital Cities and Cities of 100,000 or more inhabitants: Latest Available Year, 1995-2014" *Demographic Yearbook System* (2016年10月アクセス)

<文化芸術省調査報告>

- 文化芸術省調査報告・1021: *Majmū'e-ye Bāzār-e Qazvīn*, 1974, 2/3月 (A.P.1352, エスファンド月), vezārat-e farhang va honar (2015年4月アクセス)
文化芸術省調査報告・22681: 1974, 2/3月 (A.P.1353, エスファンド月), vezārat-e farhang va honar (2015年4月アクセス)
*いずれも Iranshahr, Encyclopaedia of the Iranian Architectural History (イラン建築史百科事典) 中のイラン文化遺産庁所蔵の文書
<<http://iranshahrpedia.ir/>>

【外国語文献】

- Abrahamian, Ervand (1974), "Oriental Despotism: the Case of Qājār Iran", *International Journal of Middle East Studies*, 5: 3-
Abrahamian, Ervand (1982), *Iran between Two Revolutions*, Princeton University Press.
Adamec, Ludwig, W. (1976), *Historical Gazetteer of Iran*, vol.1, Graz.
Adamiyat, Fereydu (1965), *Amīr Kabīr va Īrān*, enteshārāt-e Khwārizmī, Tehran.
Afary Janet (1966), *The Iranian Constitutional Revolution, 1906-1911*, Columbia University Press.
Afshār, Īraj (1965), *Savād va Bayāz*, vol.1, Ketābforūsh Dehkhodā, Tehran.

- Akbarī, Zeinab (A.P.1390, 2011/2) , *Me ‘mārī-ye Madāres-e ‘Olūm-e Qazvin* , Tehran.
- Alai, Cyrus (2005), *General Maps of Persia: 1477-1925*, Brill Academic Pub.
- Alai, Cyrus (2010), *Special Maps of Persia: 1477-1925* , Brill Academic Pub.
- Alai, Cyrus (2012), "Geography: iv. Cartography of Persia", *EIR Online* (Originally Published, 2000, vol.x: 444-448, 449-45).
- Amanat, Abbas (1983), *Cities & Trade: Consul Abbott on the economy and society of Iran, 1847-1866* , Ithaca Press for the Board of the Faculty of Oriental Studies, Oxford University.
- Amanat, Abbas (1997), *Pivot of the Universe: Nasir al-Din Shah Qajar and the Iranian Monarchy, 1831-1896* , University of California Press.
- Amirahmadi, Hooshang; El-Shakhs, Salah, S. (ed.) (1993), *Urban Development in the Muslim World*, Center for Urban Policy Research, New Brunswick, New Jersey.
- Amirshahi, Ardavan (1981) "Le Développement de la Ville de Qazwīn jusqu'au Milieu du VIIIe/XIVe Siècle ", *Revue des études Islamiques* , 49: 1-42.
- Andreeva, Elena (2014), "Russia: i. Russo-Iranian Relations up to the Bolshevik Revolution", *EIR Online* (Last Updated: January 6, 2014).
- Anwār, ‘Abd-ollāh (2011), "‘Anjoman-e Ma‘āref", *EIR Online* (Originally Published, 1985, vol. II: 86-88).
- Avery, Peter (1991) "Nādir Shā and the Afsharid Legacy" *CHI VII*: 3-62.
- Bahrambeygui, Hushang (1977), *Teheran: An Urban Analysis* , Sahab Books, Tehran.
- Bakhash, Shaul (1978), *Iran, Monarchy, Bureaucracy & Reform under the Qajars, 1858-1896* , Ithaca Press, London.
- Bakhash, Shaul (2011) "Administration vi. Safavid, Zand, and Qajar periods", *EIR Online* (Originally Published, 1983, vol. I: 462-466).
- Barthold, Vasili Vladomirovich (1984), *An Historical Geography of Iran* , Princeton University Press.
- Bayat, Mangol (1991), *Iran's First Revolution: Shi'ism and the Constitutional Revolution of 1905-1909* , Oxford University
- Beaumont, Peter (1969), "Des Cités D'autrefois a L'urbanisme Contemporain", *Les Villes de l'Iran* , vol.1: 45-64.
- Beaumont, Peter, Bonine Michael and MacLachlan Keith (eds.) (1989), *Qanat, Kariz and Khattara: Traditional Water Systems in the Middle East and North Africa* , The Middle East Centre, School of Oriental and African Studies, University of London in Associat.
- Behbahānī, Simīn (A.P.1388, 2009/10) *Tehrān-e Qadīm (The Old Tehran)* , Roshangaran & Women Studies Publishing,
- Benjamin, Samuel Greene Wheeler (1887), *Persia and the Persians* , J. Murray, London.
- Browne, Edward (1910), *The Persian Revolution of 1905-1909* , London.
- Bosworth, Clifford Edmund (2000), "Tihran: Geographical position", *EI2* , iv: 482-483.
- Bosworth, Clifford Edmund (ed.) (2007), *Historic Cities of the Islamic World* , Brill, Leiden, Boston.
- Bozorgniyā, Zohre (2004), *Me ‘mārān-e Īrān* , Sāzmān-e Mīrās-e Farhangī.
- Bournoutian, George (1976), "Husayn Qulī Khān Qazvīnī Sardār of Erevan: A Portrait of a Qajar Administrator", *Iranian Studies* 9: 163-179.
- Busse, Heribert (1972), *History of Persia under Qājār Rule* , Columbia University Press, New York, London.
- Busse, Heribert (2011), "‘Abbās Mīrzā Qājār", *EIR Online* (Originally Published, 1982, vol.1: 79-84)
- Calmard, Jean (1974), "Le Mécénat des Représentations de Ta‘ziye I: Les Précurseurs de Nāseroddin Chāh", Aubin, Jean (ed.), *Le Monde Iranien et l'Islam : Sociétés et Cultures* , vol.2, Droz: 73-126.
- Calmard, Jean.(2000), "Tehran: Urbanization, Monuments, Cultural and Socio-Economic Life until the Time of the Pahlavis", *EI2* , iv: 487-493.
- Calmard, Jean (2011), "Atābak-e A‘azam, Mīrzā ‘Alī Asghar Khān Amīn al-Soltān", *EIR Online* (Originally Published, 1987, vol. ii: 870-890).
- Calmard, Jean (2012), "Hosayniya", *EIR Online* (Originally Published, 2004, vol.xii: 517-518).
- Canby, Sheila R. (1999), *The Golden Age of Persian Art 1501-1722* , British Museum Press, London.
- Chelkowski, Peter J.(ed.) (2006), *Ta‘ziyeh : Ritual and Drama in Iran* , New York University Press.
- Chelkowski, Peter J. (2009), "Ta‘zia", *EIR Online* (Last Updated: July 15, 2009)
- Choay, Françoise, Marguerite Hugo and George R. Collins (tr.) (1969) , *The Modern City: Planning in the 19th Century* , New York.
- Cronin, Stephanie (2011), "Army iv a. Qajar Period" , *EIR Online* (Originally Published, 1986, vol.ii: 489-517)
- Curzon, George Nathaniel (1892), *Persia and the Persian Question* , 2vols, Longmans Green, London.
- Dabīrsiyāqī, Seyyed Mohammad (A.P.1380a, 2001/2), *Sarshomārī-ye Shahr-e Qazvīn: 1298-1299* , vol.2, Hadīth Emrūz.
- Dabīrsiyāqī, Seyyed Mohammad (A.P.1380b, 2001/2), *Tārīkhche-ye Farhang va Madāres-e Qazvīn* , vol.1, Hadīth Emrūz.
- Dabīrsiyāqī, Seyyed Mohammad (A.P.1381, 2002/3), *Seir-e Tārīkhī-ye Banā-ye Shahr-e Qazvīn va Banāhā-ye Ān* , Hadīth Daftary, Farhad, (1995), *The Assassin Legends : Myths of the Isma'ilis* , I. B. Tauris.
- Echraghī, Ehsan (1982), "Description Contemporaine des Peintures Murales Disparues des Palais de Šāh Tahmāsp à Qazvīn", *Art et Société dan le Monde Iranien* , Institute Français d'Iranologie de Téhéran, Bibliothèque Iranienne 26, Paris: 117-126.
- Ehlers, Eckart (1991), "Cities, iv: Modern Urbanization and Modernization in Persia", *EIR* , v: 623-629.
- Elton, L. Daniel & Farmayan, Hafez (ed.&tr.) (1990), *The Safarnāmeḥ of Mīrzā Mohammad Hosayn Farāhānī* , University of Texas Press.

- Ettehadiye, Mansoure (1992), "Patterns in Urban Development; the Growth of Tehran (1852-1903)", *QI*: 199-212.
- Ettehadiye, Mansoure (1998), *Īnjā Tehrān ast*, Tehran.
- Ettehadiye, Mansoure (2011), "Concessions: ii. In the Qajar Period", *EIR Online* (Originally Published, 1992, vol.VI: 119-122)
- Farmayan, Hafez (2002), *Society and Culture in Qajar Iran: Studies in Honor of Hafez Farmayan*, Mazda Publishers.
- Farmayan, Hafez (2012), "Amīn al-Dawla, Mīrzā 'Alī Khān", *EIR Online* (Originally Published, 1989, vol.i: 943-945).
- Mirfendereski, Guive (2001), *A Diplomatic History of the Caspian Sea: Treaties, Diaries, and other Stories*, Palgrave, New
- Fereydūn Abdolī-Fard (A.P.1375, 1996/7), *Tārīkh-e Post dar Īrān az Sedārat-e Amīr-e Kabīr tā Vezārat-e Amīn od-Dowle (1267-1297Q)*, Enteshārāte Hirmand, Tehran.
- Floor, Willem (1971), "The Office of Kalāntar in Qājār Persia", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 14, 3: 253-269.
- Floor, Willem (1972), "The Marketpolice in Qājār Persia", *Zeitschrift der Deutschrn Morgenländischen Gesellschaft*, 123(2): 293-315.
- Floor, Willem (1998), *A Fiscal History of Iran in the Safavid and Qajar periods, 1500-1925*, Bibliotheca Persica Press, New
- Floor, Willem (2009a), *Guilds, Merchants & Ulama in Nineteenth-century Iran*, Mage Publishers.
- Floor, Willem (2009b) "Kadkhoda", *EIR Online* (Originally Published, 2011, vol.xv: 328-331).
- Foster, William (ed.) (1929), *Thomas Herbert, Travels in Persia, 1627-1629*, New York.
- Gaube, Heinz (1979), *Iranian Cities*, New York University Press.
- Golāmhossein, M. (2003), "Me' mārī-ye Āb-Anbārhā-ye Shahr-e Qazvīn", *Asar*, 35: 187-197.
- Golrīz, Mohammad 'Alī (A.P.1337, 1958/9), *Mīnūdar yā Bāb ol-Jannat Qazvīn*, 2vols, Tehran.
- Cottam, Richard (1979), *Nationalism in Iran: Updated through 1978*, University of Pittsburgh Press.
- Green, Nile (2016), *The Love of Strangers: What Six Muslim Students Learned in Jane Austen's London*, Princeton University Press.
- Grey, Charles (tr. & ed.) (1873), "A Narrative of Italian Travels in Persia, in the 15th and 16th Centuries", *Travels to Tana and Persi* (Works/ Issued by the Hakluyt Society; 1st. Series, 49), New York.
- Grigor, Talinn (2015) "Kingship Hybridized, Kingship Homogenized: Revivalism under the Qajar and the Pahlavi Dynasties", *Persian Kingship and Architecture: Strategies of Power in Iran from the Achaemenids to the Pahlavis*, Babaie, Sussan & Grigor Talinn (ed.), I.B.Tauris, London, New York: 219-254.
- Gurney, John. D. (1992), "The Transformation of Tehran in the later nineteenth century", *TÉHÉRAN capitale bicentenaire*, Gurney, John & Nabavi, Negin (2011), "Dār al-Fonūn", *EIR Online* (Originally Published, 1993, vol.vi: 662-668).
- Gustafson, James M. (2016), *Kirman and the Qajar Empire: Local Dimensions of Modernity in Iran: 1794-1914*, Routledge.
- Habibi, Seyyed. Mohsen. (1997), *Az Shār tā Shahr*, Tehran.
- Hodgson, Marshall G. S., (2005), *The Secret Order of Assassins: The Struggle of the Early Nizari Ismailis against the Islamic World*, University of Pennsylvania Press.
- Haeri, Mohammad Reza (2012) "Kashan v. Architecture", *EIR Online* (Originally Published, 2012, vol.xvi: 8-29).
- Hambly, R. G. Gavin (1991a), "Āghā Muḥammad Khān and the Establishment of the Qājār Dynasty", *CHI VII*: 104-143.
- Hambly, R. G. Gavin (1991b), "Iran during the Reigns of Fath 'Alī Shā and Muḥammad Shā", *CHI VII*: 144-173.
- Hambly, R. G. Gavin (1991c), "Iran under the Later Qājārs, 1848-1922", *CHI VII*: 174-212.
- Hambly, R. G. Gavin (1991d), "The Traditional Iranian City in the Qājār", *CHI VII*: 542-589.
- Hanway, Jonas (1762), *An Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*, 2vols, London.
- Hazratī, Mohammad Alī (2004), *Qazvin: The Mirror of History and Nature of Iran*, Ahmad Torkashvand (tr.), Chargol.
- Hellot-Bellier, Florence (2012), "France iii. Relations with Persia 1789-1918", *EIR Online* (Originally Published: 2000, vol.x, 131-136)
- Hillenbrand, Robert (1992), "The Role of Tradition in Qajar Religious Architecture", *QI*: 352-382.
- Hillenbrand, Robert (1994), *Islamic Architecture*, Edinburgh University Press.
- Hillenbrand, Robert (2011), "Architecture vi. Safavid to Qajar Periods", *EIR Online* (Originally Published: vol.ii: 345-349)
- Holod, Renata (1982), "Ab-Anbār: i. History" *EIR Online* (Originally Published, 1982, vol.i: 39-41).
- Hurewitz, Jacob Coleman (1897), *Diplomacy in the Near and Middle East : A Documentary Record 1535-1956*, 2vols, Archive Editions, Oxford.
- Issawi, Charles. (1971), *The Economic History of Iran 1800-1914*, The University of Chicago Press.
- Jahanbegloo, Ramin (ed.) (2003), *Iran: Between Tradition and Modernity*, Lexington Books.
- Nīstānī, Javād (A.P.1390, 2011/2), *Me' mārī-ye Madāres-e 'Olūm-e Dīnī-ye Doure-ye Qājār-e Shahr-e Qazvīn*, Ārmān Shahr.
- Kasravi, Ahmad (2003) *Tārīkh-e Mashrūte-ye Īrān*, Negāh, Tehran.
- Kāteb, Fāteḡe. (2005), *Me' mārī-ye Khānehā-ye Īrān*, Tehran.
- Kazemzadeh, Firuz (2011), "Anglo-Iranian Relations ii. Qajar period", *EIR Online* (Originally Published: 1985, vol. II, 46-51).
- Keddie, Nikki (1966), *Religion and Rebellion in Iran : the Tobacco Protest of 1891-1892*, London.
- Keddie, Nikki (1971), "The Iranian Power Structure and Social Change 1800-1969", *IJMES*, 2: 3-20.
- Keddie, Nikki (1991), "Iran under the Later Qājārs, 1848-1972 ", *The Cambridge History of Iran*, VII: 174-121.
- Keshāvarz, Mohammad 'Alī (A.P.1373, 1958/9), *Katībe Kūftī-ye Masjed Jāme' Qazvīn*, Tehran.
- Keshavarzian, Arang (2007), *Bazaar and State in Iran: The Politics of the Tehran Marketplace*, Cambridge University Press.

- Ketābkhāne-ye Emām Sādeq (A.P.1378, 1999/2000), *Fehrest-e Noshehā-ye Khattī-ye Ketābkhāne-ye Emām Sādeq Qazvīn, jeld-e avval*.
- Ketābkhāne-ye Emām Sādeq (A.P.1390, 2011/2), *Fehrest-e Noshehā-ye Khattī-ye Ketābkhāne-ye Emām Sādeq Qazvīn, jeld-e dovvom*.
- Kianoosh, Kiani Haftlang (2007), *Collection of Historical Photographs*, Tehran.
- Kheirabadi, Masoud (1991), *Iranian Cities: Formation and Development*, University of Texas Press.
- Kleiss, Wolfram (1976), "Der Safavidische Pavilion in Qazvin", *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, Deutschen Archäologischen Institut, 9: 253-261.
- Kleiss, Wolfram (1990), "Chehel Sotūn, Qazvīn", *EIR Online*, (Originally Published: 1990, vol.v, 116-117).
- Lambton, Ann, K. S. (1987), "The Tobacco Regie: Prelude to Revolution" *Qajar Persia*, University of Texas Press.
- Lambton, Ann, K. S. (1995), "Kazwīn", *EI2*: 857-863.
- Lockhart, Laurence (1939), *Famous Cities of Iran*, W. Pearce.
- Lockhart, Laurence (1960), *Persian Cities*, Luzac.
- MacEoin, Denis (2011), "Babism", *EIR Online* (Originally Published, 1988, vol. iii: 309-317)
- Madanipour, Ali (1998), *Tehran: The Making of a Metropolis*, John Willy & Sons, Chichester.
- Madanipour, Ali (1999), "City profile: Tehran", *Cities*, 16, 1: 57-65.
- Madanipour, Ali (2006), "Urban planning and development in Tehran", *Cities*, 23, 6: 433-438.
- Malcolm, Jhon, Sir (1829), *History of Persia*, 2vols, London.
- Mahdath, Mīrhāshem (ed.) (1380), *Chand Emtiyāznāme-ye 'Asr-e Qājār*, Ketābkhāne, Mūze va Markaz-e Asnād-e Majles-e Shūrā-ye Eslāmī, Tehran.
- Mahdavi, Shireen (2010), "Medicine i. Introduction of Western Medicine to Iran", *EIR Online* (Last Updated: March 15,
- Meigs, Peveril (1952), "World Distrution of Arid and Semi-Arid Homoclimates" (UNESCO Arid Zone Res, No.1. Arid Zone Hydrogy), <<http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001485/148501eb.pdf>>
- Minorsky, Vladimir Fed'orovich (2000) "Tehran: History to 1926", *EL2*, IV: 483-486.
- Mīrfendereski, Guive (2001), *A Diplomatic History of the Caspian Sea: Treaties, Diaries, and Other Stories*, Palgrave, New Momen,
- Moojan (2003), "Usuli, Akhbari, Shaykhi, Babi: The Tribulations of a Qazvin Family", *Iranian Studies*, 36, 3: 317-318.
- Mo'tamedī, Mohsen (2002), *Joghrāfiyā-ye Tārīkhī-ye Tehrān*, Tehran.
- Morier, James Justinian (1812), *A Journey through Persia and Asia Minor to Constantinople in the Years 1808 and 1809*, Najimi, Naser (1984a), *Tehran-e Qadīm*, Jāzande.
- Najimi, Naser (1984b), *Dār ol-Khelāfe-ye Tehrān*, Arghavān.
- Nurmohammadi, Mehdi (A.P.1380, 2001/2), *Tārīkh-e Matbū'āt-e Qazvīn*, Nashr-e Teh.
- Nurmohammadi, Mehdi (A.P.1390, 2011/2), *Sar Āghāz Akkāsī dar Qazvīn*, Sāye Gostar.
- Nurmohammadi, Mehdi (A.P.1391, 2012/3), *Tārīkh-e Shahrdārī-ye Qazvīn*, Sāye Gostar.
- Pirniya, Mohammad Karim (2003), *Sabkshenasī-ye Me'mārī-ye Īrānī*, Pazhuhande.
- Perry, John (1971) "The Last Safavids, 1722-1773" *Iran (Journal of Persian Studies)* 6: 59-69.
- Perry, John (2011), "Arg" *EIR Online* (Originally Published, 1986, vol.ii: 395-396).
- Perry, John (1991) "The Zand Dynasty" *CHI VII*: 63-103.
- Planhol, Xavier de (2004), "Tehran: i. a Persian City at the Foot of the Alborz", *EIR Online* (Last Updated: July 20, 2004).
- Planhol, Xavier de (2012a), "Geography: ii. Human Geography", *EIR Online* (Originally Published, 2000, vol.x: 431-437).
- Planhol, Xavier de (2012b), "Geography: iii. Political Geography", *EIR Online* (Originally Published, 2000, vol.x: 437-444).
- Planhol, Xavier de (2012c), "Kāriz: i-iii", *EIR Online* (Originally Published, 2011, vol.xv: 564-572).
- Planhol, Xavier de (2012d) "Kashan ii. Historical Geography", *EIR Online* (Originally Published, 2012, vol.xvi: 2-5).
- Parhīzkārī, Meherzād (A.H.1386, 1996/7), *Mehmānkhāne-ye Bozorg-e Qazvīn*, Pāigāh-e Mīrāth-e Farhangī-ye Shahr-e Qazvī
- Hājji Qāsimī, Kāmbīz (1996-2005), *Ganjnāme: Farhang-e Āthār-e Me'mārī-ye Eslāmī-ye Īrān*, 18vols, markez-e asnād va tahqīqāt-e dāneshkade-ye me'mārī va shahrsāzī, Shahīd Beheshtī University.
- Qāsemīpūyā, Eqbāl. (A.P.1377, 1998/9), *Madāres-e Jadīd-e Doure-ye Qājārīye: Bāniyān va pīshiravān*, Markez-e Nashr-e Dāneshgāhī.
- Qobadian, Vahid (A.P.1385, 2006/7), *Me'mārī-ye dar Dār ol-Khelāfe-ye Nāserī*, Tehran.
- Ringer, Monica Mary (1998), *Education and Reform in Qajar Iran, 1800-1906*, (Ph.D. Dissertation, University of California).
- Ringer, Monica Mary (2001), *Education, Religion, and the Discourse of Cultural Reform in Qajar Iran*, Mazda Publishers.
- Rubin, Michael (1998), "The Telegraph and Frontier Politics: Modernization and the Demarcation of Iran's Borders", *Comparative studies of South Asia, Africa, and the Middle East*, 16, 2: 59-72.
- Sa'dvandiyan, Sīrūs, Ettehadiye Mansoure (ed.) (A.P.1368, 1989/90), *Āmār-e Dar ol-Khelāfe-ye Tehran: Asnādī az Tārīkh-e Ejtemā'ī-ye Tehran 'Asr-e Qājār*, Nashr-e Tārīkh-e Īrān, Tehran.
- Scarce, Jennifer (1983), "The Royal Palaces of the Qajar Dynasty: A Survey", *Qājār Iran: Political, Social, and Cultural Change 1800 – 1925*, Mazda Publishers.
- Scarce, Jennifer (1991), "The Art of the Eighteenth to Twentieth Centuries", *CHI VII*: 890-958.
- Scarce, Jennifer (2011), "Art in Iran x.1: Art and Architecture of the Qajar Period", *EIR Online* (Originally Published: 1986, vol.ii, 627-637)

- Semsar, Mohammad Hasan & Saraian, Fatemeh (2003), *Kamā'lulmuluk: Oil on Canvas and Watercolor Paintings*, Tehran. Shahīdī, Hosein. (A.P.1383, 2004/5), *Sargozashte-ye Tehrān*, Tehran.
- Shahrī, Ja'far. (1989), *Tārīkh-e Ejtemā'ī Tehran dar Qarn-e Sīzdahom*, 6vols, Tehran.
- Shahvar, Soli (2009) "Telegraph i. First Telegraph Lines in Persia", *EIR Online* (Last Updated: July 20, 2009).
- Sheykh ol-Eslāmī, A. Rezā (1978) "The Patrimonial Structure of Iranian Bureaucracy in the Late Nineteenth Century" *Iranian Studies*, 11: 199-258.
- Sinclair, Susan (ed.) (2012), *Bibliography of Art and Architecture in the Islamic World*, 2 vols, Brill, Leiden.
- Sohrabi, Naghmeh (2012), *Taken for Wonder: Nineteenth Century Travel Accounts from Iran to Europe*, Oxford University
- Soltānzāde, Hosein (1993), *Entry Spaces of Houses in Ancient Tehran*, Tehran.
- Soltānzāde, Hosein (1994), *Fazahā-ye Shahrī dar Baftehā-ye Tārīkhī-ye Īrān*, Tehran.
- Soltānzāde, Hosein (A.P.1378, 2000), "Masjed Madrasedhā-ye Tehran", *Waqf*, 7, 4, Mīrāth-e Javidān: 53-64.
- Sotūda, M. (1982), "Ab-Anbār: ii. Construction" *EIR Online* (Originally Published, 1982, vol.i: 41-43)
- Sykes, Percy Molesworth (1915), *A History of Persia*, 2vols, Macmillan, London.
- Tabātabā'ī, Seyyed Hosein Madrasī (A.P.1361, 1982/83), *Bargī az Tārīkh-e Qazvīn*, Khaiyām, Qom.
- Tariqi, Mojgan (ed.) (2012), *Iran during the Qajar Dynasty: from the Perspective of Montabone, the Italian Photographer*, Tehran.
- Teymūrī, Ebrāhīm (A.P.1332, 1953/4) *Asr-e Bīkhabarī yā Tārīkh-e Emtiyāzāt dar Īrān*, Eqbāl.
- Varjāvand, Parvīz (A.P.1351, 1972/3), *Sarzamīn-e Qazvīn*, Rāstī Nou.
- Varjāvand, Parvīz (A.P.1377, 1998/9), *Sīmā-ye Tārīkh va Farhang-e Qazvīn*, 3vols, Tehran.
- Walcher, Heidi (2008), *In the Shadow of the King: Zill al-Sultan and Isfahan under the Qajars*, I.B. Tauris, New York.
- Werner, Ch. (2000), *An Iranian Town in Transition: A Social and Economic History of the Elites in Tabriz, 1747-1848*,
- Wilber, Donald (1962), *Persian Gardens and Garden Pavilions*, C. E. Tuttle.
- Zoka, Yahya & Semsar, Mohammad, Hassan (A.P.1369, 1990/1), *Tehrān dar Tasvīr (Tehran in Illustration)*, vol.1, Soroush,
- Zoka, Yahya (1970), *Tārīkhche-ye Sākhtemānhā-ye Arg-e Saltanatī-ye Tehrān*, Anjoman-e Āsār-e Mellī.

【邦語文献】

- 秋葉淳他 (編) (2014) 『近代・イスラームの教育社会史』 昭和堂.
- 浅見泰司 (編) (2003) 『トルコ・イスラーム都市の空間文化』 山川出版社.
- アマーナト, アッバース (編); 田隅恒生 (訳) (1998) 『ペルシア王宮物語: ハレムに育った王女』 (東洋文庫644) 平凡社.
- 板垣雄三, 後藤明 (編) (1992) 『事典イスラームの都市性』 亜紀書房.
- 板垣雄三他 (編) (1993) 『イスラームの都市性』 (学術新書) 日本学術振興会.
- 井筒俊彦 (1958-59) 『コーラン』 (上) (中) (下) (初版: 1967-1958) 岩波文庫.
- 井筒俊彦 (1991a) 『イスラーム思想史』 中公文庫.
- 井筒俊彦 (1992b) 『イスラーム文化』 岩波文庫.
- 岩崎葉子 (2004) 「テヘランの公設市場: 食料流通と都市行政」 『現代の中東』 36: 54-67.
- ウォーラーステイン, イマニュエル; 川北稔 (訳) (2013) 『近代世界システム I: 農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』 名古屋大学出版会.
- 鶴飼政志 (2011) 「明治黎明期におけるインフラ事業の性格再考」 『社会システム研究』 23: 49-69.
- 大塚和夫 (2000) 『近代・イスラームの人類学』 東京大学出版会.
- 大河原知樹 (2001) 「近代のダマスカスにおける社会と家族 (I: 研究編)」 (博士論文) 慶応大学.
- 大野盛雄 (1971) 『ペルシアの農村: むらの実態調査』 東京大学出版会.
- 岡崎正孝 (1984) 「19世紀後半のイランにおける養蚕業の衰退とギーラーン地方の農業の変化」 『オリエン』 2: 69-82.
- 岡崎正孝 (編) (1985a) 『ガーリヤール朝史文献目録』 大阪外国語大学外国語学部.
- 岡崎正孝 (1985b) 「19世紀後半のイランにおける養蚕業の衰退とギーラーン地方の農業の変化」 『オリエン』 27, 2: 69-82..
- 岡崎正孝 (1986) 「イランの度量衡」 『「はかり」と「くらし」: 第三世界の度量衡』 アジア経済研究所: 132-
- 岡崎正孝 (1973) 「カナートとイラン農業」 『アジアの農業水利と村落社会部研究会』 2: 5-12.
- 岡崎正孝 (1974) 「イランにおけるカナート」 『水利科学』 18(4): 43-56.
- 岡崎正孝 (1980) 「イラン農業水利史に関するノート: とくにカナートとケイについて」 『アジア経済』 21, 6: 69-77.
- 岡崎正孝 (1982) 『カーリヤール朝史ペルシア語史料解題』, 日本オリエン学会 25(2): 74-87.
- 岡崎正孝 (1988a) 「ザーヤンデルードの用水配分に関する一考察」 『東洋学報』 69(3): 307-335.
- 岡崎正孝 (1988b) 『カナート: イランの地下水』 論創社.
- 岡崎正孝 (1989) 「カーリヤール朝下におけるケシ栽培と1870-71大飢饉」 『西南アジア研究』 31: 38-55.
- 岡田恵美子他 (編) (2004) 『イランを知るための65章』 明石書店.
- 織田武雄 (1963) 「イランの首都テヘラン」 『史林』 46: 138-159.
- 織田武雄 (1984) 「カナート研究の展望」 『人文地理』 36(5): 49-71.

- 加賀谷寛 (1969) 「イランの12イマーム派のイマーム・ザーデ崇拜」 『オリエント』 12: 191-205.
- 加賀谷寛 (1975) 『イラン現代史』 (世界史研究双書19) 近藤出版社.
- 加賀谷寛 (1981) 「近代イラン・ムスリム社会の宗派的二分化対抗」 『宗教と社会: 小口偉一郎教授古希記念論集』: 385-396.
- 加賀谷寛; 今松泰他 (編) (2015) 『近現代イランの社会と思想: 加賀谷寛著作集3』 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター.
- 加納弘勝 (1987) 「都市の地域社会集団の持続と変容」 『現代社会の地域-重層する実相への社会学的視座』 有信堂: 119-147.
- 河田久美 (2002) 「19世紀イランにおける政治家の初期キャリア: ホセイン・コリー・ハーン・マーフィーの場合」 『オリエント』 45-1: 172-190.
- 河田久美 (2006) 「19世紀後半のイランにおける実務官僚育成」 『イラン研究』 2: 50-78.
- 河田久美 (2012) 「カージャール朝時代の食糧危機対策: 1893 - 1894のファールス地方」 『イラン研究』 8: 92-
- 北河大次郎 (1997) 「19世紀フランス都市土木計画思想とパリ大改造」 『土木計画研究』 14: 487-496.
- 黒木英充 (1988) 「都市騒乱に見る社会関係: アレッポ, 1819-20年」 『日本中東学会年報』 3, 1: 1-59.
- 黒田卓 (1984) 「イラン立憲革命におけるラシュト蜂起」 『史林』 67(1): 34-75.
- 黒田卓 (1988) 「第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動 (I)」 『香川大学教育学部研究報告』 74: 50-
- 黒田卓 (1989) 「第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動 (II)」 『香川大学教育学部研究報告』 75: 45-
- 黒田卓 (1992) 「ハイダル・ハーンと近代イラン」 『西南アジア研究』 36: 20-47.
- 黒田卓 (1994) 「イラン立憲革命と地域社会: ギーラーン州アンジョマンを中心に」 『東洋史研究』 53(3): 155-
- 黒田卓 (1999) 「新聞のなかのイラン立憲革命」 『岩波講座世界歴史』 23, 岩波書店: 83-110.
- 黒田卓 (2008) 「ヘイダル・ハーンの事績再考」 『上智アジア学』 25: 56-61.
- 黒田卓 (2012) 「18世紀後半インド在住: イラン家系出自ムスリムの訪欧旅行記」 『国際文化研究科論集』 20: 95-113.
- 黒柳恒男 (1969) 「シーア諸派の思想と運動」 『岩波講座世界歴史』 8, 岩波書店.
- 小杉泰他 (2008) 『イスラーム世界研究マニュアル』, 名古屋大学出版会.
- 後藤晃・鈴木均 (編) (1997) 『中東における中央権力と地域性』 アジア経済研究所.
- 後藤晃 (2002) 『中東の農業社会と国家: イラン近現代史の中の村』 御茶の水書房.
- 後藤晃 (1999) 「論説: 19世紀イランの中央権力と地方の構造: アジア社会論の再検討」 『商経論叢』 35(2):
- 後藤明他編 (2010) 『西アジア: 朝倉世界地理講座』 (大地と人間の物語・6) 朝倉書店.
- 小林啓美 (1963) 「Qazvin地震調査報告: Iran・1962年9月1日」 『建築雑誌』, 78(928): 423-430.
- 小林由佳他 (1998) 「要素と配置構成から見たイラン建築水空間秩序及びカナート水路との関係」 『日本建築学会学術講演梗概集, F-2, 建築歴史・意匠』: 639-640.
- 小堀巖 (1958) 「イランのカナートについて」 『地学雑誌』 67(2): 83-93.
- 小堀巖 (1996) 『乾燥地域の水利体系: ガナートの形成と展開』 大明堂.
- 小牧昌平 (1983) 「Malcom Khanの初期の政治活動をめぐって: イラン近代史上の一問題」 『史学雑誌』 92(8): 1332-1352.
- 小牧昌平 (1987) 「ザンド朝の成立過程について: 18世紀イラン政治史上の諸問題」 『上智アジア学』 5: 27-48.
- 小牧昌平 (1990) 「18世紀末イランの諸群雄: ガージャール朝前史の基礎データ」 『上智アジア学』 8: 78-92.
- 小牧昌平 (1992) 「19世紀初期のホラーサーン: 初期のガージャール朝についての一試論」 『上智アジア学』 10:
- 小牧昌平 (2007) 「近代アフガニスタン国家の成立過程: ヘラートの事例を中心に」 『上智アジア学』 25: 137-
- 近藤信彰 (1994) 「ヤズドのハーン家の社会経済的背景: 建設業とワクフを中心として」 『東洋学報』 76: 170-
- 近藤信彰 (1997) 「17-19世紀イランにおける地方権力の研究」 (博士論文) 東京大学.
- 近藤信彰 (2003) 「テヘランの古集会モスクとワクフ」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 66: 1-20.
- 近藤信彰 (2005) 「ウラマーとファトワー」 『記録と表象: 史料が語るイスラーム世界』 (イスラーム地域研究叢書8) 東京大学出版会: 171-192.
- 近藤信彰 (2006a) 「テヘラン大バーザールのサライ: ワクフと遺言書に見るその背景」 『歴史と地理』 593: 1-
- 近藤信彰 (2006b) 「初期ガージャール朝とテヘラン: 宮廷の季節移動と首都」 『オリエント』 48: 66-86.
- 近藤信彰 (編) (2011) 『ペルシア語文化圏史研究の最前線』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
- 近藤信彰 (2007) 「19世紀テヘランの大バーザール: 発展、構成、所有関係」 『上智アジア学』 25: 161-197.
- 近藤信彰 (2012) 「19世紀テヘランのマドラサとワクフ」 『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所』 84: 67-104.
- 近藤信彰 (編) (2015) 『近世イスラーム国家史研究の現在』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
- コーン, アーサー; 星野芳久 (訳) (1968) 『都市形成の歴史』 鹿島研究所出版.
- 坂本勉 (1980) 「十九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (I)」 『史学』 50: 367-387.
- 坂本勉 (1981a) 「十九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (II)」 『史学』 50: 367-387.
- 坂本勉 (1981b) 「十九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (III)」 『史学』 51: 43-79.
- 坂本勉 (1982) 「19世紀テヘランとモストウフィー家」 『オリエント』 25: 1-20.
- 坂本勉 (1983) 「遊牧民と都市: シーラーズと近代イラン社会」 『月刊百科』 254: 24-26.
- 坂本勉 (1984a) 「19世紀テヘランの人口調査資料」 『オリエント』 21: 92-108.

- 坂本勉 (1984b) 「近代イスラム都市とイラン人」『都市民』(イスラム世界の人びと3) 東洋経済新報社.
- 坂本勉 (2003) 『ペルシア絨毯の道』山川出版.
- 坂本勉 (2012a) 「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブール(上)」『史学』81(1): 83-116.
- 坂本勉 (2012b) 「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブール(下)」『史学』81(3): 49(403)-89(443).
- 坂本勉 (2015) 『イスタンブール交易圏とイラン: 世界経済における近代中東の交易ネットワーク』慶應義塾大学出版会.
- 佐藤次高 (1993) 『都市文明のイスラーム』講談社.
- 佐藤次高 (2009) 「イスラーム地域研究: 歴史と展望」『イスラーム地域研究ジャーナル』1: 1-8.
- 佐藤規子 (1991) 「近代イランにおける宗教と政治: タバコ・ボイコット運動(1891-92)とウラマー」『オリエント』34: 17-33.
- 佐野東生 (2010) 『近代イランの知識人の系譜: タキーザーデ・その生涯とナショナリズム』ミネルヴァ書房.
- サールマン, ハワード(1983); 小沢明(訳)『パリ大改造: オスマンの業績』, 井上書院.
- 嶋本隆光 (1983) 「バスト考: イラン近代史における宗教的慣習の一考察」『オリエント』28: 35-49.
- 嶋本隆光 (1990) 「タァズィエ考: カージャーレ朝イランにおける宗教と歴史の相関についての一考察」『オリエント』33: 45-63.
- 嶋本隆光 (2007) 『シーア派イスラーム: 神話と歴史』(学術選書23) 京都大学出版会.
- 清水宏祐 (1990) 「イラン史の中の都市像: 10~12世紀のニシャープール」『史淵』28: 26-39.
- 清水直美・上岡弘二 (2009) 『テヘラン州の聖所』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 清水直美・上岡弘二 (2011) 『ゴム州の聖所』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 清水直美・吉枝聡子・上岡弘二 (2014) 『ギーラーン州の聖所』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
- シュベル, マレク; 前田耕作(監修), 甲子雅代(監訳) (2014) 『イスラーム・シンボル事典』明石書店.
- シャルダン, ジャン; 佐々木康之・佐々木澄子(訳) (1993) 『ペルシア紀行』岩波書店.
- 陣内秀信(1993)『都市と人間』岩波書店.
- 陣内秀信・新井勇治(編) (2002) 『イスラーム世界の都市空間』法政大学出版局.
- 杉田英明 (1995) 『日本人の中東発見: 逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会.
- 杉原薫(1996)『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房.
- 鈴木薫 (1989) 「『近代軍』形成期のオスマン帝国における軍人と政治: 1826-1908年(近代化過程における政軍関係)」『日本政治学会年報政治学』: 187-209.
- 鈴木均 (1982) 「イスタンブール在住イラン人とタバコ・ボイコット運動」『アジア・アフリカ言語文化研究』32: 143-178.
- 鈴木均 (1997) 『中東における中央権力と地域性: イラクとエジプト』(研究双書479) アジア経済研究所.
- スチールラン, アンリ; 神谷武夫(訳) (1987) 『イスラムの建築文化』原書房: 83-147.
- ソレマニエ貴実也 (2009a) 「カージャーレ朝テヘラーンにおけるバーザール内商業施設の建築形態に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』74(640): 1457-1463.
- ソレマニエ貴実也 (2009b) 「イラン・テヘラーンの19世紀半ばから20世紀初頭の変遷: 「衰微」の時代の都市および建築にみる「融合」」(博士論文) 東京大学.
- 武田元有 (2009) 「フランス革命・ナポレオン戦争とロシア南下政策: バルト海貿易の危機と黒海貿易の成長」『鳥取大学教育センター紀要』6: 15-88.
- 田中時彦(1963)『明治維新の政局と鉄道建設』吉川弘文館.
- 田中尚人・川崎雅史・亀山泰典 (2004) 「近代京都における鉄道・軌道網を基盤とした都市形成に関する研究」『土木計画学研究』21(2): 385-391.
- 寺坂昭信(編) (1994) 『イスラム都市の変容: アンカラの都市発達と地域構造』古今書院.
- ダバシ, ハミッド; 田村美佐子・青柳伸子(訳) (2000) 『イラン、背反する民の歴史』作品社.
- 永田雄三他 (1982) 『中東現代史I: トルコ・イラン・アフガニスタン』(世界現代史11) 山川出版社.
- 永田雄三 (2001) 「オスマン帝国における近代教育の導入: 文官養成校(ミュルキエ)の教師と学生たちの動向を中心に」『駿台史学』111: 63-90.
- 永田雄三他(編) (2002) 『西アジア史2: イラン・トルコ』(新版世界各国史9) 山川出版社.
- 永田雄三・江川ひかり (2015) 『世紀末イスタンブールの演劇空間』白帝社.
- 西川長夫(1992)「国民(Nation)再考: フランス革命における国民創出をめぐって」『人文學報』LXX: 1-22.
- 西川長夫・宮島喬(編) (1995) 『ヨーロッパ統合と文化・民族問題: ポスト国民国家時代の可能性を問う』人文書院.
- 野間英二(編) (2000) 『アジアの歴史と文化・西アジア史』同朋舎.
- ハキーム, ベシーム・セリム著, 佐藤次高他(訳) (1990) 『イスラーム都市: アラブの町づくりの原理』第三書
- 八尾師誠(編) (1993) 『銭湯へ行こう・イスラム編』Toto出版.
- 八尾師誠 (1998) 『イラン近代の原像: 英雄サッタール・ハーンの革命』東京大学出版会.
- 八尾師誠(編) (1997) 『イラン「地方史・誌」刊本総覧』(IRANIAN STUDIES 12) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 148-149.
- 花田宇秋 (1995) 「バラズグリー著『諸国征服史』17」『明治学院論集』51: 35-93.
- 羽田正 (1992) 「1676年のイスファハーン: 都市景観復元の試み」『東洋文化研究所紀要』118: 188-235.
- 羽田正 (1991) 「イラン」『イスラム都市研究: 歴史と展望』東京大学出版会: 218-269.

- 羽田正 (編) (1996) 『シャルダン『イスファハーン誌』研究：一七世紀イスラム圏都市の肖像』東京大学出版
- 羽田正 (1991b) 「ホセイン・ソルターンザーデ著『イランにおける都市と都市集住の歴史入門』」『東洋学報』72(3, 4) : 299-307.
- 原隆一 (1997) 『イランの水と社会』, 古今書院.
- 原隆一・岩崎葉子 (編) (1999) 『イラン国民経済のダイナミズム』アジア経済研究所.
- バラズリー, 花田宇秋 (訳) (2013) 『諸国征服史・2』岩波書店.
- 比較都市史研究会 (編) (1993) 『比較都市史の旅』原書房.
- 日高英實 (編著) (1992-1998) 『イラン現代政治年表』 vol.1-6+補巻1-2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 日端康雄 (2008) 『都市計画の世界史』講談社現代新書.
- 平野豊 (1997) 「ガズヴィーン遷都の年代比定：16世紀サファヴィー朝文化史再編の観点から」『イスラム世界』48: 37-53.
- 平野豊 (2000) 「シャー・タフマースプ一世治下のサファヴィー朝宮廷とゴム, エスファハーン両都市との戦時協力関係：ハーネ・クーチの都市移送に関する事例研究(1)」『駿台史学』109: 1-34.
- 平野豊 (2006) 「シャー・タフマースプ I 世時代のイラン史研究のための基本史料」『駿台史学』129: 53-81.
- 深見奈緒子 (1999) 「イスファハーンのマドラサ調査から：建築形態と分布状況について」『東洋文化研究所紀要』137: 257-294.
- 深見奈緒子 (2000) 「イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する考察」『東洋文化研究所紀要』139, 206-152.
- 深見奈緒子 (2003) 『イスラーム建築の見かた：聖なる意匠の歴史』東京堂出版.
- 深見奈緒子 (2005) 「建築が伝える情報」『記録と表象：史料が語るイスラーム世界』(イスラーム地域研究叢書8) 東京大学出版会 : 269-292.
- 深見奈緒子 (2010) 『イスラーム建築がおもしろい!』彰国社.
- 深見奈緒子 (2013) 『イスラーム建築の世界史』岩波書店.
- 藤井守男 (2004) 「「異端者」の見たイスラーム：ミールザー・アーガーハーン・ケルマーニー Mirza Aqa Khan Kermani (一八五三/四年 - 一八九六年処刑) の宗教的信条をめぐる覚書」『総合文化研究』8: 90-103.
- 藤岡謙二郎 (1969) 『都市文明の源流と系譜』, 鹿島出版会.
- 藤田弘夫・吉原直樹編 (1995) 『都市とモダニティ：都市社会学コメンタール』ミネルヴァ書房.
- 藤森昭信 (1982) 『明治の東京計画』岩波書店.
- 布野修司 (2005) 『近代世界システムと植民都市』京都大学学術出版会.
- 布野修司・山根周 (2008) 『ムガル都市：イスラーム都市の空間変容』京都大学学術出版会.
- ブロー, デイヴィッド; 角敦子 (訳) (2012) 『アッバース大王：現代イランの基礎を築いた苛烈なるシャー』中央公論新社.
- ベネーヴァロ, レオナルド, 佐野敬彦他 (訳) (1983) 『図説：都市の世界史』相模書房.
- ベル, ガートルード・ロージアン; 田隅恒生 (訳) (2000) 『ペルシアの情景』(原著：1894) 法政大学出版局.
- ポーブ, アーサー・アプハム; 石井昭 (訳) (1981) 『ペルシア建築』(原著：1976) 鹿島出版会.
- 本田實信 (1991) 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会.
- 牧野信也 (訳) (1987) 『イスラームとコーラン』講談社学術文庫.
- 牧野信也 (訳) (2001) 『ハディース：イスラーム伝承集成』全6巻, 中公文庫.
- 町村敬志; 西沢 晃彦 (2000) 『都市の社会学：社会がかたちをあらわすとき』有斐閣.
- 松山恵 (2014) 『江戸・東京の都市史：近代移行期の都市・建築・社会』東京大学出版会.
- 増田四郎 (1968) 『都市』筑摩書房.
- 松井道昭 (1997) 『フランス第二帝政下のパリ都市改造』日本経済評論社.
- 柘谷友子 (2005) 「工芸が伝える情報」『記録と表象：史料が語るイスラーム世界』(イスラーム地域研究叢書8) 東京大学出版会 : 245-267.
- 末尾至行 (1976) 「テヘラン」藤岡謙二郎他 (編) 『地図にみる世界の百万都市』朝倉書店.
- 松永松栄 (2008) 『図説都市と建築の近代：プレ・モダニズムの都市改造』学芸出版社.
- 三浦徹 (1987) 「ダマスクス郊外の都市形成：12-16世紀のサーリヒーヤ」『東洋学報』68: 154-120.
- 三浦徹 (1995) 「ダマスクスのマドラサとワクフ」『上智アジア学』13: 21-61.
- 三浦徹 (1997a) 『イスラームの都市世界』(世界史リブレット16) 山川出版社.
- 三浦徹 (1997b) 「イスラーム地域研究の発進」『歴史学研究』702: 35-40.
- 三浦徹 (1999) 「イスラーム都市研究」を越えて『創文』410: 1-5.
- 水島司他 (編) (2015) 『アジア経済史入門』名古屋大学出版会.
- 水田正史 (1987) 「ペルシア帝国銀行史研究序説」『経済学論叢』38(4) : 100-118.
- 水田正史 (1989) 「19世紀タブリーズの都市行政官についての覚え書き」『日本中東学会年報』4-1 : 119-140.
- 水田正史 (1993) 「イギリス系海外銀行進出以前のイラン金融史：アミーノッザルブとラリ商会」『経済学論叢』45(2): 74-94.
- 水田正史 (2003) 『近代イラン金融史研究：利権/銀行/英露の角逐』ミネルヴァ書房.
- 水田正史 (2009) 『第一次世界大戦期のイラン金融：中東経済の成立』ミネルヴァ書房.

- 護雅夫(編)(1983)『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社。
- 守川知子(1997)「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド：十六世紀イランにおけるシーア派都市の変容」『史林』80, 2 : 1-41.
- 守川知子(2001)「ガージャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』55 : 44-68.
- 守川知子(2007a)「近代西アジアにおける国境の成立：イラン=オスマン国境を中心に」『史林』90, 1: 62-91.
- 守川知子(2007b)『シーア派聖地参詣の研究』京都大学学術出版会.
- 守川知子(2009)「イラン国王の欧州旅行(1873年)」歴史学研究会(編)『帝国主義と各地の抵抗 I : 南アジア・中東・アフリカ』(世界史史料8)岩波書店, 217-218.
- 森谷虎彦(1966)「西アジアのカナート(短報)：イラン国のガズビン盆地の例」『地理学評論』39(7) : 498-
- 森本一夫(監訳)(2003)「ナーシレ・フスラウ著『旅行記(Safarnāmah)』訳注(I)」『史朋』(長峯博之解題, 北海道大学ペルシア語史料研究会訳)35 : 1-29.
- 森本公誠編(1985)『イスラム・転変の歴史』筑摩書房.
- 森本芳樹(1990)「都市史研究の新しい動向：共同研究・国際会議「イスラムの都市性」をめぐって」『歴史学研究』607: 64-72.
- 山岸智子(1998)「イマームの王国：殉教譚テキストからのイラン文化論」(博士論文)東京大学.
- 山崎和美(2007)「イランにおける女子教育の発展：1910~20年代を中心に」(博士論文)東北大学.
- 山田稔(1975)「カージャール朝期(19世紀後半)における宗教と結社」『東京外国語大学論集』25 : 157-169.
- 吉村慎太郎(2005)「近現代イラン政治の展開と宗教的：世俗的ナショナリズム：19世紀後半から1960年代までを中心に」『イスラーム地域の国家とナショナリズム』(イスラーム地域研究叢書5)東京大学出版会.
- 吉村慎太郎(2011)『イラン現代史：従属と抵抗の100年』有志舎.
- ラムトン, アン・キャサリン・スウィンフォード; 岡崎正孝(訳)(1978)『ペルシアの地主と農民：土地保有と地稅行政』(原著：1976)岩波書店.
- ルイス, バーナード; 加藤和秀(訳)(1973)『暗殺教団：イスラームの過激派』(原著：1967)新泉社.
- ロビンソン, フランシス; 月森左知(訳)(2009)『ムガル皇帝歴代誌：インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡(1206-1925年)』(原著：)創元社.
- ヴァルター・ベンヤミン; 今村仁司・三島憲一(訳)(1993)『パサージュ論』岩波書店.
- ヴルフ, ハンス, E., 原隆一他(訳)(2001)『ペルシアの伝統技術：風土・歴史・職人』(初版：1977)平凡社.

謝辞

本論文執筆にあたり、東北大学国際文化研究科アジア・アフリカ研究講座の黒田卓教授に、修士課程から今日に至るまでご指導を賜りました。何度も筆を折りかけた研究が論文の形となったのも、ひとえに教授の親身のご指導あってのものと深く感謝いたします。

また、常に懇切丁寧にご指導くださった大河原知樹准教授に格別の感謝を申し上げます。発表の度に示唆に富む助言をくださった勝山稔准教授にも御礼申し上げます。

研究に際し、東北開発記念財団には海外派遣援助者として、松下幸之助記念財団には松下幸之助国際スカラシップ奨学生として、それぞれ貴重な留学の機会を与えていただきました。また、留学に際しては、日本精鉱株式会社の木嶋正憲元社長、ご友人のAlī Sarbakhsh氏に格別のご厚情を賜りました。特に Sarbakhsh氏にはご親族・ご友人も含めての温かなご支援を賜りました。謹んで御礼申し上げます。

留学時は、テヘラン大学文学部歴史学科の Hasan Zandīye 教授、Encyclopaedia Islamica Foundation 主任 Hasan Seyyed 'Arab 氏、事務員の皆様に大変お世話になりました。また、Mehdī Nūrmohannmadī 氏、Mohammad 'Alī Hazratī 氏、Emām Sādeq 図書館の皆さまには、ガズヴィーンでの調査の便宜をはかっていただき、温かな助言と共に貴重な資料もご提供いただきました。共に研究に勤しんだ留学生仲間、先輩方、公私共にサポートしてくださった在イラン日本大使館職員の皆様にも深く感謝いたします。特に東京大学の井上貴恵氏、外務省の押谷ひとみ氏、松下知史氏には様々な場面でご支援を賜りました。

研究生活全般にわたり、様々な方に支えていただきました。中でも、数年にわたり教養教育の現場に関わらせてくださった東北大学高度教養教育・学生支援機構の関内隆教授に感謝を申し上げます。また、筆者を研究の世界へ導いてくださった麗澤大学の富樫壮央先生にも御礼申し上げます。論文執筆にご協力くださった京都大学の檜垣充朗氏にも心より感謝申し上げます。そして、歴代のイスラム圏研究講座の皆様にも、謹んで論文の完成をご報告致します。本講座は筆者の修了をもってその歴史に幕を閉じます。

筆者が学問を志すきっかけを与えてくださった聖ソフィア・モンテッソーリ教室の故花岡裕先生と奥様に、論文の完成を謹んで報告させていただきます。

最後に、長きにわたり、紆余曲折の研究生活を支え続けてくれた両親、2人の妹、祖母に、この場をお借りして改めて感謝の気持ちを記します。

(2016年11月提出)

正誤表

2017年2月17日作成

- 10 頁脚注 59, 6 行目
(誤) Planhol, 2012a → (正) Planhol, 2012a: ii, par. 1-3
- 11 頁脚注 60, (11 頁) 2 行目
(誤) Planhol, 2012c → (正) Planhol, 2012c: i, par. 1-6
- 11 頁脚注 60, (11 頁) 第 2 段落 11 行目
(誤) Planhol, 2012d → (正) Planhol, 2012c: ii, par. 1-5.
- 12 頁脚注 71, 11 行目
(誤) Sotūda, 1982; Golāmhosein, 2003
→ (正) Sotūda, 1982: par. 2-6; Golāmhosein, 2003: 192-195
- 13 頁脚注 73
(誤) Holod (1982) → (正) Holod (1982): par. 2-3
- 13 頁脚注 74, 3 行目
(誤) Holod, 1982 → (正) Holod, 1982: par. 7; Planhol, 2012c: par. 12-14
- 14 頁脚注 75
(誤) Scarce (1991); Calmard (2012).
→ (正) Scarce (1991): 910-912; Calmard (2012): par. 2.
- 14 頁脚注 76
(誤) Hillenbrand (2011). → (正) Hillenbrand (2011): par. 2-19.
- 15 頁脚注 78
(誤) Scarce (1991) → (正) Scarce (1991): 910-912
- 18 頁脚注 8
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 4-7.
- 19 頁脚注 9
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 4-7.
- 19 頁脚注 10
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 8.
- 19 頁脚注 11
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 9.
- 20 頁脚注 12
(誤) Hellot-Bellier (2012). → (正) Hellot-Bellier (2012): par. 1.
- 21 頁脚注 14
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 15.
- 21 頁脚注 15

- (誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 12-13.
- 22 頁第 2 段落 2 行目
(誤) イギリスにも好機をもたらした → (正) イギリスに危機感を抱かせた
 - 24 頁第 1 段落 5 行目
(誤) 1841年 → (正) 1814年
 - 24 頁脚注 21
(誤) Kazemzadeh (2011). → (正) Kazemzadeh (2011): par. 21.
 - 26 頁脚注 27, 2 行目
(誤) 敷設された → (正) 譲渡された
 - 29 頁第 3 段落 6-7 行目
(誤) Atābek-e A‘zem → (正) Atābak-e A‘zam
 - 31 頁脚注 46 (31 頁) 2 行目
(誤) 嶋本, 1983 → (正) 嶋本, 1985: 35-41.
 - 32 頁脚注 49
(誤) Cronin (2011). → (正) Cronin (2011), "ii. Early Qajar military reform": par. 1.
 - 33 頁脚注 54
(誤) Busse (2011); Cronin (2011).
→ (正) Busse (2011): par. 10-11; Cronin (2011), "ii. Early Qajar military reform": par. 2.
 - 33 頁脚注 55
(誤) Busse (2011); Cronin (2011).
→ (正) Busse (2011): par. 10-13; Cronin (2011), "ii. Early Qajar military reform": par. 3-14.
 - 34 頁脚注 56
(誤) Busse (2011). → (正) Busse (2011): par. 9.
 - 34 頁脚注 57
(誤) Mahdavi (2010). → (正) Mahdavi (2010): par. 4.
 - 35 頁脚注 63
(誤) Bakhsh (2011). → (正) Bakhsh (2011): par. 23-24.
 - 36 頁 3 段落 1 行目
(誤) 「両国大使館」 → (正) 「両国の拠点」
 - 36 頁脚注 64
(誤) Ettehadiye (1992). → (正) Ettehadiye (1992): 200-201.
 - 37 頁脚注 69
(誤) Bakhsh (2012) . → (正) Bakhsh (2011): par. 25-30.
 - 38 頁第 5 段落 4 行目
(誤) Minister of Sciences → (正) vazīr-e ‘olūm
 - 39 頁脚注 73

- (誤) Shahvar (2009). → (正) Shahvar (2009): par. 5.
- 39 頁脚注 75

(誤) Shahvar (2009). → (正) Shahvar (2009): par. 5-9.
 - 42 頁脚注 83

(誤) Anwar (2011) → (正) Anwār (2011): par. 3
 - 42 頁脚注 84

(誤) Anwar (2011) → (正) Anwār (2011): par. 3
 - 42 頁脚注 86

(誤) (Amanat, 2011) → (正) (Amanat, Mehrdad, 2011 "Ehteshām al-Saltana", *EIR Online*: par. 3 /
Originally Published, 1982, vol.I: 79-84)
 - 42 頁脚注 87

(誤) Anwar (2011). → (正) Anwār (2011): par. 5.
 - 42 頁脚注 90

(誤) Anwar, 2011 → (正) Anwār, 2011: par. 5
 - 43 頁脚注 91

(誤) Anwar, 2011 → (正) Anwār, 2011: par. 5
 - 43 頁脚注 92

(誤) Anwar, 2011 → (正) Anwār, 2011: par. 5
 - 43 頁脚注 93

(誤) Anwar, 2011 → (正) Anwār, 2011: par. 5
 - 43 頁脚注 94

(誤) Anwar, 2011 → (正) Anwār, 2011: par. 5
 - 43 頁脚注 95

(誤) Anwar (2011). → (正) Anwār (2011): par. 6-8.
 - 44 頁脚注 98

(誤) Bakhash (2011). → (正) Bakhash (2011): par. 23.
 - 44 頁脚注 100

(誤) Bakhash (2011). → (正) Bakhash (2011): par. 29.
 - 55 頁脚注 22

(誤) (Grey, tr. & ed., 1873:) → (正) (Planhol, 2004: par. 9)
 - 55 頁脚注 24

(誤) Foster (ed.) (1929): → (正) Foster (ed.) (1929): 194-195.
 - 60 頁第 1 段落 1-2 行目

(誤) 6つの大門 → (正) 5つの大門
 - 68 頁脚注 50

(誤) ビューラー → (正) ビューレル

- 69 頁図 11 (宮殿域東側の通り名)
(誤) ナースイレ・ホスロウ通り → (正) ナーセリー通り
- 71 頁第 3 段落 1 行目
(誤) ナーデリー通り (khiyābān-e Nāderī) → (正) ナーセリー通り
- 71 頁第 4 段落 3 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
- 72 頁第 2 段落 3 行目
(誤) ロシア公館 → (正) ロシアの間
- 72 頁脚注 56, 5 行目
(誤) Chelkowski, 2009 → (正) Chelkowski, 2009: par.1-4
- 74 頁脚注 59
(誤) Chelkowski (2009) → (正) Chelkowski (2009): par.17
- 74 頁脚注 65
(誤) Chelkowski (2009). → (正) Chelkowski (2009): par.23-27.
- 82 頁脚注 88
(誤) Haeri (2012). → (正) Haeri (2012): (4), par. 2-4.
- 83 頁脚注 89
(誤) Planhol (2012f) → (正) Planhol (2012d): par. 3.
- 96 頁脚注 48, 1 行目
(誤) Golāmhosein (2003) → (正) Golāmhosein (2003): 188-192
- 100 頁脚注 67
(誤) Hillenbrand (2011). → (正) Hillenbrand (2011): par. 2-19.
- 101 頁脚注 71
(誤) Calmard (2012); Chelkowski (2009). → (正) Calmard (2012): par. 2; Chelkowski (2009): par.22.
- 103 頁第 1 段落 2 行目
(誤) ウスール派 (usūlī) → (正) オスーリー派 (osūlī)
- 103 頁第 1 段落 2 行目
(誤) アクバル派 (akbarī) → (正) アフバーリー派 (akhbārī)
- 103 頁脚注 80 第 2 段落 11 行目
(誤) (板垣他, 1992: 600; Perry, 2003)。
→ (正) (板垣他, 1992: 600; Perry, 2012, "Haydari and Ne'mati" *EIR Online*: par. 9/ Originally Published: vol. xii, 70-73)。
- 108 頁第 4 段落 5 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
- 115 頁脚注 151, 1 行目
(誤) (Morganr & Coote ed. 1886: 134, 149) → (正) (Lambton, 1995: 861)

- 115 頁脚注 151, 2 行目
 (誤) (Le Strange tr.& ed. 1926: 197-202) → (正) (Le Strange, Guy, tr.& ed. 1926, *Don Juan of Persia: a Shi'ah catholic, 1560-1604*, G. Routledge, London: 197-202)
- 115 頁脚注 151, 3 行目
 (誤) (Foster ed. 2005: 153) → (正) (Foster ed. 1929: 202)
- 124 頁図 1
 (誤) ウスール派の拠点 → (正) オスーリー派の拠点
 (誤) アクバル派の拠点 → (正) アフバーリー派の拠点
- 125 頁第 2 段落 1 行目
 (誤) ウスール派 → (正) オスーリー派
- 125 頁第 2 段落 1 行目
 (誤) アクバル派 → (正) アフバーリー派
- 125 頁第 2 段落 3 行目
 (誤) アクバル派 → (正) アフバーリー派
- 125 頁第 2 段落 10-11 行目
 (誤) ウスール派 → (正) オスーリー派
- 125 頁第 2 段落 11 行目
 (誤) アクバル派 → (正) アフバーリー派
- 125 頁第 3 段落 2 行目
 (誤) アクバル派 → (正) アフバーリー派
- 125 頁第 3 段落 2 行目
 (誤) ウスール派 → (正) オスーリー派
- 125 頁脚注 10, 1 行目
 (誤) ウスール派 → (正) オスーリー派
- 128 頁第 2 段落 4 行目
 (誤) 謁見の間 → (正) ドウラトハーネ
- 136 頁脚注 54
 (誤) Calmard (2012). → (正) Calmard (2012): par. 2.
- 138 頁第 2 段落 4 行目
 (誤) 導線 → (正) 動線
- 142 頁第 5 段落 1 行目
 (誤) ホサーモッサルタネ → (正) エツゾッドウレ
- 142 頁脚注 82
 (誤) Mīnūdar: 370 参照。 → (正) Rūznāme-ye Khāterāt-e 'Eyn os-Saltane, vol.1, Sālūr, Mas'ūd & Afshār, Īraj (ed.), Asātūr, Tehran, A.P.1374: 632.
- 143 頁脚注 84

- (誤) 事実上の知事 (hākem-e esteqbāl) → (正) 事実上の知事 (hākem-e esteqlāl)
- 146 頁第 2 段落 1-2 行目
(誤) 南の方 → (正) 東側
 - 148 頁第 1 段落 10-11 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 148 頁第 3 段落 9 行目
(誤) 披露 → (正) 誇示
 - 149 頁第 2 段落 10 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 164 頁 (小結) 第 2 段落 4 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 164 頁 (小結) 第 3 段落 2 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 166 頁第 1 段落 6 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 166 頁第 1 段落 7 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 166 頁第 1 段落 9 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 166 頁第 1 段落 10 行目
(誤) 導線 → (正) 動線
 - 173 頁図②
(誤) データ → (正) 削除
 - 217 頁図 16
(誤) ナーゼリー通り → (正) ナーセリー通り
 - 220 頁図 22 タイトル
(誤) ナーゼリー庭 → (正) 宮殿城南東部の様子
 - 220 頁図 22 タイトル
(誤) ナーゼリー庭 → (正) 宮殿城南東部の様子
 - 235 頁【外国語文献】4 行目
(誤) (1965) → (A.P. 1389, 2010/1)
 - 234 頁【外国語文献】45 行目
(誤) (2006) → (1979)
 - 237 頁 6 行目
(誤) → (正) 削除
 - 237 頁 24 行目

(誤) New York. → New York; 211-229.

• 237 頁 50 行目

(誤) (2003) → (2004)

• 237 頁 51 行目

(誤) → (正) 削除

• 250 頁 13 行目

(誤) 嶋本隆光 (1983) → (正) 嶋本隆光 (1985)